

# 奇譚クラブ

1



❖ 新しい風俗文献誌 ❖

奇譚クラブ

1972・1

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Marukushuppan

Osaka Japan



雑誌 2805-1

1月号 ¥350







〔極最新版〕 新人M女性羞恥責め写真集

V組 百態 大手札印画紙 (9×13 極鮮明焼付写真)

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚 八〇〇円  
十組十枚 一五〇〇円  
二十組二十枚 二八〇〇円  
五十組五十枚 五〇〇〇円  
百組百枚 八〇〇〇円

(郵便番号545-91) 天屋社  
大阪市阿倍野局私書箱14号

複写による不鮮明な緊縛写真が出回っているようですが、これは全部特殊マニアの蒐集用として一粒選りのネガから直接印画紙に焼付した極めて鮮明な逸品揃いばかりです。きつとファンのアルバムを最高に充実させると信じます。大阪市阿倍野局私書箱14号天屋社へ前金にてお申込み願います。

☆

1 足挙げ羞恥責め(深田 菊子)  
2 トイレ排泄強要(三浦 純子)  
3 完全二つ折締め(三浦 純子)  
4 逆エビ凄絶苦悶(前田真知子)  
5 超強烈エビ責め(三浦 純子)  
6 荒縄柔肌いじめ(前田真知子)  
7 全裸縛玄関晒し(三浦 純子)  
8 ネどうでもして(高村 浩子)  
9 蝋燭責後手縛り(富田由美子)

10 羞恥の源を扶る(江口 淑子)  
11 妊婦縛りの圧巻(富田由美子)  
12 菱縄縛正面開放(江口 淑子)  
13 正面の妊婦縛り(富田由美子)  
14 麗しのマドンナ(荒尾 慶子)  
15 両手挙前面晒し(福井 桃子)  
16 強烈流湯ポーズ(高村 浩子)  
17 後手吊上げ猿轡(高村 浩子)  
18 胡坐縛りの羞恥(江口 淑子)  
19 ゴム人形の恐怖(江口 淑子)  
20 菱縄股間縛前面(深田 菊子)  
21 柱縛り股間強要(福井 桃子)  
22 鮮烈股間縛の縄(深田 菊子)  
23 本格的な麻縄責(前田真知子)  
24 強烈麻縄の緊縛(前田真知子)  
25 正面股間縛晒し(高村 浩子)  
26 両足吊りの苦悶(江口 淑子)  
27 店での全裸縛り(福井 桃子)  
28 豊満な女体開陳(福井 桃子)  
29 恍惚パイプ責め(江口 淑子)  
30 マダム責の哀愁(江口 淑子)  
31 開股強制棒責め(前田真知子)  
32 大の字片足挙げ(高村 浩子)  
33 雁字搦目の女体(江口 淑子)  
34 足挙げ責の羞恥(江口 淑子)  
35 淫虐蝋燭の挿入(福井 桃子)  
36 海老開脚強制責(深田 菊子)

37 全裸立像後手縛(富田由美子)  
38 麻縄逆エビ惨酷(前田真知子)  
39 美女の全裸縛り(荒尾 慶子)  
40 マダム全裸開陳(江口 淑子)  
41 後手錠吊上げ責(江口 淑子)  
42 女体美を晒して(深田 菊子)  
43 高々と後手緊縛(福井 桃子)  
44 猿轡に悶える女(高村 浩子)  
45 太鼓腹全裸正面(富田由美子)  
46 菱縄股間縛猿轡(前田真知子)  
47 苛酷の宴果てて(高村 浩子)  
48 美しき緊縛女体(荒尾 慶子)  
49 エビ責めの序曲(江口 淑子)  
50 猿轡に呻く麻縄(高村 浩子)  
51 料理される女体(高村 浩子)  
52 美肌に映える縄(荒尾 慶子)  
53 両手両足開責め(三浦 純子)  
54 剃毛責めの結果(荒尾 慶子)  
55 人の字型羞恥縛(江口 淑子)  
56 浴室での流湯責(江口 淑子)  
57 股間に喰込む麻(深田 菊子)  
58 股間責めのあと(福井 桃子)  
59 黒髪前に垂れる(福井 桃子)  
60 スナックで縛る(福井 桃子)  
61 喰込む股間縄責(江口 淑子)  
62 責めに呻くM女(高村 浩子)  
63 片足挙げ開股縛(江口 淑子)  
64 菱縄悲し女泣く(江口 淑子)  
65 M女を責め尽す(前田真知子)  
66 引回される全裸(江口 淑子)  
67 尻立蝋燭悦虐責(福井 桃子)  
68 羞恥責を待つ女(深田 菊子)

69 凌辱に捧げる体(高村 浩子)  
70 刺毛の女体展開(荒尾 慶子)  
71 被縛者のマダム(江口 淑子)  
72 縄の山と流湯器(福井 桃子)  
73 強制足挙臀部晒(高村 浩子)  
74 嚴重菱縄緊縛責(江口 淑子)  
75 両手両足吊り責(江口 淑子)  
76 白肌に喰込む縄(荒尾 慶子)  
77 全裸一直線開股(福井 桃子)  
78 裏門を開放する(深田 菊子)  
79 豆絞りの猿轡縛(深田 菊子)  
80 後手胴締股間縛(深田 菊子)  
81 強烈海老責地獄(江口 淑子)  
82 大の字縛り正面(高村 浩子)  
83 足挙げ強制開陳(高村 浩子)  
84 海老責の耐久度(荒尾 慶子)  
85 猿轡咽喉輪縛り(三浦 純子)  
86 後手吊上げ責め(三浦 純子)  
87 羞恥責臀部露出(三浦 純子)  
88 柔肌に喰込む縄(荒尾 慶子)  
89 淫虐に晒す女体(高村 浩子)  
90 マダム開股の図(福井 桃子)  
91 がっちり後手縛(深田 菊子)  
92 無惨白肌の縄痕(前田真知子)  
93 妊婦大の字縛り(富田由美子)  
94 開脚を強要せよ(富田由美子)  
95 引回される妊婦(富田由美子)  
96 強烈麻縄掛け(前田真知子)  
97 股間縛の引回し(江口 淑子)  
98 正座する股間縛(荒尾 慶子)  
99 荒縄後手二つ折(前田真知子)  
100 椅子開股羞恥責(前田真知子)



奇譚クラブ

一月号目次

△第二十六卷第一号△通刊第二八七号△

本文

フォト「人身御供」△左近麻里子△	庄野 謙吉 (9)
衝撃の告白△SM願望の終着駅△	渡部 光雄 (10)
小説「拷問クラブ」△「拷問ショウ」△	鶴見 浩一 (20)
カメラ・ルポルタージュ	
「全日空機で来た女」	塚本 鉄三 (32)
「奴隷妻」愛好△夫婦へ△被虐願望と意識△	柴 利好 (48)
女マッサー嬢告白△異常と異常の谷間△	佐瀬 芳子 (53)
連載・時代小説「紫蘭の門」(5)	風流極道軒 (56)
懸賞入選告白△私のヒタ・セクシユアリス△	杉本 弘志 (73)
連載小説「大噴火」△(第四十回)△	千葉 青鬼 (76)
十一月号を読みながら「思うこと」	提崎 昭人 (84)
新聞スクラップ△マゾ的受感とたわごと△	紅丸 紅吉 (89)
被虐願望女性の衝撃の告白	
岸然子の手記「桎梏より遁れて」	辻村 隆 (92)
修飾ショート・ショート△冥府よりの帰還△	小倉 幸男 (111)



奇クサロン

惑る「緊縛行」の記録……中津 紀川和歌子  
告白「Sマニアの妻として」……辻村 隆  
サロン案我記△第九十一回△……あらい かず  
イメージ「スケッチ」……乃美 剣造  
思い出の記 忘れぬ花……菊地 淳子  
おんな哀歌「哭壁」……津山 逸夫  
夫婦プレイ実践者の一人として……中村 勝一  
アブニストの弁……早木 夢二  
フォト通信「SM雑感」……清水 和也  
マニアの記 わが海老責め……藤 部  
佳人荒木慶子さんを思う……藤 部  
編集部だより……藤 部  
△M女通信△に寄る「縛りの基本方針」……山田 慈一  
て高村浩子さんへ……橋本 秀哉  
読後感寸評 躍進十二月号を賞でる……橋本 秀哉  
△深田菊子に捧ぐ△菊一輪……山田 慈一  
夫婦交換プレイの提唱……山田 慈一  
短信往来 佐野みさ子様へ……高崎 エネマ  
渡部好美夫人へ……中尾 茂男  
志村 加代様へ……東郷 とおる  
南加津子さんへ……藤 J O E  
イメージ画「残るは一枚」……佐野みさ子  
フォト通信 みさ子のSMS……佐野みさ子



懸賞入選創作「フラスコ族の叛乱」(忠)	城崎 恭介 (11)
切腹研究夜話「文芸切腹史」	中康 弘通 (13)
マダム美美代の告白「浣腸って素敵ネ！」	福井 桃子 (15)
感想「映画「性倒錯の世界」を観て」	杉本 弘志 (16)
連載・アブ紳士行状記「M派交遊録」(9)	鬼山 絢策 (19)
告白「私とプレイした人たち」	谷山久美子 (16)
Mマニアの告白△白い肉塊への眩惑△	忍頂寺 章 (16)
被虐の旅シリーズ「ハワイの別れ」	由利美千子 (17)
SMカメラ・ハント△大沢妙子の巻△	
「知りたい年頃」	辻村 隆 (18)
連載創作△幻想帝国△	花影 叢 (18)
愛読者の報告書「憧れの深田菊子を縛る」	益田 茂夫 (11)
青春の陥穽△五重連結△	芳野 眉美 (12)
読者通信	編集部選 (19)

イメージギャラリー「はずれぬ鎖」志羽利也(25)・「脱がせてえ」須坂旭(29)・「モデル人形」望井重砂路(61)・「シトソー遊び」小川茂正(67)・「哀願」宮城昌子(84)・「ともしび」志羽利也(10)・「寄者の狂宴」岡たかし(11)・「ドッグ・ランチ」春川ナミオ(11)・「ケツ庄特訓」春川ナミオ(11)・「足裏清拭台」岡たかし(11)・「組立椅子」春川ナミオ(11)・「しほりしほり」名古屋S生(11)・「麗人架刑」岡たかし(11)

目次フォト △福井 桃子△ △カット △KOJI・S△



記入の上、大阪市阿倍野局私書箱第14号天星社宛にお申込み下さい。送料当方負担にて急送致します。



奇

譚

ク

ラ

ブ

1972年1月号

＜第26巻第1号・通刊第278号＞



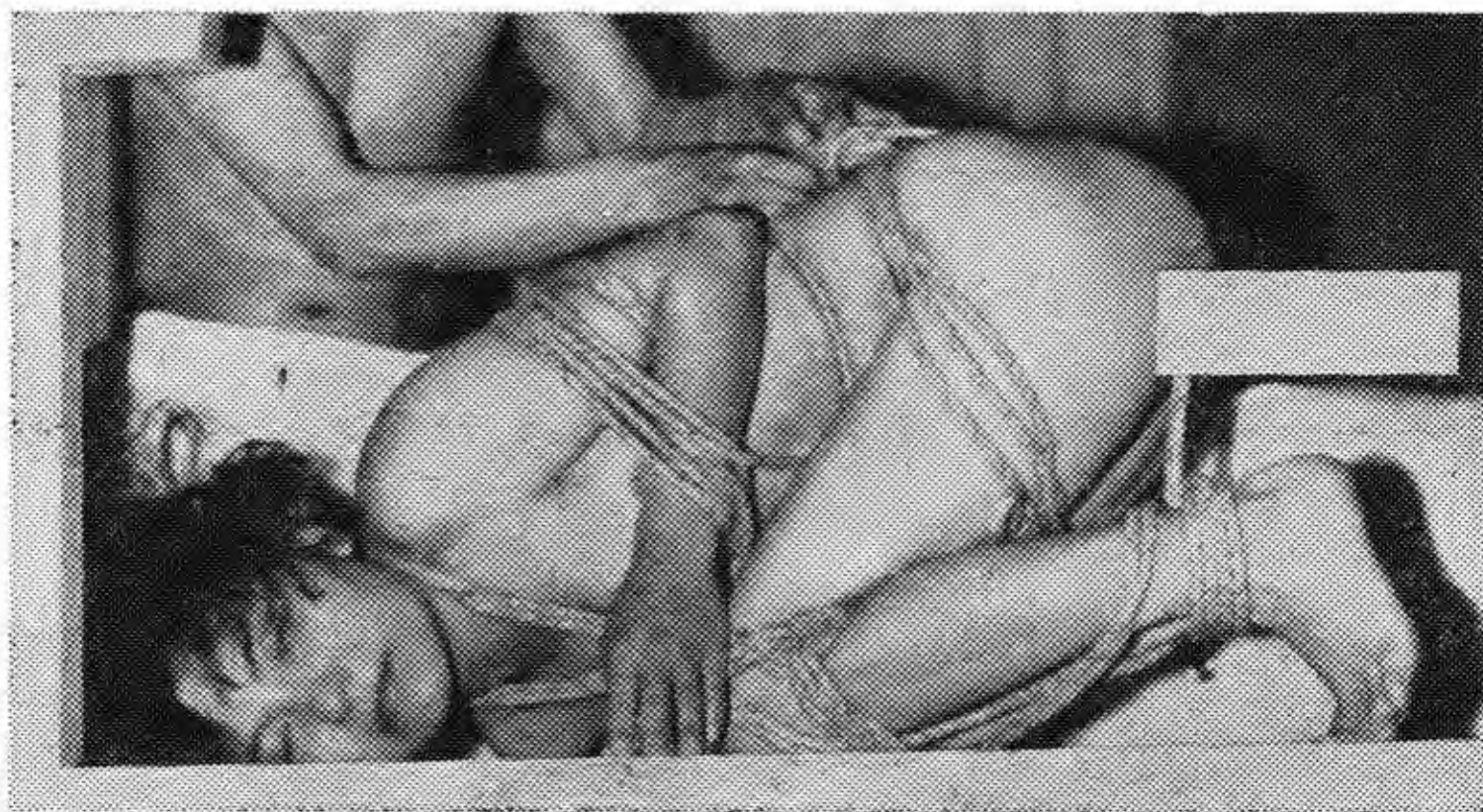
人身御供

／＼左近麻里子／

うしろ手に縛られてSMプレイの祭壇に捧げられた麻里子の周囲には、いろいろの責めの小道具が乱雑にちらばっている。これから、この可憐なイケニエの上に、どのような嗜虐の手が加えられるのか、見ている人たちは、カタズをのんで次に行なわれる事を待っていた。哀愁を帯びた麻里子

の端正な顔の中には諦観の中にも、未知のものに対する好奇心にも似た心のおののきが激しく心の中をゆさぶっていた。  
(庄野謙吉・記)





## 衝撃の告白

# S M 願望の終着駅

〈木山春夫君との三人プレー報告書〉

渡部光雄

奇ク誌上に、なんだかんだと雑文を発表させて戴くようになって、かれこれ、一年半にもなりますが、いつも感じますことは、投稿家の皆さんの表現の豊かさ描写の素晴らしさに、いつも感心しております。

私も自分が経験しましたことや時にふれ思い浮かべたことなどを、出来るだけ同好者の方々にお話したいとペンをとってみたくなるのですが、いざ書き出してみると、自分の心で思っていることの何

分の一も書き表すことが出来ず、自分の能力の無さに腹立たしくさえなってしまう。それでも、拙い文章ながら、紙の上に書いてみると、なんとなく気持が落ち着くので、ついつい原稿用紙に向かってしまっているのですが、編集部の方々には何かと、ご迷惑をかけていることと思います。

この十年余り、私を常に悩まし苦しめております糖尿病が、今年の夏頃から急に悪化して、体力が消耗し視力も弱くなって、とてもまともに仕事の出来る状態ではなく、療養生



活を余儀なくされていますが、身体の衰弱とは逆に性に対する異常な程の執着と衝動が昂まり、新しい興奮と刺激を求めるようになり、新しいのは、丁度瘦地に芽を出した植物が、早く開花結実を遂げようとする自然的な行為と同じ理由でしょうか。

木山春夫という青年と家族同様の交際を始めましたのも、私の精力の極端な衰えから、より新しいS M プレーによる刺激剤を求めた一つの試みだったのですが、私のこの異常ともいべき願望、それに妻の好美の被虐を求める願いを彼は快く理解してくれ、彼自身の高度のS性の満足感とが相俟って、一応幸せな日々を送ることが出来ました。

木山春夫君を混じえての三人プレーと申しまして三人というのは始めの内だけで、やがて私は彼に責められる妻の好美の姿態を眺めるのが楽しみになり、そっと部屋を出て換のすき間から彼と好美とのS M プレーを覗き見するようになってしまいました。

彼から羞恥責めを受け、命じられるままに色々な淫らなポーズをさせられたり、自分から殊更、身を開いてセックスを求めている好美の全てを見学するという事は、この世の中で、これほど私の心をときめかし、激しい

身を灼く嫉妬心に苦しませ、興奮を覚えることはありません。しかし、木山君の話によりますと、どこかで好美の夫である私の目が光っていると思うと、どうしても気が散ってプレーに熱中できないというのです。

そこで、最近では好美に木山君と月に一度外泊して、心の奥底から思いきってプレーをやり、お互いの性癖を満喫するよう許してあります。このことは、出来るだけ私が口を挟まず、木山君と好美の二人が自由に話し合っ

て決め、お互いの心のつながりを養い、プレーが、より効果的に出来るようにという私の思いやりからです。

八月の或る土曜日のことです。突然、彼がやってきました。下宿でばんやり考え事をしていたら、急に奥さんに逢いたくて出てきたというのです。いつものように、風呂へ一緒に入ってビールを飲みながらS M 談義をしておりましたところ、彼が急に真面目な顔になって、「渡部さん、今夜、奥さんとデートさせてくれませんか」と言い出すのです。

そばにいた好美も、びっくりして「まあ、急に、どうしたって言うの？」と言います。「それは、いつものように、二人で相談すればよいのだが、今日はまた、急な話だね」と

私も何げなく答えたのですが、何となく、彼の様子が、いつもとは変わっていました。「どうだ、木山君が折角あ言ってるんだ。一泊して来たら——」

「あなたが許して下さるなら、私は御一緒にてもかまいませんけど……」

妻は語尾をにぎっていました。早やS M プレーに対する期待で顔は上気しています。

「ちょっとタバコを買ってくるよ」

わざと席をはずして、私は二人が話をし易いように気をきかしたのですが、表へ出て角の煙草屋でハイライトを買って戻ってきました。と、どうやら話がまとまったらしく、好美は外出の身仕度をしていました。

思えば、私のなかば強制的ともいえる願望によって、夫婦の間に彼の介在を許し、三人プレーを試行したのですが、交友を深めるなかでプレーを重ねているうち、自然とお互いに信頼感が増し、安心してプレーをし、また妻の好美をまかせることも出来るようになったのでした。

好美の話によりますと、私を交えての時は何といっても遠慮勝ちですが、二人だけになると、彼は俄然、強烈なS性を発揮して、激しい責めを加えるそうです。その後は、素晴



しいテクニックでセックスに入るのですが、強烈きわまりない責めのあとにくる甘美な肉体のいとなみは、身体の奥底から悦楽の歓喜を湧き立たせ、幾度となく声をあげて泣き出してしまふとのことです。

日常接している範囲での彼の素直で明るく真面目すぎる位の性格と、一旦プレーに入ると燃え上がる強烈なS性は木山春夫を二重人格者の様に見せています。しかし、マゾ願望の強い好美にとっては、責め抜かれる悦虐を通して、今や、木山春夫の存在は、心と肉体の中に抜き難い感情として植えつけられてしまっているようです。

その夜も、急な彼の申し出にも拘らず、快く聞き入れて、身仕度もそこそこ、いそいそと二人で出てゆきました。

彼は今晚もまた強烈に好美を責め、恥かしめを与え、好美を狂喜させる事だろうと思うと、私の胸の中には一種異様な嫉妬心が、こみあげ、灼熱した火の玉が体中を熱くかけめぐる思いでした。しかし、彼とのプレーの後の好美の報告は、いつも素晴らしいSMシヨ



ーのようで、話をしている中、彼女自身もプレーの様子を思い出し、いつとはなしに私にも責めを求めてまいります。

それを思うと、私の激しい嫉妬心は、やがて、甘い心のときめきとなり、秘められたS

性を呼びさます導火線となります。好美の報告のあとの責めのことを考えると、今夜の木山君とのプレーが、より刺激的であり、より強烈であることを祈らざるを得ないのです。

いつものことながら、一泊でのプレーの後、午前十一時頃に帰宅することになっておりますので、子供達を近くの知り合いへ連れて行って預けた上で、好美の帰りを待っております。

「ただ今。昨夜は、どうもすみません」  
少し照れくさそうな顔をして好美は元氣よく帰ってきました。

私は昨夜来、好美が帰ってきたら、どのようにして報告させてやろうかと、いろいろ考えていたのですが、結局いつものように、丸裸にして縛り上げ、じわじわと責めながら報告させることにしました。

これから好美は昨夜、木山春夫と楽しんだ事を、私に命じられるままに再現しなければならぬのです。それは私という御主人様の寛大なほからいで、一夜他の男と楽しんできた奴隷妻好美の当然の勤めでもあるのです。

好美の顔を見るなり、私は開口一番「どんな気持ちだった？」と聞いてみました。

「ええ、いつもと同じくらい、激しく責めら



れて……。でも、とても楽しかったワ」

うきうきとした調子で答えます。何が、どのように楽しかったのか、早く聞きたいものとは、しきりに、はやりませんが、やはり、いつもの責めのコースに入ってゆきます。

「なんだ、その格好は。御主人様に報告申し上げるといふのに、服を着たままでよいというのか。さあ、早く、裸になれ」

「申し訳ありません。これから裸になって、御報告、申し上げます」

そう言って跪きノースリーブのワンピースを脱いだ好美は、何を思ったのか、急に泣きだしそんな顔をして、「あなた、どうか今日は、このままにして。お願い、好美、今日はとても裸になれないの。ねえ、お願い」

哀願する好美の顔は涙に濡れていました。

私は「これは、何か変わった恥かしめを受けたに違いない。きつと体のどこかに、まだ責められた跡が残っているのだろう」と思うと、無しようにS性がカッカッと燃え上がってきて、どうしても好美が自分から裸にならなければならないようにしてやろうと、心にきめました。

「さあ、早くしろ。いつものように丸裸になって、木山君に奉仕した跡を全部さらけ出し

て、私に検査させるのだ」

「今日だけは、どうぞおゆるし下さい。好美は、好美は、あなたにお見せ出来ないの。ねえ、今日だけは、かんにんして——」

「駄目だ。お前は、この私に、ことのすべてを報告しなければならぬ義務があるのだ」

「はい、それはよくわかっております。ですが、今日だけは、このままの格好でおゆるし下さい。お願いです」

「何度、言っても同じだ。お前は奴隷妻としての勤めを忘れたのか。どうしても、お前がいやと言うのなら、こうしてやる」

かねてから用意してあったロープを手にするが早いか、好美を捻じ伏せ、ぎりぎり縛り上げた上でスリッパをまくりました。すると、どうでしょう。好美のパンティがズタズタに引き裂かれているではありませんか。

「これは、一体どうしたっていうんだ。どうして、こんなことになったのか、早く申し上げるのだ」

頭髪をわしづかみにして部屋中を引きずり回し、報告を迫りました。今日は、どうやらいつもと違うプレーになりそうだと心の中で思いながら、好美の態度の急変に、責め立てずには、おれませんでした。

「ゆるして、おゆるし下さい。好美は、すべてを、お話します。あなた、ゆるして……」

引きずられながら、やっと報告すると申しますので、手をゆるめました。

「今朝、帰る前、パンティをはこうとしましたら、木山さんがとりあげてカミソリで、こんなに切ってしまったわ、これをはいて帰れと言われたのです。私、あなたに、こんな格好、見られるの恥かしくて。でも、もういいの。他にも、もっともっと恥かしいこと、されたんですもの。ねえ、パンティ脱がしてそして、よく見て。こんなにされたの」

「こんなパンティをはいて外を歩いてきたんだ。着て歩いた感じは、どうだった？」

「はい、とても涼しくて、気持ちがよかったです。でも恥かしくて……」

「木山君に作ってもらったのだから、特によかったのだろう。そうだと言えッ」

「はい、木山さんに作ってもらって、とてもうれしいです」

「そんなに、彼が好きなのか。よし、この御主人様が、もっともっと、好きになるように今日は、たっぷり責めてやる」

激しい嫉妬が、ムラムラ湧いてきました。一方それと共に煮えたぎる様なS性が無し



うに高まり、引き裂かれたパンティを荒々しく脱がしたのですが、そこに私が見たものはたしかに昨夜まで、そこに黒々と密生しておりましたものが、今は、つるつるに剃り上げられて禿山になっているではありませんか。いや、それだけではありません。剃毛された丘に赤々と赤チンがぬりつけてあるではありませんか。私は狂ったように好美を椅子に縛りつけていました。「これはまた、なんというさまだ。さあ、早く、どうして、こんなことになったのか、包みかくさず報告しろ」パイプにスイッチを入れローソクに点火して好美に迫りました。「はい。好美は、すべてをお話します。好美は昨夜、木山さんに連れられて嵐山のHホテルでSMプレーをしました。木山さんに丸裸にされ、奴隷の誓



いを申し上げ、犬になったり、恥かしい言葉を口走りながら、オシヤブリの奉仕もしました」  
「それから、どうしたんだッ」  
「それから、お風呂場で犬の格好をして、オシッコをするよう命じられました。その格好が悪いと大変叱られ剃られてしまいました」

「それから、早く言えッ」  
「それからベッドに張り付けにされ、ムチ打ち、針責め、蠟責めと、次から次へと責められ、最後には蠟責めを受けながら、木山さんのお情けを頂戴しました。しびれるような快楽と蠟責めの熱さに、気も遠くなるような飲

びでした」  
「それだけか、あとを早く言え」  
「あなた、好美は木山さんが大好き。こんなに好美を責めて下さるあの方が、どうしても忘れられなくなりました。こんなことを言う好美をゆるして下さい。こんな悪い好美を、どうか責めて下さい。どんな責めでも、よろこんでお受けします」  
「言うことは、それだけかッ」  
「木山さんに鏡の前につれてゆかれ、目を閉じることを許されず、自分の浅ましい格好を見るように命じられ、あの方に抱かれる自分を見てしまいました。とても恥かしいことですが、いつもより、たまらなく燃えました。本当に好美は、いけない女です」



これ以上、私は好美の口から報告を聞くことは出来ませんでした。私の嫉妬心は極に達して、何をするか、思わず自分の理性を失うほどでした。矢庭に引き裂かれたパンティを好美の口の中にねじ込み、ロープで顔中を縛り上げ、ムチ打ちを、くり返し、蠟涙をたらし、あくなき責めを加えるのでした。

真夏のヒル下がり、私の責めの部屋は夫婦のS M プレーの熱気にむんむんとむせかえりまるでルツボのようです。

「こんなにして、木山君に責められたのか。どうか。どうか」

私は狂ったように好美を責めながら、とめどもなく目から涙を流していました。そんなプレーがあつて暫くして、好美は私に言ったものです。

「この前、私が木山さんとプレーした時、あの方、いつもとは何かしら変わったところがありましたわ。激しく私を責めながら時々思いつめたようなところがあつて、私、なんとなく気になっていましたの」

「私も、彼がきた時から、彼の私生活に何か変化があつたのではないかと思つていたのだよ」等と返事をしておりましたが、その原因がなんであつたのか、今度の彼の訪問によつ

て明らかになつたのです。その日の彼は、私の顔を見るなり言い出しました。

「渡部さん。本当にすみませんが、家庭の事情で、どうしても田舎へ帰つて、家の仕事をしなければならなくなりました。二月ほど前から、いろいろ考へていたのですが、なかなか決心がつかないのです。やっと思つて落着きましたので、お別れに來ました。実は先日、奥さんとプレーした時に話そうと思つたのですが、どうしても言えず、奥さんを求めてしまいました。短い間でしたが、家族同様に親切にして戴き、奥さんにも、何かと無理ばかりお願いしながら、なんのお返しも出來ず、どうか我儘をおゆるし下さい」

「それは、大変残念ですね。でも家庭の事情なら仕方ないですよ。折角S M の同好者として楽しく交際出來たのに、返す返すも残念ですが、またお逢ひ出来る日も、きっとあると思います」

私は通り一遍の挨拶を交していましたが、傍の好美は如何にも心残りのようです。

「あら、木山さん、田舎へお帰りになりますの。子供達も、あんなに、なつておりますのに。私も本当に淋しくなりますわ」

好美にしてみれば、如何にプレーと割り切

つての交際であつても、肉体的結合まで許した相手であつてみれば、男の私では計り知れない複雑な淋しさがこみあげてきたのでしよう。しきりに目頭を拭いていました。

私は木山君に、こんな提案を試みました。「どうだろう。お別れに、一度、どこかのモーターにでも行つて、最後の三人プレーをやってみないか」

「渡部さんや奥さんが許して下さるなら、思ひ出に残るような楽しい三人プレーをしたいですね。僕に異存はありません」

衆議一決で三人プレーは、きまりました。さっそく、九月五日の日曜日にやることに日をきめました。

その日は、台風29号の影響で朝から雨模様でしたが、そればかりでなく風も強まってきました。なんとなく複雑な私達夫婦の感情の起伏を表わしているようなお天気でした。

午前10時、木山君の迎えの車がきました。

朝早くから、好美は「木山さんの大好物のり巻をつくるのだ」と張りきつておりました。行き先は、琵琶湖畔のKモーターときめてありました。ここは、木山君が好美と、今まで何度となくプレーに狂つた、二人にとつては思ひ出の場所でもあるのです。



木山君の運転する真赤なサニーは、丸太町通りを東へ銀閣寺より北白川を通って比叡山ドライブウエーへ向かいました。この頃より降り出した雨は次第に激しさを増してきましたが、車はエンジンの音も軽ろやかに、緑の樹々の間を縫って走り続けます。

ドライブウエーの入口から右側の一般道路へ入り、山中越えを通過、眼下に琵琶湖と大津市を見下ろす見晴しのよい坂道を一気に下ってゆきました。左に近江神宮を眺めながら湖畔へ出ます。夏の間、芋の子を洗うような大変な人出で賑った柳ヶ瀬水泳場も、九月ともなると、忘れたような静けさです。

小降りになったせいかわ目の前がひらけてヨットが二つ、静かに浮かんでいるだけです。そこを通ると、目的のKモーターの白い建物が前方右側に見えてきました。

「特別和室」の札のかかったガレージへ車を入れてシャッターが下りると、いよいよ、彼との三人プレーが、これから始まるのだという実感がわいてきました。部屋へ入ると、好美が、いそいそとしてきます。

「私、お風呂に、入ってきます」

浴室へ消えた好美を見届けてから、私は木山君に話しかけました。

「木山君、ここは、君達二人がよく来たところだそうだね」

「はあ、三度ばかり、奥さんと御一緒しました。やはり、一度来て、感じがとてもよかったので、自然、ここばかり使うようになってしまいました」

好美に風呂に入るように命じ、木山君と二人で責め道具を車から運んだあと、手づくりの巻ずしをパクついていいますと、バスタオルで体を包んだ好美が「お待たせしました」とちよっぴり、恥らいを全身に表わしながら、私達の前に坐りました。

木山春夫と渡部光雄という二人のS男の前に、これから好美は、肉体の全てをさらけ出して、かぎりない責めを甘受しなければならぬのです。

「木山君。いつものように、君が好きなのようにしてくれたまえ。私はちよっと、風呂へ入ってくるから——」

「よろしいので——」

「いいとも。今日は君の素晴らしい飼育ぶりをゆっくり見学させてもらうのが、たのしみなんだから、今日の主役は君だよ」

私はそう言い残して浴室へ入りました。自然石を巧みに組合せ、一見、岩風呂に見せか

けた、なかなか凝った風呂になっていて、湯の栓をひねると、岩と岩の間を伝って湯が流れてくるようになっています。

さらさら、岩走る湯の音を聞きながら、浴槽に長々と足を伸ばして木山君との出会いから今日までのことを、ぼんやりと思い出しておりますと、ピシリという緊張した音がしました。きつと、平手で尻を打ったのでしよう。反射的に「痛いッ」という声が出て、今まで静かだった部屋が、急に騒がしくなってきました。

「いよいよ、始まったらしい。ぼつぼつ見学しなければ——」

そう思うと、のんびり湯につかっている気にもなれません。あわてて風呂を出ると、身体を拭くのもそこそこに、隣の部屋へ忍び込み、襖を少し開いて覗きました。

後手高手小手に縛られ、木山君の前に正座した好美が、何やら言っているらしいのですが、声が小さくて、何を言っているのか、私には聞きとれません。すると矢庭に木山君は好美の髪の毛を掴むと、引き倒して頬ぺたを床につけさせ、平手でお尻をピシッピシッと叩きながら

「さあ、もう一度、正座して言ってみろ。お



前の旦那さんが聞いているから  
言えないというのか。さあ、ど  
うだ」

好美の声が小さいので、更に  
お尻が幾度となく叩かれます。

「なんだ、もっと大きな声で言  
ってみろ。いつものように、教  
えられたように、大きな声で、  
はっきりと、お前の旦那さん  
にも、よく聞こえるように、早く  
言え」

「木山さん。好美が、悪うござ  
いました。奴隷の誓いを致しま  
す。私の目も、鼻も、耳も、そ  
うして、体の全てを、あなた様  
に差し上げます」

「よし、それでは、その証しを  
するのだ」

「でも、主人の前で、そんな、あさましいこ  
と、今日のところはかんにんして下さい」

「今更、何を言ってるんだ。お前の旦那も、  
それを見たがっているのだ」

「はい、でも……」

「でも、くそもあるか。今、お前は、奴隷  
の誓いをしたではないか。さあ、早く、証し



をしろッ」

そう強要された好美は、涙に濡れた顔を上  
げ羞恥を全身に表わしながらも、毛深い木山  
君の両足の間に顔を入れてゆきます。

木山君の両手は巧みに動いて乳首をもみあ  
げて好美の性感をいやが上にも高めてゆきま  
す。好美は羞恥に身をよじりながらも、次第

にマゾの本性を表わしはじめ、  
やがて言葉にならない声を発し  
ながら、オシャブリの奉仕をつ  
づけ、奴隷の証しを立てるので  
した。

私が教えた『静子夫人』とい  
う、あられもないポーズを命じ  
られた好美は、両足を大きく開  
いて高々と尻を持ち上げ木山君  
の次の責めを待っております。

マゾ願望のさくら貝は充血し  
て、ほのかに赤く、かわいい口  
をぽっかりと開け、どんな責め  
でも、よろこんでお受けします  
と語りかけているようです。や  
がて、かすかなうなりを發した  
一本のパイプが取り出されまし  
た。

パイプの動きにつれて、好美の豊かなお尻  
が左右に回すように動きはじめ、好美は、我  
を忘れて声を出し、恥かしさの衣をかなぐり  
捨てて被虐の願望を求めて大きく波打ち、木  
山君のS性もまた果てしなくひろがり、好美  
の全身に対する針責め、クリップ責めと、休  
みなく続けてゆきます。



「イタタ、イタイ。ゆるして、ああ、痛い。ゆるして、ゆるして……」

好美は口では、そう叫びながらも、木山君に体をすりつけてゆくのです。それが無言の合図だったのでしよう。縄を解かれた好美は私の存在など全く無視したように、どっと、木山君に抱きつきました。

あれほど恥かしがっていたオシャブリの奉仕を、今ではもう自分から進んで積極的に行なうばかりか、頼ずりさえしているのです。

それが、どうやら、何回かの、今日までのプレーの中で、木山君に飼育された好美の本当の姿のように思えました。S M プレーはセックスへの、より刺激的な前戯として考え、そして行動してきた私の気持を、限りなく満足させてくれるものでした。

好美は再び木山君の手で縛り上げられました。尻を大きく持ち上げ開股して膝を立て、羞恥の極みといったポーズをとらされて木山君を待っております。若者らしく元氣溢れる体をぐっと起こした木山君は器用な手つきで蠟燭に火をつけ好美を蠟燭めにながらセックスプレーをしようとしています。好美は待ちかねたように、腰から下をなまめかしく、ゆり動かし

「木山さん。私、この責め、大好きよ。早く熱いのをして——」

しきりに蠟燭めを求めております。

一滴、また一滴、熱い蠟涙は好美の肌の上に落ちては白く固まってゆきます。

首筋に、胸に、乳首に、腹に、そうして最も秘すべき個所の近くへも、所を変え、場所を変え、たゆみなく、熱い蠟のしたたりは、好美の肌という肌を、しみだらけにしてゆきます。

「アツイ、アツイ。ああ、かんにんして。もっと、もっと、あつくして——」

「よし、さあ、これでもか」

木山君は今までより一段と低いところから熱い蠟涙を流し始めますと、好美は

「ああ、あつい、かんにんして。ああああ、あつい。木山さん、私、どうすればいいの。ああ、うれしい。もっと、いじめて——」

つきあげる快楽にまみれた好美は、自分の全ての理性をかなぐりすてて、一匹の性の奴隷と化し、悦虐に身を焦がし被虐願望をむきだしにして木山君に求めてやまないのです。「木山さん。好美、好美は、もうたまらないの。ねえ、抱いて。好美を抱いて下さい」昂進もその極になってきたのでしよう。好

美は激しく体をゆり動かしています。赤々と燃えさかるS M 願望の二つの肉体は今や一つとなつて、いつ果てるともなく激しく、S とMの合一行為をつづけました。

そこまで我を忘れて見つめておりました私は、そっと部屋を出て、二人の行為が散らないようにと心を配りました。しばらくして部屋を覗いてみますと、いつの間にか好美の縛りは解かれ、二人は無言のまま抱き合っているところでした。目を閉じた好美の顔に一筋の涙さえ光っているようでした。

これで、全てが終わったのかと見ておりますと、やがて二人は起き上がりました。

「さあ、終わりの言葉を述べるんだ」

木山君の命令が、とびました。

「今日は、目も、鼻も、口も、耳も、そうして体の全てを、責めて戴き、本当にありがとうございました。好美は自分の口で、お礼の奉仕をさせて戴きます。そこへ、横になつて下さいませ」

二度、三度とオシャブリがくり返されて好美の奉仕が終わりますと、二人連れだって浴室へ消えてゆきました。はじめの中、今日は三人プレーを楽しもうと考えていたのですが木山君の素晴らしいテクニクの責めを見てい



るうち、私の出る番がなくなり、ただ二人の S M プレーを見学するだけになってしまいました。

私がかねてから希求していた八自分の見ている前で、愛妻の好美が他人の手によって激しく責められ、その挙句たまらなくなってセックスプレーに入るところを見たい V という異常なまでの願望が、木山春夫という強烈な S 性の男性の出現によって実現し、長い間の私の夢は、想像していたより遥かに強烈な印象となって私の脳裡に灼きつきましました。

それにしても人生とは、なんと皮肉なものなのでしょう。夫婦が S M プレーの甘美な遊びを味わい、やがて、それがマンネリ化して色あせてゆき、平凡な刺戟の中から、より強烈な何かを求めて、さまよい苦しみ、さまざまな試行の中から、やっとの思いで願望の頂に手が届いたのが現在です。

木山春夫君という私達夫婦願望の救世主ともいべき人物と知り合い、甘酸っぱい倒錯の世界に身をゆだねたのも束の間、彼の帰郷によって、この三人プレーの激しい興奮も消滅してしまうのです。

しかし、一步退いて考えてみますと、私達夫婦の倒錯性癖の中に第三者の介在を許して

きた、短いながらも楽しかった今日までの生活が、果たして、いつまで続くものか、誰も予測できないことです。

仮に長々と続くことがあったとしても、お互いの人間的弱点が目に見え、お互いに S M の炎が燃えさかっている間に、一抹の別離の淋しさを残しながら別れた方がよいと思いました。その方が、お互いの心の奥深く、S M プレーの楽しい思い出が印象強く、いついつまでも、生々しく残るのではないのでしょうか。

木山君と好美の長い入浴は、まだ続いておられます。ただ、プレーの後の汗を流すための入浴ではなくて、プレーの余韻を二人で楽しむといったものなのでしょう。男と女が互いに生まれたままの裸となって自然の感情のふれ合いを交しているのかもしれない。

湯の音がかすかに聞こえるだけで、声もなく音もなく、かみ殺したような好美の囁きがとぎれとぎれに聞こえてくるばかりでした。

こうして、木山春夫君と私達夫婦の願望が完全に満たされたという形で、強烈な刺戟を生々しく残して終末を告げたのでした。

昼前から降り出した雨は一向に止まず、モーターのシャッターを開けたときには、滝の

ような豪雨となって降り注いでいました。

車は一路、京都へ。

好美の首筋や手首に残っている縄目の跡が今日のプレーの強烈さを物語るように、はつきりといっています。

激しく降りしきる雨を掻き分けるようにして、ハンドルを握る木山君の胸中には何が去来しているのでしょうか。そして、木山君の傍の助手席に坐っている好美も、何を考えているのでしょうか。

私が幾度となく妻に命じ、また自らも求めた S M プレーへの限らない願望は、総括的には大きな結果を生み、ここに試みの一ページが終わろうとしております。

風を混じえた雨は、やたらに激しく横なぐりにウィンドーに吹きつけています。なぜか私の耳には、さっき聞いた好美のすすり泣きだけが、こびりついたように離れないのでした。

——(終)——

△編集部注△ 木山春夫氏の告白『好美夫

人を縛る』は、46年10月号に発表されています。





小説「拷問クラブ」シリーズ(1)

拷問シヨウ

鶴見浩一

松山家の地下に設けられた特別室で、今日のシヨウが始まろうとしていた。古い馴染みの観客の四人は、すでに椅子に坐り、期待に胸を躍らせながら、静かに開演を待っていた。

室内の電灯は消え、舞台となる鉄製の特殊ベッドを、スポットライトが丸く照らしていた。ベッドには数種の歯車が付けられ、複雑なメカニックを内蔵している。松山老人の自慢の一つである。

天井からは何本もの銀色の鎖が下がっていた。ライトに反射して不気味に光り、出演者の到着を待っている。

ベッドの横には、ギラギラしたムキ出しの電気コードと、小さな変圧器が設置されており、それがまた、観客の想像を楽しくしていた。

部屋の後方にいる松山老人が、ドラを一つ鳴らした。

「皆さん、お待せしました。只今より開演しましょう」

松山老人の言葉が終わると同時に、矢部信次が若い娘を連れて、スポットの中に入ってきた。信次はブリーフ一枚の裸で、若く、たくましい筋肉を示すように、観客に向かって一礼した。

「この青年は、すでに皆さん顔馴染みだと思います。その道のベテランであり、私の忠実な助手です」

松山老人がそういういながら、片手で合図すると、信次は、おびえ切っている若い娘を、観客の前面に押し出した。

純白のスリッパを着た娘は、両手を後で縛られ、形の良い唇を半開きにしていた。特殊な口カセのために口を閉じる事はできない。



ただ、長いマツゲの奥に、恐怖に見開かれた瞳が、キラキラと輝いていた。その、可憐な美しさが、観客には嬉しかった。若い、きれいな娘が苦痛の表情を示す時、観客の快楽が始まるのである。そういう人達のための特別シヨウであった。

松山老人が、後方から娘を紹介した。

「今日のシヨウの主演は、この女性です。岡本順子、十八才。一週間前まではO・Lでした。まだ処女です。一つ、男を知らぬ身体を見て貰いましょう」

信次は、順子のスリップに手をかけ、脱がし始めた。

まず、若い弾力に富んだ白い肩が現われ、スナナリと伸びた姿態が、明るいスポットライトの中で震えた。

つづいて信次の指が、無表情にブラジャーを取り除くと、ムッチリと張った形のよい双の乳房が現われた。

ほうっくと観客の一人が、思わず溜息をついた。それ程、順子の乳房は可愛らしかった。丸い、なめらかな曲線の頂点に、米粒程の小さな乳首が、ピンク色の顔を出している。

松山老人は、自分が賞められたように弾んだ口調で言った。

「どうです。真の処女の乳房です。一度、乳房圧迫器にかけて、思いつき縮め上げてみましたが、すぐに元に戻る。ゴムマリのような弾力です」

信次の手が、小さな、最後の着衣であるパンティにかかると、順子は激しく抵抗した。もの言えぬその顔は、精一杯の哀願の表情を示している。

信次は、無理に脱がすのをやめ、大型の万年筆の様なものを取り出した。

「ウウ……ウウ……」

順子はそれを見ると、唸り声をあげて身体を震わした。

「何ですか、あれは」

観客の一人が、松山老人に問うた。

「電気です」

松山老人は、楽しそうに答える。

「電気……」

「そうです。あの中に強力な電源が内蔵されています。信次、やってみなさい」

信次は頷くと、順子の腕にそれを押しつけた。

「ウウッ……ウアッ」

順子の身体は、ガクンとのけぞり、突張った。一秒程の接触であったが、順子の顔は青

ざめ、乳房の谷間に汗が噴き出していた。

「成る程、強力らしいですな」

「鞭の代りとして考案した物です。教育にはこれが一番いい。さあ、信次、急ぎなさい。

真裸にして、そのお嬢さんをベッドへ」

抵抗する気力もなくなった順子の腰から、信次はパンティを脱がせると、作業を開始した。特殊ベッドに、丸裸の順子を縛りつけるのである。

順子は、今から自分の肉体を襲ってくる拷問の恐怖に、油汗を浮かばせながら、戦慄のおのきを、くり返していた。

順子にとって、今日までの一週間は、地獄に等しい悪夢のような毎日であった。

一週間前――。

会社が退けて銀座を散歩していた順子は、果物屋のパラーで松山老人と知り合った。

それが――不幸との出会いであった。

温厚な紳士風である松山老人が、一人でソフトクリームを舐めていた順子に、極めて自然な様子で話かけてきた時、順子は、なんの警戒心も起こさなかった。それほど松山老人の眼は澄んでいたのである。

自分は写真家だが、貴女の写真を一枚撮ら



してくれないか、と松山老人は、信頼に耐え得る表情で順子に頭を下げた。

世間知らずの箱入り娘で育った順子が、小さなアバンチュールに胸をときめかしたのが地獄への一步であった。

車で松山家へ連れてこられた順子は変わった部屋に案内された。不気味なメカニクを持ってゐるらしい椅子、ベッド、大きな箱等が設置されており、天井からは数十本の鎖が下がっている、陰気な部屋であった。

順子は本能的に恐れ、質問する口調には批難が、こめられていた。

「ここは何処です。本当に写真を……あッ」それが、順子の最後の言葉であった。何時の間にか後ろに回った信次が、順子の口に麻酔薬を嗅がせた。

気が付いた時、順子は両手を頭の上で縛られていた。

「何をするんですッ。帰して下さいッ」

叫んだつもりの言葉は、口の外から出なかった。順子は愕然となった。口の中にゴム製の口カセが固定されていたのである。

順子の全身に恐怖が走った。先程の松山老人と、若い青年が、順子の前で笑っている。

松山老人が合図すると、信次は壁にずらりと並んだボタンの一つを押した。ジ、ジ、ジと電動の音がして、順子の身体は吊り上げられた。両手を縛ったロープがピンと天井まで張り、順子の足は床から離れたのである。

「ウウッ……ウウッ……」

肩の骨に全身の重みがかかる苦痛に、順子は悲鳴をあげた。もちろん、口カセのためにその悲鳴は唸り声となっている。

松山老人は静かな口調で呟いた。

「お嬢さん、騙して悪かったですな。貴女には、なんの怨みもないが、今から一週間、少し痛い目に合せて貰います。我々には、貴女みたいな若く美しい処女が必要なんです。では、さっそくだが処女かどうか調べさせて貰いますよ……」

松山老人の合図で、信次は長いハサミを取り出した。順子の衣服は、それで切り取られていった。ブラウスとスカートが切れ、スリップも切り落とされた順子は、羞恥と骨の激痛に涙をこぼしていた。これ以上、何をされるのかと思うと気が遠くなってくる。

乳房の谷間とブラジャーの間に、冷たい金属製のハサミを感じた時、順子は思わず叫んだ。

「やめてッ」

絶叫した言葉は、特殊な口カセのために、ただの呻き声と変わった。

パチンと音を立ててブラジャーが切り取られると、順子は、絶望的な羞恥に身を震わした。とたんに、体重の圧力が肩の骨と手首を強烈に責めた。

「ウッ……ウウッ……」

順子の丸やかな形の良い乳房が露わにされた。両腕を耳に押しつけるようにして吊り下げられているため、張り切った乳房は双方から圧縮され盛り上がった。

「ほう……」

その美事な乳房の線に、松山老人は思わず溜息をついた。

「こういう美しい乳房を眺めると、少し虐めたい気が起くるのは当然だな……。信次は、そう思わんか」

信次は、異様に眼を光らせて答えた。

「同感です」

「やってみるか……」

「あれ……を使いますか」

「ふむ、暫く乳房圧迫器は使用していなかったな……」

温厚な、紳士然とした松山老人の顔は、す



でにサデイスチックな表情に変わっていた。

種々雑多と置かれている拷問道具の中から信次は鍋敷きの様な太い針金の器具を持ってきた。直径十五センチ程の丸い円を描いた針金で、円の終点の所に歯車がついている。

信次は、その円の中に、順子の柔らかい乳房の一方を入れた。

「ヒィッ」

順子は声にならぬ悲鳴をあげた。ギョッと片方の乳房が圧迫されたのである。

信次は無表情に歯車を回し始めた。十五センチあった円が、十センチ、五センチと縮まっていく。

「ウアッ……ウグッ」

順子は乳房を根元からもぎ取られるような激痛に、激しく身をのけぞらせた。

順子の柔らかい乳房が、真中からひょうたんのように、くびれた。

「グッ……ウウッ」

頬一つ殴られた事のない家庭で育った順子にとって、乳房をねじ切られるような激痛は想像を絶するものであった。

針金の輪が三センチに締められた時、順子の全身から油汗が噴き出した。順子の乳房は真中からくびれ、野球のボールみたいに、きれいな丸い円を描いた。その円の頂点に、押し出された乳首が、真赤に充血して、くっついていてる。

「グアッ……グウッ……」

順子は鋭く呻くと、ガクンと身体を突張った。心臓が引きつるような苦しみに、何時しか順子は気を失っていた。

失神していた順子は、右腕に小さな痛みを感じると、水の底から浮かび出るように、スツと気が付いた。

——今までは夢を見てたんだわ……。

そう自分に言い聞かせて、恐る恐る眼を開いた順子は、暗然となった。

夢ではなかった。順子は相変わらず天井から吊り下げられていたのだ。眼の前には、注射針を持った信次と、笑みを浮かべた松山老人がいた。

現実に戻ると、先程の激痛が順子の全身を駆けめぐっている。

「ウウ……ウッ……」

乳房圧迫器は外されていたが、虐められた乳房は焼けつくように痛かった。

「気が付きましたかな、お嬢さん」

松山老人は、順子の傷ついていない方の乳房に触り乍ら言った。

「今、強心剤を打ちました。もっと痛い目に合っても、今度は失神しません。ま、ゆっくり苦しみを味わって貰いましょうかな」

どうしてこんな非道い事をツ、と叫んだが順子の言葉は外に出ない。順子は戦慄の思いに身震いした。

信次が先程のハサミを手にして、順子の小さな最後の布切れを切り取った。

順子には、もう既に抵抗する気力もない。順子にできる事といえば、処女の本能で両の膝を強く閉じるだけである。

が、そのはかない行為も、信次の手によって無残に打ち裂かれた。順子の白い足首は、ロープに結ばれ、左右に捻じられた。

順子は、また気が遠くなりそうになった。男達の視線が、自分の裸体を凝視し、釘づけになっているからである。

「ウウ……アウ……」

恐怖と羞恥でカッと見開いた順子の目から涙が、こぼれ落ちた。

松山老人が静かに言った。

「さて、お嬢さん、疑う訳ではないが、今から処女鑑定を行います。江戸の頃、徳川大奥で使用された方法で、少し古いが、かなり



確率は高い……」

松山老人の合図で、信次はピカピカに磨かれた鏡を持ってきた。そして、大きく広げられた順子の両足の間に設置したのである。細長い台の上に乗せられたその鏡は、順子の肌に今にも触れそうな位置に固定された。

「何、長い時間じゃありません。貴女の胎内の呼吸を調べるだけです。一度、男と通じたら、どうしてもその呼吸が激しくなりましてな……。処女は呼吸しないものです」

信次が後ろに回って、柔らかな筆で順子の全身を愛撫し始めると、松山老人は、その鏡を真剣な表情で覗き込んだ。

屈辱で気が狂いそうになる時間が流れた。

「間違いない。貴女は完全な処女だ」

松山老人は満足そうに叫んだ。信次は手早く鏡と台を片づける。

「お嬢さん、貴女は疑問に思ってたっしやるでしょうな。何故我々が貴女を責めたり、こんな事をしたりするのか……」

松山老人は、旨そうにタバコを吸うと説明を始めた。

「私はあるクラブを経営している。クラブと言っても、会員は四、五名です。秘密保持の

立場から、あまり増やせません。そのクラブの目的というものは、もうすでに御理解いただけたでしょう。若い処女の女性が苦しむのを喜ぶ人達の集まりです。週一回の拷問シヨウに数十万円出しても観たいと参加して下さる人達です」

松山老人は言葉を切ると、次の用意を、と信次に眼で促した。

「ですから、マゾの女性では駄目なのです。何故なら、マゾヒストは責められても苦しまず、喜ぶだけです。拷問シヨウの主役は、あくまで普通のお嬢さんがいい、責めるたびに苦痛の表情を見せてくれる。そう、貴女みたいな美しい人が最適なのです……」

松山老人は、満足そうに順子の裸体を眺め回した。

順子は、先程から油汗を浮かばせていた。体重の圧力をかけられた手首と肩の骨がギシギシと強烈な痛みを送っていたからである。責められた乳房からも、血が逆流するような激痛が続いていた。

松山老人の説明は、淡々と語られる。

「高いお金を取ってシヨウを観せるのですから、主役の女性が、すぐに失神したり死んだりしたら面白くない。そこで最低一週間の教

育期間は必要となってくる訳です。一週間、あらゆる責めを体験し、本番のシヨウで気絶しないだけの教育が……」

松山老人は言葉を切ると、悪戯を始める子供の様な表情になった。

その顔に、順子は新たな恐怖を憶えた。

松山老人の指が、壁のボタンの一つを押した。ジ、ジ、ジと電動の音がして、順子の両足首に縛ってあるロープが動き始めた。

「ウアッ……グッ……」

順子は鋭い呻き声をあげた。「人」の字型に吊り下げられた順子の身体が、三方のロープで引っ張られたのである。

両手は上へ、両足は左右へ……。

「グッ……グッ……」

順子は、気が遠くなりそうな苦痛に、絶叫を洩らした。四肢の骨と筋肉が、可能な限り伸ばされた。順子のきれいな乳房すらも、上と下へ引き伸ばされた。

順子は失神しそうな激痛の中で、自分の内臓が肌を破り、外へ飛び出るのではないかと思った。それ程、全身の苦痛は強烈だった。

——私は死ぬんだわ……。

順子は遠くなる意識の中で、そう呟いた。死んでもいい……この地獄の苦しみから解放



されれば死んでもいい……。ああ、死にたい  
 .....  
 が、その最後の願望も、右腕に感じた小さな  
 痛みで破られた。  
 意識が急速に戻った。とたんに、吐き気を

ともなう全身の激痛が、再び強烈な感覚で戻  
 ってきた。  
 「ウアッ……グアッ……」  
 胃腸が、心臓が、全ての内臓が、体内で躍  
 り、伸ばされ、破壊寸前の激痛が襲った。



——イメージギャラリー——『はずれぬ鎖』——志羽利也——

順子の全身から体内の水が流れ出した。口  
 からは汚物が、眼からは涙が、毛穴からは油  
 汗が……。そして小水に限る事なく床へ落ち  
 た。体中の穴という穴から、苦痛の液体が流  
 れ続けた。

順子の本能が、この苦痛から逃げる道とし  
 て失神を誘ったが、それは非情な、小さな針  
 ——強心剤によって拒否された。

「ゲウワアッ……グアッ……」  
 順子は体中から絶叫をあげた。それは絶望  
 の悲鳴であった。

その日から、順子の教育が始まった。  
 あらゆる激痛、苦痛に耐え得るだけの肉体  
 を作り、「失神」という言葉を順子の体内か  
 ら取り除くための教育である。

それには慣れが一番いい、という松山老人  
 の指向で、順子の肉体には、種々の拷問が連  
 日に亘って襲った。

順子に対する教育のスケジュールは、次の  
 通りであった。

- 第一日 全身責め
- 第二日 針責め
- 第三日 水責め
- 第四日 火責め



第五日 神経責め  
第六日 電気責め  
第七日 全身責め

寸分の狂いもない計画で、順子の教育は進んでいった。

順子が苦痛に耐えられず、失神しそうになると強心剤を打たれ、激痛に神経が狂い、発狂しそうになると精神安定剤が打たれた。

そして第八日目――。

順子は風呂で身体を清められ、化粧をされて、今日の拷問シヨウに連れ出されたのである。

すでに順子の感覚は、あらゆる責めを受けでも失神しない、強力なものに作り変えられていた。

拷問シヨウは始まろうとしていた。

すでに、丸裸の順子の身体は、特殊ベッドに固定されている。天井を向いて、『大』の字に、白い処女の裸身がスポットライトの中で浮かび上がっていた。

信次がベッドの横にあるボタンを押すと、順子の腰あたりが、グイと突き出された。

「ウッ……ウウ……」

順子は口の中で悲鳴をあげた。やがて襲ってくるであろう、新たな拷問への恐怖が、順子の身体を震わせる。

ベッドの中心部は不気味に動き続けた。十秒もすると、順子の肉体は、下腹部を頂点として丸い半円を描いた。

「アア……アッ……」

順子は処女の羞恥で叫び声をあげた。盛り上げられた自分の腰部に、観客達の視線が灼きついてるのが分かる。処女として耐えられない格好であった。

松山老人は、得意そうに説明した。

「御存知のように、このベッドは特別製でしてな、好きなように動かす事ができる。それでは処女の身体を、心行くまで眺めて貰いましょうかな……」

松山老人の合図で、信次は再びベッドのスイッチを操作し始めた。

ギ、ギ、ギ、と歯車の音がして、ベッドが前面に向かって四十五度に傾いた。

ハウッと観客達は身を乗り出した。責め場を見るのが楽しみな人達だが、きれいな処女の裸身を間近に眺める趣向も悪くない。マナイタの上の素晴らしいコイを眺めて、さてどのように料理してやるかな、と思う調理士の心

境である。この素晴らしい処女に、この後、残酷な拷問が加えられるのだ……。

別のスイッチに信次の指がいくと、どういう仕かけか、ベッドの下半分が、パカリと開いた。当然、順子の拡げられた両足も、ベッドの動きに応じて、左右へ大きく開いていった。

嬉しそうに松山老人が叫んだ。

「真の処女の肉体です。彼女の胎内まで覗いて下さい」

信次がスポットの向きを変えると、盛り上げられ大きく開かれた順子の腰部が煌々と照らされた。

「アアッ……」

順子は耐えられなくなっていた。肉体的苦痛こそないが、処女の奥底まで明らかにされているこの姿態は、死にも等しい地獄の拷問である。

観客の中の一人が、ゴクンと音を立てて唾を飲み込んだ。

「さて、皆さん、これからお待ちかねの拷問シヨウの始まりです。今回は趣向を変えて、皆様の注文による責めを行なおうと考えております。一つ、このままの姿で一番効果的な女体責めを提案していただきたい」



楽しそうに松山老人は言った。

観客達もこの企画に胸を躍らせた。自分達が望む手段で目の前の娘が虐められるのだ。

「始めは定法通り、鞭打ちがいいな」

一人が弾んだ声で言う。

「それも普通の鞭ではなくて、何か、鋭い奴で……」

松山老人は頷くと、信次に合図した。信次が取り出した鞭は、観客の要望に答え得るものであった。皮バンド状のもので、一寸おきに鋭い釘が飛び出ている。

提案した観客の一人は、すでに興奮した声で言った。

「それはいい。それで上から下へ……」

信次は頷くと、順子の頭の上へ立った。

「ウアッ……ウウッ……」

順子の顔色が変わった。信次の鞭が自分のどこを狙っているか分かったからである。順子は激しく身をよじった。が、しっかりと固定された身体は微動だにしない。

順子の不安は当たった。

鋭い釘を持つ鞭は、高く盛り上げられ開かれた順子の下腹部を襲った。

「グアッ——！」

順子の全身の感覚が、躍り狂い、悲鳴をあ

げた。外的刺激に一番敏感な場所一面に、死ぬかと思う程の真赤な痛みが突き刺さり、全身の骨を駆けめぐった。

それは、想像を絶する激痛であった。一瞬順子の心臓は停止した。が、気を失って苦痛から逃げる事はできなかった。あらゆる痛感に耐え得る教育が効果を奏したのである。

信次は鞭を手前に引いた。

瞬間、順子は絶叫した。全身の神経が切り取られるような鋭い激痛を下腹部に感じたのである。

順子の柔らかい肌に喰い込んだ鞭の鋭い針が、肉を切り裂いたらしい。

信次が鞭を取り除いても、順子の全身はケイレンをくり返した。

順子の体中から流れ出る油汗で、ベッドのシーツは驚く程、濡れた。

順子は荒い息を吐いていた。白い腹から背中まで届く鞭の跡には、小さなニキビ状のものが噴き出していた。それは無数の血の穴であった。そこから恐ろしい程の激痛が、順子の神経をズタズタに切り刻んでいる。

順子は嘔吐した。顔色が真青になった。

信次が、順子の手首と踵を調べる。

「大丈夫か」

松山老人が声をかけた。その心配は、順子への心配ではなかった。まだまだ続く拷問に耐えられるかという心配である。

順子の肉体は、すでに順子の所有ではなく拷問というサドの快楽の為の材料であった。

信次は、大丈夫でしょう、と頷いた。

「よし、皆さん、次の提案をして下さい。この娘さんの肉体は、まだまだ大丈夫です。どんな非道い責め方でも結構ですぞ」

松山老人は再び観客へ叫びかけた。

順子はその言葉に、気が狂いそうになる絶望を感じた。

——一思いに殺して！

順子はそう叫んだが、もちろん言葉にはならない。これ以上、どんな恐ろしい事をされるのかと思うと、順子の神経はピリピリと震え、身体は小刻みにおののき、戦慄した。

「拷問」という言葉は、本来、肉体的苦痛を与えて告白させるという意味だが、彼らの意味は違っていた。順子には、告白すべき何もないのである。彼等は、ただ快楽のためのみに「拷問」の形式をとっていた。

犠牲になる順子こそ、地獄であった。

——狂ってるんだわ、この人達はッ……。

その狂っている連中が、無差別な拷問を加



えてくるのである。順子は自分の方が狂いそうになった。

「何かありませんか。何でも結構です。なるべく効果的に苦痛を与える方法を提案して下さい」

松山老人は、再び観客を促した。

観客の一人が口を開いた。

「あの、水道の準備はありますか」

「水、ありますよ」

提案者は喜んで拷問の方法を指示した。

「水責めをやってみて下さい。飲めるだけの水を飲ませ、カエルの様にふくらんだ腹を、思いっきり揉みほぐし、最後に強い圧力をかける……」

「ほう」

松山老人も楽しそうな声をあげた。

「それは面白そうですね。水責めと言うよりも、内臓責めですな。よろしい、やってみましょう」

順子は新たな恐怖にかられた。

——この人達は、人間ではないッ。鬼だッ。

ああ、神様、助けて下さい！

順子の絶叫は、口の中で消えた。

信次がホースを引っ張ってきて、順子の口カセの中に、ガキッと先端を固定した。次に

信次はベッドのスイッチを入れた。盛り上がっていた順子の下腹部が、電動の音とともに元の位置へ下がっていった。

信次は、ゆっくりと水道の蛇口を捻った。ジャアッと冷たい水が、順子の胃へ流し込まれていく。

「ウッ……ギウッ……」

順子は悲鳴をあげた。恐ろしい勢いで水が走る。

信次は、蛇口の横についた目盛を、低い声で読み上げていく。

「二合……四合……八合……」

八合になった時、順子は異様な呻きを立てた。胃の中に重い石が転がり、それが踊り狂うような激しい苦痛が襲う。顔を歪め、吐きそうになったが、激しく流れ込む水のために汚物は押し流された。

「九合……一升……一升二合……」

順子は全身をケイレンさせた。可能な限りに広げられ水を貯めた胃が、他の内臓を圧迫し始めた。

「一升三合……一升四合……」

胃に収まらなくなった水が、順子の鼻と耳から噴き出した。

順子の頭の中に、もの凄いの激痛が襲い、心

臓が一時、停止した。

やっと水道が止められた時、順子は断末魔に近い呻きを洩らしていた。気が遠くなりそうな苦痛が、腹の中で荒れ狂っている。

順子の胃のあたりは、異様に盛り上がっていた。胸から腹にかけて妊婦のように突き出ている。

信次は、ベッドのボタンを押した。再び順子の腰部が突き出されていった。

「ゲアッ……」

盛り上げられた胃が、背中から圧迫される苦痛に、順子は呻いた。

——胃が破れる！

そう思った瞬間、順子はこの世のものとは思えない絶叫をあげた。

信次の両手が、ふくらんだ順子の胃を力一杯、握りしめたのである。プロレスに胃袋掴みという技がある。その要領で、白い肌の上から胃袋を、わし掴みにされた。

「グエッ……ググア！」

順子の口から、鼻から、そして耳から水が噴き出した。

その激しい苦痛の表情に、責め場に慣れている筈の観客達も、思わず自己の下着を濡らしそうになった。



全部の水を吐き出してしまった順子は、弱々しく肩で息をしている。

信次が、手首と瞳を調べた。大丈夫だ、と

いう信次に松山老人は満足そうに頷くと、観客に言った。

「さて皆さん、シヨウもいよいよ佳境へ入っ



てきました。今度は仕上げとして、あれで責めてみましょう」

松山老人は、電気のコードを指さした。裸のコードが、ギラギラと輝いている。

「電気ですか」

観客の一人が興奮して叫んだ。

「そう、電気です。が、ただの電気責めではない……」

松山老人は、悪戯っぽい表情になった。

「と言うと……」

「もちろん、普通の電気責めもやりますが、その後で、面白い事をお見せします……」

松山老人は観客を、じらした。

「このお嬢さんは、ごらんになった通り、真の処女です。この処女を電気と器具で破ってみせます」

「電気と器具？」

「そうです。それで破る楽しみのために今日まで彼女の処女を大事にしてきました……」

信次、器具をお見せしなさい」

信次は、凸型の箱を手にした。一尺四方の鉄製の箱に、棒状の突起がついている。箱の下からコードが下がり、その先にスイッチがつけられている。

信次がそのスイッチを押すと、突起した棒

イメージギャラリー

『脱がせてえ』

須坂

旭



状のものが上下へと動いた。

「ほう……」

観客達は感心したように、その動作を見守った。

楽しそうに松山老人が説明する。

「私が考案したものでしてな。あの棒は、箱の中に引込んでますが、飛び出した時、先端から強烈な電気を放出する……。即ち、処女の胎内に電流が通じる訳です……。これは処女にとって、強烈な苦痛ですぞ」

「成程！」

観客達は異常な興奮を憶えた。

「では、まず普通の電気拷問から始めましょう……」

順子は顔色を失った。

——電気を自分の体内に！

想像しただけで、順子は血が逆流する思いにかられた。

信次は、裸のコードを無表情に順子の肌へセットしていく。

順子は慄然となった。双の乳房の頂点に、二本のコードがテープで張りつけられたのである。

「アア……」

計り難い恐怖のために順子の全身から油汗

が噴き出した。自分の身体の中で、一番敏感な乳首に電気が流される！

それは、想像しただけでも気が遠くなるような恐怖であった。

松山老人の合図で、信次が変圧器を回す。

「グアッ……ギャッ！」

順子は鋭い絶叫をあげると、四肢を硬直させた。乳首を襲った電流は、全身を駆けめぐり、再び敏感な乳首に戻って焼けるような激痛を残した。順子の身体が、ガクンと激しく突張り、ケイレンした。

「電圧を上げて、み給え」

悪魔のような松山老人の声が、順子の意識の隔に入ってきた。

変圧器が最高に上げられた。

「……」

瞬間、順子は地獄の底を見た。

心臓が肌を破り、外へ飛び出し、その心臓を切り刻まれる自分の断末魔を見た。全身の筋肉が引きちぎられ、骨が潰れる自分を感じた。

電流が止まっても、暫くの間、順子は呼吸ができなかった。代りに、全身が波のようにうねり、躍り狂っていた。

遠い感覚の中で、順子は信次が自分の瞳と

手首の脈を計っているのが感じられた。

「強心剤を……」

松山老人の声がして、順子は右腕に何時もの小さな痛みを感じ、地獄の絶望が頭の中を占めた。

——ああッ、私は失神して、この苦しみから逃げる事もできない！

急速に意識が戻った順子は、綿のように疲れ切っている肉体と、真赤に焼けただれ強烈な痛みを訴える乳首の感覚に呻いた。

地獄の悪魔の使者である松山老人の声が、はっきりと聞き取られた。

「さて、いよいよ最後のシヨウです。先刻、申し上げた通り、器具と電気による処女破りを始めます」

順子は腰に冷たい鉄の感触を憶えた。が、もう何をされようと、呻き声すら上げる元氣は失っていた。

鉄の棒を内蔵した箱は、皮ベルトで順子の腰に固定された。

信次がスイッチを入れた。

瞬間、順子は鋭い痛みを下腹部に感じたが我慢できぬ程のものではない。

が、次の瞬間、順子は絶叫をあげると、ガクンと四肢を突張った。



「グウアッ！」

強力な電気が、順子の胎内を突き抜けたのである。

鉄の棒の先端から放出された電流は、彼女の清らかな胎内を鋭く抜け、脳まで達した。

一秒毎に、その電流は確実に順子の胎内を襲った。順子の未知の部分は、強力な電気で焼かれ、ケイレンを引き起こすに十分な激痛を与え続けた。

順子は一秒毎に、心臓が潰れる苦痛に泣き叫んだ。

十秒間、それが続いた時、順子の身体の穴という穴から液体が噴き出した。油汗が、血の涙が、肉片を含んだ汚物が……。

「ギャアッ！」

二十秒経った時、順子の口から、真赤な血の泡が噴き出た。

すでに、順子の感覚は切り刻まれ、肉体は破壊寸前に冒されていた。

三分間が経った時、順子の脳神経は、逆流する全身の血潮に逆らえなくなっていた。

——私は真赤な血の海を泳いでいる……。

順子は、そう思った。次の瞬間、順子は楽しくなった。

順子は、口の中でケタケタと笑った。心の

底から楽しそうに笑った。

「電気を止めろ」

松山老人は怒鳴った。

順子の肉体は、縛られたまま、スツと柔らかくなって崩れ落ちた。そのままの恰好で順子は笑い続けている。

「……狂った」

観客の誰かが興奮から覚めた声で叫んだ。

ベッドを照らしていたスポットライトが消

され、代りに室内の電灯が点された。

松山老人が、静かに立ち上がると、観客に終わりを告げた。

「これで今月のシヨウを終了致します。どう

でしたか、皆さん」

言葉の代りに、拍手が答えた。

「でも……」

と一人が質問を口にした。

「この女性は、どう処理されるんですか。こ

のまま、街へ放す訳じゃあ……」

松山老人は、楽しそうに笑った。

「あなたは新しい会員でしたな。それでは御心配なさるのも無理はない。大丈夫です。私は精神病院の経営が本職です」

「成程……」

観客は納得した。

「では、皆さん。来月の今日、新たな企画で拷問シヨウを開催します。楽しみにして下さい下さい」

観客達は立ち上がると、信次に連れられて隣の部屋へと消えた。その部屋では、一糸まとわぬ若い女性達が、観客への最後のサービスをしてくれる手筈になっていた。

松山老人は、扉に鍵をかけると、衣服を脱ぎ始めた。

松山老人の唯一の回春剤は、拷問で神経をズタズタにされた処女の肉体を、時間をかけて弄ぶ事であった。

処女拷問シヨウは、クラブの会員のためばかりではなく自分自身のためでもあった。

松山老人は、ケタケタ笑っている順子の手足を自由になると、優しく愛撫を始めた。

自由になった順子は、楽しそうに松山老人の首に腕を回した。

松山老人は満足そうに笑うと、次の企画を考えていた。

——明日からまた、処女探しだな……。

——（この章・終）——



カメラ・ルポルタージュ

# 全日空機で来た女

塚 本 鉄 三



「塚本さんですか、私、松本たえですけど、今、伊丹の空港に着いたんです」

電話線を通して伝わってくる細いが、よく透る女の声を耳にしたとき私は、まさか、あの女が大阪までやって来る筈がない。と、そう思ったので、一瞬、自分の耳を疑った。  
「ええッ、松本たえさん？」

思わず疑問符が口をついて飛びだした。すかさず、受話器の向こうで、ほん目の前にいるような、はっきりした口調で女の返事が返ってきた。

「はい、松山の福竜ふくりゅうでございます」  
その言葉を聞いて、私は全く観念せざるを得なかった。やっぱり、あの女だ。いよいよ



大阪くんだりまで、出て来やがったか。と、ほろ苦い中にも『旅の恥はかき捨て』式のハレンチな狂乱の一夜を過ごした一カ月前のことを、甘美なうずきと共に思い出していた。

それは一カ月前の九月上旬のことだった。

小学校のPTAで実行委員をしていた頃の仲間四人が、子供がすでに大学に入っているというのに、特に気の合う悪友として未だにつきあっているのだが、その悪友四人で温泉めぐりをした時のことだった。

何かにつけて口やかましい女房連なのだがそこは、PTAの連中との会合だというと、一応はそれ、ホコ先が鈍るので、いつとはなしに、一年には数回、そうした骨休みの息抜きをやらかすのだった。

零細企業とはいっても、いずれも、それぞれ一國一城の主であってみれば、仕事の面では何かとストレスの累積の多い立場なので、そうした馬鹿遊びは、絶好のリクリエーションになっていた。

第一、最も気が楽なのは、お互いに仕事の上での利害関係が皆無なので、本当に心おきなく底抜けの遊びに徹することが出来るのが一番、愉快であった。

今回も、別にきまったコースも定めず、三

泊四日の温泉めぐりという弥次喜多道中であったが、一応、村上という機械工具店の主人を会計にして、大阪を出発した。

第一日は皆生温泉に泊まった。

大体が『飲む』『打つ』『買う』という道楽の三拍子をやらかそうという魂胆で家を出て来たのであるから、第一日は、入浴後、芸者二人を呼んで軽く酒を酌み交した上で、麻雀をやることにした。翌日の費用は誰が持つかという賭で思わず熱中して、寝たのは翌日の二時過ぎになっていた。

それでも、ぐっすり寝込んで、年のせいか六時には目がさめ、一風呂、浴びた。T園のスカイレストランから眺めた日本海の眺望は素晴しかった。都会のスモッグもなく蒼い海が目にしみるようだった。

朝食後、タクシーを呼んで貰うと、伯耆大山から松江市内、それに宍道湖を通って出雲大社へ、日御崎をめぐって夕方には、玉造温泉に着いた。湖岸の夕景が特に印象的で時間があれば、もっと回りたい位だった。

第二日は飲むということ、呼んだ芸者四人と共に、夕食もそこそこにタクシー二台で海岸沿いのナイトクラブへ行った。

左右を芸者とホステスにかこまれてご機嫌

になり、したたかに飲み過ぎたので、それから寄った薄暗い地下室のようなバー、それに固い木製の椅子に坐らされて見たヌードスタジオへ行ったらまでは覚えていたが、それから先、どのようなコースでホテルまで帰ったかはっきり覚えていない。

バーで女と踊ったような気もするし、道端で大きな声で、わめいたような、或は人がわめいていたようなことも薄々記憶にある。

とにかく、自分達の部屋にそれぞれ四人の芸者に四人が送って貰って、彼女たちが帰りの挨拶をしている時に、目が覚めた。だからそれまで、四人がどのような醜態を演じたかはそれは四人共、誰も知らない。村上君が出発の前に芸者の一人に財布を預けておいたので支払いは、とどこおりなく済ませたらしい。

芸者が帰ってしまったから、山田という男が、寝呆けたのか、酔っぱらったのか、床の間を便所と間違えて小便をやらかそうとした位だから、酩酊の度合も推して知るべし。これが家だったら、女房や子供から、大目玉を喰うところだが、旅の空とは有難いもの。

一夜明ければ、天気晴朗にして、何ごともなかったように、天皇陛下も行幸されたという、その立派なホテルをあとにした。





もっとも、そのホテルで自慢である温泉プールで、大阪のデパートガールたちが数人、水着姿で泳いでいるところへ、我々四人が素

裸で入っていったので、彼女達が嬌声と共に逃げてゆくというハプニングが朝食後に起こったが、昨夜の醜態からみれば、これなんかは可愛いものであった。

中国山脈を横断し瀬戸内海を水中翼船で渡って松山市に着いた。道後温泉で第三日目を迎えるためであった。

この日は今回の旅行の最後を飾る『買う』という妙味を体験するため、特に若い芸妓四人を電話で頼んでおいた。

芸者買いの楽しさを十分堪能するため、夕食前の酒もほどほどにして、専ら彼女たちの唄や踊りを鑑賞した。そして、スタミナ源にもと、生造りの新鮮な魚を、時間をかけてゆっくりと腹中におさめた。

無芸大食を自慢の四人であったが、流行歌や小唄がとび出し、そして、軍歌を合唱するという賑やかさであったが彼女たちのアイデアで、お座

敷遊びが一しきり華やいだ。特に左手でジャンケンして、勝った者が右手に持った槌(といてもビニールで作った叩けばボンと音のする玩具だが)で相手のおデコを叩くという遊びは、軽い加虐味、被虐味があって、キャッキャッという女の叫声が面白くて長く続いた。

十一時でおひらきになり、それから以後は各人の自由恋愛の時間で、それぞれ二人宛のアベックで外出するという事になった。

宿泊したホテルで彼女達と共に、ということとは許されないもので、一度外出して別の旅館へ行って遊ぶということになるのだ。

私の相手になった芸妓は、色白で瓜実顔の如何にも日本髪がよく似合うといった華奢な感じの女であった。源氏名を福竜と呼んでいたが、竜という名のついた名前に似合わず、なんとなく弱々しいといった感じを受ける身体つきであった。

福竜の案内する旅館の一室にくつろいでも彼女は、きちんと正座した膝の上に両手を揃えたままで、固くなっていた。

芸者はお客のものに箸をつけてはいけなし、座布団を敷いてもいけないと教育されてきたかは知らないが、自由恋愛で来たのだから



ら、もう少し打ち解けてもいいのではないかな  
と思つて、つい、いつものモデルに対するよ  
うな気持で

「遠慮せんと、着物を脱いだらどうだ」

と、乱暴に言葉をかけた。何をカン違いし  
たのか、彼女は強引に拒否した。

「いやッ、私は裸になるのは絶対にいや」

その厳しいほどの女の言葉を聞いて、私の  
心にムラムラと怒りの念が湧いてきた。

第一、もう十二時はとくに過ぎてゐる。

彼女もきつと、明日の朝は六時か、七時には  
帰るに違いない。いじましい話だが、そうそ  
う時間があるわけではない。

「生娘きむすめじゃあるまいし、早くせんか」

と一喝してやりたかった。しかし、流石に  
平素の教養が、そんな言葉を口に出させるの  
を憚らせた。しかし、心の中では「今晚一晚  
買い切った女だから、思いきり楽しまなきや  
ソンだぞ」と、いう気もしたし、他の三人は  
「今頃、よろしくやっとなるだろう」と考える  
と、自分だけが、こんなところでニラメッコ  
しているのは馬鹿らしく思えた。

裸になるのは嫌だと言つたつて、そんなこ  
とは、かまつてはおれない。とにかく自分に  
とつては初めての女だから、裸を見んことに

は、おさまらない。

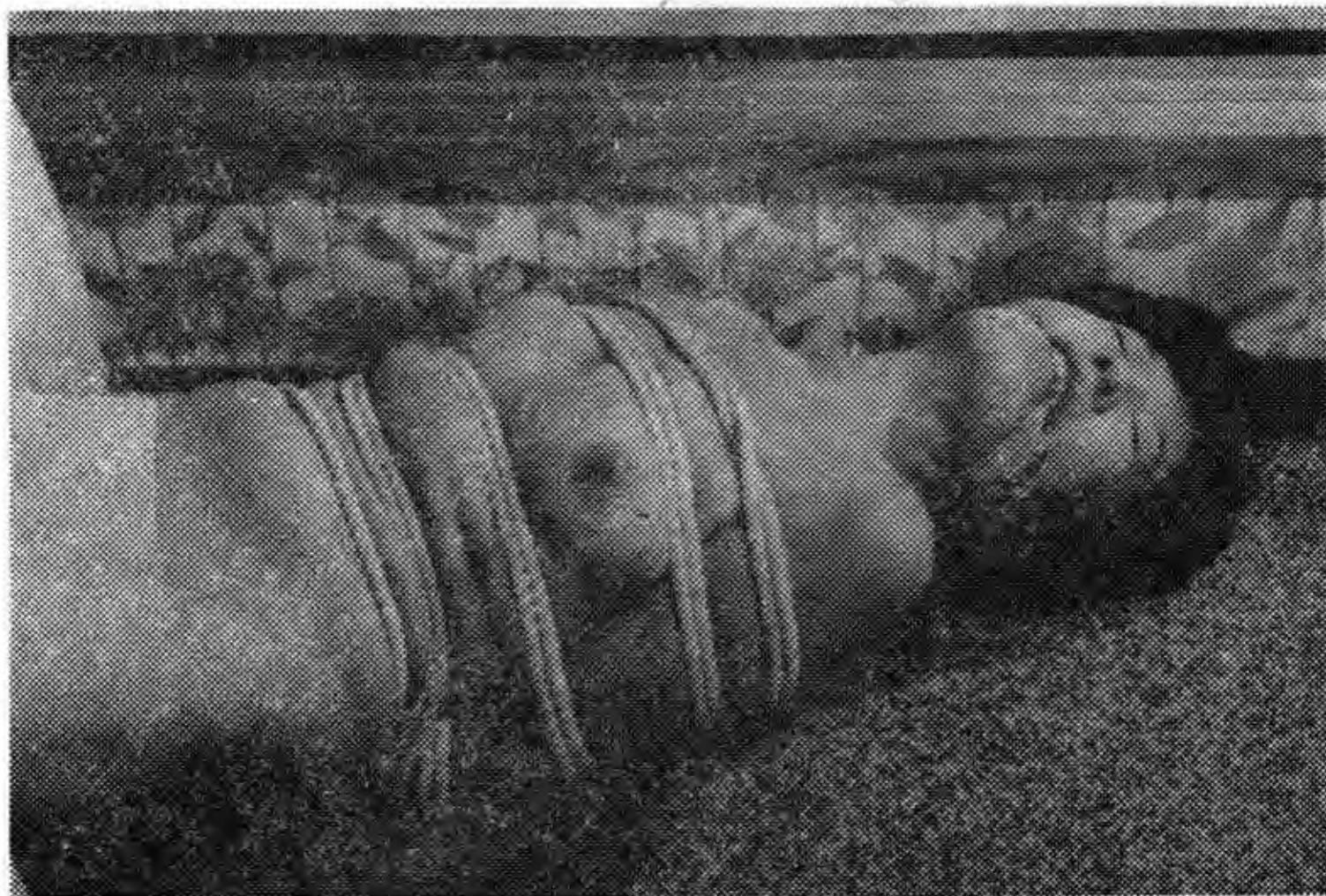
「自分で脱げなければ、私が  
脱がしてあげよう」

言葉はおだやかだったが、  
私は手荒に彼女の肩と帯に手  
をかけた。

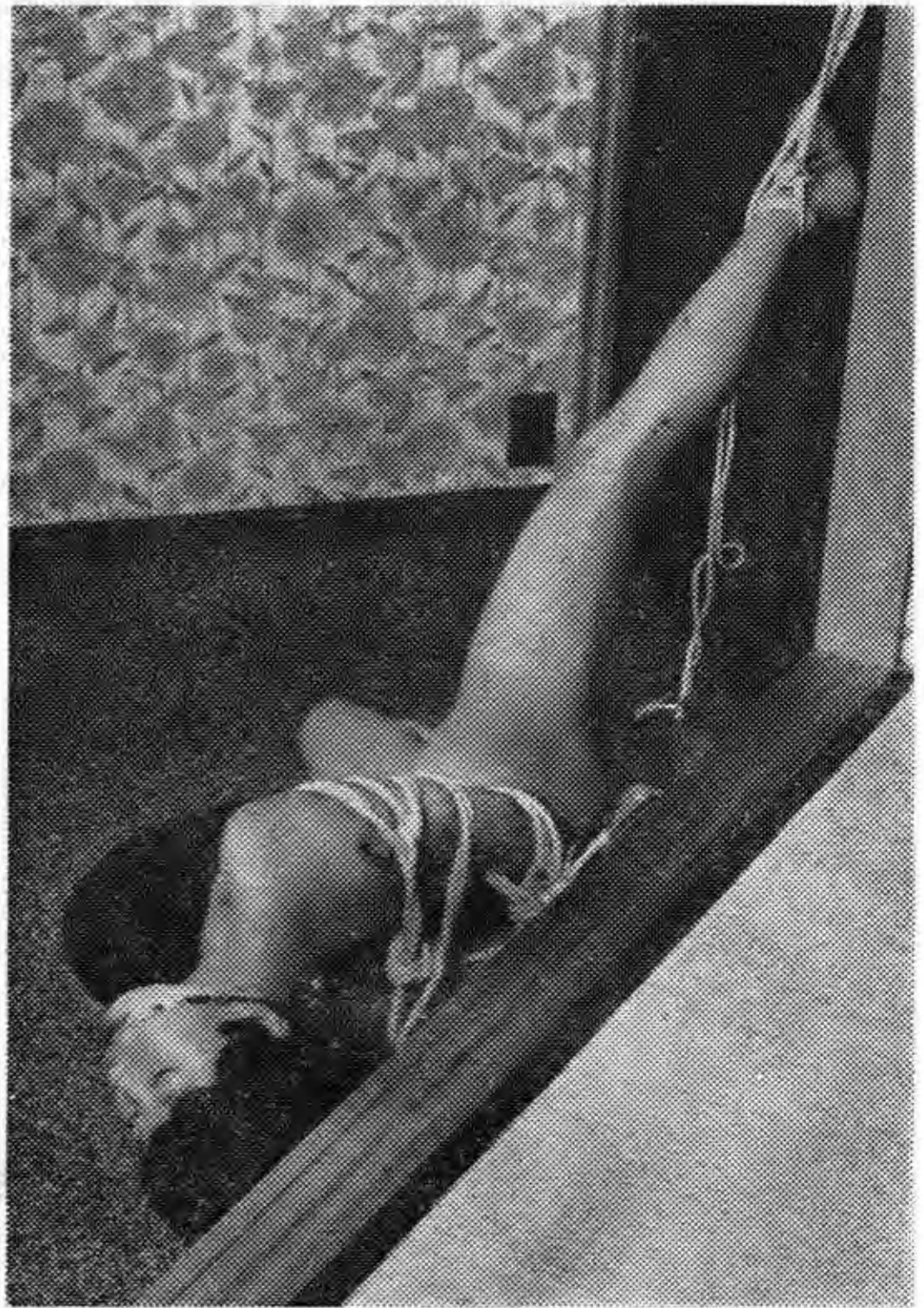
そのとき、私は多年の経験  
で彼女の心の中を見抜いたよ  
うな気がした。私の手の触れ  
た肩先がブルブルとふるえて  
いるのだ。

帯を解いてしまうと、あと  
はもう玉葱の皮をむくように  
着物をはいでいったが、長襦  
袢一枚になったとき、福竜は  
細い腕を揮つて襟元を必死に  
合わせて抵抗しだした。

しかし、非力な彼女の抵抗  
は空しく、右手を逆にとられ  
て長襦袢の袖が肩からはずさ  
れた。右手首に、ちらばつて  
いた腰紐をからませて縛り、  
同じように左手首も長襦袢を  
脱がせてから、右手首と重ね  
て縛ってしまった。







あとはピンクの腰巻と白足袋を脱がせるのは、きわめて、た易かった。忽ちにしてエビのように曲った白い女体が畳の上どころがっていた。

私は興味を以て女体を観察した。そして最後に、「あれッ」と思った。

福竜の花芯に私の視線が行ったとき、その

敏感きわまりない反応のあかしを、そこにはっきりと見てとってしまったのだ。

この女はマゾだ――。

私は、そう確信した。

そうなれば、縛るのには事欠かない腰紐がそこら中に、ちらばっているではないか。

後手高手小手から海老縛りにした。そして

つきせぬ泉から、こんこんとして湧き出るものを、十二分に目で楽しんだ。

彼女の呻き声は次第に高くなってくる。

こんなに感度の高い女性は、私の今までの経験では初めてであった。

それから、あとは、落花狼藉といった生やさしいものではなかった。

東の窓が白々と明るみかける頃まで、私はSMプレイの醍醐味を心ゆくまで味わいつくし、そして福竜を責めに責めたてた。

カメラというものが介在しないため、休む間もなく責めることが出来たし、また彼女もその責めに、よく耐えた。

一夜妻として、一晚、金で買った女奴隷を性のなぐさみ者にし、おもちゃにするといった気持が私の行動をきわめてラフなものにし、その楽しさも、また素晴しかった。

幾度となく彼女を絶頂境に追い上げ、その間、一度も紐を解くことなく責めぬいた。

私も自分ながら、よくもスタミナが続いたものだと感じた。

入浴を済ました上、帰り仕度を整えた福竜は、自分の源氏名を刷った名刺の裏に「松本たえ」と書き、「ここがおカアさんのところですよ」と電話番号をエンピツで書いて私に手



渡した。流石に私は自分の名刺を彼女に渡す気にはなれなかったが、ホテルの箸の袋の裏へ電話番号と名前とだけを書き

「もし大阪へ出てくるようなことがあったらここへ電話して下さい。日曜以外の日中だったら、大体おりますから」

と、儀礼的に答えておいた。

「是非、大阪まで遊びに、行かせてもらいます。そのときは、よろしく」

福竜のそんな言葉も、挨拶の一つくらいにしか、私は考えていなかった。第一、航空運賃を渡すようなことをしていなかったのだから、万に一つも彼女が大阪くんだりまで、出てくるとは夢にも思っていなかったのだ。

もっとも、その日の午後の便で松山空港から大阪へ発つとき、待合室へ福竜が見送りに来たのには驚いた。他の三人の相手の芸妓は誰一人、見送りに来ていないのに、私の相手の福竜だけが、和服姿で見送りにきているのには、彼女が一見して芸者であるとわかるタイプだけに、私も面映ゆい思いをした。

三人の友人からは大分、冷やかされたが、田舎の駅さながらのローカル線の佻しい松山空港のこととて、三人以外には知り合いもなく、福竜と握手をし、互いに手を振り合って

別れたが、文字通り八旅の恥はかき捨てV式の、今回の三泊旅行の幕切れでもあった。

薄情なようだが、一旦、機上の人となった私は、わざわざ松山空港まで見送ってくれた福竜のことは、もうすっかり忘れてしまっていた。そして、それから一カ月。よもや彼女が上阪してきて私の事務所に電話して来ようなどとは夢にも思っていなかった。

それが、突然、福竜、いや今は一人の女性松本たえとして私を訪ねてきているのだ。私は咄嗟に時間を計算してみた。

やりかけの仕事をA君に説明して引継いでもらうのに七分、五階の事務室から廊下へ出てエレベーターで地下二階のガレージまで下り、車用のエレベーターで一階の駐車場まで出てスタートするまでに五分を要する。あとは阪神高







速道路を利用して大阪国際空港まで時速五十キロで走って十九分。駐車場に車を置いて構内まで歩いて四分。計三十五分。

三十五分後にそちらへ行くから、と、二階の喫茶店で待ってくれるように頼む。ロッカーから撮影用具入りの鞆を出して車のトランクに放り込み、一路、伊丹の飛行場へと飛ばす。

「やあよく出てきましたネ」

一別以来の挨拶を交す。

「実は、もう少し早く着いたんですけど、大阪空港だというもんですから、大阪市内だと思って、貴方の書いて下さった電話番号を、そのまま回したら掛からなくて——」

「ああ、此所は兵庫県ですから、大阪市内へは06を回さなくちゃ掛かりませんよ」

松本たえは、始めて来た未知の大阪を前にして如何にも

淋しげだった。最初、06を回さなかったので電話が掛からず、私がデタラメの電話番号を書いたものと思い、少しの間だが怨みに思っただけである。

それが隣の男の人に聞いて十円玉を五つ入れた上で06を回して、やっと掛かったので、はっとしたという話をくりかえして言った。

仕事は余り休めないから、明日の夕方には松山へ帰りたいので今夜一泊だけの旅だった。それでは京都を案内して上げよう、ということ、昼食を摂ると直ぐ阪神高速道路へ車を乗り入れ、先ず環状線へ向かった。

大阪市内をゆっくり案内する時間的余裕もないので、環状線を一周しながら、あれは図書館、あれは中の島公園。向こうに見えるのは大阪城、あの高い塔は通天閣、これは難波球場と説明しながら、時速30キロぐらいにスピードを落として、左車線を走る。環状線を一周してから再び空港線にとって返して豊中インターチェンジより、名神高速道路に入り京都に向かう。途中、左側に見える万国博会場の残骸を見る。四国以外の土地へ旅行するのは始めてという彼女は勿論、万国博の見物には来ていないだろう。徐行しながら走る。

京都市内へ入ってからは、先ず苔寺を訪ね



て嵐山へ回り、嵯峨の天竜寺へ足を踏み入れ  
仁和寺から竜安寺、金閣寺を見る。それから  
詩仙堂、銀閣寺、南禅寺と駐車場へ車を駐車  
しておいて徒歩で附近を歩く。

あとは御所、二条城、西本願寺、五条大橋  
などは車で近くを通過し、京都タワーや清水  
寺の五重塔は遠望するに止めておく。

釣瓶落しとの秋の日は西の山  
にかくれて黄昏が迫ってくる頃  
になると、私は一カ月前の福竜  
との狂乱の一夜が生々しく蘇っ  
てくるのであった。いや、今、  
私の傍に坐っているのは、芸者  
の福竜ではなくて、私に責めら  
れたいために、わざわざ松山か  
ら上阪してきた一女性、松本た  
えなのである。

今夜こそ、宵の口から松本た  
えを責めに責めて、彼女の被虐  
度の深さを確かめてみたい気が  
した。そのためには、日本式の  
旅館よりも洋式のホテルの方が  
便利だと思った。

万博景気を当てこんで京都市  
内でもホテルが乱立しているの

で稼働率50%といわれる昨今、格好の部屋を  
探すのは容易であった。

深い樹立に囲まれたホテルの六階にあるベ  
ランダ付きの和洋折衷の部屋に落ち着いたと  
きには、すでに午後七時を少し回っていた。

二階のグリルで夕食を済まして部屋に戻っ  
てベランダに面した部屋のカーテンを開ける

と、目の下に京都の市街のネオンが宝石をち  
りばめたように、きらめいていた。

うっすらと、あたり一面に霧がかかってい  
て背後の丘陵からベールののような白い帯が、  
このホテルを取りまいてるように見えた。

入浴を済ますと、もうあとはSMプレイに  
松本たえを燃え上がらせるだけしかない。

一カ月前、道後温泉の旅館の  
一室で一夜妻として金で買った  
芸者福竜を弄んだのは、旅の徒  
然を慰める余興の一つであった  
が、今日、ここに来ているのは  
福竜とは別人のマゾ女性として  
の賓客、松本たえである。

四国より外へ旅したことのな  
いという彼女が飛行機で大阪ま  
で私を頼って出てきたというこ  
とは、よくよくの事であろう。

お客の言葉を真に受けて、関  
西見物に出てきたとばかりは思  
えない。そこに彼女の思いつめ  
た真面目さと真剣さがあった。

「何故、この前は私が裸になれ  
といったら、あんなに激しく抵  
抗したんだね」





撮影の準備も整えて、いよいよSMプレイに入ろうとしたとき、私は訊ねてみた。



せび泣く姿ではなからうか。今日は、この前と違って、縄もふんだんに

「だって、私、こんなに痩せて、貧弱な体でしょ。だから見られるのが恥かしくて。こんな女の気持、わかって下さるでしょ」  
彼女はそんなに答えていたが、私には彼女が殊更、私を挑発して加虐を求めていたように思えてならなかった。腰紐を手にしたときも、暴れながらも、適当に私が縛りよいように両手をうしろへ回していたように思えた。

そして、縛り上げてしまつてからの、あの彼女の燃え上がりようは、どうだろう。

「私は縛られ責められるのが大好き」

そういう切々たる言葉を全身で以て叫んでいるのがあのとときの彼女の悦虐にむ

あるし、カメラもある。

そう考えると、縄を持つ手もふるえるほど私の胸は、わくわくしてきた。

松本たえの身体全体からにじみ出るムードは、なんとなく被虐的である。それは、どのような理由か、その原因は私にはわからないが、とにかく、側へ寄っただけで、いじめたい、無茶苦茶にしてやりたい。弄びたい、という気持を起こさせるから妙である。

普通、如何に相手がM女性だといっても、いささかのためらいがある。後ろめたさというのか、なんらかの抵抗が大なり小なりあるものだ。それが、この福竜は、その雰囲気からして、はじめからマゾ的なのだ。長い間、芸者をしていたという、その前時代的な教養と習練の結果なのだろうか。

私は湯上がりの彼女が、再び白足袋をはき長襦袢を着ようとするのを許さず、一切の身につけるものを取り上げて部屋の隅に投げ捨てた。

か細い女体が、私の手荒な行為にとまどいながら、電光の下で白い肌をさらしていた。それから、もう、一方的に私の気ままに身勝手な、ふるまいの連続であった。

八むざむざ、俺に責められ弄ばれたいために



飛行機で大阪くんだりまでやってきたのか、麻縄で、荷物でも荷造りするように乱暴に縛り上げて畳の上どころがし、足で踏みつけ蹴上げた。

女の口の中へ足の拇指を突込んで「舐め」と強要した。拇指から、あと全部の指を一本一本、しゃぶらした上、足の裏まで舐めさせた。踵を舐めたところで、私は足で女体をひっくり返して、花芯を検査した。

△松本たえは完全なマゾ女性だ△

そう私が確信するに足る証拠を、そこにはっきりと目にして私のS度は百度にも燃え上がり、プレイの序幕は切って落とされた。

麻縄での高手小手縛り、背中の下になった後手首が畳にじかに押され、そして、私の全体重を更に、その上加重されても、彼女は「痛い」とか「苦しい」とか、一言も洩らさなかった。

皮肉に喰い込む麻縄の強烈な痛さも、悦虐の甘美な旨酒には勝てなかったとみえる。私は彼女の肉体をむさぼりつくした上で、SMプレイの一ラウンドは終わった。ここまで遂に私は一枚の写真を撮ることも出来なかったが、好都合なことには、彼女は痛いから縄を解いてくれとは絶対に言わない女であった。



私はバスタオルを腰に巻くと、カメラを手にとって、畳の上に長々と伸びている彼女の表情にピントを合わせて、カメラアングルを変えて数枚、シャッターを切った。

これから翌朝まで、まだまだ時間は、たっぷりある。私は縛ったままの女体を畳の上に放置したままで、浴室へ行くと、ゆっくり入浴をすまし、その上で念入りに熱い目のシャワーを全身に浴びた。

浴用タオルを腰に巻いて部屋へ戻ってみると、そこには奇妙なショーが展開していた。

全裸で縛られて放置されていた女体が、まるで尺取虫が這うように、いや、蛇がうねっているともいおうか、低い呻き声を口から洩らしながら、全身で悶えているのである。

部屋の入口で私が眺めているのを知ってか知らずか、彼女の被虐の絶頂感に到達した法悦境は、いつまでも続いていた。私はしばらく女体の蠕動運動を眺めた上で畳の上どころがっていたカメラを拾い上げた。

広角レンズに交換しファインダーを透視式に変えて、うねっている女体を追って、右から左からシャッターを切った。

縄を解くと汗びっしょりになって法悦境をさまよい続けていた彼女も初めて現実に戻っ



たのか、流石に恥かしそうに身をすくめて、浴衣をまとうと、そそくさと浴室へ姿を消した。

一カ月前の道後温泉の宿でも、この女は相  
当なマゾだなあと考えたが、今夜のSMプレイも、のっけから、この有様では、スタミナに自信満々の私も、いささか、たじろがざるを得ないと思った。

浴室から出てきて、まだ湯気の立っている女体に休みも与えず縄を掛けていった。

なにしろ、縄に対しての感度が抜群に高いので従来のカメラロボのように、縦横にカメラを駆使することは出来なかった。ともすれば彼女のペースに巻き込まれて、落花微塵の修羅場を展開してしまいそうになる。

カメラが主か、遊びが主か。

ムチを手にした私は、『女体コマ廻し』と呼ぶ、その遊びに熱中してしまった。

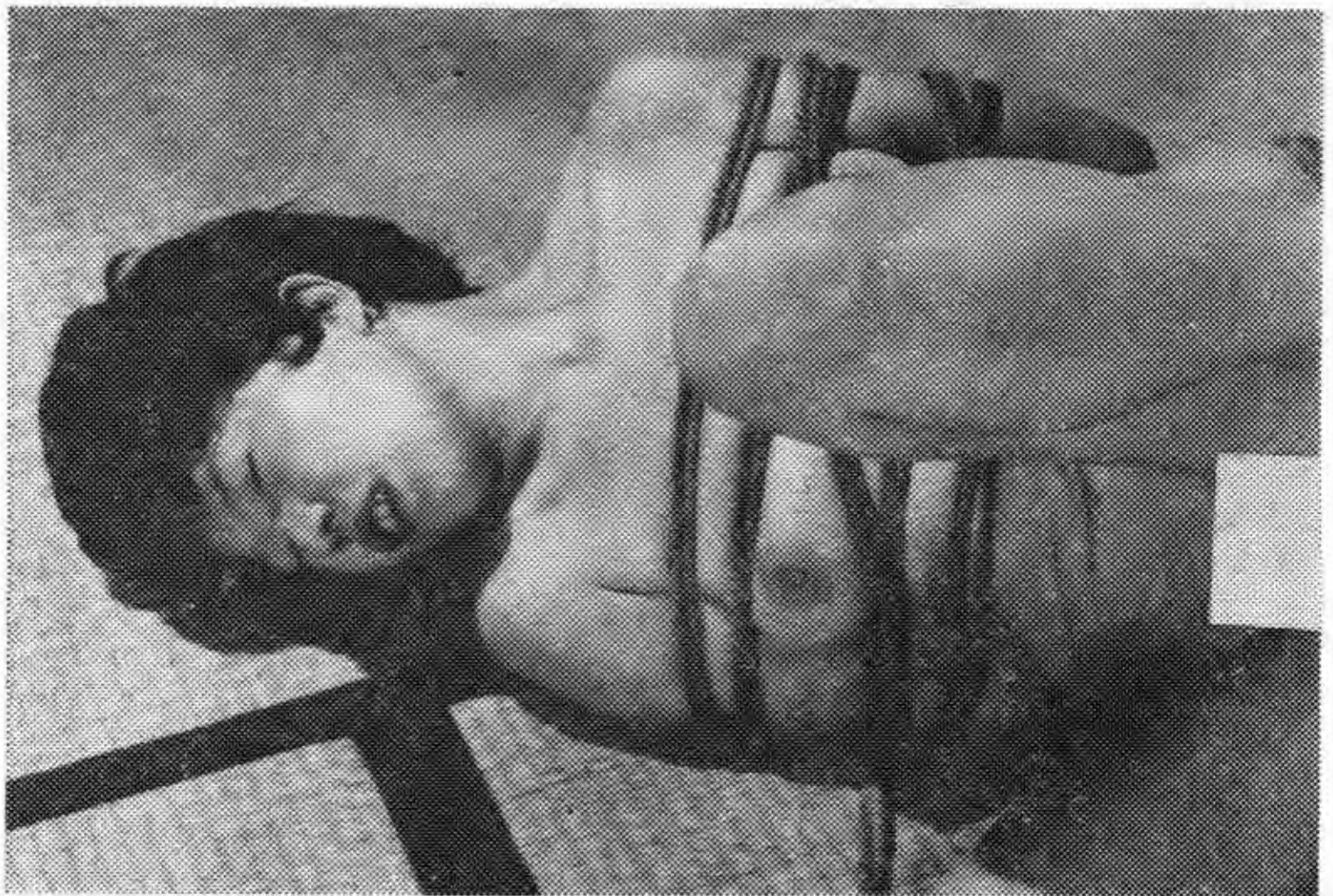
福竜を後手高手小手に縛り上げた上で、縄尻を利用して、後手首を縛った縄を左右に振り分けて、左右各々の両膝を縛り上げる。

こうすれば、左右の脚を思いきり開くような格好になるので女は羞かしがって激しく拒むが、その時は脇腹を擦ったり抓ったりして観念させ、素早く縄止めをしてしまう。

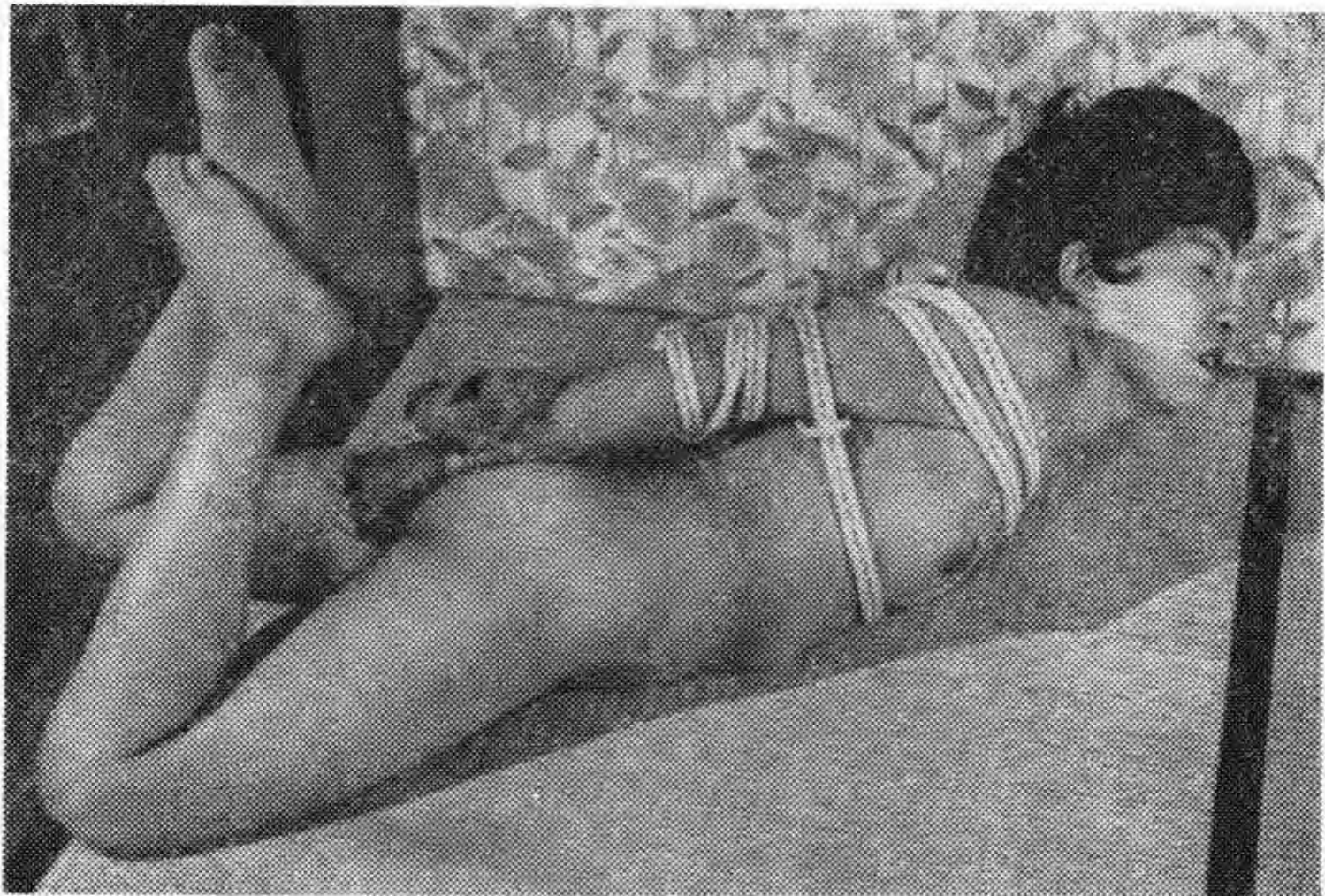
それからあとは、ムチを手にして、この女体コマを廻しておればよい。主として臀部を狙ってムチの穂先を肌に炸裂させる。ムチを避けようとして、縛られた女体はコマのように床の上をころがる。

こうなれば、臀部ばかりをムチは狙ってはいない。肩先でも、太股でも、脚でも、目の前に現われた攻撃目標には適確にムチをお見舞いする。呻き声を挙げながら、女体は床の上を、ころげまわる。

全裸の肌は鮮かなムチ痕を残しながら私の目の前に、どこも隠しようもなく、さらけ出してしまう。殊に両膝頭に縄が掛かっているのも、もげばもがくほど、どうしても脚が開ききってしまう。女はそうなってはいけないと必死に身体の向きを変えようとす  
るが、非情なムチは、そんな女の思いを、あざ笑うかのよ







うに執拗に打擲の雨を降らせる。

汗にまみれて喘ぎ、やがてぐったりと伸びたように全身の力を抜いたが、燃え上がったマゾの血が、そんなことで終熄を告げたのではないことはこんこんとして快美の泉を湧き出さしている彼女の、かくされた部分が如実に物語っている。

数分に亘ったハ女体コマ廻しVのプレイで、縄は恐ろしいほど皮肉に喰い込んでいるが、彼女はそんなことに苦痛を感じる様子もなく無我の境地を、さまよい続けている。「あなたのしたい放題、お好きなようにして頂戴」という自己放棄のスタイルで、性愛の歓喜に没入、忘我の恍惚境にひたりきっている福竜の様子は、まさにマゾの極致である。

よく、マゾの側から、御主

人様に奉仕するという言葉を聞くが、奉仕するというのは、全く反対のSの立場ではないかと、私は思う。全く努力もしないで、セックスの絶妙な歓喜を求めるのは、いつの場合でもマゾの方である。私の目の前でのびている女の姿を見て、つくづく、そう思った。

大きな努力を伴って征服欲、支配欲、所有欲を女体の上に発揮させようと考えていたのに、今、ここに至って、なんとも言えない消化不良に、燃え上がってきたSの心が、行き場のない迷路に、はまり込んだような複雑な気持になった。

彼女が嫌がるだろうと、意地悪く、足の指や足の裏を舐めさせてみた。それがマゾに昂揚した女は、如何にもおいしそうに、ペロペロと喜んで舐めているではないか。

奉仕しているのは誰だ——

私は、そう叫びたかった。

人間の身体の中で、一番汚いと思われる肉体の部分を舐めさせてやれば、如何にマゾとはいえ、少しは拒否するだろうと考え、お尻を、ぴたりと女の顔に据えた。

それすらも、自分がついさっき、入浴を済ましてきたことを悔むような結果となった。風呂へも入っていない汚い身体の部分で穢し



たい。もっと、もっと犯したい、なぐさみものにしたい——そう思っても、相手に一向にそれが通じないもどかしさ。私は、そこに哀れなピエロの姿を自分の立場に見出した。

もう、こうなった以上は、縄を解かないままの女体を弄んで、足下に蹂躪した上、最大の侮蔑と羞かしめを与えてやるより、自分の腹の虫が、おさまらない気がした。

宴会の席では美しい衣裳で華やかに着飾り日本舞踊で色を添えたり、三味線の伴奏で民謡を唄ったりしている福竜が、今、この席では素裸にひん剝かれてるばかりではなく、小一時間余りも麻縄できびしく縛り上げられて畳の上でころがされてるのだ。

今、これから、この女をどのように料理しようか、それは私の勝手気ままである。

今日、京都見物をしている車中で、福竜は私に対して、自分の身の上話をした。それは本当か嘘か、私にはわからなかったが、私には、そんなことには興味がなかった。

目の前に全裸で縛られて、ころがされていく一つの若々しい女体が、私の征服欲と独占欲を、どのように満足させるかについて興味があった。女の肉の髄まで、しゃぶり尽してしまえば、それでよかったのである。

隣室にあるツインベッドの一つへ女を運んでゆくなどという思いやりのカケラも私の心に存在しなかった。

何一つ掩うものとなない畳の上で全裸で縛られた女を最も無慈悲に犯そうというのである。今流行のポルノというに、ふさわしい淫虐きわまりない破廉恥な行為であった。

山の方から、お寺の鐘が鳴った。

諸行無常の響きが、痴態に呆けた私の心に一瞬の反省心を呼びさました。

外は静かである。ひんやりとした夜気が閉め忘れた窓から湿ったような空気を、しのびやかに、ひそませてくる。むんむんとするSMプレイの熱気を、いくらかでも、さまそうとする、その夜気は、さすがに十月の声を聞いた秋の気配を感じるものがあつた。

畳の上でころがっているカメラを見た。

まだ幾枚もシャッターの切られていないそれは、如何にも厄介物のように、そこにころがっていた。

SMプレイに熱中してしまうと、写真って撮れないものだ——と思った。

今日は別に、縛り写真を撮影しようと考えて来たわけでもないし、彼女もまた写真を期待してきたわけでもないだろう。いつもの習

慣でカメラは持参したものの、どうも邪魔物扱いになってしまった。

いつも奇クの編集長から「写真と記事は必ず取って来いよ」とよく言われているが、実際のところ、愛読者ファンのためには、よい写真と記事を取材して来なくては、全く以て申訳けない仕儀となってしまう。自分だけが適当に楽しんで、はい、それでおしまいということだったら、奇クの読者は本当につまらないことになってしまう。

「自分は楽しまないでもよいから、読者に受けるような、よい写真と記事を取って来い」そう叱咤する編集長の気持も、よく判る。

今、福竜とのSMプレイの第二ラウンドの宴を終わって、そこはかとなない悔いの思いが無雑作にころがっているカメラを眺めて私の心の中に蘇ってきた。男の誰もが感ずる遂情のあとの思いにも、それは似ていた。

入浴を済ましてベランダへ出て身体を冷やしていると、再び元気が回復してきた。京の夜景を眺めていると、やはり汗を流してきた福竜が浴衣姿で、控え目に私の傍に寄り添ってきた。袖口から細い腕を通して私の腕に、そっと自分の腕を重ねてきた。

「私、あんなの、生まれて初めてだったワ」



夜景にチラッと目をやって、「まあきれい」と大仰に驚いてみせてから私の耳元で艶っぽく、そう囁いた。

「あんなのって。」

私は故意に知らぬ振りして問い返した。

「イジワル、私が縛られることが大好きなのを御存じのくせに。にくたらしいわ」

そう言って、私の二の腕の内側のやわらかいところを力いっぱい抓った。

それは芸者としての巧まざる男の気を引く技巧の一つであったかもしれない。しかし、それが、次の第三ラウンドの導火線となってしまった。

体重は四十五キロぐらいしかないだろう。

私は女を軽々と抱え上げると室内へ運び入れて、カーペットの上へころがした。

既に完全に私の奴隷と化してしまっただ女は逃げようとする素振りさえなかった。

私は片方の足首に縄を掛けてドアの上に通してノブで縄尻を止めた。素



肌には浴衣を着たままなので、下半身があらわになった。腰紐の結び目を解き浴衣を剥いだ。

吊られた片足を中心にしてころがり自分の前面を私の目からかくそうとした。私は俯伏せ気味になった女の尻の上に腰を下ろして乱暴に両腕を逆にとって縄を掛けた。

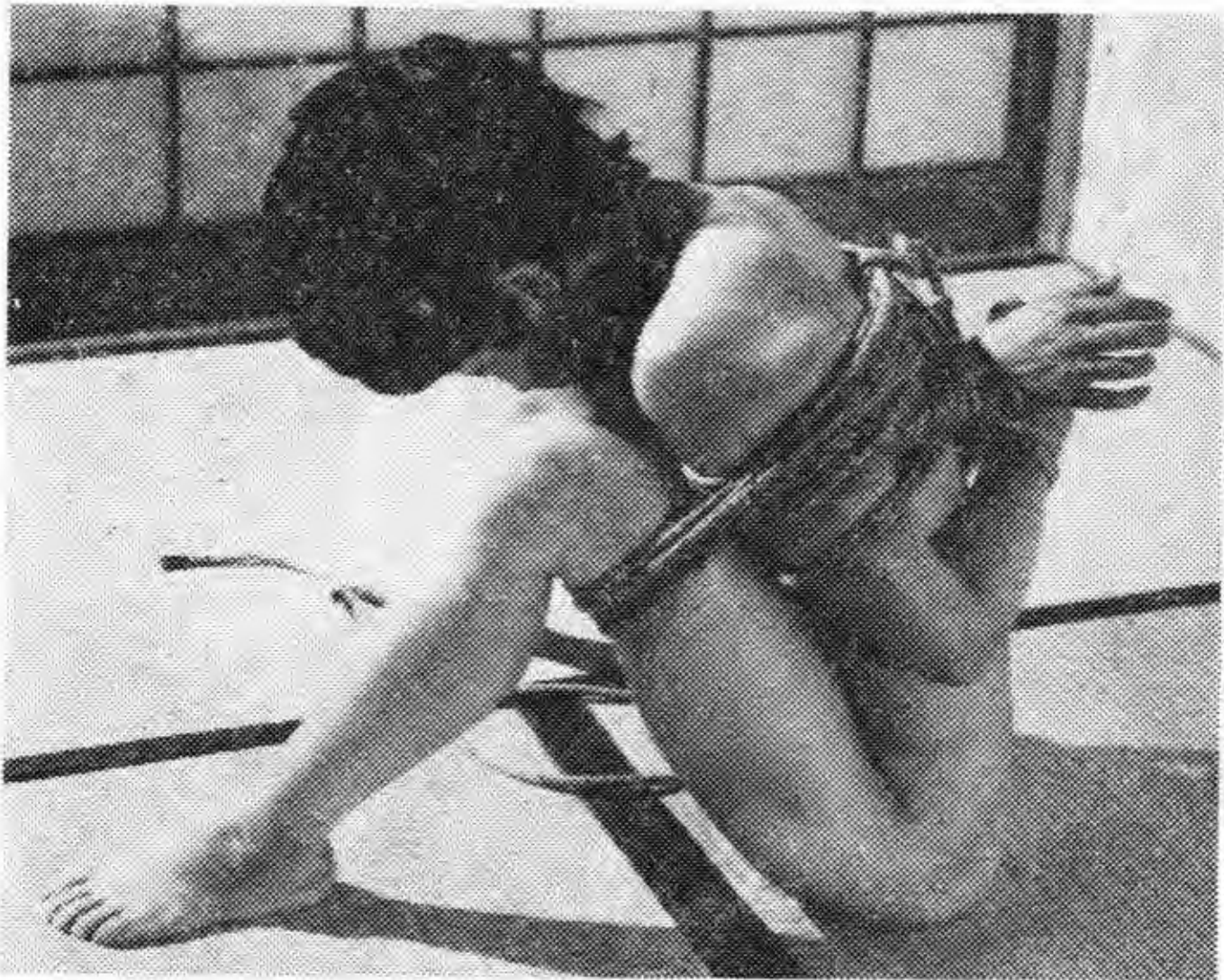
「私、両手をうしろに回されて括られたら、もう、身体中が燃え上がってくるの」と言っていた福竜のことだから今まさに、ぞくぞくと身ぶるいするような官能のうずきを味わっているところだろう。私の尻の下に感ずる彼女の女体の動きが、それを如実に物語っているように思える。

「この世の中に、果たしてマゾの女性なんて、いるのだろうか」と疑問に思っている読者の方に、私はこの女の姿を見せてやりたい。

福竜こそ、生まれたままのマゾ女性である。縛ったままで放置しておいて悶え悶えて、ころがり廻るなど、私も始めて経験した。

金目当てや名目当てで、一時的にマ





ソ女性を粧っている女を読者の多くは好まれないことと思う。SMブームにつけこんで、

そういった手合いは、男性でも女性でも、数多くあるように思う。だが、福竜だけは違う

私の発掘した正真正銘のM女性である。

それに、アノ方の感度も抜群なのだから驚く。相当、高度のM女性であっても、アノ方の感度がまことにお粗末のがよくある。縛られ責められることばかりというのは倒錯度からいえば、割合が高いと言えるかもしれないが、私はこうしたのは余り頂きかねる。もっとも人は好き好きだから、これは私の一私見としておくが、その点福竜は私の好みからいっても理想的なマゾ女性であった。第三ラウンドの責めはパイプと熱蠟たらしで開始された。さっきも言ったように感度が鋭敏なのでパイプを埋没させてし

まうと、そのあとの狂爛怒濤の高まりは、全く手のつけられない激しさを呈する。

専ら色彩的効果を狙って、クリスマス用のキャンドルに点火して、熱蠟のしたたりを、太股から臀部、背中へと、所かまわず、たらしでいった。吊られた片足を軸にして暴れまわるので、熱蠟は思わぬ個所に落ちて赤い斑点を点々として、つけていった。その間も、たえ間なく、パイプは鈍い振動音と共に自己に与えられた任務を忠実に果たしているようであった。呻き声は部屋中に充満して、熱気が忽ち、むんむんと、たち込めた。

「苦しい、許して。ユルシテ……」

断末魔が彼女の全身に襲ってきたようだ。そんな女の姿を私は冷ややかに眺めながら熱蠟の雨を狂ったように降らし続けた。へもっと苦しむがよい。もっともっと、悶えるがよい。泣け、喚け▽

そう私は心の中で叫んだ。一本の蠟燭が尽き果てると、私はムチを手にして肌を打ちすえた。それは見事な眺めだった。

一打毎に、肌の上にしみついていった蠟骸は赤い花びらのように飛び散った。

太股も、臀部も、背中も、ムチの激しい洗礼を受けて、蠟の花びらをまき散らすと、余



りのムチの痛さに、パイプを生み落とした上で福竜は、ぐったりと伸びきってしまった。

「まだ、まだ、もっと……」

ウワ言のような福竜の言葉の語尾は、はっきりと聞きとれなかったが、私には彼女の言わんとしていることはよくわかった。

はやりきった生きた観音様を成仏させてやらないことには、仏罰が立ちどころに落ちてくるだろうと恐ろしくて、私はあわてて浴衣をかなぐりすてていた。

全くもって、SMプレイというにふさわしい、女体に対するいたぶりようであった。

ツインベッドは二つ共、遂に手づかずでカバーを掛けたままできちんと、そのまま置かれていた。第一ラウンドから第三ラウンドまで、畳の上であったり、土足で歩くカーペットの上であったりしたのだ。

彼女の身体も、凄く傷つきようだった。

胸に三筋、血がにじんだような縄のあとをくっきりとつけていたし、背中には縄の結び目が当たったのか、ムチが当たったのか、二箇所ばかり赤黒く皮下溢血していた。二の腕なんか縄のこすれたあとが、むごいばかりについている。お尻はムチ跡で真赤なミミズ腫れが盛り上がったようにしている。流石に

可哀そうになった私が、

「大分、縄のあとがついたようだが」

と、慰め顔で言ったが

「私、いつも着物ばかり着ていますので襟元だけは下さしたら、外だったら、いくら傷ついても構いませんわ」

と答えた福竜は、私が黙っているの

「あの襟元も、いいんです。なんとか誤魔化しますから」

と、つけ加えた。なんというマゾに徹した言葉であろうか。実は気の毒で言えなかったのだが、さっき、私がいきり立って彼女の口に縄を噛まして思いきり締めあげたので、口辺が切れて血がにじみ、そして色白の頬に、赤い縄あどが、くっきりと残っているのだ。

顔のことだから、私は内心、しまったと思っていた。明日の朝までに、直っていてくれるように——そう祈るような気持であった。

翌朝——

晴れてはいたが、昨夜の霧が、まだ、どんよりと立ちこめている京の朝であった。

十二時五分発の全日空便で松山に帰るという福竜を大阪国際空港まで送っていった。

寝不足の目に、活気を帯びた沿道の街の風景が、まぶしく見えた。

なにもかも、いきいきと躍動しているような朝の空気であった。それに引きかえ、私の心は、なにかなし弾まなかった。

頹廢的な一夜であった、と思った。

美しく化粧した福竜は、何事もなかったように、すまし込んで助手席に坐っている。

全く、女というものは、得体の知れない魔物のような存在である。

空港へ着いて、いよいよ別れ際になって

「あの、また来てもいいかしら」

福竜は控え目に、そう言った。

「うん、まあいいだろう。けど、今度のように突然じゃ困るな。手紙でも、前もって、知らせてくれなきゃ」

私は、そう言ってポケットから名刺をとり出して手渡した。

「ええ、そうするわ。私、今度も、もし、あなたに逢えなかったら、すぐ松山へ帰るつもりで切符も往復、買ってきたの」

福竜が寄り添ってきて、私の手を握りそうにする気配なので、それを避けてエスカレーターに彼女を押し上げた。

「じゃ、さようなら。またね」

私は踵を返して駐車場へ向かっていた。



カット・府和糸男



誌 上 通 信

「奴隷妻」愛好ご夫妻まいる

## 被虐環境と意識

柴 利 好

## — (1) —

同じ夫婦プレイでも、そのお相手を小竹氏は「奴隷」佐原氏は「女囚」と呼んでおられます。いずれにしても、これらの言葉の持つ意味や語感、S・Mマニヤの感情を唆ることに絶大です。

「囚人」と「奴隷」とでは、その成り立ちや拘束、苦役の目的、方法などが相違していることは誰でも知っています。しかも、外見上では両者共に日常生活の上で行動の自由を奪われ、肉体的苦役を科せられていることに於いては変わりなく、愛好者は、その嗜好を満

足させる方策として、これら非業悲惨な環境下に置かれた生活を自己流に手本にして、各自のプレイの中に採用しているのでしょうか。

即ち、この場合は、囚人とか奴隷とかいう境遇上の本質的相違すらも、それらの持つ被虐的イメージが、より重要になって、責め手も、被虐者も、ひたすら、囚人、又は奴隷という言葉の内に、夫人の自分なりの夢を求めて、各人の倒錯嗜好に合致した境遇を心に描いているでしょうし、プレイを通じて、このような環境意識の中に専心没入しながら、昂ぶった情念の満足を充たそうとしているのだ

と思います。つまり、囚人も奴隷も、それ自身がプレイの目的ではなく、それはSM嗜好に耽溺するための、一つの手段であると解されます。従って、実際、行なわれる、これら二つのプレイの内容には、厳密な差異がなくとも一向、差し支えないのでしょうか。

## — (2) —

プレイの実際上に相違が現われたとすればこれら二種の被虐環境に係わる属性、即ち、囚人らしさ、あるいは、奴隷らしさを、プレイヤーが装うための演出でしょうし、この演出によって、演技された諸々のSMプレイに



陶醉するのでしょうか。そこで、このような演出、演技に格別の意義を認める意識尊重派の存在も見逃がせません。

私が、かねてから尊敬申し上げている早木夢二氏は、囚人、それも我が国、古来の時代風俗として伝わる囚人の拘束生活に、年少の頃から憧れ続け、数十年を経た今日にまで及んで、ご結婚後も、心から理解ある好伴侶、慶子夫人と相携えて、お二人して交互に責めつ、責められつの囚人プレイを今も尚、仲睦まじく続けておられるご様子で「羨望」といえば直ちに早木氏が連想されるくらいです。

同氏のプレイは、常に捕縛による緊縛に終始しているようで、それ以外には殆ど、お膳立てらしいものは、お使いにならないらしくもっぱら「神妙にお縄を受けませい!」「お引き回し」「お手打ち」「お白洲」その他、旧幕時代の数々の古風な言葉の表現を、プレイ中、ご夫婦の会話の中に駆使されているとか。そのことで、囚人とか獄舎の気分を存分に楽しく味わっておられ、お幸せな、ご様子を誌上で毎々承っております。従って、少なくとも早木氏ご夫妻に関する限り、そのプレイの上でガレイ船の漕手とか、競り売りに掛けられる奴隷の生態は、全く考えられないこ

とでしょう。こうした嗜好は、緊縛や鞭打ち等の責め苦、そのものをプレイの主目的とする「実際派」に対して、いわば「ムード派」と呼んでも良いと思います。「実際派」にも苦痛そのものに陶醉する直接派と、被虐者の形態美観を翫味する耽美派とに区別されますが、ここでは詳細に触れますまい。

### (3)

ところで、佐原氏の呼ばれた「女囚」という言葉ですが、兄の抱いておられる意識が日本的なものか、西欧的なものか分かりませんが、多分、氏は、この「女囚」という言葉の持つ独特な雰囲気がお好きなのでしょう。それ故、罪を犯し、その罪の償いのために苦役に泣く女囚の生態を、プレイの中に適用なさることによって、その雰囲気を味わっておられるのでしょう。

あるいはこの太股錠の責めの時に偶々「女囚」と呼ばただけであって、別の時には奥様を縄や鎖で緊しく縛り上げながら「お前は俺の奴隷だ!」というような言葉を掛けておられるかも……と私は、つい想像してしまうのです。奥様も、ご主人に命ぜられるまま、そうした場合々に応じた被虐意識に基づいて、それらしい演技をなさりながら、ご主人

への限らない愛情を込めつつ、被虐の悦びに浸っておられるのだらうと思います。こう考えて見ますと、フォートの背景の細い障子の棧さえも、角材で組立てられた座敷牢のように錯覚して映ずるかも知れない、などと思ったりします。

要するにSMPに使われる言葉は、囚人でも奴隷でも、そのどちらでも良く、それはプレイヤーの嗜好に従って適当に決められるものなのでしょう。その実技に於いて、方法上同じような緊縛、拘束や鞭打ち等が行なわれたとします。そこではプレイをより楽しく、悦虐の情念を、より激しく燃えたぎらせる演技方法として、これら残酷な環境の代表格としての二つの言葉が、使い分けられるということなのだと思ふのです。

小竹兄は、吊るし責めに関して「前戯」が必要であることを強調されました。この論旨は独り、吊るしのみに限らず、プレイ全般に当て嵌めることができましよう。つまり囚人も奴隷も、これらの言葉の使用は、プレイ実行に先立つ前戯の一つであり、心の下準備であると解釈することが、一番、分かり易いと思います。

仮に、飼育が徹底した馴化女性を縛るにし



でも「さあ、縛るよ」「いいわよ。どうぞ」と簡単に片付けるよりも相手を「奴隷意識」や「女囚意識」に浸らせて置いてからプレイに入った方が、より一層「マゾ気を昂め」お互いに効果的な陶酔を得られるに違いありません。そうした意識を単に前戯として止まらせることなく、プレイ終了まで持続できれば最も好ましい訳で、しかもそれが意識上のみには止まらず、更に実際の小道具（磔柱、木馬檻）の使用にまで進めることができれば、尚楽しいプレイになることは勿論でしょう。

#### — (4) —

SMPの世界では、これらの囚人と奴隷の他に、今一つ「家畜」という言葉が、よく使われます。「家畜」は畜生ですから、全く人格が認められない獣類に身も心も成り下がる最も浅ましい被虐意識である訳で、プレイ実践上の家畜生活については、本誌上でも、大同小異の具体的な願望、及びプレイ・レポートが屢々散見できますが、私の「家畜」観を述べてみますと、概要、次のようになります。

獣類であるからには、直立して歩行することとは許されず、四つ這いを強制されます。人語を話すことも許されません。着衣さえも身ぐるみ剥ぎ取られ、生まれたままの姿でいな

ければならない境遇なのです。

畜生とはいえ、持主に飼われている家畜なのですから、日常でも野生のまま放置されてはいません。当然、その飼育と訓練のために家畜としての所定の拘束を受け続けて暮します。縄、鎖、錠枷による緊縛とか鞭打ちなどは家畜生活から決して切り離すことは、できないものです。食事の手を使えず、与えられた物を口で直接、受けて喰べるのです。その食事中でも首輪や腰枷などで、柱とか杭や鉄環の類に繋がれていることもありますし、時には両手を後ろ手のままで喰べさせられたりします。生理現象は、庭先や縁の下に四ツ這いで行かされて、自然の処理に任せられなければならぬのです。こんな時でさえも、縄や鎖で繋がれて持主の手で引き回されるのが普通ですし、何時、鞭が裸身の肌には炸裂するかも知れない惨めさです。

縄や鎖は引き回しの時に限ったものではなく、家畜は本当の牝犬と全く同様に、身体の何処かを繋がれて毎日を過ごします。なんの罪科もないのに、その緊縛は、囚人や奴隷に對するよりも惨酷で緊しいこともありますし時には様々な責め道具を使って折檻されるのですから、堪まりません。

寝る間でも緊縛から逃れられません。就寝の場所といえ、身体一つ、やっと入れるぐらいの小さな箱か檻の中です。あるいは、箱一つすら支えられずに、平土間や縁先の泥土の上で寝なければならぬ時もあるのです。

特別の「美畜」の場合は、泥土で裸身を汚すことなく、屋内生活を許されることもあります。丹念に化粧を施され、美しい特製の家畜衣裳で着飾って、ご主人への奉仕を強制されることになるのです。しかも、こうした室内用のペットも、事と次第によっては戸外に追放されたり、鳥小屋のような別荘住まいや金網の囲いの中に入れられて、杭繋ぎの憂き目を見る場合もあるのです。

八月号のサロンで北川まりこ氏は「雌犬の歌」という題名のもとで、こうした私の夢想する「家畜の悲惨な生活」を、美しくも可憐に歌い上げて下さいました。

#### — (5) —

マゾヒスティック・アニマルとさえ呼ばれる谷山久美子さんは、以上に述べたような家畜生活を、ご自分から進んで実地に、ご経験になつたらしく「一糸も与えられぬ裸暮しの、鎖と革と縄に縛々と束縛された毎日ですが、本望にも思えます」とM・O氏に飼育された



日々を追想しておられます。別段の特殊な理由からではなく、ただ、嗜虐生活その一途の願望によって、一匹の家畜にまで落ちぶれ果てたという谷山さんの事例は、全く凄絶というより他に言葉がありません。

渡部好美夫人は浣腸にも非常な嗜好をお持ちのようですが、そのプレイ振りを告白文中から伺ってみると、夫人は、ご主人から責めを受ける時は、どんなに寒くても全裸に剥かれて、後ろ手高く緊縛され、猿ぐつわを嵌め

られて、浣腸は二千ccの食塩水。一旦、緊縛を解かれた上、ご主人の愛を、突き上げて来る便意の中で甘受した後に、トイレに走って排便の楽しみを味わう段取りになるようですが、「それも主人の命令で、トイレに行かせてもらえず庭先や板の間で用を足さなければならぬこともある」のだそうです。この悲惨な排便の事項に関する限り、夫人は女囚でも奴隷でもない、明らかに一匹の家畜妻に化身なさっているといえましょう。

## 新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

### ☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

### ☆規定☆

- 一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。
- 一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。
- 一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんが、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

他にも、男女を問わず、これに類した畜生道を、空想上ではなくして、実地に体験されている方々が実際におられるかも知れないと思います。自縛自演の単独プレイではなく、持ち主の意志のみに一方的に屈従させられる、全く自己を放棄したM生活に耽溺しながら、悦虐の業を背負ってトボトボと歩んでおられるとすれば、その生活は恐らく期限を限った定時制の家畜ではありましようが、想像するだけでも、その哀れさ惨めさに気が遠くなりそうです。

これに関連して思い出されるのは、五年前に誌上を飾った山中冬子さんの手記のことです。確か彼女は、ご家庭の事情で自ら志願して家畜生活の年勤めをなさったとかで、その一文が発表された当時、その徹底した家畜生活の哀れさに私は驚倒し、あるいは随喜の涙を流したものです。ところが、この手記は回を重ねること数度で、パッタリと跡絶え山中冬子さんの名は、それ以後の誌上に見られなくなりました。

この蒸発の真因が、なんであるか、私には分かりませんが、この筆者が男性ではないかと疑われたことが影響しているのではないかと憶測が流れていました。疑点の根拠は、

手記の内容がSの男性の立場に立って、一方的にS好みに記述されていること。それに女性特有の細やかな被虐感覚が伝えられていないことなどでしたが、私は事の当否は別として、こうした事柄に対する無責任な詮索は、全く無意味で価値がないと思います。よしんば、ある人が筆名として異性の名前を使い、どんな投稿をしようとも、それが一体、何処がいけないんだと詰問したくなります。たとえ形式がどうであっても、月刊誌という一つの媒体を通じて、SMという特殊な世界で睦み合うことができれば、それで良いじゃありませんか。私は、この得難いM作家の引退を惜しみ、その復活を心から望むものです。

尚、その手記に見られた生活内容そのものは、明らかに一匹の家畜としてのアニマルライフであったのですが作者ご自身は「奴隷」と名乗っておられたことを憶い出しました。ここにも、奴隷とか家畜とかの実際上の身分の差別が、さしたる問題として重視されてはおらず、ひたすら虐待行為そのものに主眼が置かれていたことが分かります。

## (6)

いささか話題が理窟めいてしまいました。この辺で取纏めをしなければなりません。

私は本稿に於いて被虐環境としての意識と演出についての話題を求めて参りました。これらの意識下で演出実践されるプレイは、被虐者が異性である場合もあり、同性同志によることもありましよう。が實際上、最も多く見られる事例は、一番、身近かで合意し易い立場にある夫婦間のプレイであり、それも被虐者が妻である場合が抵抗が少なく実行されると思われまう。この場合には、そのプレイ上の用語も囚人は「女囚」「女囚妻」となり奴隷は「女奴隷」「奴隷妻」に、そして家畜は「牝奴」「牝犬」「美畜」「家畜妻」など味わい深い言葉に交わる訳で、これらの普通なら、なんでもない言葉の一つ一つが、SMの虜囚となった男女に与える魔力が、どれほど大きいものかは、元より計り知れません。

こうしたSMプレイに当たっては、たとえその時の被虐環境の呼称が何であっても、その実践方法はプレイヤーの自意任恣に任せられるものであり、当然、各人の嗜好に合わせ、その折々の情感の昂ぶりに最も、ふさわしい手段が採用されてしかるべきだと思います。そしてプレイヤーは飽くまでも相互に真摯な合意に基づいた信頼感を基礎に行動しなければならぬことが、何よりも必須の条件で

このことは兎角、勝手気儘に振舞える夫婦プレイに於いて、より以上、強調されなければならぬことは勿論でしょう。そこには、他の何物にも替え難い珠玉の宝「夫婦愛」が全てに優位しているのです。連れ添う夫婦が相互に愛し、愛されておればこそ実行できる、悦虐生活なのだ、思うのです。それでこそプレイの結果として初めて獲得できる肉体と精神との複合的陶醉が生まれるのでしょう。

大橋美代子夫人は、夫婦プレイの悦虐について「でも私は、うれしいのです。……苛められることは、本当に辛く苦しいのですけれど、それが夫の手によってなされているというだけで、この苦しみの中に、じんと痺れるような、めくるめく被虐の陶醉が湧き上がって来るのです」と、いみじくも告白なさいました。私は、悦虐女性に対する讃仰者の一人として世の奴隷妻、女囚妻、家畜妻の皆様に申し上げたいのです。貴女方こそ被虐愛好という甘美な素質と、それを実行できる悦虐の場とを天与の恩恵として授けられた、真に恵まれた方々なのです。夫婦プレイを通じて、貴女方の素質を精魂傾けて育て上げ、万葉の華として花咲かせて下さったのは他ならぬ、ご主人なのです……と。

(終)



## 女マッサージ師の告白

佐瀬芳子

異常と  
谷間

カット・あらいかず

私は或るクラブに所属している女マッサージ師です。人は按摩とか女按摩と呼びますが、私はマッサージと呼んでもらいたいと思っています。「アンマをしてくれ」と言われるより、「マッサージをしてくれ」と言われる方がどんなに感じがよいでしょうか。私は今三十二才ですが、二十七才の年からもう五年も、この商売を続けています。何故こんな商売に入ったかと言いますと、夫運がわるくて、大酒呑みの夫にさんざん苦勞させられた挙句、離婚したからです。

子供二人を養うため、お菓子屋や住込みの飲食店なんかに入りましたが、給料が安く母子三人暮してゆけず、人づてに聞いて、マッサージの途に入ったのです。身体自由もきくし、案外、収入もよいし、それ以来、ずっと五年間この商売を続けています。今のクラブに所属しているマッサージ師は九人ですが、休む人が多くて、常時、店に顔を出しているのは、四、五人ぐらいです。若い人は少なく、大体三十代、四十代、中には五十代の人もいます。時折り二十才前後の若い人が入ってくることもありますが、長続きしないので、一、二カ月でお客と出来たり他の水商売へ交わっていったりします。先日二十才という、けばけばしい化粧の娘が来ましたが、仕事から帰ってくるなり、「お客さんからチップを貰ったから」といって一万円札と千円札をチラつかせて皆にラーメンを奢りましたが、首筋の髪が湯で濡れていて、顔を真赤に湯気でほてらせ、暑い暑いと言っていました。『ホテルへマッサージに行つて、お風呂へ入つて来たんだね』と、あとでみんなと大笑いしましたが、その娘も二週間もいないで、男をつかまえたらしく、挨拶もしないで、友達とかいう若い男に荷物を取りに来させました。私は中肉中背で三十二才という齡からして年齢並みか少し若いくらいに見られるという自信はありますが、一度、世帯を持っていますので、どうしても地味になり勝ちです。白い上っ張りを着て街を歩く勇氣もなく、買物籠の中に入れて、呼んで呉れたホテルの玄関に入ってから、それを着てお客さんの前へ出るようにしています。

午前中は殆どお客がないので、早出でも昼食後一時から二時頃、用があったりしたら四時頃にお店へ顔を出します。終わるのは仕事の都合にもよりますが、午後十一時頃です。

一時間のマッサージ代は千円で、延長して二時間分というお客さんが多いようです。一時間といっても正味は四十分くらいです。

僅か四十分もんで千円とは、よい商売のようには思いますが、お店の取り分、それに呼んで貰ったホテルへの払戻しなどを計算すると額に汗した割には、そうボロイ商売でもないのです。それに指名されたら別ですが、そうでないときは、店へ出た順番で仕事を割り当てられますから、どうしても、お茶を引くことも多いのです。

五年も、こんな商売をしておりまうと、いろんな変わったことに出合います。私のクラブでは、按摩といっても全部、目あきで、小綺麗にはしております。もっとも、今いる人は皆、真面目で、商売熱心でやっています。

お客さんの中で十人の中、八人までは普通のマッサージのお仕事です。時には入るなり「スペシャルを頼む」というようなお客さんもあります。こんなお客さんには、怒らせないように、やんわりとお断わりします。

といっても、なにしろホテルの一室という雰囲気の中で二人つきりになるのですから、その時の話の運びようで、脱線することもあ

りますが、それは三回、四回と呼んで頂いたお馴染みさんの時に、あり勝ちです。

五年もこういうマッサージをしておりまうと、時には変わったお客さんに出合うこともあります。ありますが、他の同僚の者の話を聞いていみると、私なんか、そんな経験が少ないように思います。と言いますのは、私は一見して服装や態度が真面目そうに見えるのと（実際に真面目ですが）、そんなワイ談に最初からのらないからだと思っています。

先日もし所轄の警察署に私が呼ばれて聞かれたことで、実際にあったことですが、どうしたわけか、新聞にも載らなかったのが皆様も御存じないと思いますので書いてみます。

私の働いております界限には、鍼、灸、マッサージなどの治療院やクラブが六カ所ばかりありますが、その中に若い女マッサージ師が出張したホテルの一室で、中年のお客さんから縛られた上でスポンのベルトで血がにじむまで殴られたという事件がありました。

そのお客というものが、機械工場を経営している社長で、今までに何人もの女マッサージ師をホテルの一室へ呼んでは縛ったりムチ打ったりしていたそうです。お金で納得させた上で縛ったり叩いたりするのは興味がありません。無理矢理、縛り上げた上で、泣き叫ぶのをかまわずムチ打ったり責めたりするのが好きなんだそうです。

この事件がわかったのも、ホテルの案内人のオバさんが、部屋の中で余り女の泣き叫ぶ声が激しくするので、不審に思っ警察へ知らせたのが、きっかけになったそうです。

調べによって、その女の人以上にも何人も女マッサージ師が被害にかかっていたのだそうです。そのお客の呼んだ按摩の中に私も入っていたということで参考人として、私も警察に呼ばれたのです。

私は、そのお客に呼ばれたときは、普通に揉んで帰っていますので、その通り答えておきました。が、そのとき、私の警察の人に言っでやりました。勿論、女按摩を縛ったり叩いたりしたその男は悪いでしょうが、女の方にもスキがあったのと違いますか。現に私なんか、少しもそんなことがなかったのですからと犯人を弁護するような口ぶりで答えておきました。がやはり懲役三月になったそうです。そんな固い方の私でさえ、長年の間には変わったお客さんに会うことも多いです。

一番多いのは、アベックのお客さんで、二人の愛を交すところを見てくれという要求ですが、やはり私も好奇心はありますし、人が高いお金を払って見物することを逆にお金を貰って只で見せて貰うのですから、心は動きますが、そういう申し出があったときは、「私はマッサージに来たのですから」と言っ断わっております。しかし、巧妙



なトリックでアベックの行為を見せつけられてしまうこともあります。

呼ばれて行ったホテルの部屋は二間続きになっていて、蒲団の敷いてある奥の部屋は窓もなく電灯も消してあったので私は、てっきり男一人が寝ているのだと思って、マッサージを始めたのです。

目が明るさに慣れてくると、どうも蒲団のふくらみが男一人にしては不自然なように思えてきたのです。それで、腰の方をもむようなふりをして蒲団をめくってみたんです。したら、裸の小柄な女が男の横に寝ているではありませんか。

私に身体の一部をもまして楽しんでいたんですね。私に見つけられたと思った男が、二人分の揉み賃を払うから帰らないで呉れと頼むので、見ていてやりましたが、そのうち、私も興奮してきて、どうせ見るんだったら、よく見てやれと思って、スタンドをつけて足下の方から覗いてやりました。

それから、男二人というお客さんもありました。これは一寸、遠い旅館からの電話で、歩いて三十分ぐらいかかりましたかしら。

昨夜から泊まっているとかで、部屋の中に飲みさしのビールや食べ残しの寿司の鉢があったりして乱雑なんです。男二人というのに二つあるベッドのうち、一つは敷布もくちやくちやで掛布団もずり落ちてるのに、もう

一つのベッドは全然、乱れてないんです。

ホモというんですか。最近、あんなのが多いようですね。なんとなく、私なんかが見てもソレとわかります。二人を別々にもんだんですが、私がいたときには特に変わったこととはありませんでしたが、言葉使いが違います。女のような言葉なんです。それが気持ちが悪いぐらいのものでした。

左の肩が凝っているから特にそちらをもんでくれとか言う、お客さんの注文はよくありますが、脚を逆エビのようにして呉れとか、私の足で、胸を踏んずけて呉れとか、顔の上に乗って呉れとか注文する変なお客さんがあります。大体、そんなお客さんは殆ど断わっております。そうしたら、普通の揉み方で帰って行かれます。

女のお客さんで「私は擦ったがりだから下半身だけでもほしい」という変わった注文がありました。擦ったいから下半身はやめてくれというのは、特に女の方には時々あるのですが、このお客さんは一寸、交わっていません。腰のまわりや太股だけを揉みます。

まあ、私なんか商売ですから、お客さんの注文通り、どこでも揉みますが、この女の人なんか、もう少し右とか、もう少し上とか、自分で指図するんです。その通り言うことを聞いていますと、女の羞かしいところへ来てしまうので、いくら女同志でも、こればっか

りは、お断わりしました。

中年の男の人なんかで、例の写真や絵をカバンから取り出して見せようという方もあります。

先日余りしつこく「見る見る」と言うので、「お客さん、そんなことをしていたら、揉む時間がなくなりますよ」と言ったら「揉んでもいいから見ろ」なんて、中々熱心なもんです。

揉まないでもマッサージ代を貰えるんだったら、私も楽ですから、感心したようなふりをして、そんな写真をゆっくり見てやりました。

中には、おさわりバーとカン違いして、服の間に手を挿し込んでくるバカなお客さんも時にはありますが、こんな男にはピシャッと平手打ちを喰わすに限りません。

まだまだ、いろんな変わったお客さんはありますが、私たちの方もマヒしてしまって、それがあたりまえとは思わないまでも、そう変に思わないように、馴れっこになってきます。

私は当分、このマッサージの商売は続けてゆくつもりですので、また話題になるようなことに出会いましたら、お知らせします。

今日は私が警察に参考人として呼ばれたことから、とりとめもないことを書いてみました。

連載・時代S小説

紫

蘭

の

門

(5)

白蘭の園に嵐吹き寄せ  
 黒蘭共々にうち慄う  
 暴威止まるところを知らず  
 建ち続け得るや紫蘭の門

風 流 極 道 軒

カット・岡たかし



はかない抵抗

豊香が、麻生六本木にある元禄屋重右衛門の別邸で、鞭兵衛たちに、さんざん罵りものにされ、小用までさせられている頃、ここ日本橋四丁目の本宅では、貴子の撮影が終わり、雅子が引きだされて、老中領田下野、勘定奉行肥田若狭たちの前に、一糸まとわぬ裸身を曝していた。

豊太閤の莫大な秘宝の鍵をにぎる五夜のロザリオの内、徳川家に伝わった甲夜のロザリオの秘文は既に元禄屋たちの掌中にある。

「色は匂へど散りぬるを」と刻まれたあと、南蛮数字で、「16・16・22・12・3」と記されてある。また、秀吉が、上杉景勝に与えた丁夜のロザリオも、公儀櫛師春田和泉のもとから奪いとり、そこに、「浅き夢みし酔ひもせず、33



・14・20・21・47」と、燦爛<sup>さんらん</sup>とかがやく黄金のクルスに、彫りつけられていることを知っていた。

残る戌夜のロザリオは、十一代將軍家齊公の御落胤と名乗る怪盜徳夜叉が持っていることを老中領田配下の黒鉄<sup>くろてつ</sup>の者が探知したが、その徳夜叉がどこにいるのか目下の所、前田利家に伝えられた乙夜のそれとともに不明。時を待つばかりはない。

前号梗概——豊臣秀吉が六十三歳でこの世を去るとき、唯ひとつ、気がかりなのは、一子秀頼のことであった。そのために、甲乙丙丁戊と五更を刻んだ「五夜のロザリオ」を徳川家康以下の五大老に手渡し、五人、協同してその輔佐に当たることが遺言したが関ヶ原合戦で五散。天保三年に至り、その莫大な秘宝の謎の端緒を知った幕府金銀為替御用をつとめる元禄屋は、勘定奉行肥田若狭等と、ロザリオの探査に乗り出し、すでに、前右大臣菊亭政房の息女貴子姫、その侍女久我雅子、櫛師春田和泉・豊香夫婦、その養女千登世たちの上に嗜虐の魔手を伸ばし、いま、あらたに怪盜徳夜叉の情婦小紫のお景の裸身に、ロザリオの謎を解くべく淫らな拷問を加えようとしている。

「丙夜のロザリオには、多分、有為の奥山、今日越えてと彫られていることであろう、問題は、その下の南蛮数字よ。それが判らないことには、何のことやら」

領田が、脇息に倚りながら盃をあげる。

「まっこと、猿智慧の秀吉公にしては、余程考え抜いてのこととみえまする」

勘定奉行肥田若狭が、同調する。

「なあに、この写真、菊亭政房に届けりゃあ、丙夜も必ず手に入りましょうぞ。御公儀勝手向きも万々才というものです」

佐渡刑部の目は、そう云う間も、雅子の眸に向けられている。

久我雅子——従三位民部大録、久我親元の娘。一度、大蔵大輔柳原宗忠のもとに嫁いたが、子なきがゆえに離縁し、菊亭貴子の侍女として江戸に下ってきたのであった。

そんなことよりも——、いま、佐渡たちの眼前で、陳沈宝たち三人に、唐風の緊縛術である金股流地獄縄叫喚の厳しい縛めを受け、王晏奴のかまえる和蘭渡りのカメラの前に曝された裸身は、異常な美しさに輝いていた。

その肌が、並みの色艶ではない。極上の美酒をいくらかうすめたような琥珀色にきらめ

き、むっちり凝脂ののった生身の肉が、甘くやるせない沈丁花の香りにも似た体臭を漂わせながら、菊灯台の明りのなかに浮かび上がっている。

「天女のようにじゃわ」

佐渡の言葉に、

「天女にしては、少し肉が付きすぎではないかな。それに、天女は、このように緊縛されまいて。フッフッフ」

「肥田様。天女とて、閻魔大王<sup>えんま</sup>には、かないますまいよ」

「閻魔？……元禄屋。おぬし、余を閻魔と申すのではあるまいの。フッフッフ」

「ハッハッハ、閻魔もたじろぐ老中様」

元禄屋、盃を領田にすすめながら、

「そう雅子だけを、お褒めになりますと、貴子姫がお嫉けになりますようぞ」

一同の視線が、床間に向けられる。

座敷牢で責められたあと、貴子達は、この書院風の大広間に移されてきたのであり、それは、あきらかに、責めをもっとゆっくりと酒の肴にして楽しもうという下心であった。

床間、右の千鳥棚には、例の緊縛人形十体が妖しげな雰囲気醸し出している。そのとなりの丸柱に、貴子は立ち縛りの姿をさらし、

ているのだが、その姿が、哀れにも美しく、公卿の姫の風情を十分に示していた。

竜虎の高肉彫りのある欄間から下りた真赤な縄に、頭上にあげた両手を縛られ、同じ色の縄が右足首に二巻きして、高々と、白い内股もはり裂けるほどひらかせて、通り欄の端に縄尻がかくれている。

「ト」の字の逆を想像して頂ければよい。つまり「ト」となる。右足を高く、もうこれ以上は上がらないくらい高く。

七尺近い垂髪が、真新しい備後畳にとどいて、うねり、しっかりと閉ざされた切長な眸を、まもる長い睫毛。いくらかかたく、そして上に反った乳房のさきの紅真珠のような乳首。あえかな律動をくり返す脇腹……責められても責められても蘭麝の香りを馥郁と漂わせる貴子であった。

もう、なかば以上、あきらめている。今後どのように扱われるかも、ほぼ想像がつく。しかし、死ぬわけにはいかなかった。貴子が死ねば、元禄屋たちが、どのような難題を父政房や公卿衆にもち出さないとも限らない。時は天保三年、日本国中に飢饉の嵐が吹きすさび人が人の肉を喰うて生きのびる時代、京都の公卿衆としてその日の糧に困っていた。

(妾は、全公卿衆の犠牲)……何度か云いさせた言葉を、新しく噛みしめながら、貴子は観念のほぞをかためているのである。

「美しい。貴子姫も天女のひとりよ。あの紫手拭の猿轡が、また得も云われぬ風情」

肥田は、盃をあげながら、先刻まで、いたぶり抜いた裸身をあらためて見つめる。

「ヨオイ、デキマシタヨ、旦那サマ」

カメラのそばで、王が云う。

「よかろう、始めな」

「ハイ。ジャ、雅子サン、動カナイ。動クト映ラナイアル。ドンナニ暴レテモ、私タチ必ズ、映ス。オトナシクスルヨロシ」

長方形の箱に首を入れた王は、乾板に映る雅子の姿を見て、ニタツニタツと笑う。

金股流地獄縄叫喚——全裸で「大」の字。

ただそれだけならば、尋常の態位ともいえるであろう。変わっているのは、鬱金色の肌に迫る熊手、戟、さすまたの類であった。

右手首と右足首を連結して袖がらみが垂直にたち、左側に立つ突棒に、左の右手首と大きく開かれた左足首が固定され、二本の鈍い光を放つさすまたが、左右の乳房を、下から、突き上げている。その上、熊手が、二尺も離れた両膝の内側を横に走り、二本の戟が、首

伽のように、前後から項をはさんで、責めつけている。七本の捕物具に苛まれる雅子の裸身は、地獄の底で、牛頭馬頭の鬼どもに囲まれたような、凄惨な光茫を放っていた。血統

正しい気品は失われてはいないが、いかにせん、細く長い眉を苦痛にゆがめ、長い睫毛をしっかりと閉じて、四肢の苦痛に耐える顔は女そのもの。男心をそる女の淫らな表情とも受取れるのを、どうしようもなかった。

「眼ヲ開ケテ。ソウ、閉ジテハイケナイ」

王の言葉に、抗うことができないかのよう

に雅子は、眸を開く。

「凄艶……と云う語があったな」

領田が、歎賞するように云う。

「まさしく、公卿の姫が責められるのを現わすには、ぴったりの言葉で」

肥田が答える間も、不気味なカメラのひびきが続き、やがて、王が、黒い布から出てきて、ニコツと笑う。撮影が好調にいった証拠であった。現像のため、部屋をでるのを見送った領田が、

「凄艶の美貌、孤閨を守って何年になる」

「もう、三年になるとか」

「フーム。どうじゃ、元禄屋。抱かさぬか余に。手植の花にしてみたい」



「老中様。そのうちに、機会を見まして」

「フッフッフ……さきに手は出すまいぞ」

「それはもう、番頭はじめ一同にも十分、申しさかせてあります。女を抱くには、時がござりまして。役者も揃いませぬと」

「役者とは」

「フッフッフ。ただ、抱くだけでは面白うもござりますまい。その女を、恋する男や、夫の前で抱いてこそ、男冥利に尽きようと云うもの。それまで、お待ちなされませ」

「何やら、策がありそうじゃのう。よし、待つとしよう。では、今宵は……」

酒が廻ったのか、千鳥足で、たち上がった領田は、チラッと、床間の貴子に流し眼をおくったが、やはり、雅子に惹かれたらしく近寄り、赤く濁った眼で、先ず全身をためつすがめつ眺めてのち、さも焦れたように猿轡を伸ばして、生絹のような内股を軽く振り上げた。

思いがけない疼痛に、雅子が大きく眸を瞪く。瞼がきれるように見開かれた双眸を、もろに見返しながら、領田下野は、

「連嬪の眉、蛾眉の目か。……それに、この匂いは、十柱香のうち明石香……」

雅子の汗ばんだ裸身から漂う体臭——沈丁

花の花の匂いが、明石香の優雅な香りを想わせるというのであろう。精好平の袴をぼんとたたいて、中腰から、蹲ってしまった領田は憑かれでもしたように、短兵急に責めはじめた。

「これはまた、お気の早い」

元禄屋が、雅子の横から、むっちり肉の盈ちた肩に手を置きながらからかうのに、

「年をとるとのう、気も短くなるうぞ」

「それくさそうな笑いを、うかべる。」「そうまでお焦りなら、思いきって、お吸い遊ばしたなら」

「外聞もあることじゃ」

「なんの、なんの。ここには、これだけしかおりませぬ。御老中さまのなさること、誰が他に洩らしましょうや」

李と陳が、雅子の裸身から、さすまたと、戟をとり外す。

「じゃあ！」

吼えるように叫んだ領田は、どったと胡座すると、ぶるぶる両手を慄かせながら伸ばし始める。

雅子は、必死で、いそぎんちゃくのように吸いつく触手の攻撃を持ちこたえようとしたが、貴子と異なり、反応に敏感であるその肉

は、やがて、雅子の意志に関係なく、あえかな顫えを示し始め、甘い息吹きとともに、唇が開いていくのであった。

「フッフッフ、お姫様。我慢する必要はない。儂等だけじゃ」

元禄屋が、肩から咽喉、珊瑚樹の実のような乳首を狙い打ちする。指で押すと、その指先にくっついてくるように弾力のある肌であった。その肌を弄ぶ元禄屋の顔にも、快楽の表情が、ありありと、うかんでくる。

肥田が立ち上がって蠢く脇腹にとりつき、盃を手にしたままの佐渡刑部が、玉のような汗の浮かんだ富士額から、高くとおった鼻、鼻孔から、唇へと、分厚く動い唇を、負けじとばかり這わせていった。

「アッ！ アア……」

噛みしめた皓齒のおくから喘ぎが洩れて、

「姫……さま。貴子、姫さま。ご、ごらんにならないで……アッ、アウ！」

絶叫しながらも、やがて、呻きを、嗚咽へと変化させられていく雅子であった。

「フッフッフ……可愛い奴じゃ」

領田が、くねる艶肌に、噛みつく。

「アア！ アッ！ アウ……」

四肢を弓のように反らして痙攣する雅子を

四人は、さらに責めたてる。

「心配いらぬよ。誰だって、女はみんな、責められれば、このようになるものさ」

元禄屋が、そおと右肩を抱き寄せた。

「アッ！ アア！ 元、元禄屋さん！」

途端、元禄屋の頬に、溢れるような笑みがうかんだ。自分を心の底から憎んでいる女が遂に、自分の名を呼んでくれたのである。満面に笑みをうかべ直した元禄屋。

「よしよし、心配いらぬ。思うように声をたてればよい。遠慮無用」

その声も耳に入る余地さえなく、雅子は、全身の血が逆しまに流れるような錯乱の中に叩きこまれた。それは、怒濤にもてあそばれる沈没寸前の小舟にも似ていた。

(ひと思いに、溺れてしまえば……)

雅子はそう思いながら、それでも耐えた。

屈服はすまいと、はかない努力を続けた。

「ウッ！ ウウ……」

その努力を嘲笑うが如く、激しく責めたてる六本の攻め手。

甘い疼痛……めくるめく稲妻が、頭の頂きまでつきあげてきて、雅子はこれ以上、抵抗しきれない自分をさとする。

「あああああ！」

嗚咽が、部屋中に進った。

「フッフッフ……泣きなよ、存分に」

元禄屋の擲擲が、ふと耳に入ったのか、雅子は、思わずその広い胸に顔を埋め、菱郡内の羽二重の襟を、しっかりと噛みしめてしまっていた。

ぐったりと、すべての筋肉の抵抗を解いてしまった鬱金色の裸身から拘束縄が除かれると、くずれるように、あれほど憎んでいた元禄屋の胸のなかに、全身をあずけた雅子を眺めながら肥田が呟く。

「女は、やはり女よのう」

鉤鼻のさき、狭い額、頬にまで汗の玉を浮かべていた領田が、肥田のさし出す懷紙で顔を拭うのに、ぼんやりと焦点の合わぬ眸を投げていた雅子であったが、瞬息の間、はじかれたように跳びあがった。

「人非人！ 外道！ これが、武士のなさることでありましょうか」

これだけ打ちのめされても、なお失わぬ氣品のこもった声であったが、その怒りも、所詮は、淫らな笑いを、さそうだけであった。

「余らが外道であれば、そなたは何じゃ」

「第一、その怒った顔が、また、格別の風情じゃ。元禄屋どの。今宵は、この我儉な姫御

前を着に、夜っぴいて飲むことにいたす。その前に、縛り直しておかねば。そして、貴子姫のそばに……」

佐渡刑部、おもむろに近寄ると、しなやかな木綿の五尋縄をしごいて、雅子の両手首を再び背後にねじりあげ、アッと云うまに一達流乳房縛り——汗にぬれる雅子の裸身を拷問用に緊縛すると、正面、床間、貴子の脚もとに、ひきすえるのであった。

陳たちが、高灯台や結び灯台をその周辺に並べたて、王が、再び、タルボタイプかダゲレオタイプか、和蘭渡りのカメラの長方形の箱の中に、首を突っ込む。

むし暑い夜であった。

大伝馬町天王祭もちかく、格子造りの箱に醬油・酢・徳利などを入れたところ、でん売りが「ところてんやあ、かんでんやあ！」と江戸の町を甲高い声をはりあげて出廻り始めるのも間もない頃であろう。

## 拷問を受けるお景

日本橋四丁目、元禄屋の本宅が徳夜叉一味の襲撃をうけ、千両箱七箇が奪われたのは、それから二日後のことであった。



僕のイメージ画集『モデル人形』室井亜砂路



警戒嚴重な公儀金銀為替御用を勤める土蔵造りの邸に侵入し、千両箱を、やすやすと奪いとるのは、ここ数年、関東中に鳴り響いた怪盗徳夜叉以外には考えられない事である。急抛、麻生六本木の別宅から呼び戻された

羅卒の鞭兵衛たちは、地団駄踏んで口惜しがり、直ちに、その探索に当たった。四日目の、たそがれ時——佃島の細民窟で、鳥追姿の女を見つけた赤狐が、好き心も手伝って後をつけたところ、

これが何と大手柄。間口一間の破れ障子の間から、小判を数枚ずつ投げ入れるのを目撃して、早速、番屋にとび込み、大親分の威光を笠に番太郎を脅して、その女を難なく番屋に連れこませ、有無を云わさず附近の若い衆の加勢を得て、縛りあげてしまったのである。老いた番太郎を使ったところ、まったく赤狐の大手柄であった。

「番太郎さん。この女、鞭兵衛親分が一寸、話してえことがあるから貰っていくぜ」

騙かられたと知って必死で縄目を切ろうとする女を駕籠に押し込んで、

「酒手は、はずむぜ。急いでくんな」

と、とぶように、麻生六本木の別宅へと運び込んだことであった。

その上、その駕籠を追ってくる人影に気付いた赤狐は、早速、青蛇と黒馬にあとを追わせ、これ、また、まんまと成功。そやつを苦もなく捕えてしまったのである。

「赤狐、まったく上々の首尾！」

鞭兵衛達にほめられた赤狐は細い目を一層細くして、

「やはり親分、お景でござんしょう」

もう、大変な喜びようであったが、それも道理。南北両町奉行所が必死で探索して隠れ

家ひとつつかめなかった徳夜叉の情婦小紫のお景を、その子分大蔵の越中松と一緒に捕えたのである。

「フッフッフ。徳夜叉のいろだけあって、こまたのきれあがった、いい女よ。あいつは、たっぷり責め甲斐があらうというもの」

上気嫌の鞭兵衛が先頭に立って、西の土蔵に、ぞろぞろと歩いていく。

春田和泉と豊香が囚えられている土蔵の隣に、いくらか小さめの棟があり、その南蛮錠を鞭兵衛が外すやいなや、中から、威勢のよい啖呵がきこえてきた。

「どこのどなたさまか知らないが、妾たちをいったいどうしようというのさ。お奉行所ならいざ知らず、どこから見ても商人の別邸。町人のぶんざいで、妾たちを縛りあげてよいという御法が、いつ出たんだい！」

なかは、土間——。二階がなく吹き抜けになつており、余程、大きな荷物でも、しまい込んでおく所らしい。

その土間に、荒筵が二枚。

鞭兵衛たちが手燭をもって行くと、立ち上がった、お景が叫んだ。

小柄な躰つきだが、均勢のとれた、いかにも、きりりっとひきしまった感じの女であり

長い睫毛の下の眸が、深山の湖のように美しかった。

「訊ねたいことがあるのさ、小紫の姐御」

ずばり、本名を呼ばれて、さあっと緊張するお景に、追討ちをかけるように、

「徳夜叉の情婦小紫のお景姐御だというね、たは、われているさ。そちらの猿轡のお哥兄さんは、相撲取り並みに肥えている所をみると四十人力の大蔵の越中松。どうでえ！ 凶星だろう。ええ」

青蛇は、壁に「大」の字に四肢を鉄鎖にながれて、身動きひとつできぬ男に云う。

越中松の油断であった。姐御のお景が、捕まったのを知り、あとを追ったまではよかったが、この別宅に何かあると睨んで、築地のそばで中の様子を窺うところを、突如、闇のなかから投縄が、首と右手に絡まり、何の！と、渾身の力でひきちぎったものの、今度は頭上から広い網がおちてきて同時に目つぶしを五つ六つと喰い、まんまと陥穽におちた。

そのまま縛りあげられて、猿轡。姐御の危機を目前にして何ひとつできない焦りが、ガチャガチャと鳴りひびく鎖の音に、こめられていた。

「騒いだ所で、千切れるような鎖じゃあない

ぜ。まあ、そこで、姐御の裸弁天に剝きあげられるさまを、よく見守っている事さ」

鞭兵衛がそう云ったとき、扉が軋んで、入ってきたのは、勘定奉行肥田若狭と元禄屋。それに、昭吉、和吉の二人の番頭であった。

元禄屋は、つかつかと、お景の前に進み、「戌夜のロザリオ、どこにある、云え！」と、高圧的な口調で尋ねた。

「チェッ、知らないねえ。ロザリオって、いったいなんなのさあ。はばかりながら、切支丹宗門なんかには、いっこう関わり合いがないものでね」

あきらかに何かを隠している口調。

「フッフッフ、ロザリオが、邪宗門に関係があると、なぜ知っておる！ 云え、徳夜叉の隠れ家はどこだ！ ロザリオはどこにある」

「知らないねえ！ また、たとえ知っていても、金輪際、お前さん方には云わないだろうねえ。フッフッフ……」

不敵にも赤狐に縄尻をとられたまま、含み笑いさえ浮かべる、お景であった。

「こいつはまた、いきのいい女狐だ。旦那、一筋縄じゃあいきまずまい。始めますぜ」

鞭兵衛の声に、元禄屋、真顔で頷き返す。

ここで、戌夜のロザリオが手に入れば、も



うすぐ京都の菊亭政房から送られてくるであろう丙夜のそれと合わせて、四つの謎が掌中に入る。元禄屋は昭吉の揃えた床几に倚ると肥田とともにこの小生意気な女を見守った。

「お景、云うほうが身のためだぜ」

「云わなきやあ、素っ裸にひんむかれて、ほれ、みな。あの天井の梁から、逆さにぶらさがって貰うことになるぜ」

「フン、この妾を哭かせようと云うのかい。

こりゃあ、面白い。こうなったら小紫のお景姐さん。お前さん方と根比べをしようじゃあないか！」

縛られながら滅法強い啖呵をとばす。

「フッフッフ……そんなせりふも、今のうち。

きつと、儂等が、哭かせてみせるぜ」

「どうともおしよ！」

ぷいっと横を向いたそのおとがいのあたり

の白さが、奇妙になまめかしかった。

「そうかい。じゃあ、まず、裸になって貰いましよ」

赤狐が、背後から云うと、いったん縄をとき、解かれた瞬間、ばい、雷の珊瑚玉の簪に手をやるのを、

「おとととと、いけねえよう」

黒馬が、左手首をがっちりと押え、

「じたばたしねえこと。ここから逃げ出すことは叶わねえ。お前さんが逃げだせば、この越中松の命は、即座にねえものと思つて頂きやしよう」

瞬間お景が、じいーと唇を噛みしめる。

「先ず、手甲、脚胖からいきやしよう」

白豚が、紺茶堅縞の手甲を脱がせ、同時に斑猿が猿臂をのばして、表紺裏は浅黄木綿の脚胖の紐をとき、すいっとはがし取る。現われた怪は、健康な肌色に輝いていた。

「お次は、黄八丈の帯と唐棧の長着」

黒馬の口上とともに赤狐が、前から抱きつくようにして帯をとき、くるくると、せわしげに三廻りさせて、投げ捨てると、長着の襟に手をかけて、むずっと、荒々しく双肌を、胸のあたりまで押しひろげる。

「あいよ」

黒馬と斑猿が左右の手の肘をまげて、無理矢理に袖を脱がせると、華やかな縞模様、音もなく荒庭の上にこぼれ散る。

「フッフッフ、鳥追女は、木綿以外は御法度だ。そこで、表は、唐棧縞を着こなしておいでなさるが、一皮、剥けばやはり友禅縮緬。親分、やはり、女ですぜ、この阿魔も」

黒馬が、長襦袢の紐に手をかけるために、

右手を離した、その刹那！

お景の手には黒馬の脇差が握られていた。目にもとまらぬ早業と云えよう。

「さあ、くるならおいで。八重垣流小太刀の舞いを！」

お景、眦をはりさけるほど見開いて、男たちを睨んだが、紅梅色の地に菊の花をあしらった総絞りの長襦袢は、いかにもなまめかし、めくれあがった裾からのぞく膝やふくらはぎの白さが、仇っぽい色気を漂わせる。

そんなお景の、脇差を正眼に構えた姿に、ニヤリと笑いを含みながら、

「いいのかねえ。そんな事を云って」

元禄屋が、顎で示した方角には、乾分の黒馬と赤狐が、身動きひとつできない越中松の両脇腹に、匕首をつきつけている。

(アッ！ しまった！)

ともかくも、脇差を奪うことに精一杯で、越中松のそばに走りよらなかったことを悔いたが、もうおそい。

「脇差を捨てるこった。女は、女らしくなさき、どうともおしよと云ったばかりじゃあねえのかい」

「捨てる！ 捨てぬと！」

その時、

「ウッ！ ウー！」

という呻きを越中松が洩らした。赤狐が、  
ヒ首のさきを脇腹につきさしたのだろう、血  
が、さあっと鈍い銀色の刃を赤く染める。

「や、やめてよう！」

二歩、三歩、その方角にすすんだお景は、  
恨めしように、男たちを睨んだが、

「よおく、わかったよ。もう、じたばたしな  
い。さあ、今度こそ、どうともおしよ。その  
代り、越中松の手当てを頼みますよ」

脇差が、土間にカチリと音をたてて落ち、  
白豚たちが鼠襦子の衿に手をかけていった。

まるで茹卵の薄皮でもむくように、一気に長  
襦袢が宙に舞うと、あとは、稀頭の純白の肌  
襦袢と、鳩羽紫色の湯文字が一枚。

「白状する方がいいんじゃないのかい」

白豚が、親切ごかしに、お景の耳元で囁い  
たが、お景は、じいっと眸を閉ざしたまま応  
えはしなかった。

「フッフッ、強情はるのも今のうち！」

白豚と青蛇が、同時に、左右の襟に手をか  
けて、さあっと、勢いよく肌襦袢を、むしり  
取る。瞬間――

お景も女――むき出された胸を両腕で覆う  
と、片膝立てて蹲り大きく肩で呼吸する。

裸軀燭に映し出されたその裸身は、小柄で  
愛くるしく見えた。生身の肌が、薄桃色に輝  
き、贅肉ひとつない、ひきしまった肩から腰  
へかけての風情は、小菊の花の懸崖を思わせ  
た。その背中に手をやり、

「立ちなよ、小紫のお景姐御」

青蛇が声をかけると、ピクッと裸身を慄わ  
せて、うわ眼づかいに、お景は、怨みの眼差  
しで、青蛇の顔を見上げる。

「おっとっとと、その顔。その怨めしそうな  
顔がまた、こたえられねえや。さあ、手を回  
しな。いつまでおっぱいを隠してやがる」

白い肩におおいかがさるようにしながら青  
蛇が乳房を覆っている、お景の右手を取る。

「フン、いい気なものさね。たかが、女一匹  
を、こんなお歴々があつかいかねて、素っ裸  
にした上で、縛りあげるといふんだからね。  
さあ、縛ってごらん！ ほら、こうして、し  
っかりと、両手を後ろに回してあげたじゃあ  
ないか！」

観念のは、ぞをかためたのかお景は、きつと  
なると自分で、両手を背後で交差させる。

「も、もそっと上！ 深々と交差させな。も  
っと、高くさ！ お前さんの腕なら面白いほ  
ど上にあがりそうじゃあねえか」

青蛇は、青縄を手にとると、肘よりも高く  
「X」型に交わった中心に、一筋、キリリッ  
と巻きつけると、ぐぐぐと、ひきしぼって  
いく。

「い、いた！ 痛いじゃあないかよう！ バ  
カだねえ、女を扱うときにゃあ、も少し、優  
しくするものさ」

お景は、遂に縛りあげられていく我が身を  
考えて、口惜しさで一杯になる。乾分の大蔵  
越中松さえ捕まっていなければ、ここを逃げ  
出すことも不可能とは思われない。

(ち、畜生！……)

抵抗ひとつできないまま縛られるお景の無  
念さが、わかるのであろう、越中松が狂乱し  
たように四肢をよじり、そのたびに鎖が、が  
ちががちと鳴った。

「お景、一筋縄じゃあいきそうもねえお前さ  
んだ。一通り、拷問道具を廻って貰おうじゃ  
あねえか。もし、白状する気になったら遠慮  
はいらねえ！ すぐ申し上げることさ」

羅卒の鞭兵衛が口をはさむと、黒馬が、土  
間の隅から三角木馬を運び出し、

「よいこらしよ！」

懸声とともに、三、四人がかりで、お景を  
その上に、またがらせる。



「い！ いた！」

鋭く尖った木馬の背梁に、お景は思わず腰を振ったが、振ったところでどうなるものでもなく、ますます加わる、じいーんとする痛さに、お景の美しい顔が、ゆがんだ。

青蛇は、心地よさそうにその顔を横目づかに眺めながら、天井の梁からおりた滑車に後手の縄尻を吊り上げて、木馬からずりおちないようにお景を固定して、

「まだ、小半刻はかかりましょうぜ、親分。」

これを肴に一杯やりてえもので、

昭吉が、早速、酒を取りに、出て行った。

「フッフッフ、このばい、鬘と云うやつが、またこたえられねえ粋なもんで」

青蛇が、お景の、ふとももまでめくれあがった湯文字をさらに乱しながら、蛇のような眼差しで見上げたが、もう、羞恥よりも、苦痛を耐えるのに必死のお景であった。

上半身は丹念に菱縄縛りにされ、くりくりとした形のよい乳房が、青色の縄目から突き出して反りあがり、その上に、いきいきとした茱萸の実のような乳首が光っている。

苦痛にゆがむ額に、三、四本のおくれ毛がかかっているのも、凄愴な顔を一層、際立たせていた。

しかも、青蛇の云ったように、ばい、鬘であった。ばい、鬘とは、ばいとよばれ日本に広く分布する二、三寸にもなろうという貝の一種で、髪型がその貝の殻に似ている所からこう呼ばれる。ばい、鬘とは云うものの丸鬘、島田鬘、結綿、松葉返し、天神、兵庫、深川などのように、いわゆる鬘とよばれる中央の高い部分も、たばも両鬘もない。洗い髪をくるくると巻きあげて一本の簪でとめただけの、鉄火風の、つまり櫛巻、きに似た髪型で、喜多川歌麿の「浮気之相」のなかに、これがある。

一本の簪だけで、とめてあり、しかも、崩れそうで崩れない——陥落しそうで陥落しないまったくもって男心をそそりたてるような髪型の型であった。

そのばい、鬘を、前や後に傾けながら、お景が悶えるのを、男たちは、昭吉の運んできた徳利や折敷の肴をつつきながら、眺めて楽しみ始める。どうやら、夜っぴいて責める氣でいるらしい。

「肥田様。この女のどこに徳夜叉が惚れたと思われまする」

「さて、小柄で、きりりっとひきしまったところかな。それとも、胴が短くて足がすうりと牝鹿のように発達しておるところか」

「まったく。ちょっと得難い均斉のとれた身体つきでござりまするな。しかし、女は表面だけではわからぬもの。多分……」

と元禄屋は、

「青蛇、どうじゃな、例の方は」

「旦那。そうおっしゃいまして……」

いいながらも青蛇は、裸蠟燭を、右の下半身ちかくに持っていくと、

「おや。これは、また親分。奇妙な所に、黒子がひとつ」

「どれどれ！」

肥田を始め一同が、たち上がるなかで、

「御覧なせい。ほれ丁度、太腿の付根」

純白の内腿が、腰部に溶けこもうとするあたりに、ひとつ、ぽつんと小さい針でさしたほどの黒子がある。

「もっと、よく見えるように」

肥田が、柔肌を摘みあげると、その根かたが、大きく鳥肌だち、黒子が蒼い静脈のうえに浮きあがる。

「フッフッフ……この女。菊のようじゃ」

「菊とは、また……」

「いかにも、この匂いは、菊の園に、はいり込んだにも似た香りじゃと思わぬか」

「まっこと！ 菊の香りか……フッフッフ。」

白菊・黄菊でなくて黒い菊と云う所ですな」  
十人あまりの男が、自分の下肢に集まってくるのを気配で察したのであろう、

「な、なにをするんだよう！ いったい、このまま、こ、こんな木馬の上に何時まではおっておこうと云うのだよう！ ち、ちく、畜生！ 外道！ 痛ッ！」

自分の腹から腰のあたりに、群がっている糸鬚いとひげやら野郎鬚、辰松風や本多風、さらには大銀杏鬚の男たちを見おろして、思わず両足を振ってお景は絶叫したが、そのはずみで、木馬の背梁がさらに喰い込んで、激しく奥歯を噛みならず。

「フッフッ……いつまでって、それは、姐御の決めることで。白状しさえすれば、いつでも、おろしてさしあげまさあな」

「だ、だ、だれが！ だれが云うものかい！ 越中松！ 頑張るのよお！ う、うっ！ うう……」

男たちが太腿に手をかけ、面白半分に揺すったものだから、お景の口からは、人間のものとは思われない呻きが断続してあがり、額に油汗をにじませ、白木の弓のように上半身を折り曲げる。男たちが、更に面白がって太腿を揺する。跳ねあがる上半身。喰い込む木

馬の背梁……欲声をあげて、太腿を揺する男達。この繰り返しを、止めたのは元禄屋であつた。

「止めろ！ せっかくの絶品女を、だいなしにしちゃあ、もってえねえ。あとの楽しみがなくならあ！」

といいながらも、（しぶとい阿魔め！）といまいましそうな顔で、白豚たちに抱きおろされて、荒筵の上でぐったりとなっているお景の乳房を、草履で踏みつけると、

「抱かせな、石をよ！」

冷たく云い、盃の冷えた酒を、ぐいっと、あおった。

元禄屋にしてみれば、どうしてもこのお景の口から戌夜のロザリオのありかを探り出したかった。せめて、徳夜叉の隠れ家だけでも白状させたいのである。

「そっちの男も、いっしょに責めな」

「合点！」

とは云ったものの空返辞。誰一人、越中松の方に行く者はなく、もうほんの、申し訳ていどに腰のまわりに鳩羽紫の湯文字がまつわりついているだけのお景の周囲に群がっている。もう一度催促されて、黒馬と白豚が、

「へえ、親分、やりまさあな」と、しぶしぶ

に越中松の両足の鎖を外して、かわりに縄で一つに縛りあげ、その端を滑車につなぐと、左右の手に頑丈な手鎖をかける。

「お前さんは、逆さに吊りあげてやるさ。よく眺めることさね、姐御の、すっ裸をよ。滅多やたらに拝める図じゃあねえぜ」

ぎしぎしと滑車が鳴って、越中松の巨体がまるで、豚のように逆さに、ぶら下がる。

その間――

青蛇たちの手で土間には、十露盤そろばん台が運び出され、長さ三尺、幅一尺、厚さ一寸の伊豆石が用意される。伝馬町の強訊場などでは厚さが三寸あり一枚で十三貫はあると云う。どうやら、ここ元禄屋の伊豆石は、その三分の一の重さらしい。三分の一の云っても四貫は超える。それを、ぎざぎざの十露盤台に正座させられたお景のむき出しの両膝の上に

「よっこらしょ！」

と白豚が、乗せたから、たまらない。

ただ坐るだけで、向う臍へそが、きりきりするほどの痛さである。そこへ、四貫もの重さがあるのである。

「キャアッ！」

押えようとしても押えきれない悲鳴があがり、朱い唇をまげ、奥歯をかみしめてお景は



## イメージギャラリー『シーソーあそび?』小川茂正



腰を右、左とゆする。

「もう一枚!」

元禄屋の冷たい声。

「よっこらしょ!」

という白豚の間の抜けた掛け声。

ガキッ、ガキッと、石と石とが重なり合っ

て、今度は、

「ウッ! ヒー! キッ! ヒイイ……」

呻きとともに、後ろに倒れようとする上半

身を斑猿が支えると、

「お景姐御。しっかりしなせえよう、まだ二

枚ですぜ」

極度の緊張で、硬くなった乳房を振り、そ

のさきの乳首に爪をたてたが、もう、お景は

そんなことには反応を示さず、悪寒にでも取

りつかれたように全身を痙攣させて、激痛と

たたかっていた。それをよいことのように青

蛇が、柔らかい腹と伊豆石の間の隙間に猿臂

を伸ばすと、何やらニタニタ笑いつける。

「俺もやるぜ!」

負けじと黒馬。

「こいつ! まだ手助けは、いらねえよ。俺

に任せなつてば。フッフッ」

「ヘッヘッヘッ……」

顔見合わせて笑っている。

裸蠟燭に照らし出された土蔵の中の荒筵の

上、石抱きの強詛をうける女の左右から手を

のぼそうとする二人のやくざと、それを淫ら

な笑いで見つめている七、八人の男たちの立

ち姿は、この世のものとも思われぬ陰惨な

雰囲気、むんむんと漂わせていた。

「これだけやられて白状しねえとは、徳夜叉

も、よくよく、この女を仕込んだものよ」

やがて、元禄屋は、業をにやしたように、

石を膝からおろさせ、失神寸前のお景の頭か

ら水をぶちかけさせると、

「短兵急には行かぬようじゃ。その男も降ろ

してやれ」

と命じて、肥田に、

「御覧のとおりのおし、ぶとい女で、いまい少し、ときをおきまして」

「ウーム。海老責めにでもするか」

「まさしく」

元禄屋は、逆さ吊りから解放されて、再び「大」の字に、壁にはりつけられた越中松をチラリと見やったが、

「鞭兵衛、この男を逃がすなよ。昭吉！ お景を、しよっぱいて行け！」

と命じ、昭吉と和吉に左右から抱きかかえられるような恰好で、土蔵をでるお景のあとから、礎石を踏み、中庭を横切り、邸に入ると、奥まった部屋に肥田を案内し、

「酒肴じゃ……じゃがその前に、その女を海老縛りにせい」

「承知しやした」

あとを追ってきた青蛇が、もう、ぐったりとなつて反抗の気配ひとつ示さないお景の裸身を、高灯台の光のなかで、あらためて縛りあげていく。

「これも、もう、邪魔のようで、ヘイ」

自問自答した青蛇は、鳩羽紫の湯文字の紐をとくと無造作に投げすて、燦めくようなお

景の背中にまたがるようにして、海老責めのかたち、すなわち胡座を組ませた両足首をひとつに縛りあげ、その縄を真白い頸に連結して、一寸刻みにしめあげていく。

コトンとかるい音をたてて、珊瑚玉の簪が畳の上におち、瞬間、お景の黒髪が、パアッと四周に割れた。その額をかきあげてやりながら、青蛇は、両足と白い顎とが、あと二寸くらいで触れ合いそうなところで、止め縄をした。

「ヘッヘッ……このくらいにしておきませぬと、アッと云う間に気絶しまさあ」

両足と顎との距離のことであつた。くつつけてしまうと、まさしく、その場で、意識を失うかも知れないほどの強烈な緊縛である。

「まあ、これくらいで、小半刻でしょう」

乱れた黒髪的一端を、朱い唇で噛みしめながら、苦しみに耐えようとの堅い決意を、細い肩や長い睫毛にまで示しているお景の姿は凄艶ななまめかしさを漂わせているのであつた。

いままでお景たちが責められていた隣の土蔵では、丁夜のロザリオの持主であつた春田和泉夫婦が、羅卒の鞭兵衛とその子分、青蛇の青蛇たち、昭吉と和吉、豊香に執念深く云いより、そのたびに振られた浮世絵師鳥尾芳年たちに、罵られつづけたのであつた。

鳥尾が、責め場を絵にかきたいと云い出して、豊香が夫の和泉を救うために、三十五才の妖艶な女体の総てを曝け出し、木馬責め、釣り責め、石抱き、逆さ吊り、水責め、さらには大がかりにも、礎柱まで持ち出しての火焙りや磔刑と、面白さ半分に鞭兵衛一家が、夫の和泉の見ている前で、妻の豊香を責め罵り、小用まで、衆目のなかでさせたあと、鞭兵衛たちは、日本橋の本宅にもどり、徳夜叉の情婦であるお景を捕え、再び、ここ別宅にやってきたのであつた。

この間、夫とは別々に監禁されていた豊香であつたが、今夜、ついさきほど、鳥尾が土蔵のなかに入ってきて、

「豊香、お客様だよ。さあ、ご挨拶なさい」

と、傍でうすい上唇を、さらにうすく、あのかないのかわからないような下唇で、さかんに舐めている男を指さした。

骨も肉も、ばらばらになるほど責め抜かれ

## 夫婦責め

三日前――



挙句の果てが、(豊香!)と呼び捨てにまでされて、

「どうにでもして頂戴な……早く」

と、つい、男たちに、口走らされた豊香ではあったが、布ひとつ許されていない裸身をまじまじと、見つめられと、いまさらのように屈辱の思いが、よみがえり、

「出て行って! もうこれ以上、お責めにならないで!」

両手で乳房を抱いて壁の方に身を後退させるのであった。

「それそれ、隠したって、隠しおおせる乳房じゃあなからう。見なさい、両手から、こぼれて、乳首が見えてるじゃあないか」

つかかかと近寄った芳年は、ふっくらとした二の腕を捕え、

「遠慮はいりませんよ。種彦さん。この女はもう、儂等の思いのまま。早く縛って見なさいよ。あれほど縛りたがっていたじゃあありませんか」

「そりゃあ、そうですが……何かこう奇妙なものですか。他人の妻を、思う通り縛りあげる……歌舞伎のなかじゃあ、ちよいちよいそんな場面を書くのだが、こう、実際にやる」となる」と

「何を尻ごみなさってる。市村座の演し物・鎖格子女之拷問は、大変な評判だそうで」

「まあ、まああってところでしょう」

豊香は、始めてみる男であった。

「さ、手助けしてあげましょう」

種彦は、尻ごみしたわりには、慣れた手付きで、木綿縄をとりあげると、芳年が、背中であぐらで持っている搦きたての餅のように白い手首に、きり、きりっと二巻き。ついで左の二の腕に喰い込ませて、前に回すために、上半身を、豊香の背に押しあてる。と、いやがおうでも、しっかりと膝を合わせて正座している豊かな太腿が見える。さらに鼻先の素肌が、むうっとする爛熟した女の匂いを発散させている。思わず、ゴクツと生唾をのみ込み、水蜜桃の実の三つぶんもありそうな乳房の下から、同じようにおおきな右乳房の下へと縄をとおして、ぐいっとひきしぼり、右の二の腕に一巻きして、手首でとめる。

「上にも懸けなされ。その方が美しい」

芳年の指示を待つまでもなく、種彦は、同じ動作をくり返して縄をかけたが、結城袖をとおしてその男の体温を感じ、その心中の昂ぶりを豊香は背や脇腹の肌で、敏感に察していた。

(ああ……妾って、とうとう!)

もう抵抗しても無駄だと、芳年の手の動くままに背後に手を回し、縛られるに任せているのであったが、始めて、縛られたときに較べて、はるかに、嫌悪感がなくなっている。鳥肌立ち、死にたい! とさえ思ったのは、つい、三日前の夜なのである。

(どうして、死にもの狂いで抵抗しようとならないのかしら、妾って。女は一度、肌を見られたり汚されたりした男には、手向かえないと云うけど……妾としたことが!)

思わず全身に力をこめて、縄から逃がれようとしたが、この場になって無理なことばかりだったこと。それでも、肩をあげ、腕に力をこめて、急に反抗の気配を示し始めた豊香に、

「どうしたい、豊香。フッフッフ、心配はいらねえ。取ってつけたような反抗は、やめにしな。フッフッフ、女は誰でも、好きなものよ。お前だけじゃあねえ。虫も殺さねえ面をしている公卿の姫御前も同じことさ。さあ、種彦先生に連れられていきな。どなたか、もう一人、待ちくたびれておられるわさ。それに、この間のように、あんたの大事な旦那様にも、そのうち、逢わせてあげるさ」

（夫の前でだけは許してえ！）

何度、叫ぼうとしたかわからなかったが、言葉にはならなかった。訴えて、聞き入れてくれるような男たちでないことは骨身にしみて知らされている。あれだけ絶叫し泣き叫んで懇願したのに、結局は、男たちの嗜虐心を満足させただけで、とうとう、小用まで、させられてしまったではないか。（あなた！妾は一体、どうすればいいのよう）

渡り廊下を宏壮な内庭の一隅にある瀟洒な茶室とも思われる離れに、ひきたてられていきながら豊香は、心の中で絶叫する。

が——、その絶叫のおくに、不可解きわまる本能の疼きが、翳をおとしていることに豊香自身、まだ気付いてはいなかった。

離れでは利倉屋が、何重にも猿轡をかまされて、がんにがらめに縛りあげられている和泉のそばで、早くも、ちびりちびりと盃を傾けていた。

六畳ほどの広さ。三方が壁。炉もきられていなければ、茶道具もなく、それどころか、鳥の羽、こけし状の奇妙な品々、各種の縄に五尺六尺位の猛宗竹などが、散乱している。日本橋本邸の緊縛人形と同じように、元禄屋重右衛門が金にあかせて集めた女泣かせの珍

品であろう。

「挨拶しな！ 利倉屋さんに」

にじり口で、芳年に云われた豊香は、たたきの上に腰をかがめると、襖から顔だけだし始めてみる利倉屋に、頭を下げる。

（もう云われたままにするほかはない、夫はまだ、ここにはいないはずだわ）

いままで、自分を最も惨めな恰好にしておいてから、夫をひき出してきた彼等の手口から、そう判断した豊香は、

「初めてお目にかかります。妾、公儀御用の櫛師春田和泉の家内で豊香と申します。どうか、よろしく、お願いいたします……」

芳年に教えこまれたとおりの、せりふを口にした。

「フッフッフ、僕は利倉屋庄右衛門」

利倉屋は、必死で膝を合わせて蹲っている豊香の裸身を、満足そうに見おろしてのち、

「その、どうかよろしくとは、どう云うこと

じゃな、御内儀さん。教えてくれませぬか」

豊香は、下唇を噛みしめていたが、

「わ、わたくしの身体を、どうにでもなさって下さいませ」

「どうにでもとは」

「ご、ご存分に……お賜り、下さいませ。妾

どのようなことでも……」

「すると仰言る。ほう、なるほどのう。じゃが、あなたは人妻ですぞ。人妻が、他人の男の自由になる。あなたはよかろうが、僕はとうなる。姦婦姦夫は二つに合わせて四つ斬りと定まっておる」

「いいえ、そのようなことには……妾が、どうしても賜られたいのでござりまする。その上に……」

大きな鉛の塊をのみこむように、生唾をのみ込んだ豊香は、遂に、

「夫、夫の和泉も、それを許してくれたのでござりまする。夫が、妾に、行けと申すのでござりまする」

「まことじゃな」

「まことでござりまする」

「それでは誓文を。ほれ、これじゃ」

利倉屋は、懷中から書面を取り出すと、

「ここには、こう書いてある。

妾儀、貴方さま方にどのようなになされましようとも、いいますせぬ。また後悔もいたさず、お怨みにも存じませぬ。どうか妾を存分にお抱きになり拷問なされて下さりませ。妾が、それを望んでいるのでござりまする。夫の和泉もそれを許



しここに連署してお誓い申し上げます。  
宛名は、僕等。そして、ここにあなたがた  
夫婦が署名することになっておる。よいな」  
我知らず深く頷いてしまった豊香である。

## 毎月確実に入手されるために 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送32円)
三月分	3冊	一一〇〇円(送共)
半年分	6冊	二二〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号  
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、  
或は地方のため、入手することが出来ないとか  
かいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い  
目に、手に入れたらいいという御要望をよく承り  
ます。そういった方々は、どうぞ是非月極御  
予約下さるようお願い致します。毎月製本完  
成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのには  
大阪市住吉局私書箱第四十一号出版株式会  
社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお  
払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指  
定下さい。

○六月分以上お申込みの節は、送料、包装  
代などは、総べて当社にて負担致します。但  
し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分  
三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、「現金書留、小為  
替、定額小為替、(切手代用は一割増) 振替

「よし。さすれば安心じゃ。さあ、もう一度  
その口から、どうされたいか云うてみい」

耳元で種彦が囁くとおりに、

「妾は、利倉屋さまに、この肌、この軀のす

(大阪四二七八三番)のいづれかをご利用  
願います。現金の場合、普通郵便封入は違法  
ですから、必ず「現金書留」にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印  
刷完成と同時に、外部から見えないように厳  
重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料  
三十二円をなるべく毎月十五日頃までに御送  
金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者  
の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号  
から何カ月分送れとお書き願います。第一回  
分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何  
月号からとお書きにならないときは、重複や  
欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましましたときは、封筒の上に  
△本号にて前金切りの判を捺印致しますから  
継続お払込み願います。継続のお払込みでも  
何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方  
は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局  
留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受  
取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構  
です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。さ  
ば、当方では御指定の局留としてお送りいた  
しますから数日後その局で御受領願います。  
局での留置期間は十日間でその間にお受取り  
にならないときは、発送人に返戻されます。

みずみまで改めていただき、どのようにでも  
賜り、辱かしめて頂きます……」

夫がいれば当然、躊躇したであろう、これ  
らの言葉が案外、すらすらと口から、でた。

「フッフッフ、よからう……では」

襖が開かれ、縄尻が芳年の手でさばかれ、  
敷居をまたいで、部屋に入った瞬間、

「アッ！」

豊香は、息をのんだ。糞虫のように縄で縛  
りあげられた夫の和泉が、そこに居た。

「あ、ああ……ああ！」

全身を白く巨きな棒のように硬直させて豊  
香は、呻いた。

(今までの言葉を夫が、聞いていた！)

「あ、あなたあ！」

縄尻を持つ芳年の手を振りきって、とび出  
した豊香は、夫の軀におおいかぶさる。

「あ、あなたあ……ゆ、許してえ！」

あとは言葉にならなかつた。後悔とも屈辱  
とも苦悶ともつかぬ、灼熱した焔に焼きつく

される衝撃のなかで、ただ夫に、必死で裸身  
を、すりつけるだけである。

「ど、どうしてこんなことに。いったい、ど  
うして、このようなことに！」

緊縛された不自由な軀で身悶える豊香を慰

めるすべは、和泉にはない。ただ、猿轡の上の、はり裂けるように見開かれた眼だけが、ギラギラと憎悪に狂う。

「フッフッフ……さあ、御内儀さん。約束どおり、賜らせて貰いましょうかな」

利倉屋は、ニヤリッと笑うと、

「芳年さん、種彦先生。このままじゃあ何かと不便。縛り直しましょう」

縄尻を強くひっぱられた豊香は、ぶざまにも仰向けに、足を宙に泳がせて、転がった。

「ウウッ……痛、痛い！」

後手が、折れるように痛む。

「痛くないようにしてやるさ」

上半身を抱きおこして利倉屋が、縄を解きにかかると。

「反抗するかも知れませぬぞ。しっかりと押えて！」

種彦と芳年が、右左から腕をしっかりと握るなかで、木綿縄が畳におちる。

「右手と右足首から、はれ、急いで！」

狂ったように、力の限り抵抗する右手に二巻きした細目の縄を、ぐいっとしぼって右足首にまきつける。左手首と左足首がひとつにされて、くるくると縛り合わされる。

「いや、いや、いやよう！ あ、あああ」

悲鳴のなかで、豊香の爛熟した女体は、丁度「M」の形に固定されたのであった。

「どうぞ、芳年さん。貴方を振って振って振り抜いた女じゃそうな。一番手は、貴方に譲りましょうぞ。ただし、元禄屋さんのきついお云いつけだけは、最後まで忘れてはなりませんぞ。ご承知でしょうな」

頷いた芳年は、竜文の単の裾をめくりあげ白羽二重の下着もあらわに、ゆっくりと豊香の、豊満な乳房に顔を寄せた。

「アウ、アア……アッ！」

心で拒否しながら三十五歳の爛熟した女の肉体は、いつしか、微妙な変化を見せ、

「あ、あなたあ！ あなたっ！」

夫をよびながら、強く鋭い反抗が、次第に柔らかく、ゆるやかな蠢きにかわっていくのを、止めることはできなかった。

「ウッ……あ、あなた。ウッ！」

朱い唇が開き、鼻孔までも拡げられて、自ら暴虐を求めての蠢きに変わろうとする、その時！

「さあ、芳年さん！ 今度は儂じゃ！」

あわや、元禄屋の禁が破られるとみたか、利倉屋が芳年を押しつけ、不満気な芳年のふくれっ面を尻目に、

「フッフッフ。儂はちよいと変わった方法で可愛がってやるからな。驚くなよ、豊香」

ニタツと利倉屋が笑う！ 刹那！

「キイツ！ キアッ！」

肺腑からしぼり出すような呻きと共に豊香が、「M」型の四肢を狂おしいばかりに振りたてる。それを、がっきと、押え込み、

「フッフッフ……溜飲がさがるってのは、このことだぜ」

ニンマリと笑ってたち上がった利倉屋の着物の裾がぐっしりと濡れ、豊香の太腿から真新しい備後畳は、しとどに汚水を吸って泡立っていた。

「ワッハッハッハ……ガキの頃、以来じゃわい。ハッハッハ」

利倉屋は、腹をゆすって笑うと、大盃に酒を満たして一息に飲みほし、不審そうな芳年と種彦の視線に気付くと、ニヤツとした。

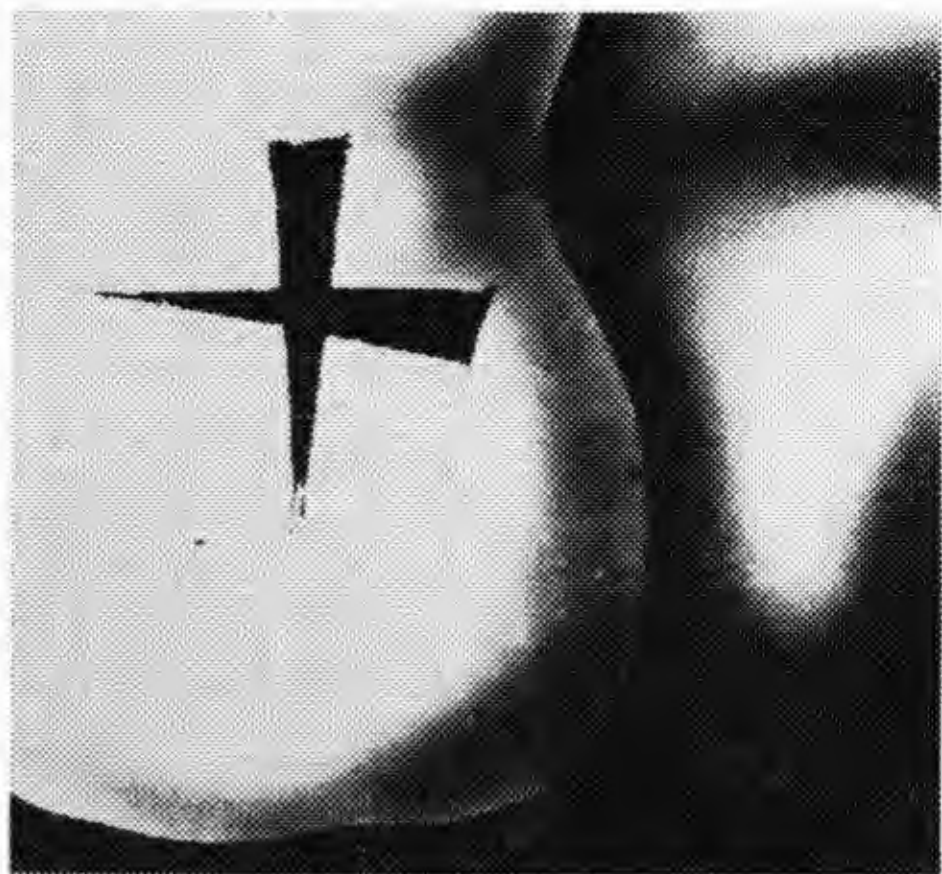
「儂はのう、おふた方。ガキの頃に大病をしましたな。厩にも行けぬ何日かがありましたのじゃ。その時に、おふくろが、小便は、これにしろと酒徳利を……。フッフッフ、いや思い出させてくれましたわい。ワッハッハ」

豊香は、うわ言のように夫の名を呼びつづけるだけであった。

——（未完）——



幼稚園ぐらいの年令の頃、襖を閉めきった部屋で、同じ年ぐらいの男の子と、いわゆる「お医者さんごっこ」をやっていました。どっちかがどっちかのお尻に、マッチの軸でイタズラして遊んで（今思い出しても、お医者さんゴッコは、どきどきするような、胸がつかまるような「悪」めいた楽しい遊びでした）いた時、突然、閉めてあった襖が開かれて母が覗きこみました。私は「開けてはいけない



懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

## 私のビタ・セクシュアリス

——ア—ヌス願望の半生——

杉 本 弘 志

と云ってあったのに」と、火がついたように泣きわめいて怒った記憶があります。

もちろん、直ちに「お医者さんゴッコ」はとり止めになりましたが、でも何故あのようには私は怒ったのだろうか？ と思います。恥ずかしさの裏返し？ 約束を破られた怒り？ それもあるでしょうが、あんな幼い子供の頃から、人間は自分のセックスの秘密を、人に知られたり見られたりしたくないというよう

な、本能的な何かがあるのではないだろうかという気がします。あるいはまた、セックスは秘めやかな中でこそ、ユニーク（子供は子供心にセックスの欲望を自分だけの秘密とと思っています）——云い換えればヘンタイ——であってこそ快楽である、とも云えるのではないのでしょうか。とにかくこれが、私の最初の性の思い出です。

関連してのことに、時々私の家に、五つ上

の兄の同級であった女の子が泊る（近所の子で、親同士も親しかったから）ことがありましたが、その夜、私は妙に胸がワクワクして嬉しかったのを覚えています。それはたしかに、単にお客があるという嬉しさではなく、性的対象となる異性が一つ屋根の下に寝るという、セクシャルな喜びであったと、今思い返して確認できます。

一年生の時に、近所の女の子（同級生）と一緒に帰り道での事です。その女の子はクラス一番の可愛い子で、その子のお母さんがまた、ベッティさんみたいな明るい顔の美人でした。（こう書けば、その頃すでに美人不美人を感じ分けていたことになるが）その女の子が急にウンコがしたいと云いだして、道ばたにしゃがみこんだのです。私は、ナイトよろしく四囲を見張りながら、その様子をじっと見ていました。今でも生ま生ましく思い出せますが、女の子はその時おなかをこわしていたらしく、地面に拡がるようなやわらかい便でした。人っこ一人いない場所での、その子と私だけが知っているできごと。私は秘密の快感をおぼえました。

私は本の好きな子供でした。よくひとりで読みふけり、いろいろのことを空想したもの

でしたが、今考えて、決して性的な内容のものではなく、とくにサディスティックなものでもありません。子供向きの「巖窟王」とか「鉄火面」「小公子」などばかり（母の婦人雑誌の盗み読みはしたが）だったのですが、不思議なことに、空想することは、あまりおだやかとは云えないことばかりでした。

私はその空想を、本の余白とか白い紙に絵に描いて表現したものでしたが、おかつぱの女の子がお尻のところだけ着衣をはがれ、そのお尻が剣で突かれて血をふき出しているところや、四つんばいにされた首に鎖をつながれ、地面を引きずり廻されているといったような絵を、何枚も何枚も、丹念に描いていたことを思い出します。誰に教わったわけでもないのに、ほんとうに不思議な思いです。

小学校の三、四年頃だったと思いますが、銀杏の落葉を集めて押し葉にするのが流行ったことがありましたが、私はその一枚の葉の柄の部分を、お尻に挟んで寝ることが楽しかった思い出があります。そして翌朝、そっととり出して匂いを嗅いだものですが、それがなんとも云えぬ秘密の快楽でした。

小学校五、六年頃、帰り道の原っぱで、腕白な同級生の一人が、学校でも評判だったグ

ラマラスで魅力的な女の子を、膝の下に組み敷いていじめているのを見ましたが、強烈なショックを受け、いじめている男の子を羨ましく思ったものでした。その女の子は、学芸会などで美しい衣裳の短いスカートを穿き、きれいな足をはね上げ、ダンス（特別に習ったバレエ？）などを踊ってみせる子でした。その時、男は誰でも美しい女をいじめてみたい欲望があるのだと、何か安心したような気持ちになったことを思い出します。

中学時代の私は、軍隊関係の男ばかりの寮制度の学校で過ごしたので、性的な思い出しささかホモめいてきます。事実、「稚児さん」という同性愛の風潮は、寮内でも公然の秘密でした。それは主として上級生が下級生の美少年を可愛がる（といっても極めてプラトニックなもので、肉体的な接触は全然なかったと思います）というもので、私も下級生時代に、上級生からそんな眼でみられたことがあります。私は上級生になっても下級生には眼が移らず、同級の美少年、TとOとMの三人に想いを寄せ、一緒に入浴する時などは、彼等の臀部を、後ろから眺めるだけで、ただならぬ気持になったものでした。また自由時間に「解剖遊び」のようなことが流行っ



ていましたが、その時私は率先して、犠牲者に私の好きな三人の内の誰かを槍玉にあげるべく提唱し皆で彼らを縛り上げたものです。

思えばそれが私の縛り経験の最初ですが、うつ伏せにして手足を一つに縛り上げる海老縛りでした。あと何をしたのか覚えていませんが、着衣を剥ぐようなことはせず、ただ擦る程度だったようです。それでも縛られたTやOの、真赤に上気した顔は思い出せますし、その場には、たしかに性的な雰囲気は充満していたと思います。

そして終戦です。ストリップ・ショウの出現。二十才前後だった私が、おぼろげに遊廓がどういうものかを知り、入りたくてうろろした時代です。ストリップといっても大きな

【伝言板】 ○分譲品録目録は作成が大交遅延しておりますが出来次第発送申し上げます故、今暫くお待ち下さるようお願いいたします。尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、振替（切手代用は一割増）にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

な飾りをぶらさげて、自由の女神のように凝然とつつ立っているだけと云っていいようなものでしたが、照明に輝く裸形の女肌、初めて見る若い女のおへそに、私は激しい衝撃を受けました。また、私の童貞を捧げた娼婦S子は、大きなお尻に、ペニリン注射のあとをばんそうこうで誇示しているような女でしたが、なじみになってからは、アースに惹かれる私の願いを聞き入れてくれました。

以後は極めて平凡で、特に思い出となるようなこともありませんが、私がひそかに誇りに思っていることは、アースという言葉がポピュラーになったのは、私が奇巧に投稿して掲載された「アースへの讃歌」（昭和三十年頃）からではないかということなの

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありましたが最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号出版株式会社へ願います。

です。私は仏文専攻だったので、エイナスと英語読みせず、アースと仏蘭西語読みして使ったのですが、多分、最初だったのではないかと思います。

つけ足しますと、結婚後の性生活で特異なものとしては、別稿で告白しますが、街のトイレでピーピング（のぞき見）をしたことがあります。空想としては、夜道や映画館のトイレで若い女を襲うところが、よく浮かんできます。強姦願望ですね。

妻との性交渉は平凡なものです。妻は性的に淡泊なほうです。私の好み（縛り、浣腸、エーナルセックスなど）には、時々は応じてくれるのですが、かりにスワッピング（夫婦交換）をやろうといったら、応じるかどうかと考えることもあります。現実にはそんなことはないのに妻に云ったことはありませんが答えは悲観的なような気がします。

世間的には、私の妻は良いほうだと思えますが、サジスト（私がSであることは認めてもらえると思います）は本来、沢山の獲物を並べて楽しみたいという性癖があるそうで、私は、それが出来ない欲求不満を、現在感じているのです。

## 連結マワシ

「敬礼ッ！」

当番衛兵が叫んで立ち上がると、詰所の全員が立ち上がって不動の姿勢をとった。

ジャンヌと沢可奈（D—一九六号）の二人は、衛兵たちに対してではなく、衛門広場の真中に立っている有明のブロンズ像に向かって敬礼した。これが衛門を入るときの礼式なのである。礼式では普通、下士官、兵の出入りに際して、起立称呼の礼を行なわないのだけれども、ジャンヌは下士官相当ではあって

も「見習士官」つまり、近い将来、将校に任官する筈であることを示す腕輪を左膊上部にはめていたから、将校並みの礼を受けたのである。

ともあれ、宮殿から退出してきたジャンヌの顔は輝きをとり戻していた。遠くからではあっても、有明を見ることが出来たという理由だけで、彼女は元気になる。

二人は命じられた通り本部建物に入り、大階段を昇って訓練連隊長室のドアを叩く。本部付下士官が控え室に案内した。暫く待つうちに、公室の中から出てきた中尉副官が、「F—七五三号、連隊長殿がお会いになる」

といってジャンヌを招いた。沢は、そのまに残る。

連隊長は俗名を伊藤香織といった。元貴族の血筋で、彼女の祖父は明治維新の元勳として恰く知れわたっている。卑賤の足軽から身を起こし、台閣に列した男であるだけに、所謂、英雄好色を地で行く傍若無人ぶりで、妻妾その数を知らずといったところ。もっと立派なのは、産ませた子供を悉く認知して伊藤姓を名乗らせたことであつた。その数、実に二十七名。香織の父は、その末尾に数えられる。あまり科学的な説明とはいえないが、よ





く隔世遺伝ということが、いわれる。人間の場合、母親の形質の多くが息子を通じて孫娘に伝わるということである。香織の父方の祖母は一世を風靡した祇園の名妓だった。名妓といわれるからには、単に美しいというだけではなく、頭も又、カンもよかったにちがいない。香織が受け継いだのも、才と色の双方であった。職業軍人だった香織の父は、彼女が生まれて間もなく南太平洋方面の、あの絶望的な作戦に出陣して名誉の戦死を遂げた。そして終戦。華族、職業軍人に対する世間の風当りは辛く、生活はタケノコ暮しだった。そして、それさえ無限ではなかったし、最も傷手だったのはインフレと財産税に耐えかねて本家が没落してしまったことであろう。未亡人と二人の娘（香織には姉があった）は何の助けもなしに怒濤の真只中に放り出されてしまった。一時は母方の実家から細々とした援助が来ていたけれど、そっちも厳しい新円切換え時のショックで補給が断たれてしまった。働こうとしても、苗字や家柄が邪魔し、思うにまかせず、結局、新興成金と家族ぐるみ再婚する事になってしまったのである。ところが、それが又ヒドイ奴で、母親ばかりか当時十六才になったばかりの姉娘を手ごめ

にしてしまった。それを恥じて姉娘が自殺。続いて母親も気が狂って精神病院行きとなりコッソリ薬殺されてしまった。小学生だった香織は、親戚の間を転々として育った。そして、深く傷ついて行った。

有明との出遭いは、ガボンで成功した彼が秘書を募集するという名目で美女を蒐集しようとして企てたとき、応募した一人だったことに始まる。

彼女がガボンに行くことになる、親戚たちは厄介払いが出来たといって喜んだ。そのくせ、香織がガボンで殺される（実際は生きて有明の国に入ったのだが）と、法外な慰謝料を有明に、ふっかけてきた。有明は苦笑いをしながら、ほぼ、その要求を満たしてやった。そのことを聞かされた香織は、親戚に対して彼女が残っていた僅かな愛着すら、完全に打ち棄ててしまった。これこそ、有明が払った金の代償だったのである。

彼女はアマゾン女兵として模範的な資質を磨きあげた。地上の世界に誰一人、頼るものとしてない彼女は、有明への忠誠と奉仕を唯一の生き甲斐とするようになった。当然のことに、彼女は目覚しく累進して現在の地位に到

前号までII世界の各地から誘拐されてきた数多の美女たちは、ただ有明一人のために畜従隷従を強いられている。巨大な秘密国家の組織は、システムの女囚を責め鍛え抜いて、次第に洗脳して行ってしまう。数々の修行、テストをパスした者には地位に相応した自由が与えられる。含頭礼を終えた美女七名の内、ジャンヌこと小林敏子と沢可奈の二人は武官府の訓練連隊に配属を命じられた。このように運命の昇り坂を行く者たちは、それなりに華やかであったが、逆に日本沿岸で脱走して再捕獲された杉本美和中尉の場合は0号重拘束を受けて、まさに絶望的な重刑を宣告され様としている。

達した。

訓練連隊長、大佐の伊藤香織は、ジャンヌを見て、スグ立ち上がった。

挙手の礼をしたジャンヌは、教えられた通り大声で申告する。

「ご申告、申し上げます。肉体番号F-七五三号、俗名、小林敏子。十八才。見習士官として訓練連隊に配属を命ぜられました。ここに謹んで申告いたします」

「ごくろうさん」

敬礼を返しながら連隊長は、いった。

「あなたは異例のお手付きだから、きつと最

短コースで出世するに違いないわ。それだけに、すべての点で中途半端になりやすいと思います。それでは、あなたを、わがアマゾン女軍の幹部にしたいとおっしゃるマスターのおぼしめしに背くことになります。いいですね。これから、ここで普通の見習士官が一年かかってすることを、一カ月で、やって貰います。すべての教課を

果たすのは大変なことです。しかし、あなたならキットやれます。

いいえ、やってもらわなければなりません」

やさしくさとされてジーンと胸の熱くなるのを感じたジャンヌは「ハイ、全力をつくします」

とだけ答えるのが、せい一ぱいだった。

伊藤連隊長は公式のやりとりは、もうおしまいだという風に、急に姿勢をくずし、ニコニコしながら、

「ところで、あなたの肉体番号はマスターがおん自ら入墨なさったと洩れ承っておりますが、それは本当ですか」

と聞くではないか。何気なく、

「本当です」

と答えると、

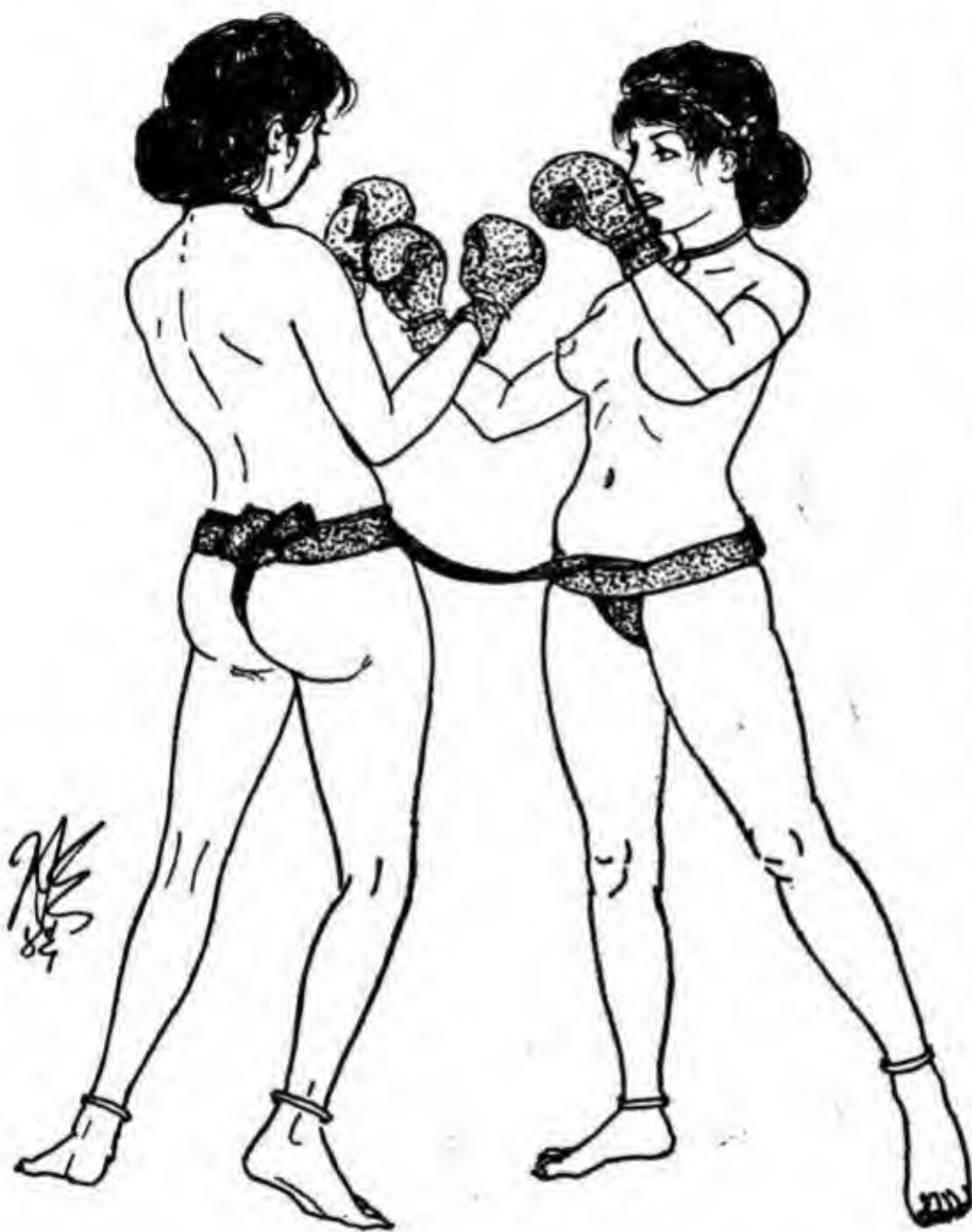
「そう、それは光栄なことです。一つ、わた

しにも拝ませていただけませんか」

ジャンヌは全身の血がサーッとひいて行くように感じた。又ぞろ屈辱の四つん這いをして、要求される言葉使いこそ、段々と隠やかに、はきたものの、否ということとは依然として許されていない。

「おお、見事に墨がシミになっていますね」

顔を近々として見ているというところが、伊藤連隊長の鼻息が生あたたかく感じられることで良くわかった。その上、ご丁寧にも双の親指で押しひろげて、「不思議にマスターがなさるとキレイに仕上がるのね。近ごろは人口も増えたし、お忙しいので全くといってよい程、なさらなくなっちゃった。ええ、久しぶりで目の保養になったわ」などと、独りごとをいっている。その間もジャンヌは両手、両足で身体を支え、臀部をシャーンと屹立させていなければならぬのである。





ジャンヌは将校に任官する前、下士官としての勤務を一定期間、行わなければならなかった。彼女が配属になったのは訓練隊B中第一分隊であった。偶然のことだったが、それは望月レイ子、つまりF-108号が所属する分隊である。もちろん、ジャンヌとレイ子の間には、何の接触もなかったのだが、かなり有名な映画女優だった望月レイ子ことはジャンヌも常識的に、顔と名前ぐらいは知っている筈である。

この分隊は丁度、ジムナジウムで体育訓練を受けていた。女の本性から当然のことなのだが、女兵たちは、ともすれば受動的、消極的になりやすい傾向があった。訓練連隊の目的とするところは、これに徹底的な戦闘性を附与することであった。女子でも、プロのレスラーや剣士があつて、男まじりのファイティング・スピリットを発揮している。アマゾン女兵は、傑れた斗士であることも要求されている。ただし、強いだけでは未だ完全とはいわれない。斗士であると共に、大前提である三つの、誓いを満たす資質がなければならぬ。すなわち、忠誠隷従、精励奉仕、保美保健の通則である。

訓練連隊で体質が特に重視されるのは以上

のような理由による。ただし、重量揚げや砲丸投げ等のように体型を損う瞬間的運動は特殊な場合を除いて採用されていない。その反面、この国でなければ考えられないようなものが数多く取りあげられている。その実例をいくつか紹介しよう。

望月レイ子は、先輩の中村二等兵にサンザン撲られていた。といっても、ボクシングのグローブをはめているから、ひどい傷にはならない。ただ変わっているのは二人共、相撲のマワシのような褌をつけさせられていること。そして、それが一本になっていることである。二人の身体は、そのマワシで連結されその間隔は八センチ位しかない。打撃を逃がれる為に跳びさるということが不可能である。両者とも、たえずグローブの射程内で斗わねばならぬ。ルールとしては、どこを叩いてもよい。又、足を使ってもよい。勝負は相手を倒して、後の結び目を歯で解いて、敵からマワシを剥ぎとることで決する。

望月レイ子は、もうフラフラだった。ただ側で棒を持って立っている内藤伍長の罵声だけで支えられていたといつてよいであろう。ただ、やみくもにグローブを振り廻すだけだったから、一つも有効打をあげることが、で

きない。勝ち誇った中村二等兵のパンチは、ますます冷静になり、アッパーにボディに、自由自在に入ってゆく。

「オイッ、どうしたのよ。だらしないう。こんなことでヘコタレちゃあ、あとで懲罰よ」

内藤班長が、ヨタヨタくずれかかる望月レイ子の尻を、棒でハタいて叱咤するけれども精も根も尽き果てたのか、遂に望月は膝をついて、ついで、仰向けにのびてしまった。中村二等兵が敏捷にのしかかって、うつ伏せにひっくり返しても手向かいも出来ない。少女歌劇スターだった中村則子が、かつて大勢のファン達に見せた白い美しい歯が、今や獣のようにマワシの結び目に噛みついて行った。たちまち、結び目が解かれる。サッと立ち上がった、力強い棒の穂先を引っぱると、グンニヤリした望月レイ子の裸身が、床上で二、三回、転がり廻って、最後は一糸もまとわぬ姿のまま、アラレもなく大股を開いてしまふ。気絶した彼女では恥かしがらうことすらできない。勝った中村二等兵は、長いマワシを引きずったまま躍りあがるようにして勝鬨をあげた。

「エイ、エイ、オウ、オウ」

これも女兵達の斗争心を鼓舞するために、

強制的にさせられることなのである。

今や地獄の牛頭馬頭かと思うばかりの下士官や古参兵たちに、新兵望月レイ子は木の葉のように翻弄され、罵倒される他はない。

内藤班長が再び棒を、ふりかぶった。

それより早く、木村上等兵が望月の髪をつかんで上体を引き起こすと、激しく両頬に平手打ちをくわせた。その衝撃で望月は、やっと息を吹きかえす。そして、あわてて立ち上がった。不動の姿勢をとる。倒れたままだった罰が一層ひどくなるのだ。ひっぱたいたのは木村上等兵の親心だったといえよう。だからといって、負けた責の償いを免れるわけには行かない。

不動の姿勢のままレイ子は蛇に魅き込まれた蛙のようにブルブル小刻みに震えていた。内藤班長の持つ棒は白樫を削ったもので、一メートル余り。先が樫のように平たくなっている。昔、軍人精神注入棒といわれたヤツである。

「キサマ、たるんでるよ。軍人精神を叩き込んでやる。サア、股をひらいてケツを出すんだ。歯を喰いしばれ」

臀部で炸裂した棒は、豊満な肉のクッショ

ンに吸収されたのか、にぶい音を立てただけである。その瞬間、望月が前のめりにフツ飛んでしまったので、音に比べて、当たりが如何に、ひどかったかが、わかった。

丁度そのとき、新任のジャンヌが、やってきたのである。

全員が不動の姿勢をとった。

## 0号生存刑

脱走の罪は重く、厳しかった。まして、それが兵の模範であるべき将校だったから尚更大変であった。

軍法会議は極刑に処せられんことを決議した。この国の法律では最終判決は、すべて有明の意思に任されている。

前に述べた様に、一人の美女を誘拐して立派に仕立てるまでには大変なコストが、かかっている。おそらく億を越す金額であろう。その意味で、この国は女達の取り扱いに甚だ慎重だったといつてよい。調教や刑罰で、如何に凌辱を加え、苦痛をあたえたとしても、それはあくまでも回復可能でなければならず心や肉体に癒し難い創痕を残すことは許されていない。

だが、杉本美和子中尉の場合は、あまりにも犯した罪が重大だった。国家は、こうした犯罪の結果が、どんなことになるかを見せしめとしなければならない。

有明にしても0号重拘束を命じたとき、すでに、この玉（ギョク）を犠牲にする決心を固めていた。

王宮にひき立てられた杉本美和子は、長い間の0号重拘束で足腰も萎え、身体中、アザと傷におおわれて、見るかげもなくなっていた。それでも一応は、もと通り拘束を解かれていた。目や口に突き立てられていた針や金串も抜かれた。本来なら、このチャンスに自殺することが、許された最後の機会だったであろう。だが、今の美和子には、そうする気力さえ残されていなかった。

赤白ダンダラ縄で、有明本陽三重菱縄が正式に打たれた。本縄は判決まで、この国の人間であることを証している。

「肉体番号B―二〇三号。俗名杉本美和子。二十五才。汝の犯した罪は重大である。よって軍法会議の決議を裁可し、中尉の階級を剥奪すると共に0号生存刑に処する」

有明の言葉は最終的であり、最早くつがえ





すことは出来なかった。建国始まって以来の極刑に列座の高官達でさえ、顔色をかえたものである。

この国では死刑は、まだしも名誉あるものだと考えられていた。生存刑の方が重いのである。中でも、0号生存刑となると、その最たるものであった。以下に、その段階を紹介しておこう。

まず肩と腰についている手足の関節を外してしまふ。舌のツケ根に再びピアノ線が横に刺し貫かれ、舌の両端、歯のあたるところに直径十ミリ程のナットをねじ込んで、ピアノ

線をはさんで固定する。これで舌を噛むことはおろか、口を閉じることも出来ない。食餌はすべて鼻腔からビニールチューブで入れる。腹部には左右から小さなステンレス板をワッシャーにして四カ

所をボルト留めにする。ステンレス板は尻部まで延びて、プラスチックパイプを固定する役も果たしている。尿道に挿入されたカテーテルは内側をまわって、後部パイプに合流している。これで排泄行為の自由が奪われ、四六時中、タレ流しをつづけなければならなくなる。

以上が0号生存刑に処せられた者の予備的処置の、あらましである。

こうした処置が済むと、特製の懸架車に縛りつけられる。関節を外した足は自由に曲るから背面にまわして手と一緒に太い革帯で、

しめつける。臀部だけが車の床につくのだがパイプが床の穴にハマ込まれて、床下にある汚物タンクに接続する仕掛けになっているから汚物や臭気が洩れる心配はない。

哀れにも杉本美和子は、羽毛をむしられたチキンのように吊るされていた。そして、それは最早、美しい女体であるというより、呼吸する肉塊というべきであろう。

烈々と燃える炭火を盛った鼎が運ばれてきた。有明自らマッ赤に焼けた焼き印を取って美和子の前に立った。アマゾン将校が二人、美和子の髪を掴んでシッカリと抑えつけた。「ギャーッ」

人間とは思えない程の絶叫が、美和子の不自由な口から、ほとばしった。

シーンと静まりかえった室内に、皮膚を焼く音が、おどろおどろしく響くと同時に、不快な臭いが、たちこめてきた。美和子の額が焦げて簡単なカナ文字が読める。それは(バカ)という二字であった。

又もや、悲鳴があがった。

今度は、貴和が焼印を美和子の頬に押しつけたのである。宮中席次に従って高官達が順次に美和子の皮膚を焼いていった。そのたび毎に美和子はアリッタケの声をふり絞った。

ただし、一時に沢山の火傷を負わせると、皮膚呼吸のバランスを失って生命が危険になる可能性があるもので、とりあえず第一回は一品のお手付上臈までと定められた。それでも、全裸の思い思いの部分に押された焼印は十数カ所にのびた。失神しても、すぐ注射で意識を回復されてしまうから、たまらない。最後に夕霧の局が臍の下、ステンレス板で縫い合わされた所の直ぐ上のあたりを焼いたときなどは、ひととき高く吼えて気絶してしまっただのである。

あまりのことに、さすが場馴れをしている筈の高官達も顔色を変えている。しかし、これから先、無限に続くであろう杉本美和子の受難を考えれば、0号生存刑はまだ始まったばかりの、いわば小手調べにすぎなかった。

まことに0号生存刑というのは極刑中の極刑だった。

美和子に乗せた懸架車は各場所を引き廻され、つぎつぎと一寸刻み五分試しの苦痛を加えられるのである。

美肌のすみずみまで、みにくい焼印を押されるのが約二カ月もかかる。皮膚呼吸の限度をチェックしながら、部分的に押して行くか

ら、なかなか閑がかる。

次に刻みが始まる。それは例の食肉魚ピラニアが一尾一尾では大した肉片を噛みとることも出来ない小魚なのに、群なす集団の力で巨象をも倒して白骨だけにしてしまうのと似ていた。この場合、集団は回数を意味する。すなわち、美和子に加えられる苦刑は無慮一五〇回に亘って加えられるのだ。これを項目別に説明することにする。

#### ①毛抜き

頭髮を始め体毛のすべてを、少しずつ大勢の手で引き抜いて行く。約六〇回。

#### ②爪剥ぎ

手足の爪を次々と剥ぐ。二〇回。

#### ③歯抜き

上下の歯を麻酔なしで引き抜く。三二回。

#### ④指詰め

手足の指を根元から切断する。二〇回。

#### ⑤乳首切り

双の乳首を鉄でチョン切る。二回。

#### ⑥四肢切断

手足を関節毎（三節）に順次、切除して行く。三×四＝一二回。

#### ⑦耳鼻切断

鼻を削ぎ、両耳を切りとる。三回。

#### ⑧舌抜き

串刺しで殆ど腐りかけた舌を根元から切りとる。止血に注意して一回。

#### ⑨眼球摘出

曲針を眼蓋から挿し込んで、視神経を切断して眼球を摘出する。二回。

以上の手術は一回毎に治療を待ちながら継続されて行くので、項目により長短はあるけれども、完了するまで短くても三年は、かかる。気の遠くなるような刑罰であった。そして、もっと残酷なことは取り除いた肉体の部分は、総てをミンチにして喰べさせてしまうということである。量が多いときには様々に加工した上、冷凍保存してポツポツ与えてゆく。共喰いの材料は犠牲者の眼前で料理することが命じられる。もっとも、両眼をクリ抜かれるまでの話であるが……。

生存刑であるから執行の途中で死亡してしまわない様に慎重な手当てが施される。外科を専攻する医務官が管理責任者として任命されるほか、精神科、内科、その他、種々の分野に亘る専門家が、これに協力する。

各項各回毎に刑の執行は異なる場所、異なる人物によって、なされる。いいかえれば、



一五〇人もの美女たちが、ただ一人の犠牲者に対して、替わる替わる刃を、加えさせられるのである。

やられる方が惨めなのは勿論だが、加害者の立場に立たされる方も又、容易ならぬ受難である。

拒否しても、許される筈がないので、彼女等は歯を喰いしばって、受刑者の肉片を切りとって行く。

こうして、刑は罪人に苦痛をあたえると同時に、一般の女達にも惨烈な警戒と見せしめを強制してゆく。

美和子を固定した懸架車は宮殿の不浄門か

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下さい。電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

ら運び出されて行った。

行き先は、かつて彼女が将校として勤務した訓練連隊である。

訓練連隊長、伊藤大佐は連隊命令を発して全員を集合させた。

台上に曝された美和子。ククリ猿のような肉塊と化しきった、かつての部下を小突きながら嚴重に訓示をした。

「判決は下されました。この者は、もう人間ではないのです。人間でないものには、その資格証明の肉体番号は、いらないのです。小林見習士官！」

突然、名前を呼ばれても咄嗟に自分と、わからなかったジャンヌだったが、それでも、B中隊長に目で合図されたので、ハツとして一歩、前へ出た。

「ハイッ」

と不動の姿勢をとる。

「貴官が一番あたらしい見習士官です。訓練連隊を代表して、わたしらに恥辱をあたえたこの者の肉体番号を、切りとることを命じます」

ジャンヌの姿勢がグラツと揺れた。それでも辛うじて気を取り直すと、手渡されたメスを持って美和子に近づく。

火傷だらけで、氣息奄々としている美和子は、恐怖に凍りついたような目でジャンヌの動きを追っていた。

「ヒィーヒィーッ」

苦痛と口惜しさ、みじめな絶叫が、奔り出た。

鼠蹊部に入墨されたB―二〇三という文字が皮膚ごと削ぎとられた瞬間の事だった。

ふるえる手に血まみれの皮膚片をつまんだジャンヌは、それを伊藤連隊長の前に提示した。

それを見た連隊長は、

「よろしい。焼き棄ててしまいなさい」

ジャンヌの義務は終わった。しかし、何とこの不快さであろうか。ジャンヌは、吐き気のするのを必死にこらえなければならなかった。

女兵たちが、順番に一本ずつ美和子の毛髪を引き抜くことを命じられた。どうどう巡りが始まって、一人が立ち止まる毎に、美和子の悲鳴が聞こえる。

0号生存刑の執行が、いよいよ始まったのである。

——(未完)——

——カッ ト・志 野 春 秋——



十一月号を読みながら

# 思 う こ と

提 崎 昭 人

毎号読みながら思うことは、執筆者の方々のことである。読者ならば、本屋に少し立って買って買う人を見れば、おおよそ、どのようなタイプの人が読んでいるのか、見当がつくかも知れないが、執筆者となると、まったく推測するしかない。

奇クは投稿が主であり、多くの無名のSMファンによって作りあげられている。ほとんどが匿名であり、正体を隠しているのは、この種のことが、いまだ社会で市民権を得ていないからである。いくらテレビでSMという

言葉が語られようと、それは特殊な人々がいるという好奇心の故であって、一般の市民が私はサド・マゾですと公言してはばからない時代が来るとは思えない。

私の推測では、奇クの投稿者というのは、ジャーナリズム関係、芸能関係の人が多いと思う。あるいは、金に余裕のあるインテリであろう。

団鬼六氏は「花と蛇」を書き始めた当時、高校の教師であったと、ご本人が述べていられるのだが、ある意味で随分、皮肉な話だと思ふ。

執筆者の正体を詮索するようなことは、こ

の種の雑誌では失礼になるかもしれないが、なぜそのようなことを考えたのかというと、十一月号のロマン派生の「マゾヒスチックレディ」を読んでいて、ロマン派生が、どのような人なのか、知りたくなってきたからである。腔鏡の使い方を知っていたり、貞操帯の突部をコンドームで覆い、危険な細菌感染を避けたりするところを見ると、医者か、医者の家に育ったとは思えない。

こんなことは枝葉末節のことなのだろうが推理小説の読み過ぎで、すぐ推理したくなる私の悪癖の、しからしむところである。

ところで、この「マゾヒスチックレディ」



は、なかなかのものである。

ピアノ教師というレディは、豊かな肢体の持主で、こんな教師に教えられたら、ピアノの腕など上達はせず、悩殺されっぱなしではないかと思ってしまう。

ピアノ教師といえば私にも思い出がある。

彼女は近所でも評判の美人だったが、グラマ—Iというよりは、繊細なタイプだった。あるとき、私とその教師の家で遊んでいて、何気なく便所のそばに行くと、偶然に中から激しい排泄音がきこえて、やがて出て来たのが、ピアノ教師だったのだが、フト顔を見合わせると彼女は顔を赤らめた。何故なのかは幼い私には分からなかった。

今でも、その時の音とピアノ教師の美しい赤らめた顔を、はっきりと思い出すところをみれば、私がこの道に興味をもったのも、そのあたりからだったのだろうか。私は、その時、十才ぐらいだった……。

○

「マゾヒスチックレディ」をはじめ、十一月号には、写真掲載の文章が多かったことは、この号を一段と魅力あるものになっている。

荒尾慶子さんの「行く川の流れ」おなじみ辻村隆氏のカメラ・ハント、新形式の録音告

白の福井桃子さん。いずれもタプリーと写真を載せ、しかも、それが従来に比して、かなり大きい。十月号から、このように写真が少し大きくなっているが、迫力の点で、ずい分と違うもので、十月号を見たときは、ビックリしたものである。しかし、まだ遠慮しているようで、一ページでもいいからグラビアが欲しいと願うのは、私だけなのだろうか。

荒尾慶子さんの「行く川の流れ」は流麗な文章で、彼女のつまましい人柄を、しのばせるものがある。読んでいると「憂愁の佳人」とでも名づけたくなってくる。

色々な男性からくる手紙で心が動揺するさまは、男の保護本能をかきたてずにはおかないが、それにしても、奇巧の読者は、勇気があるんだなあとと思う。私など気の小さいことおびただしく「ノミの心臓」の持ち主だからすてきな男性を求めますなどといわれても、立候補することなど思いも及ばない。それは荒尾さんが大阪に住んでいるためもあるけれど、城章夫氏など、新幹線で三時間ではないかと、情熱的にせまる。男たるや、こうでなくはいかんと、ハッとした感じがする。

こういう男性の積極さにこそ、女性の方も惹かれるのではないか。荒尾さんは、東京へ

行くらしい……。私は、それが実現したのならば是非、二人でその様子を知らせてほしいと思う。一方はサドの立場で、もう一方はマゾの立場で。同一の行為が、サドとマゾで、どう感じ方が異なるか、興味がある。

荒尾さんの告白のところで驚いたのは、八十三ページの写真で、まことに大胆な全身像である。横たわり、諦めたように目を閉じ、責められるのを待っている。

白い縄は、きつく乳房の上下を二巻きし、腰のくびれにも巻きついている。そして剃毛された柔肌はふっくらと盛り上がっている。

よくぞ、この写真を掲載したものである。編集部は、載せるかどうか、少し迷ったと思うが、どんなものだったのだろうか。

○

新人として、奇しくも二人のマダム、江口淑子さんと福井桃子さんが登場している。よくもまあ次々と、新人が登場してくるものだと、感心してしまうが、我々読者としては大いに歓迎である。

福井さんは、何やらバイタリティすさまじき女という印象を受けるが、バレーで鍛えた体で、ウルトラC級の一八〇度の開股をやったのけた。表情が、はっきりと分からないの

が難点だが、あどけない感じで、その度胸には、びっくりする。おまけに逆海老縛りで、体を横向けにされた写真は、セクサイティン・グなものだ。

この頃の奇クは、ポルノ映画のボカシにならってか、白線利用の方法をとっている。その結果、制限されたポーズから、多種多様なポーズが見られるという楽しみが増えた。望むらくは、白線の部分をギリギリまで小さくして欲しい。

何はともあれ十一月号は、誰かさんが「花と蛇」を読んだ時の言い草ではないけれど体をコワしてしまいそうだ。私は二日ぐらい頭に血がのぼってカッカとしていたのである。

## ○

あまり「見る」ことばかりに熱中しているのも、バランスがとれていなくて、奇クの相当な部分を占める創作に失礼というものである。

会社づとめを始めて以来、読むのが億劫になったというのは、私が並みのサラリーマンであることを示しているのかもしれない、あるいは、SMマニア度が低いのか？　さいわいにして、九月二十五日は土曜日、ゆっくりと読むことができた。

いよいよ終わりという「花と蛇」は、とうとう京子と美津子の姉妹レズを見せた。私はこういうことは絶対に書かないだろうと思っていたのだが、団先生、最後の大サービスであらうか。ついでに小夜子と文夫の姉弟のプレイも見せてくれたら良かったと思うのだが残念ながら時間切れのようである。

姉妹レズの描写は、静子夫人と京子、静子夫人と小夜子の時と比較すると、描写の密度がうすくなっているが、やはり陶然たるものである。描写のスピードが速いので、まわりくどくなっていた最近のものより、こちらの方をよしとする人も多いだろう。

姉妹レズのあとは、久方ぶりに珠江夫人が出てきた。途中で消えてしまっただけで、どうなったかと思っていたが、とうとう、何やら結着をつけさせるために、ご登場ということになったのだろう。あと、美沙江がいるが、これも最終回に出てくるだろうか。

第七十九回を終わったところでは、どういう終わり方をするのか、見当がつかない。

全員救出されるという、ハッピー・エンドのようで、その実、アンハッピー・エンドでゆくか、大乱交会のような、この小説にふさわしい終わり方をするのか、まったく、競馬

の予想ではないけれど、興味のつきないものがあるといえる。

それに朗報なのは、また時代ものを、団先生が執筆してくださるということだ。団先生のタッチからすれば、時代ものがふさわしいような気がするだけに、またもや、体をコワしてしまいうようなSM小説ができあがるのではないかと、胸をわくわくさせると共に、かなわんなあと恐れてもいる。本心は、やはり強烈なる一篇を望んでいるのだけれども。

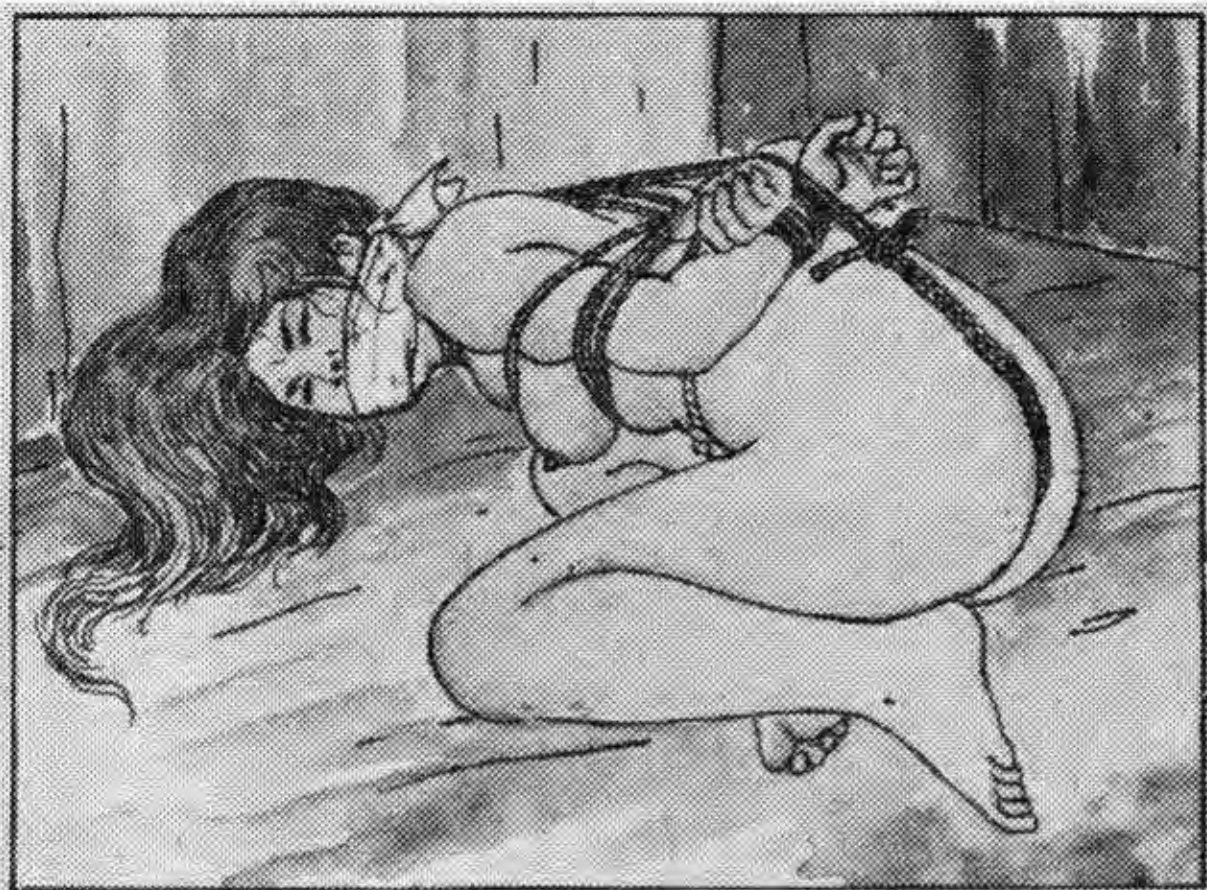
時代小説といえば、風流極道軒氏の「紫蘭の門」が、いよいよ佳境に、はいってきた。

責めに重点を置き、これからも色々な責め場を見せてほしいものだが、第三回目では、千登世と豊香が登場してきて、登場人物は多彩になった。着物の脱がせ方が素早く、ネチネチした、いやらしさが表現されていないのが欠点といえば欠点だが、その反面、物語の進行が早くて面白い。ストーリーが渋滞しない。

養女、千登世をかばって、義母、豊香が責めを受けるところなど、桂子と静子夫人のチュエーションと同じだ。豊香は、その名の通り豊かな肢体と女盛りの色気を待っている。ますます、静子夫人と似てくるではないか。



## イメージギャラリー 『哀　願』 宮　城　昌　子



年が十ぐらい上で三十五というのが、違ふところだが、モデルの山本富士子は、豊香の年令の方に近い。それだけに想像もしやすいというわけである。

その豊香、全裸にされ、大の字に吊り下げられて数人の男に嬲られてしまう。さて、どうなるのか……？

○

南彦造氏の『最近の洋画と残酷』を読む。私も洋画ファンであるから、映画のことについての文章は、どれも面白いのである。『ツルジャーブル』のクライマックスについてはスチール写真などで見て知っていたのに、ついつい見そくなっていたが、氏の文を読んで、これは見なくてはと思った次第である。

『女狩り』については、時間の都合で最初の方しか見れなくて、肝心のビン責めを見逃がしたのは間抜けといわれても仕方がない。

『新アニマル』については私も見た。

ロバート・フロストの作品は『世界猟奇地帯』以来、注目していた。この作品では、

アラビアの白人女の奴隷売買のシーンがあり体を調べたり、金髪女が出てくると喜んだりする様が、盗み撮られていた。フロストの作品は性倒錯趣味が横溢していて、楽しいものである。

『アニマル・シリーズ』第一作『アニマル』では、息子に危害を加えるぞとおどして、その子の母親の着物を脱がして行く。全裸にして、体を一回転させ、たんねんに眺める。勿論、下半身の部分はボカされているが、母親を演じたヴァージニア・ゴードン（フロストの夫人）の表情が絶品で、サディスティックな欲求に、見ていて、思わずかられてしまった。

脅迫者は結局、母親連れ出し、ホテルでバンドの鞭で打つ。

第二作目の『続・アニマル』は西部劇で、これもフロスト夫人、ヴァージニア・ゴードンが主演しているが、姉を犯されたメキシコ人が、復讐のために姉を犯した牧場主の妻を誘拐して犯すという話。

姉が犯されるとき、木に両手で吊り下げられて衣服が剥がされ、全裸にされる。

牧場主の妻も後手に縛られ『汚い』メキシコ人に犯される。ヴァージニア・ゴードンの

両手を縛られて、吊り下げられた姿は、なかなかのもの。全部、映っていたらしいのだが例によって税関でカットされた。

第三作目の「ラヴ・キロンプ・セブン」はもっともサディスティックな映画だろう。

何しろ裸、裸、裸である。しかも、一人や二人ではなく十数人といふのだから大変だ。恥毛を映さないようにするのにも苦労しただろうと思うシロモノだ。

第二次世界大戦中の実話で、ドイツ兵士を慰安するために、美しいユダヤ女を集めた捕虜収容所がある。題名の通り「ラヴ・キャンプ」なのである。そこに収容されたユダヤ女から情報を得るために、米軍の女性兵士がユダヤ女に化け、キャンプに潜入し、ひどい扱いを受けながらも使命を、まっとうする話。

収容所にいれられるとき、体を洗うと称して、ものすごい勢いでホースの水を出し、女達に吹きつける。女達の中には立っていられなくて倒れるものが出る。それでも情容赦なく水を吹きつける。新手の水責めである。

その後、全裸にされ、女体検査を受ける。仰向けに寝かされ、足を左右の兵士に持ち上げられて開かされる。女性自身は勿論ボカされているが、ここで調べられるマリア・リー

ス（「新アニマル」に出ている）はデルタ・パットなど、しなかったとのことである。

このシーンを撮影している時の様子を思い描こう。

マリア・リースは、映画の演技とはいえ死にたくなるような恥ずかしい姿をさらしている。左右の足を持ち上げている兵士など役得というしかない。それに何回もテストを繰り返したろうし、そのテストの間は、マリア・リースは全裸だったのかな、と考えるだけでも面白い。もしそうなら、何度も足を閉じたり開かされたりしている間に、感じてくることもあるわけだ。そういうときは、どうしたろう？

カメラ・ポジションを変える間も、彼女はあの、あられもないポーズをしていたのだろうか。フロストなら、それくらいのことをさせかねないと思う。

収容所にはいったあと、木馬責めにされている女に会う。木馬といっても、鋭角的な三角形をしており、とても堪えられるようなものではない。果して、女が木馬から降ろされると、あとはベクトリと血がついているという、どぎつさである。

そのあと、その女は、服従を誓わせられ、

ドイツ兵士の突き出す軍靴を口で清めさせられるのだから、真のサディスティアンなら大喝采だろう。

その他、マリア・リースが鞭で打たれるシーンもあり、ここでは彼女の白い全裸が、みるみる赤い条痕でいっぱいになってゆく。本当に鞭打たれているわけで、女優という商売も楽じゃない、と思うのは、こういう時だ。ここは非常な迫力あるシーンだった。

第四作目が「新アニマル」で南彦造氏の述べている通りだ。

このアニマル・シリーズのセックス・シーンばかりを集めた「アニマル百年史」というのが出来るそうで、これは強烈な映画になりそう。

谷岡ヤスジではないが、鼻血ドバーツというところ。

私も書きすぎたようだ。書いていて頭に血がのぼってくる。これ以上、書くと、ほんとに鼻血が出るかもしれないから、この辺で筆を措く。

さてもさても、十一月号は興味津々。ちょっと体に毒であった。これで三五〇円なんだから、安いなあ。





## 新聞スクラップ

## マゾ的受感と

## たわごと

## 虹丸虹吉

私は肥満体狂症の自覚症状を自認する人間であり、ただ単に「肥満体」という言葉だけで、不可思議にもエキサイトしちまったりしたことがあるヘンな反射神経? の持主でもあるのだが、このヘンな性向の人間をゾクゾクさせてくれる記事が、大新聞Mの海外ニュース・コラム欄に、しばしば登場してくれるんだから、ウレシイ。

「そのつもりになれば66キロやせられます」  
「百二十キロという肥満体のため、保健上の危険」を理由にオーストラリア移住を拒否された英国婦人が、突貫療法で66キロもやせ、

24日、やっと入国をみとめられた。

この人は、マンチェスターに近い、キアズリー出身のメービス・ホールデン夫人(31)で、移住を拒否されたあと、スリミング・クラブ(やせよう会)に、はいった。体重をふやすパン、バター、砂糖、ジャガイモ、チーズなどはやめ、果物、肉、魚などの健康食に専念したところ、一年後には自分でも見違えるほどスマートになったという。

移民局の係官は、これが一年前の同一人物かと目を疑い、出迎えたこの人の姉も、妹の「変身」を見て泣き出す始末。これまた体重百キロのブロック夫人は「今度は私がやせる

番」といつていた」(UPI) Mシンブン  
9月27日

肥満体も、珍しいどころか我が国でも肥満児激増、アタマのいたい問題となっちまったが、日本人の肥満体とは違い、白人等のそれは百キロオーバーなんてのは、ざらであるらしいのは、なんとも堂々たるもので、M的性向自認者たる私としては白人崇拜的願望を否定し得ぬ、としか言えないようで、こうした記事にはバカバカしいくらい興味を抱く。

「変身」というのも面白く、谷崎作品のなかに「友田と松永の話」というミステリックな作があって、肥満とるいそうをくりかえす人物をトリック的に使ったのがあったのを、つい思い出しちゃったものである。

「さすが紳士の国」

「ロンドンのある映画館。画面では派手な射ち合いを演じていたが、そのころ、同映画館の婦人用トイレでは67キロの、さる婦人が苦悶の最中。便器から腰が抜けず、必死に助けを求めているのだ。」

婦人の悲鳴に、ようやく気付いた映画館の支配人や従業員が、大急ぎでかけつけたが、なかなか引き出せない。ついに消防士が呼ばれ、ハンマーを使って便器をぶちこわし、や

つこの思いで婦人を救出した。

ところが、そこは紳士の国、消防士はトイレに、はいる前に帽子を脱いで、うやうやしく婦人に一礼。それから、おもむろに救出作業に、とりかかったという（ロイター共同）Mシンブン9月8日

○

うやうやしく一礼だなんて、さすがはユーモアの、ご本家。笑っちゃったり感心したりであったが、西部劇のクライマックス中に、トイレで苦悶、絶叫だなんて、マアなんというコッケー、ステキな光景であることよ。

まるでオールド・ファンには懐かしいルネクレール監督の映画、スラップスティック・コメディのシーンみたいだが、件の婦人は老齢のためばかりでなく、おそらく超肥満体のために便器から腰が抜けなかったのだろうと思われる。なにしろ外人の超肥満体には、日本人のデブチンとはケタ違いで、転ぶと自分では起き上がれず、助けを呼ぶ必要があるなんてえのがあるそうだ。

（街路で転んだビヤダル婦人が、助け起こすのが当然だとばかりに、通りすがりの日本人男性に「ヘイ、ジャップ、ヘルプ！」は一寸おかしいかも知れんが、とにかくエバッテ叫び、非力矮小なる日本男性の揮身の努力にもかかわらず、ひっぱるどころか反対にスットバサレて伸びちまった……だなんてバカバカ

しいシーンは、私の憧憬するものだが……）

便器にはまりこんで抜けない肥満体だなんて、想像しただけで笑っちゃまい、かつ、老齡が氣にならずにシゲキを受けちまった。外人だから？ かとも思うのだが、白人のみならず黒人肥満体女性にも同様にゾクツとくる私は、このスクラップに赤色サインペンを揮つたものである。「エキセレント！」……と。

それにしても、どうしてこうした笑話が、外国のだとドライな感じがして楽しいのだろうか？ トイレで臀部へのリーチに難点があるほどの肥満体へのマゾフィズムに、この上なくシゲキを覚える私のヘンな性向が、そう受け取るのだろうか？

×

×

### 食欲

「静かなジュネーブの昼下がり、異常なほどに肥満した中年の女性がバスに乗り込んできた。バスは混んでいた。この女性、太ったからだで乗客を押しわけ、アフリカからやって来た黒人の旅行者の前で立ち止まり、うなり声をあげた。

「このうすぎたない黒ン坊め。白人のご婦人が前に来た席をゆずるぐらいのこと、国でおそわらなかつたのかい」

あまりのことに、バスの中はシンとなったが、この黒人旅行者、静かな声で、「私の国ではですな、マダム。あなたのように

な方が前に来れば、食べられてしまいます」……」（サンデー毎日1月24日号外信部のクズかご）

○

肥満体狂崇癖というヘンな性向の持主の私でなくても、この海外ニュースは、かなり面白くないかと思う。「笑い」といっても深刻な人種問題がからむ、というより人種問題そのもののようなニュースなので、ストリートには笑えず、正にブラック？ ユーモア的なシツクな笑い——なんと、美食（人肉嗜食趣向）まで備わっている——ともいえるくらいのものだが、黒人旅行者の即意妙答の才智と役者ぶり、そして超肥満白人女性というコッケーさが、見事に、このシビアな事件をドライに救出しているみたいであるし、この短い出来事が何ともドラマティックに感じられて、「クズかご」から拾いあげた記者に拍手を送りたいと思っちゃった。だいたい、乱出流行した数多くのショート・ショートの中に入れたとしても、優に最上列にランクされるのでは？ と思う。（新聞記事としての真実性について疑ってかかると、さてこれは外人記者の創作では？ なんて思ったりもするが、とすれば、これまた驚きだ）

ともあれ、この記事に感嘆のウナリ声をあげた私。そして当然エキサイトし、自ら赤面した。勿論、私の血がのぼちちまった頭の中



では、私とその黒人とが入れ替っていた。そしてその私は、激怒した超肥満白人女性にかまり……という例によって例の如き妄想の一幕に連絡したのだが、それは、この際、省略したほうが、よさそう。

だが、もしこの黒人旅行者の立場が日本人であったとしたら、まず、こんなにシヤレてとぼけた応答など、とても、なし得ないのではないだろうか、なんてホントに思っちゃう。

さすがはジャズ音楽などクリエートし得たブラック・パワー。いまだに「黒ん坊」なんて口に、まるで毛唐になっちゃったような錯覚を抱いてるんでは？ と思われるような日本人も多いようだが、他民族の文化遺産の模倣せつ盗者といわれても仕方ないくらい、いいかげんな今日の日本人であることに気付くべきだ——なんて、調子にのって勝手なタワゴトを述べちゃったけれども、混んだバスの中で、それでも超肥満体のわが身をもてあましている白人女性が、アタマにきてオーバーな恰好でわめきたてるなんて、それだけでもマンガ的であろうし、こうしたドラマさ（白黒ともに）は、とても日本人には縁遠いものではないだろうか。

私の想像することだから当然、私の感覚範囲内の見方をすることになっちゃうが、平均的日本人が、この黒人旅行者の立場なら、得

意のジャップ・スマイルでも浮かべるのに違いないと思っちゃまう。元来がマゾフィスティック？ な人種（もちろん潜在的という意味も含めて）であるに違いない日本民族男子こそ、この超肥満白人女性にかみつかるにふさわしいと思われてならない。

何？ どうせそういう恥辱を与えられるのだったら、そんな河馬みたいな大デブチン女性からではなく、もっとすっきりした美女から受けたらいい？

ぜいたく言っちゃあ、おてんとうさまに申しわけないよ。だいいち、河馬みたいに肥満した白人中年女性であるからこそ、マンガになるんじゃないか。そして、臀部への難リーチ状態の白人女性に憧れる私のマゾ性向をくすぐってくれるんです。

× ああ……夏が終わる！ ×

「電柱のテッペンで、若い男が「ウォーッ」と叫んだのは8月はじめのこと。うだる暑さのせいだった。これもまた、電柱にのぼった男の話。こんどは去りゆく夏が原因、というのも、この男はノゾキが大好き。秋めく風にノゾキの季節も閉幕近し——そうアセッたのです。

この男、東京S区のスシ屋の店員Y（28）店の寮の真向かい、6メートルの道幅の道路

をへだてたところにマンションがある。Yの部屋は二階だが6メートルの距離が、もどかしい。やがて夏も終わり。せめてマンションのすぐ前にある電柱、あれにのぼったら……。

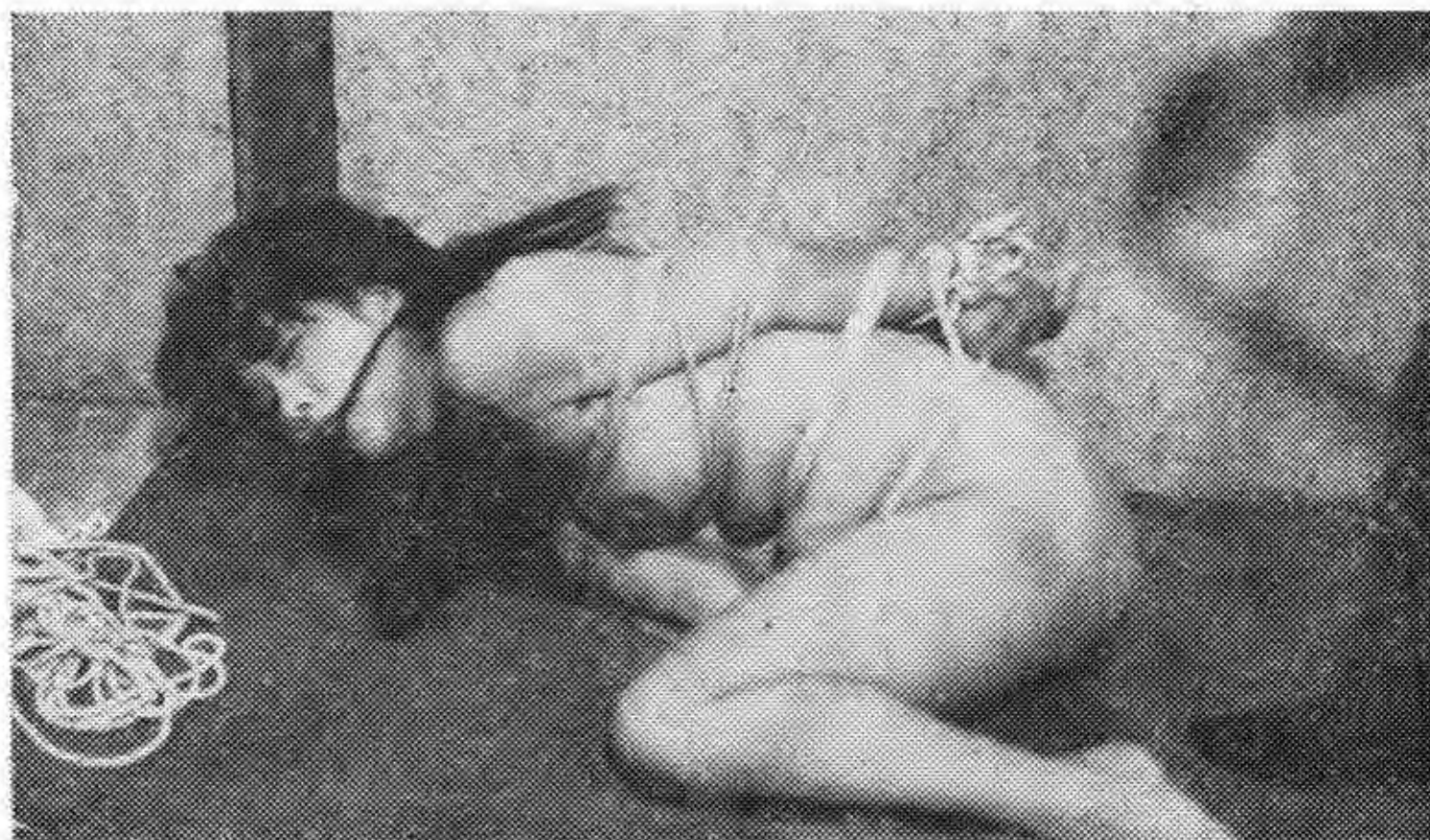
思いを押えかね、テッペンに、よじ登ったのは8月30日午前2時すぎ。張りきったY、右足を電柱の足掛けに、左足を、スナック経営Aさん（32）方のヒサシにかけたたん、外をみたAさんと視線がカチーン。窓ガラスごしに逆立ちしたYの顔。——窓をあけ、大声で、どなりつけた。仰天したYは足を滑らせあつと6・5メートル下の道路に墜落。

Yは左足骨折、救急車で病院へ。寛大なAさんは許してくれた。でも看護婦さんの応対が冷たかったのは当然。「ノゾキ魔が、骨折り損の、夏去りぬ」……（Mシンブン9月3日II赤デンワ）

○ まるでアブ誌によく載っていたストーリーみたい。もっとも、ストーリーのほうは、たいていが、彼はその後、女王様になぶりものにされて臣従を誓わされ、人間馬とされ、神酒の拝受とくるのだが……。

それにしても、大新聞のコラムも進歩したもの……だなんて思っちゃった次第。

——（おわり）——



——被虐願望女性の衝撃の告白——

# 桎梏より遁れて

——岸悠子（旧姓新田ゆう子）の手記——

辻村 隆

かねて交遊のある新田英雄氏から、初秋の午後、ひょっこりと部厚い書留の書信が届いた。

絶えて久しく音沙汰もなかったので何事ならんと開封してみると、彼の奥さんの新田ゆう子さん自筆の、流麗な筆致の原稿と、十数枚の、彼女の緊縛フォトであった。

添付の彼の手紙（原文の尽）

「拝啓、すっかり秋めいてまいりました。

映画、テレビ、カメラ・ハントなど、多方面にいいよ御活躍で、蔭乍ら感激しておる次第です。

例の筆不精で、心ならずも御無沙汰致しました。以前にも御連絡しました通り、やっと身辺の整理もつき、最愛のゆう子と、狭いところですが二人きりの生活をしております。何もかも、一から出直しのつもりです。ゆう子も心の枷を外し、どうやら自由の空気が吸えるようになって、のびのびしております。同封の原稿は、小生とゆう子の、合作めいた



ものですが、書く方は苦手で、ゆう子に告白を書かせてみました。

誤字や、文章の拙いところ、あるいは露骨な表現もあると思いますが、何分よろしく御訂正下さいまして編集部へお口添え下さい。

運よく掲載されれば嬉しいですが、万一没でも、貴兄に読んでいただき、過去の私達の苦しみが分かっていただけたら幸いです。

尚この度、一身上の都合によりまして、旧名に立ちかえり、岸英雄となりました。

従いまして、妻も岸悠子ということになります。

現在の仕事の関係で、十月末か、十一月中旬、第二の人生の出発のつもりで気分を一新して、新婚旅行ならぬ、旧婚旅行をするつもりです。

関西の白浜、勝浦温泉方面へ行く予定です。その際、是非ゆう子ともども、お立ち寄りして、一泊させていだきたいと、勝手に二人できめております。甚だ厚顔しいお願いですが、その節は、何卒よろしくお願い申し上げます。

ゆう子は、最近レズの傾向も持つようになりまして、若し出来得れば、その時、三浦純子様か、渡部好美様か、適当なレズ女性を御

紹介、下さいませんか。

いいチャンスですから、女二人のSMレズシーンを撮ってみたいと念願しております。

書けば、いつもきまった様に、一方的な勝手ばかり申して、申しわけ御座居ません。

ゆう子と二人、今からその日を楽しみに、期待している次第です。

奥様にもその旨、何卒よろしくお伝え下さい。貴兄の御健斗をお祈りして擲筆します。

早々

新田改メ岸 英雄拜

新田英雄、いや現在の岸英雄が、家庭のこととで、相当もめていたことは、かなり以前から、彼の文通で若干、知ってはいたが、その原因を精しくは知らなかったし彼も余り知られたくなかったのか、努めて避けるようにしていた。こうしたイザコザは、彼のプライベートに関することだから、『楽我記』欄にも書かなかったが、今ここに、新田ゆう子改メ岸悠子さんの衝撃の告白を一読して、その事実を知り、深い感銘と驚愕が、私の脳裡に渦巻くのであった。

告白は殆ど原文の儘で、タイトルに私の名を冠するのもオコがましいが、矢張り私と彼等との繋がりを説明したかったので、私の手で発表する恰好になってしまった。

文章の表現、若干の誤字、句読点や改行、それに私風の慣用字など当て嵌めたが、原文は壊れてはいない。

かつては憧憬し、一度は岸英雄に交渉して断われた、ゆう子さんが今みずからカメラ・ハント女性として私宅を訪れる日も近い。彼との交遊既に五年有余、うたた感慨にたえない。

タイトルの表題は、私が適当に附したものである。原稿の表題は、簡単に『手記』の二字に過ぎない。

## 『手記』 岸 悠子

すべての桎梏と束縛より解放された今、愛する夫、英雄の契機により、始めてペンを採る気になりました。

私の、縛られ、あられもなき羞恥の写真が夫の手によって、奇ク誌上に発表されておりまして、皆様のお目にも、度々とまっていたことを羞かしく存じております。

文筆の得意でない夫は、時々思い出したように、編集部へ私の緊縛写真のみを送っては奇クサロン欄などへ掲載されるのを、秘かな



愉しみにしていたようでございます。

断続してここ数年間、サロン欄の、ほんの一隅にのった、私の緊縛の姿の一部が、まさか私達の将来を、大きく左右するとは、夫も私も夢にも思いませんでした。

奇クサロンのフォトに依らなくても、いつかは訪れるカタストロフであったかも知れませんが――。

夫によって、SMプレイの愉しさを知った私は、夫のその行為を責めようとは、決して思ってもおりませんし、封建的な、余りにも

古めかしい、しきた

りの中で、喜怒哀楽した煩わしい環境から、今こうして脱出できて、むしろホッとしたり、のびのびした気分浸っているでございます。

狭いながらも楽しい我が家――とは、このことでございましょうか。

二DKの、ほんとに狭いホームも、今の私にとっては、金殿玉楼にも勝る、自由の快楽の棲家でございます。誰に気兼ねも遠慮もなく、煩らわされることもなく、最愛の夫と、二人きりで過ごせる毎夜――。

女の倅を本当に掴んだようで、今では逆に、私のほうから積極的に、夫にSMプレイを望む始末でございます。

私がこうして、敢えて告白する気になったのも、私の様な境遇の方が世間には案外、沢山おられるのではないかと思ったからです。別れた夫と再び結婚する――こんな奇妙な

ことも、世の中にはあるのでございます。

文才とてもなく、誠に拙ない、恥かしいような筆運びでございますが、夫と同じような趣味をお持ちの方なら、私達の気持も分かっていただけと存じまして、とりとめもなく書き綴る気になったのでございます。

.....

将来、服飾デザイナーを志していた私は、高校を卒業すると、すぐに、目黒の大きなドレメの学園に入学し、毎日楽しく通学しておりました。

二年目の冬、お友達と赤倉ヘスキーに行った時、彼を始めて知ったのでした。

彼、新田英雄の家は駒込にあり、古い老舗の紙問屋の若旦那でした。

彼と私の交際は、東京へ戻ってから拍車がかかり、一週間に一度が三日に一度となり、果ては、会えぬ日は淋しくて、眠れぬ夜となつて、私達の恋は、火のように烈しく燃えさかってゆくばかりでございました。

私の家族は、故あって故郷のI市に居り、私は姉夫婦を頼って上京していた、いわば居候の境遇でした。姉も義兄も好人物揃いで、私には優しくしてくれました。自由になるのをいいことに、彼を知ってから日増しにル



ーズになり、放埒気儘な生活を送るようになってゆきました。

彼と一緒にいる時だけが幸福そのもので、別れてあとは、すべてが灰色の世界に感じ、もうドレメの方も、さっぱり実がいらす、何をするのも、うとましい日が続き、私は完全に恋の虜となっていたようでございます。

姉夫婦も、やがて私の変化に気付き、心配して、いろいろ問い訊しますので、遂々彼の仲を白状しました処、先方を聞き合わせて反って乗気になり、悠子も年頃だからと、正式に彼との縁談を進めて呉れました。

新田家の両親は子供に恵まれず、遠縁に当たる彼が中学一年の時、養子として入籍し、新田家を嗣いでいたのです。

しかし彼の家族は多人数で、祖父母、養父母を始め、母方の妹に当たる夫婦と、その子供達。古くから勤めていて、家族同様の番頭さん夫婦、使用人等で十四人の大世帯です。嫁入りして、果たして勤まるだろうかと、姉夫婦は複雑な人間関係を案じてくれましたが有頂天の私は、家族と結婚するのではなく、彼と結婚するのだと、勝手に独り極めして、もう夢中でした。

他人様から見れば、さぞかし釣り合わせ縁

でしたでしょうが、彼の家族への熱心な説得もあって、まるで氏なくして玉の輿にのったみたいな恰好で、やっと結婚へゴールインすることが出来たのでございます。

新婚旅行は、九州一周の七日の旅で、板付飛行場までは、往復とも飛行機という豪華さでございました。

甘い甘い、蜜のような一週間は忽ちに過ぎ

て、私は新田家の家族の一員となり、氏名も米沢悠子から新田悠子にかわりました。

因習的な古いしきたり、封建制の名残りの男尊女卑の気風などが、容赦なくその日から私に襲いかかりました。

姑との意見の相違。大姑、小姑、使用人などへの心づかいなど、しきたりの厳しさ、冷たさが、結婚前の甘い考えを一挙に吹きとば





してしまいました。

すべてがシキタリ、シキタリ、シキタリ、シキタリの中で、息のつまりそうな日々の連続。私達、新婚夫婦に与えられた一室は、養父母の隣室と襖一枚、隔てた六帖の間でございました。

息をのみ、声を殺す夜毎——神経をすり減

らす毎日。

そして、もっと悲しかったのは、彼が養子というせいでシキタリに押し潰されて、自分の意見は、何一つ、いえない情なさでした。

ドレメでの花嫁修業などタカが知れております。少しの洋裁を覚えた以外、これといって取り柄のない私に、家族中の眼は冷たく、



そんな中で、私は辛うじて、彼の愛情のみを信じて生きていたのでございます。

お店の休日も、私は台所をかけずり廻り、次々と用事に追い立てられて、ゆっくり息つく暇もなく、こき使われている状態に、夫は内心、期するところがあつたのか、ある休日（それは私にとって、忘れがたい休日になりましたが）祖父母、養父母の許しを得て、是非の買物と称して私を伴い、外出してくれました。タクシーに乗るや、追い立てられるように、すぐさまアベックホテルへ直行したのでございます。

彼は何を持ち出してきたのか、一つの鞆をかかえておりました。

夫は息の詰まりそうな家から遁れて、日頃の鬱憤を、溜り溜った激情で爆発させたかったのでございましょう。それは私にも意心伝心に察しられて、心は熱くほてり、体の濡れるのを覚えるのでした。

婚前には、しばしば利用したアベック・ホテルも、新婚旅行から戻って以来、始めて潜る門でございます。

息のつまりそうな、強い烈しい抱擁、長い長いくちづけ、いつしか喘ぎはじめる私。

夫の手によって、いつしか脱がされ、裸身



で絡みつく私は、夫の大胆なセックスを期待して、体を疼かせておりました。

夫は、いつになく真剣に私をみつめ、つきつめた挙句の、意外な申し出に、私は思わず一瞬、顔を強ばらせ、心臓の飛びでような衝撃をうけました。

私の自由を奪い、裸身を縛って、それを前戯として、心ゆくまで、私をほしのままにしたいと、思いつめた、四の五の云わせぬ強要の顔付きで、いい出したのです。

甘い官能の疼きは途端に吹っ飛び、夫のこの思いがけぬ申し出に私は涙ぐみ、何とか拒否しようと、駄々をこねて懇願しましたが、夫は激した口調で、家でのあの苦渋、忍耐、抑圧の夫婦生活を、ふっきれさすには、こうした変わった手段で、せめても自分の秘かな欲望を満足さすより方法はないのだと、私に両手をついて頼みこむのでございました。

夫の、たつての願ひによりまして、私も急に物悲しい気持ちに襲われ、何をされるのか分からぬ、不安と困惑さで肌を慄かせ乍ら、結婚後三カ月目にして、始めて夫から、いましめを受けたのでございます。

それは二十一才の私にとりまして、唯もう羞恥と、恐怖と混乱のショック以外の何もの

でもありませんでした。

肌を刺す縄目の痛みに、忍び泣きする私のおえつは、やがて甘美な喘ぎに代ってゆきました。かつて味わったことのない夫の、激しく、狂おしい愛撫。五感をジーンとつらぬく陶酔に、私はいつしか、しどに乱れ、ひたすら歓喜にむせび、はしたない声を挙げつづけておりました。家庭内で閉ざされ抑圧されていた私の性が、夫の爆発した愛戯をうけて一挙に爛漫と開花したようでございます。

こうして縛ったり、軽く咬んだり、苛めたりすることが、夫の秘かな趣味と気付いた時いくたびとなく恍惚の境を、さ迷う私の心は判つきりと、きまりました。

この夫から愛される妻になるには、夫の嗜虐的な趣味に、私を合わせてゆくことが、最も賢明な手段だと考えついたのです。

「いいのよ、いいのよ。私はあなたの奴隷。どのようなでも好きなようにして……」

とりとめなく、そんな言葉を甘く投げかけて、まるで人が変わったような夫の、めくるめくような愛戯に酔い痴れていたのを、かすかにおぼえているのでございます。

「こんなオレだと分かってても愛せるか」と叫ぶ夫に、私はいましめの体をすりよせ

「好きよ好きよ、大好き。もっともっと虐めてもいいわ。だから私を捨てないで……」

と感極まって泣きじゃくり、夫は力の限り私を抱きしめて、

「ああ、悠子——愛してる、愛してるよ。だから尚更、苛めたくなるのだ。縛って苛めるのが、激しければ激しいほど、愛しているシルシだと思ってくれ」

と、再び氣力を燃やして、激しく求めてくるのでした。

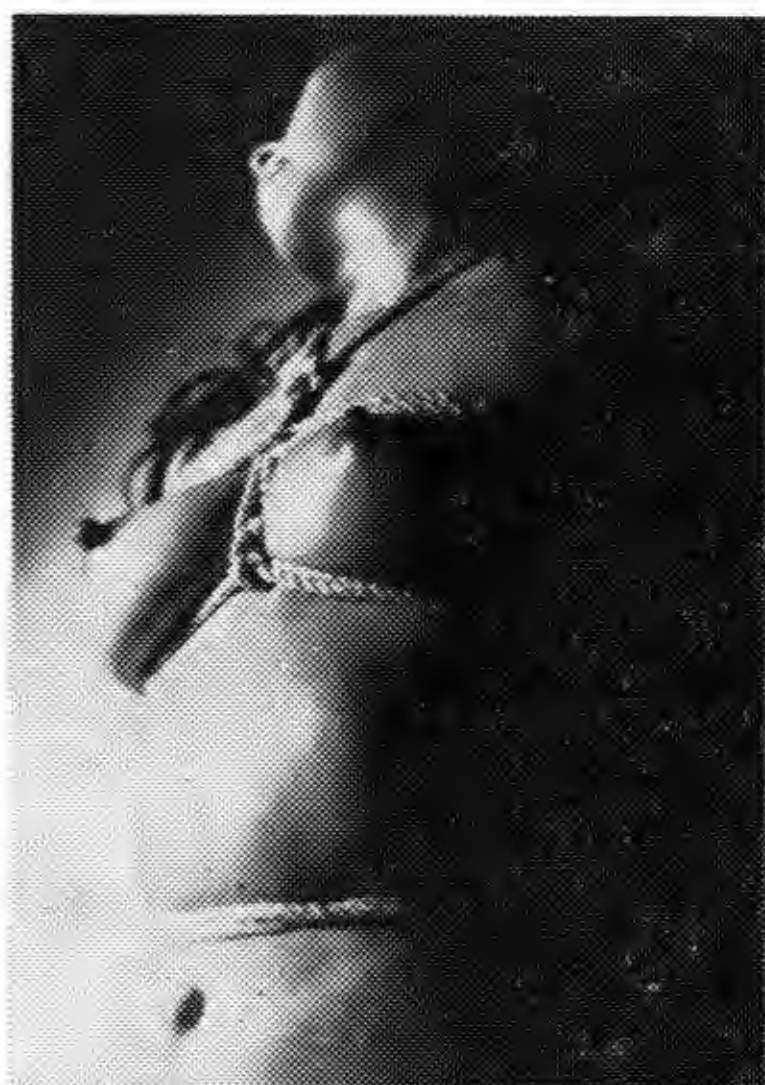
短い時間に、夫を幾度となく振り立たせた根源が、嗜虐の行為に繋がっていることを、私は判つきりと、さとしたのでございます。

その日を契機に、私達は、何とか用件を繕えては、お互いの愛情を確かめるべく外出するようになりました。

揃って出掛ける日もありますし、別々に家を出て、落ち合う時もあります。

アベック・ホテルでのひととき。家にいる時とは見違えるように、活気に溢れた夫によって、さまざまに縛られ、激しく身をさいなまれ、羞恥のすべてを剥ぎとられてゆくことが、私の生甲斐でございました。

嗜虐のたわむれのあとの、身も心もとろけてしまいそうな甘美な愛撫——。めくるめく



恍惚のひとときに、すべての憂さを忘れ果て、気の遠くなる陶酔の淵に溺れ込んでゆくのでした。

隣室に気を兼ねた、家庭での縛しめのない夜など、彼の愛撫は、まるで気の抜けたような、ほんのお座なりで、嗜虐をともなったホテルでの感激とは、まるで月とスッポンの違いで、比較になりませんでした。声を押し殺しての、あわただしい契りに、私の体は濡れきらぬまま終わり、味気ない、空しい不満がいつも心の底に、くすばっているのを感じました。

ございます。

彼の嗜虐の度合が、強ければ強いほど、そのあとにおとずれる愛戯は、それに比例して激しさを増すばかりでした。

苦悶のあとの快楽——正しく、そんな言葉がピッタリする私達でした。いいえ、その苦悶すらも、私には官能を操る欲びに感じとれるのです。

私の被虐の願望が、日を追う毎に強まってゆくのも、彼の巧妙な、そうした飼育と調教によるものだと思えるのでございます。

彼は気が向けば、私のあられもなき縛しめ

愛し合う者同志だけが持つひそかな秘密。それは何という甘美な、ひめごとでございましょう。

私は、いつしか自分自身でも気付かぬうちに被虐を待ち望む女になっておりました。有体に申し上げると、被虐願望というより、夫の嗜虐の行為のあとに繋がる、甘美な陶酔の欲びに、やるせない心を燃やしていたので

のポーズをカメラに撮ってありました。

家庭での現像など及びもつきませんので、親しい心の許せる友人の家の暗室を借りては仕上げてきて、家人が寝鎮まった頃、そっと取り出してきて、その写真をみせてくれました。さまざまな私の縛しめの姿態が、眩しく眼を射り、極端に恥かしい赤裸々な私をみせつけられては、われにもあらずカッと血が頬にのぼり、心はしらずしらずに燃えて、体の奥深く、濡れてゆくのが分かるのでした。

夫は、家で果たせぬ嗜虐の一部を、そんな行為で、はかし、肌の変化を手で確かめ、我が意を得たように、しこった乳房を噛み、頭から、すっぽり布団をかぶると、欲情に昂ぶる息をはずませ、私の被虐願望を、更に昂めようとするかのような、猥らな怪しい痴態、強烈な緊縛などを、次回のホテル行で行なうことを告げ、私に猥らな言葉、痴態の復讐をさせて、心を燃やすのでした。それが私達にとって、部屋での精一杯のSM的な行為で、私もそうされたいと願うように変貌している自分を発見し、この私達のひそかなひめごとのみが、しきたりと因習に閉ざされた氷のよう冷たい新田家の嫁の、唯一の生甲斐であり、愉しみであるように思えるのでございま



した。

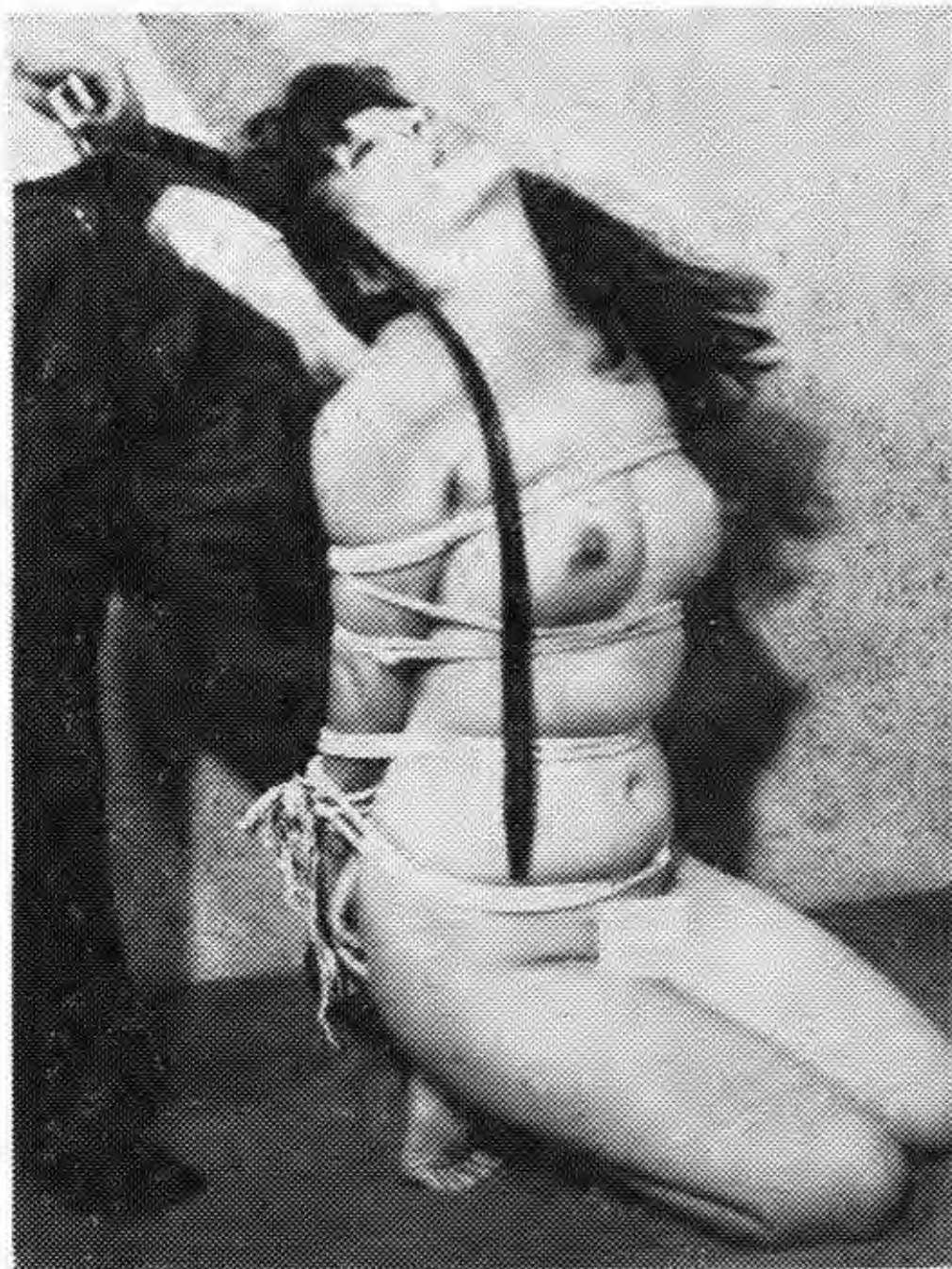
何よりも私と夫が、SMラインという太い一本の縄で、しっかり心と心がつながっているのが、心の支えでもありました。

しかし、このあられなき、羞恥の縛しめの写真が、まさか誌上に発表されていたようとは神ならぬ身の、夢にも気付かなかったことでもあります。

夫はフォトと奇ク誌を、自分の文書箱に秘蔵し、しっかり施錠しておりました。家人の眼に触れるのを恐れてと思っておりました私の考えは甘く、私の眼からも逃避させていたのを、あとになって知ったのでした。だから自分の縛しめの姿が、読者の眼前に曝されている事実を長い間、知らなかったのです。

夫は気が向けば、写真を編集部に送る程度でしたので、毎月のように誌上にのらなかったことも、発見を長びかせた理由の一つでしょうか。

夫が夜、寝床で、時々奇ク



誌を取り出して読み耽っておりましても、まさかその誌上に私の緊縛の羞恥像がのっているとは想像もつかず、むしろ奇クによってあの手、この手の、嗜虐のプレイや緊縛の方法を考えている夫に、内心、ひそかに期待していた私のように思います。

そそられるようになりました。夫から、もっと熱愛される妻になりたいと願う心は、被虐の願望に通じており、その雑誌が、未知の被虐の行程を、私に教えてくれるのではないかと思えたからです。

ある夜、読み疲れたのか、雑誌を枕元に伏せ、スヤスヤと眠る夫の手から、私は、そつと奇クを取り上げ、夫に気付かれぬようスタンドを引き寄せパラパラとめくりました。

ドキリとするような緊縛図——めくるめく字句の配列。私は体を燃やして、いっしか耽美と倒錯の世界にひきずり込まれてゆきました。

辻村隆様の増田夫妻対談『春宵一刻縛千金』など拾い読みし、世の中には、私達と同じような夫婦のいることも知りました。

そして奇クサロン欄で、私の裸身の緊縛の一葉を何気なく発見した時の、心臓の止まりそうな驚き——。



表紙をかえすと、忘れもしない、昭和四十一年八月号でございました。

蒸し暑い、梅雨に入った頃でしたから、六月の末頃だったと記憶しております。

結婚して、既に一年半経って、始めて覗いた夫の秘密――。

それは私に、強烈な衝撃を与えました。

何故、夫は私に内密で、この様な発表をしたのだろう。二人きりの甘い秘密だと思っていたものが、根底から音を立てて、ガラガラと崩れ去ってゆく思いで、私は憤怒に胸を昂ぶらせつつ、尚も奇クサロンの私を熟視しておりました。胸をドキドキ弾ませて、悪いものでも覗きみるように、私自身をいつまでもみつめこんでいたのでございます。

それには一行の説明もなく、私の双つの乳房を強調した、夫好みの縛り方の、上半身の緊縛像が、一枚のっているきりで、傍題に、  
(愛妻ゆう子の縛りポーズ 新田英雄)  
と、しるしてあるきりでした。

その夜私は、とうとうマンジリともせず、頭は冴えに冴え、不吉な予感ばかり先走りして、夜明けを迎えました。

問い訊すべきか、知らぬ振りをしているべきか――。

心は千々に思い迷った挙句、結局は心の重荷に堪えかねて、次の夜、彼にその事実を追求したのでございました。

瞬間、夫はさっと顔を強ばらせましたが、すぐに表情を戻し、むしろ太々しく、薄ら笑いすら泛かべて、こともなげに答えました。

「何だ、今頃やっと気付いたのかい。悠子に

承諾を求めても、懼らく拒否するだろうと思つて、黙って発表したまでさ。美しい妻の緊縛ポーズを、自分だけで独り占めしておくのも勿体ないと思ったからね。奇クの同好者に発表して、一言の讃辞をききたかったのさ。オレにも、こんな素晴らしい妻があるんだぞといったかったのだよ」







「でも、せめて一言ぐらい……」

と、愚痴をこぼすと、

「御免御免。じゃあ皆みせてあげよう。悠子ののった雑誌だけは、大切にとってあるんだよ」

そういって、彼は唇に手を当て、静かにするように制止すると、例の文書箱を、そっと開き、六、七冊の奇譚クラブを、とり出した。

「余り、大きな声を立てるなよ。隣へ聞こえるからね」

と、私に差し出します。

昭和四十年三月号が、私の緊縛フォトの、処女掲載号でございました。

(夫婦SMプレイの写真)

と題して、三度目にホテルへ行った時、彼が始めてカメラでうつした写真がのっているではありませんか——。

私達の結婚が、昭和三十九年の九月でございすから、もう一年半以上も前から、はずかしい、裸体の緊縛写真が発表されていたのでした。

「読んでごらんよ」

といわれて、簡単な紹介文に眼を通してみると、かなり虚偽がありす。

第一、彼は三十才ではありませぬ。結婚したのは二十七才なのですから三才も、サバをよんでおります。そして私の紹介が、

(妻の名は悠子、本年二十四才。一六一センチ、五四キロと、少々大柄で肥っています。まだ妊娠したことはありませんの

で、乳房も大きい方です)

「ひどいわ、ひどいわ。こんなこと書くなんて」

と、齧りつき、私は思わずコブシで彼の体をぶっておりました。だって二十四才なんて非道い——。二十一才なのに、私の方も、三才も年を上しているのですから。

「シ——ッ、大きな声を立てるなよ。ちよいとプレイの経験者ぶってみたかったのだよ。二十七才と二十一才では、若僧だと思われると思ってね」

そういわれても、若い女のサガで、やはり若くみられたいのは人情です。反対に年上にするのだから、彼も変わっています。

確かに年令より、幾分老けて見られる私は二十四才といわれても通用しますが、今、この告白をしたためている現時期ですら二十七才で、三十代には手が届いていないのです。すっかり年令がばれてしまいましたけれど、三才も多く書かれては、ついムキになってしまふのもオンナなればこそでしょうかしら。

彼のその一文は、同好者に、夫婦プレイを呼びかけておりました。若し誰方かと文通出来たら、今はやりの、交歓プレイでもするつもりだったのでしょか——。



昭和四十年五月号 (二度目の投稿)  
至って変哲もない題で、私の二葉のフォトは、おしりばかりうつっていました。

昭和四十年六月号 (愛妻ゆう子の緊縛ポーズ)

「最近では、肌に埋もれるように縄がきつく

しまっても、妻は一向平気で、こういった縛り方はどうだろうかと、積極的に意見を述べたりするようになりました。私と結婚するまでは平凡なBG (私、註——BGのケイケンありません、これはウソです) だった彼女も夫唱婦随というのですか、それとも、亭主の

好きな赤烏帽子というのでしょうか、私はだしの凝りようで、毎日のように写真をとって楽しんでおります」

と、大分オーバーに書いて、一葉のせておりますが、万更ウソでもございません。

昭和四十年十月号 (愛妻ゆう子の近況)  
首のない、胴だけきつく縛った、緊縛写真一葉です。

昭和四十一年三月号 (夫婦の緊縛プレイ)  
フォトのみで説明文がありません。緊縛の全身像で、仰向いている私の顔は、いい具合にみえません。

昭和四十一年四月号 (奇クサロン愛好者の皆様へ)

私の膝立ての緊縛ポーズ一葉で、彼の御無沙汰の挨拶文がのっていました。

昭和四十一年八月号——これが、私の発見したショックを受けた号で、緊縛を写したフォトだけで、一行の説明もないものです。

占めて八冊の奇ク誌上に、一年半に亘って夫は私に内緒で、緊縛フォトを送り続けていたのでございました。

今更怒ってみたとして、誌上から抹消出来るわけでもなく、夫の弁解を聞きながら、私はいつしか許す気持になっておりました。



愛妻と銘打って、私を誇示したい彼の行為に、一種の甘い感傷的な被虐性が、奇妙な顕示欲ともなって、心にしみ込んでゆくのでございました。

.....

結婚以来、丸五年間。封建的な因習の家庭で、私は私なりに努力して、何とか曲りなりにも平和は保たれ、ここへ嫁いだのも前世の定めごとと諦めて、夫の愛情を唯一の頼りに頑張り続けてきたのでございます。

大姑、姑さんにとって、私が物足りない嫁であった原因の一つに、家人の期待に反して子宝に恵まれないこともあった様でございます。

夫はかなりセックスには強く、私も決して拒みませんでしたから、人並み或はそれ以上に、交渉はあったはずですが、こればかりは人為的にはどうにもなりませんし、隣室を気にするのが、不妊の原因かとも思いましたがそれならホテルでの、ひそかな甘美な愉しみのひとときは、大胆奔放に振舞うのですから理由にはならないようでございます。

それでいつかも、夫婦揃って検診にもいったのでございますが、とり立てて悪い個所もなく、私達にとりまして、子宝に恵まれぬ

のが、何となく不安であり、心淋しい思いでございました。

夫も、仕事のほうで、かなり重要なポストを受持ち、全国を走り廻る日が多くなり、私は私で、いつしか嫁としての、自分のポストが出来てしましまして、秘密のホテル行は、結婚当初からくられて、ぐんと数も少なくなり、それこそ数カ月に一度か二度、夫の心が嗜虐心にそそられた時など、誘われて出てゆくぐらいのことで、兎も角も表面は、安定を保っていたのでございます。

夫はその後、折々暇をみては、思い出したように、奇クに私の緊縛フォトを発表しておりました。あれ以来、夫は必ず私に報告してくれ、掲載号を買ってまいりますと、一応見せてくれるようになりました。

とり立てて文句をいうほどのものもなく、私もいつしかそれに狎れて、ああ、又のっているなあと、ごく軽い気持で観るようになっていたのでございます。

それというのも、時折奇クに掲載される私の緊縛フォトが、ホテルで奔放に行なうSMのプレイにくらべたら、ほんの冰山の一角にも当たらずものであることを、私自身が一番よく知っていたからでしょうか。

広い世間だもの、たかだか一枚や二枚のフォトが掲載されたとして、私の正体が分かるものではないと、タカをくくる、気持になっていたことも確かでございます。

御参考までに、その後の、私の緊縛フォトが掲載された奇クを列記します。

昭和四十二年一月号 (愛妻ゆう子の股間縛)

ほんの少し、紹介文を書いております。

昭和四十二年二月号 (愛妻ゆう子の緊縛フォト)

三葉お送りしましたうち、一枚しかのらなかったそうです。乳房を強調したフォトですが、単なる上半身のこのフォトが後日、死命にかかわる大問題を惹き起こそうとは、神ならぬ身の、知る由もなしでございます。

昭和四十二年四月号 (ゆう子の股間縛) 背後をみせた、かなりきつい緊縛ポーズです。

昭和四十二年六月号 (愛妻ゆう子の両手吊)

二月号に三枚送りましたうちの、一枚だそうで、編集部で適当に題をつけて下さいました。

昭和四十二年七月号 (私の作品)

五枚送ったフォトのうち、二枚だけ掲載されましたもので、縛った私を足吊りにしたフォトです。夫の文が、半頁ばかり書かれてあります。

昭和四十三年三月号 (愛妻ゆう子のプレイボーズ)

背後からの緊縛フォト一枚で、説明文はございません。

昭和四十三年九月号 (フォト通信、ゆう子)

珍しく四葉のフォトが掲載され、夫にしては、これも珍しく、かなりの長文を書いておられます。辻村隆様と御交際していただいていること、全国旅行をすること、サロン欄の夫婦プレイの方々のこと等、かなりの熱意で書いております。緊縛フォトは笞打ちでした。この頃から夫は多忙になり、プレイも大分、御無沙汰になりました。奇クにも一年ばかりフォトを送らなかったようです。

昭和四十四年九月号 (愛妻ゆう子)

かなり長い間、ホテル行が途絶えておりまして、半ば私の方から持ちかけまして、久しぶりに官能をたぎらせ、プレイに耽溺しましたが、その時の一枚を、気が向いて送ったものだそうです。

こうした掲載の記録は夫がひそかにつけていた『U子のPLAY・MEMO』によるもので、今は一冊も、手許に残っていないのが、くち惜しう存じます。

昭和四十六年五月号

(愛妻ゆう子)

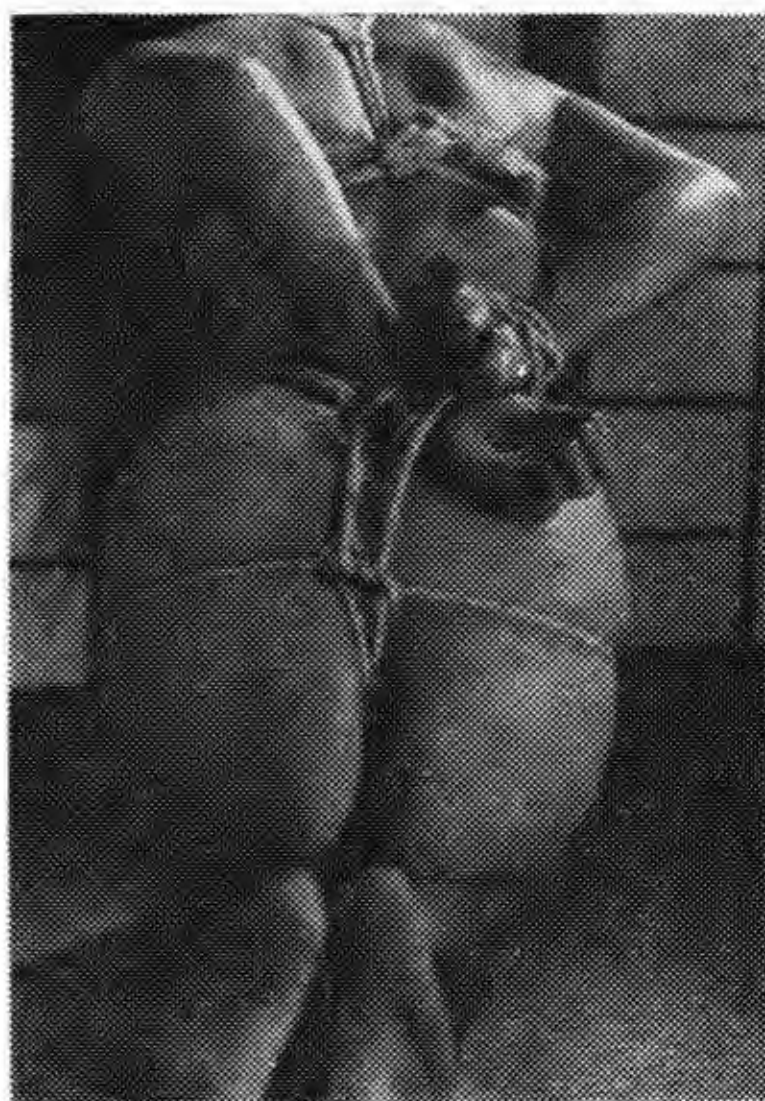
はじめて奇ク誌上に私が登場しましてから既に六年有余、経過した最近の私でございます。緊縛は、簡単な後手縛りの吊上げですが、私変わっているでしょうかしら……

既に二人きりの、甘い生活に入ってからのものでございます。

昭和四十六年六月号 (わが妻ゆう子)

前月号と同じ時に撮ったものでございますが、六年前と余り変わらなないと、チョッピリ自負いたしております。

話が前後いたしますが、事件以来、夫もやっと気分が落着き、再びフォトを撮ったり、送る気になったようでございます。言い忘れましたが、昭和四十二年から四十四年頃まで



夫は相当ハミリカメラに興味を持ちまして全部で十一巻ございます。すべてカラーでタイトルをつけ、これは運よく災いをまぬがれて私達は二人の愛の記録を、まるで宝物のように、大切に保存いたしております。

私達だけのことでございますが、ハミリフィルムタイトルの、年代順に列記しますと  
(愛の誓い) (ゆう子緊縛図絵) (愛の責苦)  
(ゆう子の作品) (ゆう子蠟燭責) (歓喜する悠子) (二人の秘密) (愛技に悶える悠子) (U子の性態) (強烈股間責) (性愛の記録)。





タイトルで御想像のつく、顔の赤らむものばかりでございますが、私達の強い愛の絆の折々の記録として、今は懐かしいものばかりです。

甘い追憶にひたっておりますと、あの忌むしい出来事を発表する筆も、つい鈍りがちになってまいります。

昭和四十四年の九月号より、昭和四十六年の五月号までの、一年半の空白の間に、私達の身辺に、思いもかけぬカラストロフの猛台風が吹き荒れたのでございました。

.....

忘れもいたしません。私達の一生を狂わすような、忌むしい事件が起きたのは昭和四十四年の秋、十月十日体育の日の午後のことでございます。

世の中には、本当にお節介焼きの人もいるものでございます。自分の得にもならぬのに人の幸せを平気で踏み躪って、まるでいいことをしたように思っている輩を、私は憎くて仕方がありません。

偽善者ぶる人は救われても、偽善者は救い難い存在でございます。

埼玉県下の、小売文具店の主人が、支払いと仕入の用件で立寄りしました時、たまたま私は、店の事務机に坐って、記帳を手伝っていたのでございました。

後で知ったことですが、その男は、奇くなどの雑誌を、古本屋で買い漁っている輩で、

私の顔を驚いたようにシゲシゲとみつめておりましたが、数日後、どんな気になったのでしょうか、養父あての親展で、例の昭和四十二年二月号の、奇クサロン欄を、わざわざ卑劣にも切抜いて送ってきたのでございます。

夫も狎れて、いつしか大胆になっていたのでしょうか。二月号掲載の私の緊縛フォトは隠しようもなき、正面からの私の上半身のクローズアップで、顔もとりわけ判っきりと撮っております。

私に違いないということを決定づけるためその男は、わざわざそれを選んで、送りつけてきたようでした。

緊縛は、乳房の上下に縄をかけた、上半身のみシンプルなものでございましたが、その断片をつきつけられては、どう弁解の仕様もない、私本人のあらわな裸身でございました。そのフォトの、夫の簡単な説明文は、次の通りでした。

八ゆう子の「乳房」を強調した狙いで、三枚のフォトをお送りいたします。現像の際、液洗で失敗しましたため、大変フラットな写真になってしまいました。乳房の上下を締め上げて大きさを増し、お臍の中心を通して胴をくびり、更に腰のところから股のつけ根に縄

をまわし、胴縄と股間縛りの縄を連繋しました。妻にきくところによると、この縛り方は非常に緊縛感があるということでした。

名古屋の小川様、東京の新田です。お便りありがとうございます。せっかくお約束しながら、お会い出来ず残念でした。そのうち又、機会をみてお会い致しましょう。貴方がた御夫妻のプレイフォトも、是非御紹介下さいV

と、あります。

十月十日のひる下がり。養父から、抜き差しならぬ証拠の写真や、その男の手紙などつきつけられ、私は衝撃の余り、気が遠くなりそうになりました。全身に冷汗が噴き出し、心臓の動悸は早鐘のように打ち、真っ蒼になってガタガタ慄え、只管に『済みません』を繰り返すばかりでした。突発的で、脳細胞は停滞し、それ以外に、どんな言葉も浮かんではいなかったのです。

縛られた裸身の、羞恥のナマを眼前に差し出されては、私に何がいえるでしょう。

すべては夫の行為とはいえ、私も又、それを許容していたのです。知らぬ存ぜぬでは通りようもなく、勿論、夫一人の責任に転嫁する気は毛頭ございません。

養父母は、私達夫婦の居間に侵入し、夫の秘蔵の文書箱の錠前を、職人を呼んで、こじ開けさせました。

ゾクゾクと出てくる、私の緊縛のあられなき写真。眼を蔽う、秘所むき出しの羞恥のポーズ。

すべては、夫の言いなりになって撮られたフォトですが、由緒とのかいを誇る新田家では、それこそ天下のひっくり返るような大騒動となりました。

掲載の奇クも次々とあばかれ、立ち合わされた私にしては、もう恥かしさの余り、居ても立ってもおられず、そっとその場から遁れようとしたが、養父の力強いかいなで引き寄せられ、思わずその場へ、ヘタヘタと崩折れてしまいました。

夫はその日、幸か不幸か、四国、中国方面へ出張中で、三日しないと帰ってはまいりませんでした。

緊急の親族会議――。

その間、私は離れの三帖の小納戸部屋に、監視つきで、監禁同様に閉じ込められておりました。使用人すら今迄と違って、何がなし猥らな眼付きで私を眺め、入口で私の行動を監視しておりました。

翌日の夜、午後十時過ぎ、金一封を押しつけられた私は、まるで不浄物でも捨てるかのように、勝手口から身一つで追い出されたのでございました。

昔年の『大経師昔暦』のおさん茂兵衛が、あらぬ噂が本当になって、手に手をとって駈落ちし、丹波の栢原で、心ない物売りの告げ口で捕まった時も、このようなことでもございましたでしょう。

今の世の中、ハリツケにはならなくても、心の痛手は、ハリツケ以上の残酷さでした。

どこへ訴えようのない羞恥の憤り――。

死にたい願望がソクソクと身を包み、どう来たのか、隅田の川のはとりを、死に神に憑かれたように彷徨しておりました。今更、この生恥曝した体の、よりどころもないと、ひたすらに思いつめていたのでございます。

離縁の原因は娘にきけと、両親の方へ荷物を送りかえたそうですが、どうしてこんなことが親に言えましょう。

身投げでもして死のうと決意しながら、何も知らずに戻ってくる夫に、せめて一眼、出逢いたい、筆舌に尽しがたい慕情にとりつかれ、私は故郷へも戻らず、その場から行方を晦ましてしまったのでございます。



ドレメ時代の、最も親しかった友を頼って、そのついで辛うじて生きてゆく道をみつけ、住込みで、ドレスメーカーの下働きみたいな恰好で、新宿に近い大久保の、某洋服店に、傷心の身を隠したのでございました。

心にかかるのは、出張中の夫が帰ってきてどうしているだろうか？ 夫と、どう連絡をとればよいだろうかと、唯もう、ひたすらに夫にばかり、燃えたぎるような、熱い心を走らせておりました。

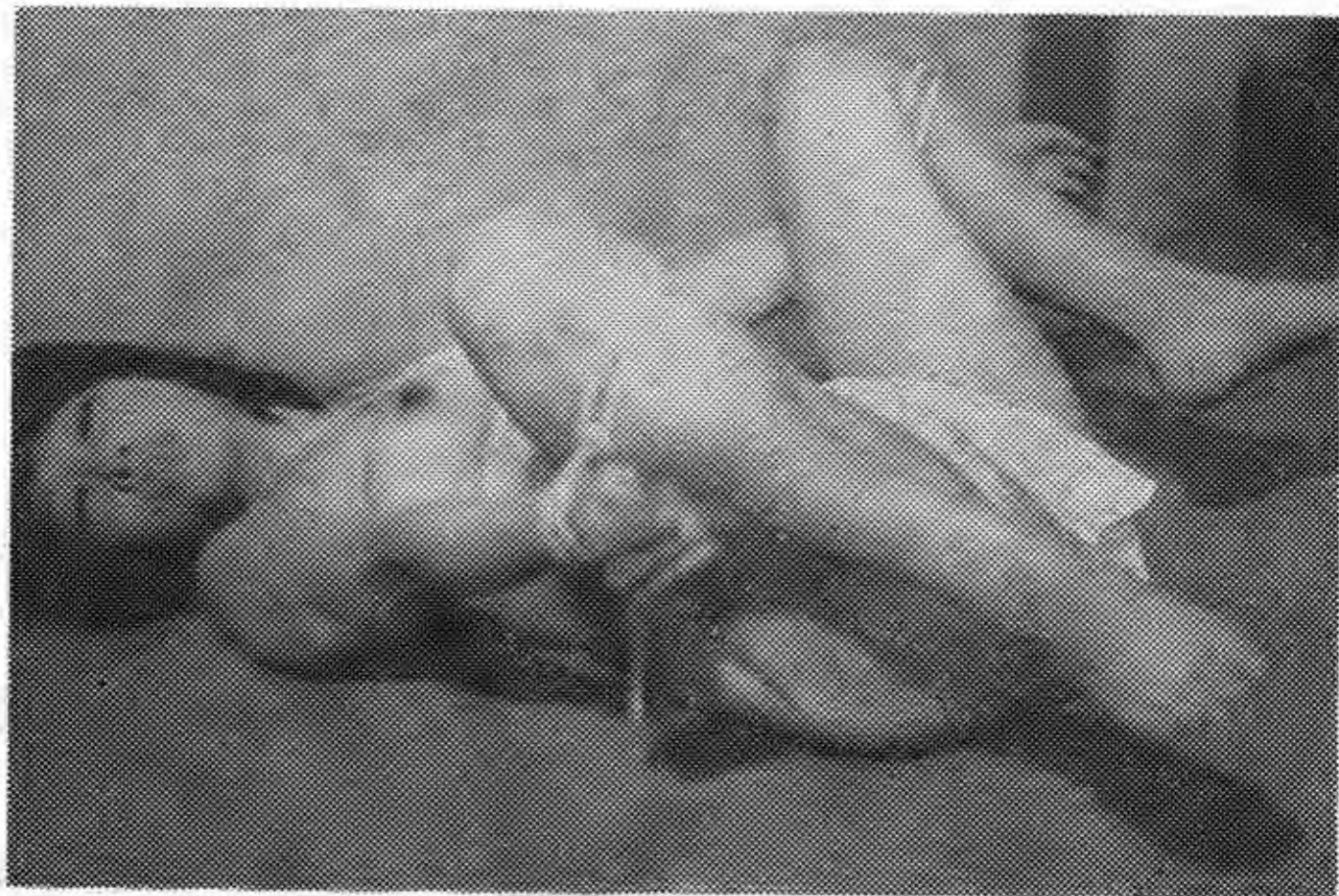
生きてゆく一縷の望みは、夫恋しさ、逢いたさの一途でございました。

思いあぐねて、友達を介して、それとなく電話してもらいましたが、新田家では用心深く、夫を出しませんでした。

もう気の狂いそうな夫恋しさに、深夜、駒込の家の辺りを、そつとろつき、若しや夫の英雄が、出てきはしまいかと、万が一の僥倖をたのんで彷徨したこともございました。

当てもなく家の表をさまようその頃、夫の身辺にも、激しい嵐が吹き荒れていたことをあとになって知ったのでございます。

夫は全責任を一身に負って、すべては自分の所業で、妻には何ら責任はないと、必死に抗弁したそうでございますが、昔気質の江戸



ッ子で、老舗と伝統に生きる、養父母や祖父には、こうした行為は、所詮、理解出来る道

理もありません。

家名を汚し、大事な信用を失墜したと、果ては廃嫡問題さえ、持ち上がったのでございます。

私達のこうした秘密が、新田家のみで納まれば、プライバシーの問題で養父母達も、かくまでに猛りたなかつたのでございましょうが、得意先の一小売商から明るみに出ただけに、古い老舗の、のれんを誇る店にとっては、家名にかかわる大問題だったのでございましょう。

徹頭徹尾、譲らなかった夫は、とうとう勘当同様になって数カ月後、何もかも捨てて裸一貫で新田家を出たそうでございます。

母方の妹夫婦の子が、新たに養嗣子に迎えられ、家名を守るといふそれだけの理由で、夫は新田家から縁を切られたのでございました。

養子であつたにしても、幼い頃から、長い年月の親子関係は、実子同然だったのにとすると、夫のこの英断はひたすらに、私に心を走らせた挙句の、破局のようにも思われるのでございました。



こうして私達は、離れ離れになって、お互いに消息のとれぬまま、半年、一年と、むなしく経過していったのでございます。

裁断やミシン踏む片時にも、鴛鴦の甘き契り結んだ、夫恋しさの想いは燃えさかるばかりで、独り寝の枕を濡らしては、今頃夫は、いずこの野辺で、佗しく暮しているのかと思うと、矢も楯も堪まらず、もうむしように口では云い尽せぬ愛恋の情にかり立てられるのでございました。

もう一人の住込みのKさんも、私の事情に同情してくれまして、何かと慰めてくれましたが、その同情が、いつしか奇妙な女同志の肉欲の刷け口となってまいりましたのも、この頃でございました。

きつと夫も、私と同じ思いでいるに違いはない——。そんな確信を持って、私は暇さえあれば、夫の友人や知合いに、伝手を介して、電話したり、消息を探ってもらったりしましたが、相変わらず夫の行方は、沓として判らなかつたのでございます。

あれから丸一年経って、あの忌わしい体育の日が巡ってきました。

私は、このいまましい日の記憶を消そうとするかのように、夕食の時、余り嗜めぬ洋

酒をのんだりしまして相住いのKさんから、不審がられる始末でした。

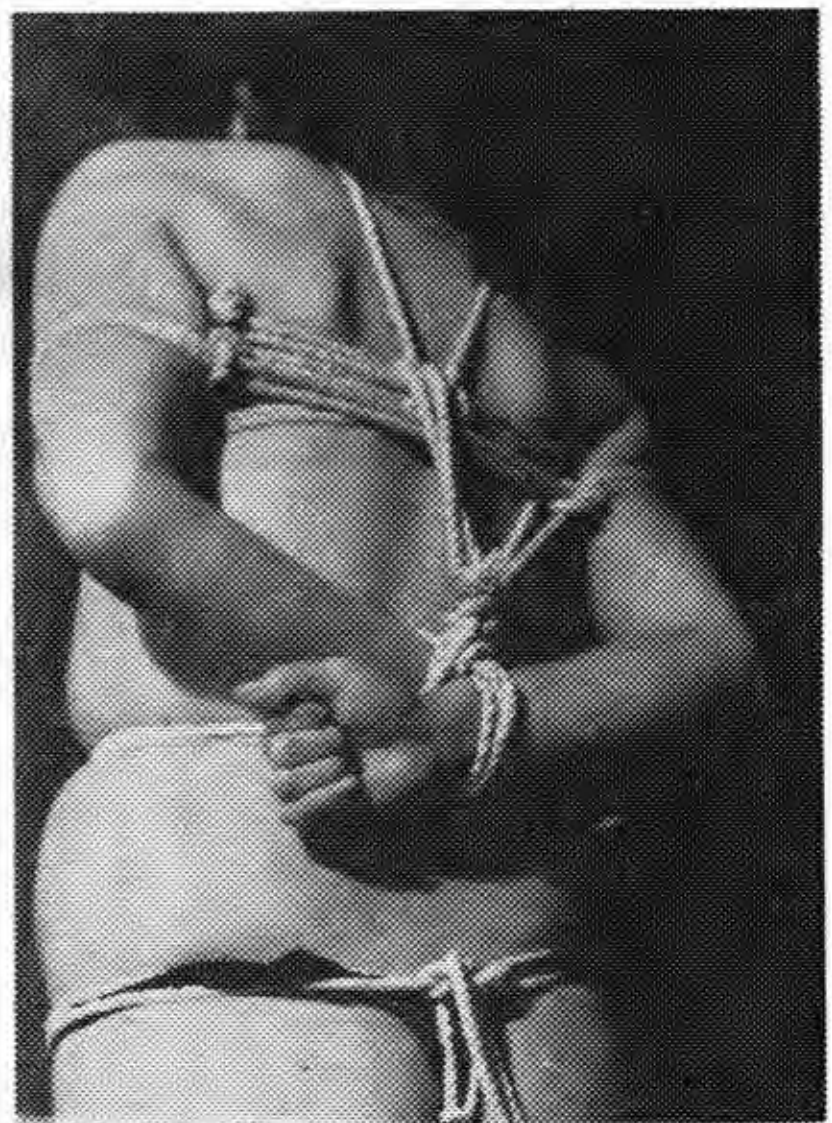
優しく肩を撫でてくれるKさんの唇が、私の乳房を求めてまいります。

女同志の慰めに耽ける今日、此頃。いつしか私はブラウスの胸を、豊かな乳房を押し出してKさんの唇に任せておりました。

三十二才のKさんはレスピアンで独身。私が住込んだ時、早くも魂胆があつて近付いたよう、性目覚めていた私の肉体は、ごく自然に彼女の誘いをうけ入れ、お互いの体を燃やし合つて、私は夫不在の満ち足りぬ佗しさを紛らわせるようになっておりました。

世の中には、目に見えぬ、奇しき縁の糸があるものでございましょうか。

奥まったプレハブ住宅の、住込み住居の二人きりの気易さで、Kさんと裸身を絡ませて酔余のみだらごとに耽つておりました時、名



古屋から長距離電話がかかつて参りました。何事ならんと慌てて裸身に、じかにガウンを纏い、受話器を耳にすると、電話の主は、大学時代、夫と仲の良かったIさんから、薬にも縋る思いでIさんにも頼んでありましたが実を結び、夫が名古屋に在ることを突き止めて、急拠、知らせてくれたのでございました。

捨てる神あれば拾う神あり——。その時の、私の飲びは如何ばかりか、お察し下さいませ。



その夜は、もう興奮で眠れませんでした。

同僚のKさんも、よかったよかったと、何度も祝福してくれては、唇と唇を合わせ、夜更けに起き出して乾盃し、全裸で、まるで気が狂ったように踊ったりしました。

とうとう一睡もせず、Kさんも一緒に、眠らずに起きていて交際<sup>つきあ</sup>ってくれました。

Kさんの横顔にフトよぎる淋しいかげり。レスビ안의恋仲も、もうこれっきりになることを知って、Kさんは内心、悲しかったのでしょうか、そのことは一言も口に出さず、唯もう有頂天の私に、調子を合わせてくれていたようでございます。

新幹線の一番列車に乗り込んだ私の眼は懼らく不眠のため真赤に充血していた事でしょう。一睡もしていないのに不思議に眠くなく、むしろ頭は、いよいよ冴える一方でございます。



す。

夫の独り住むアパートの、熱田区伝馬町まで、見知らぬ街をタクシーで飛ばしました。

この日のために溜めたお金が二十数万円。私は懐に、しっかりと抱きしめ、未知の朝の街を、たずねたずね、歩き廻りました。

彼は、この近くの某車輻工場で働いているそうで、友人のIさんが名古屋へ出張中、大須観音でバツタリと出くわしたそうでございます。それこそ私達をあわれんでの、観音様

のお引き合わせでございましたか。

やっと探し当てたアパートでしたが、管理人に訊ねると既に出動したとのことで、勤め先の車輻工場をきき、面会を求めました。

丸一年振りの劇的な邂逅——。もう口もきけず、唯々鼓動が切迫し、涙の対面でございました。

夫は東京で、誰かに出会うことを嫌い、ほとぼりの火が消えるまで、身を隠しているつもりだったそうです。

狭い四帖半の、殺風景な部屋の小机に、私と夫の、仲良く肩を並べた写真が、小額にはめられて飾ってありました。

一言も云ってもらわなくても、その一事で私は夫の変わりなき愛情を確認したのでございます。

夫の、アパートの一室で過ごした蜜よりもなお甘い、耽溺の四日間——。

どんな豪華なホテルよりもその部屋はよくフワフワしたマットレスや羽布団にもまして夫の体臭の沁み込んだ煎餅布団が嬉しく、懐かしく存じました。

近くからテンヤものを取りよせ、たべては寝て、もう溜りに溜った激情をドツと吐き出すだけの床ぐらしが丸三日間つづき、すべての思考力は失せて、頭の中はカラッポになってしまいました。

体全部がセックスの塊となって、絶頂を過ぎても飽くことなく、又しても次の絶頂を求めて、まるで色情狂の様に、ひしと夫にしがみついております。

余りにも激し過ぎる交接の連続――。

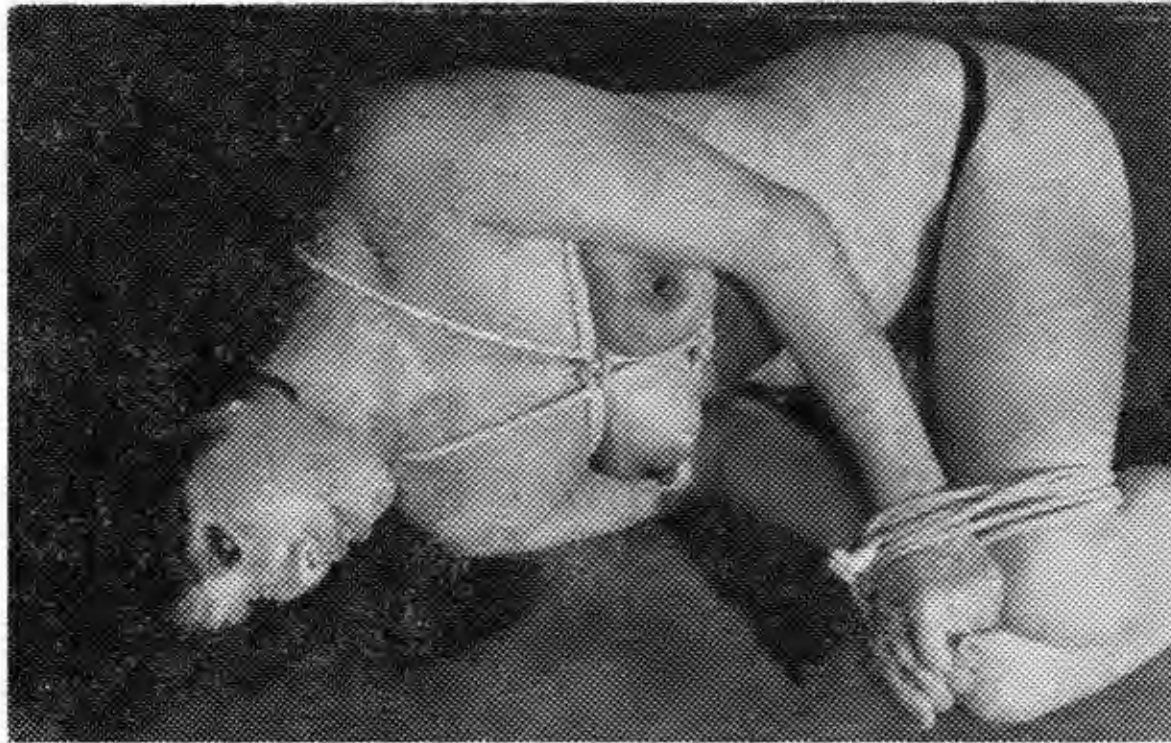
それほど激しい営みを続けながら、どうしたわけか、夫は奇妙に嗜虐的なプレイを求めませんでした。

「縛ってくれないの。どうして苛めないの」と、官能に五感をくねらせて、夫の耳許でささやくと、

「今はそれをしたくないのだ。ゆう子を求めるだけで精一杯の気持なんだよ」

と、あの好きだったSMプレイを口にするさえ辛そうでした。

思いがけぬ別離の原因、新田家との断絶。そうしたことがすべて、プレイの結果の、奇クの写真が端緒と思えば、やっと一年振りにめぐり合った今、それを口にすることは、何となく憚られたのでありましょうか。



餓えた狼は何でもガツガツとくらいます。いい肉の選り好みするだけのゆとりがないからです。

私と夫の、奇蹟的な邂逅は、セックスに餓えきった牝、牡二匹の餓狼が、お互いの骨ま

でシャブリつくす貪婪さにも似ていました。性というたべものを選び好みする余裕もなく、ただ餓えてガツガツしていたのです。

いずれ性にも満足し、飽和状態を得て、夫の心に、SMプレイをとり入れるゆとりも戻ってくるのではないのでしょうか。

三日目、夫は私に一旦、東京へ帰るようにすすめ、身の振り方のつき次第、後を追って帰京すると申しますが、ここで別れたなら、再び又、巡り合えぬような危惧にさいなまれ私は駄々っ子のように頑張つづけ、翌日も居残りつづけました。

夫は逐々諦めて、会社へ私と一緒に出掛けわけを話して退社手続をすませ、アパートを引き払って、荷物は殆ど処分して、上京いたしました。

連れ戻してまいりましたものの、私とて住込みの身で、住居のあてとありません。

とりあえず、プレハブの私の部屋へ落着きました。Kさんが一緒では、甘い睦言も交わせず、どうしようもなく、一時、私の知合いの方の、裏の離れの一間を貸して戴き、早速適当なアパート探しに、毎日二人で歩き廻ったのでございます。

大東京に、今すぐ空いた適当なアパートは



おいそれとはなく、コーポや、高級マンションはあっても、びっくりするような権利金や家賃に手が出ず、それでも根気よく探した甲斐あって、一カ月目に、やっと今の二DKのアパートをみつめて、引っ越したのでございます。

二十数年経って、新田家を離籍した彼は、元の岸英雄にかえり、私も旧姓の米沢悠子から、三転して岸悠子に変わりました。

新たな第二の人生に一步、踏み出した私達は、今こそもう自由です。

何者にも邪魔されず、煩わされることなく我が道を歩みつづけることでしよう。

夫の嗜虐癖は最近、又頓に激しさを増してまいりました。

夜毎の耽美なまじわりに、大半SMのプレイが伴っているのは、私の願望も頓に強くなって、むしろ夫にそれを求めるからでございますか。

夫は秋になって、仕事の方も軌道にのれば関西方面へ温泉めぐりの旅をしようと、いつております。

私達の第二の新婚旅行のスケジュールの中には、未だお目もじしたことありませぬ、辻村様に出会っての、SMプレイも含まれて

おります。

勿論それは夫の希望ではございますが、私にしまして、SMカメラ・ハントで、しばしば誌上でお目にかかった辻村様が、どんな方か、お会いしてみたい気持ちで、心をふくませております。それも私にとっては、快いアバンチュールの一つで、かつて辻村様が、私をハントなさりたいと願われて、夫がお断わりしたことなど聞き及びまして、今の私は夫と一緒に、どのような羞恥のプレイであらうと飲んでお受けし、地獄の果てまでもついてゆくつもりでございます。

近頃、やっと一人前のドレスメーカーとして、新しいお店に勤めることが出来、彼も親友Iさんの紹介で、手堅い商社に採用され、収入も安定いたしました。

人間万事、塞翁の馬。禍転じて福となすという古言もございますが、私達はまだ若いのです。

幸福を掴んだ今の、夫と二人きりの楽しい生活——おそらく多分に、SMの激しいプレイが含まれていることでしょう。こんな生活が生涯づくことを希って、被虐の願望に燃える私の、赤裸々な手記を擱きます。

追伸

同封のフォトは、夫が適当に選んだものでございます。先にも申し上げましたように、私の掲載されました奇クが、全部ございませんで、或は以前に発表したものと、重複するフォトがあるやも存じませんが、何卒御諒承下さいませ。

フォトの中には、私の羞恥の部分削除しておらず、露出のものも混じっておりますが辻村様なり、編集部の方にて、適当に御処置の上、掲載下さって結構でございます。

運よくフィルムネガの方は、全部助かりました。夫が紙倉庫の奥の棚の、人眼につかぬところへ、隠しておいたのだそうでございます。

フォトとフィルムは、別々に保管するのがこの種の場合、常識だなんて申しておりますた。

最近、安くお友達から分けていただいた引伸機で暇さえあれば、せっせと夫はもう一度焼き直しております。

乾燥を手伝うのも、楽しい日課のひとつでございます。

——(おわり)——



銃殺刑を宣せられた女スパイ。執行の日は前夜からのドシヤ降りであった。

刑場まではかなり遠い。銃殺隊員は彼女をなかにはさみ、ぬかるみのなかをドロまみれとなって歩いていった。

死を前にした美女、冷笑して曰く

「あたしは幸せね。この雨のなかを帰らずにすむのだもの」

○

絞首台にひかれた美女。覚悟はしていてもいざとなると、さすがに脚がすくんで、どうしても十三階段をのぼることができない。こんな彼女に、刑吏がこうはげました。

「さあ、がんばって、なんとか上まであがるんだ。降りるほうは心配しなくともよい」

女囚は弱々しく答えた。

「そうね、片道キップしかなかったものね」

……惨酷ショート・ショート……

## 冥府よりの帰還

小倉 幸男

カット・室井亜砂路

ガス室の椅子に縛られた美女に、最後の点検を終えた刑吏が、ささやいた。

「いいか。いくらガスを吸うまいとしてみても、もう助かりっこないんだ。あきらめて、ガスが噴き出してから十を数え、それから思いきって深く息を吸いな。楽に死ねるから」

女囚は奮然として叫んだ。

「どうしてそんなこと知ってるの！ あんたが、そうして死んでみたっていうの！」

○

あの世への旅立ちには常に一方通行である。しかし……。

×

×

ここはどこだろう。いやにまっくらな一本道をどの位歩いたことか。ようやく前方に灯が見えて、人影もふたつ。ほっとして近づい

ていったわたしは、相手をはっきり認めて驚いた。赤オニと青オニではないか。

「やあ、美しいお嬢さん、いらっしやい」

案外なやさしい声に、力を得たわたしは聞いてみた。

「ねえ、ここはどこなの？」

「ここは地獄の入口さ」

地獄だって？ そうだ、そう云えばわたしは絞首刑になったのだわ。

すくむ脚で十三階段をのぼり、頂上でロープを頭にまかれ、踏板がボタンとおち、絶叫はググッ！ という窒息音と消え、すさまじい苦しみと共に、頸はキュウツと締め……

「これが、現在のきみの姿だよ」

示された鏡をのぞくと、絞首台からブランと吊りさがっているのは、まぎれもないわたし。それにしてもひどい姿。目はうらめしそ



うにみひらき、鼻からは見事な二本棒。口からドロツとしたよだれと共に、舌がダランとアゴの下までたれさがって……。絶世の美女といわれた、わたしもカタなしだ。

絶命までのタイムは、三十二分を示している。普通は十二、三分と聞いていたのに。

「大王がおまちだ。こちらへどうぞ」

大王とはエンマ様か。相手が誰だろうと、この二十才の若さと美ぼうがあれば、決しておそれることはない。シャバではこれがアダとなって、絞首台にのぼる羽目になったが、すくなくとも地獄の第一印象はわるくない。案のじよう、大王は極めてやさしく、侍女にしてくれた。

死刑囚は正式の埋葬は許されず、靈魂は冥府にとどまるわけだが、非美女や年長者は労働を命ぜられ、わたしのよう侍女になれるのは、五十年か百年に一人だという。

ただ不満なのは、わたしが三十二分もジタバタもがいていたと云っても、誰も尊敬してくれないことだ。もっとも、ハリツケ、火あぶり、股裂きをうけた大先輩ばかりだから、絞首や斬首は死刑のうちに入らぬらしい。

農業用の押切台に首をはさまれ、上からゴシゴシやられてやっとな首がおちたという、斬口がギザギザになっている斬首女囚でさえ、ちっともハバがきかないようだ。

「私の刑はね、両手両脚、それも首にまで綱

を結び、その先を五頭の馬につないで、同時にムチ打ち、五つの方向に走らせたのよ。どこがまっ先にちぎれたと思う？」

「さあ、クビが最初にもげたんじゃない？」

「ちがうのよ。面白いことに、全部同時にバラバラになったの。四肢はそれぞれ馬についたままだこまでも引きずられ、クビは途中ではずれてコロコロころがり、胴体だけもとの位置にデーンと居すわっていたわ。しかもこのあと、四肢と胴体をブツ切りにし、皮をはいで、大釜で煮つめて脂肪をとり、苛性ソーダを加えて、石ケンにされてしまったわ」

これはひどい話だ。しかもこれが序の口、あとからあとからものすごい話がでそうだったが、突然赤オニに呼びだされた。

「どうしたのよ、何の用？」

「気の毒、といってよいかわるいか、厄介なことになった」

「だから、どうしたのよ」

「実は王妃がきみをみてね、ヤキモチからか現世に送り帰せというんだ。大王は恐妻家でね、しぶしぶ承知させられた」

「それで……？」

「きみを締め生かすことになった」

あつというまに赤オニの両手がぐうつとせまり、白く柔らかい咽喉をおしつぶさんばかりの力で締めつける。抵抗しようとしたわたしの両腕は青オニによっておさえられた。

息がつまる。苦しい、苦しい。

「殺られる、いや、生かされる？ ナンカ、ヘンダワ……」

×

×

「死刑囚〇七五号、絶命しました」

絞首台にプランと吊りさがった二十才のすばらしい美女。だがひどい姿だ。目はうらめしうにみひらき、鼻から見事な二本棒。口からドロツとしたよだれと共に、舌がダランとアゴの下までたれさがっている。

「絶世の美女も、こうなるとカタなしだな」

「全く、運もわるかった。絶命まで三十二分か。ジタバジとずいぶんもがいていたな」

「でも、今頃はエンマ様の前でしようね。ああ、五分経過しました」

「よし、おろせ！」

ロープをゆるめると、美女の身体が床におりてくる。まず両脚がストンとついた。次いでドサツ！と背後に仆れる。刑吏が頸にしかたく食いこんだ輪をはずす。白く柔らかい咽喉に締めあとも痛々しい。ふと興味を覚えた刑吏が、そのあとに己れの両手の指をあて、ギューと締めてみた。そのとき……

「ウッ！ ウーン」

周囲の全員がゾーと寒気だった。

確実に絶命したはずの、美しき女死刑囚の唇がふるえ、わずかに身うごきしたのが認められた……

懸賞入選創作

# フラスト族の叛乱

(中)



カ ャ ト ・ 須 坂 旭

城 崎

恭 介

三

宮井家のベルを押すと、トランシーバーから、

「どなた？ 畑先生ですか？」

と、いう声が出て、やがて、ホットパンツを穿いた若い女性が門扉をあけにきた。

「宮井伊万里です、よろしく」

と、淑かに頭を下げる風情は、いかにも育ちのよい名家の令嬢をおもわせて、電話からうけた印象とは違っていた。

目鼻立ちのくっきりとした、足のすらりとした長身で、胸の膨らみや、腰の張り具合に、まだ堅さが残っていたが、山本リンダに似たいかにも清純な美女だった。

「どちらかへ、お勤めですか？ それとも、



学校？」

と、訊ねると、

「O文化短大でデザインの勉強をしています。十九才です」

と、現代ッ子らしい、ハキハキした答が、かえってきた。

この、まぶしいばかりに鬨りのない妙齡の美女が、あのように陰湿なサディストであるとは、どうしても信じられなかった。

応接間に彦六を通すと、伊万里は姿を消して、しばらくは空虚だった。

スウェーデン製という豪華なソファに腰をかけ、さわやかな水蓮の風情を描いた日本画を眺めていると、いかにもゆったりとしたくつろいだ気分になり、先刻の電話の内容が、嘘のようにおもえた。

いかにも充ち足りた表情で、正志クンを膝に抱きあげ、頬ずりしながら、やんちゃ坊主の面倒をみていた加奈子は、富貴な若奥さまの気品にあふれ、母性愛そのもののように輝いて浮かんできた。

泰西名画から抜け出たような加奈子が、この瀟洒な邸の中で、いま淫虐な責め苦を味わっているとはどうしても信じ難く、想像すらできないことだった。

しかし、突然ドアがあいて、当の加奈子が茶菓をのせた盆を捧げて唐突に入ってきた。瞬間、彦六は次元のちがう空間に、放り出されたような衝撃を覚えた。

加奈子の上半身は、裸だったのだ。

いや、もっと正確にいうならば、加奈子の白い裸身を覆っているのは、腰に巻きついた小さなエプロン一つきりだった。

「自分で呼んでおいて、なにを恥かしがってるのさ。ぐすぐすしてないで、あんたの恋人にあいさつなさいよ」

加奈子のすぐ後ろについてきた伊万里は、さすがに立ちすくむ半裸の夫人の肩口を、こづき上げるように押して、冷厳な主人のような口をきいた。

「いらっしやいませ……」

耳たぶのうしろまで赤くして、加奈子は目を伏せたまま、慄える手で茶菓を卓においた白い指先がわななき、澄んだ紅茶が少さく波うった。

「先生、加奈子ったら、エッチなのよ。こんな恰好で、お目にかかりたいって、むずかるもんだから……」

と伊万里が、からかい半分にいいかけると加奈子はキツとなって、

「ちがいます！」  
と、抗議した。

ここにくるまで、どれだけ責苦にあったのだろう。胸から首、首から腕と、滑らかな裸身に縦横無尽に赤らんだ縄目の痕が刻みこまれ、さっきのクリップ責めの痕だろうか、どっしりと盛りあがった形のよい乳房には、青紫色の痣が無数について、無残だった。

「カッコつけんじゃないよ、いくら恋人の前だからといったってさあ」

伊万里は、女番長のような口調になって、いきなり加奈子の髪を掴みあげると、仰向いた顔に平手打ちをかませた。

加奈子の反りかえったのどのあたりに、数条の痙攣が走り、「く、く、くウ……」と、声をしのばせて哭いた。

「へえ。今日はまた、いやに甘ちゃんなのねえ。やっぱり、恋人のいるとことだと、根性なくしちゃうの？」

伊万里は、加奈子の髪を掴んだまま、どしんとソファに腰かけた。髪をひきずられて、加奈子は絨氈の上に崩れおち、伊万里の巧みな誘導によって、伊万里の膝で両頬をはさみつけられ、顔を彦六のほうへ向けたまま、身動きならぬ形に、おさえこまれてしまった。

倒れたはずみにエプロンが振れ、ドキッとした彦六の視線が走ったのを、気配で感じとったのか、加奈子も反射的に手を動かしかけた。

「おとなしくしてなさい。もうじき、何もかも、鑑賞していただこうというのに、それっぽっちのこと、どうでもいいじゃない」

伊万里は、撫んだ髪の毛を扱いて、冷酷に制止した。

加奈子は、自分の顔を伊万里の膝にあずけて、横坐りに膝をそろえ、観念したように目を閉じた。

「先生、この女はね、死んだお兄さんの玩具だったの」

伊万里は、ペットでも扱うように、加奈子の顔に手をかけて、鼻をつまんだり、唇をひねったり、休みなく玩弄しながら、飼犬の話でもするように、加奈子のことをしゃべりはじめた。

「どう、なかなか美しい牝犬でしょ。山形の田舎から、家へお手伝いさんに来たのを、お兄さんがスカウトして、犬に仕込んだの。あれは、いくつの時だったかしら？」

「十六です」加奈子は、目を閉じたまま、答えた。

「そう、十六の春に、東京に来たのね。あの頃は、あなたも若くて、きれいで、雪の精のように、すばらしかったわ。あたし、やきもちやいて、何度、あなたを苛めたか、わかりやしなかった……だけどあなたは、決して出て行こうとしなかった。いいえ、お兄さんが離そうとしなかったのよ。あなたを愛していたから……牝犬のように、とても愛していたから……」

伊万里は、拇指で加奈子の鼻頭をおしあげて、豚のように変形させた。「あちッ」と、口の中で声をあげたが、加奈子は堅く目を閉じて、美貌の凌辱に耐えていた。

「かわいそうに、あなたは徹底的に犬の作法を仕込まれて、正志ちゃんという坊やまで生みながら、お兄さんに先立たれてしまったのよ。不運な牝犬ね……」

と、コトバつきは同情的だが、鼻頭をこねくりまわす嗜虐の度合いは、次第に加速度を帯びて、いきなり撫んでいた髪の毛をふりほどくと、肩口を邪険に小突いて、

「さあ、ワンワンしておみせ！ お前が、どんなに浅ましい犬の恰好してみせるか、先生にみていただくのよ」

と、加奈子を腹這いにさせた。

加奈子は四つん這いになって、一瞬、悲しげな視線を走らせた。目尻にたたえた涙滴がせきを切ったように豊頬に溢れ、加奈子が美貌であればあるほど、動物的なポーズの被虐感は昂まった。

「さあさあ、歩いたり、歩いたり……お尻をうんとあげて、ワンと吠えて……いいっていうまで、やめちゃだめよ」

と、伊万里にせきたてられて、加奈子はあきらめきった従順さで、四肢を張って、絨氈の上を這いだした。

膝を伸ばし、腰を高くあげた、犬独得のスタイルも、手足のすんなりした加奈子がやってみせると、犬というよりも蜘蛛のように見えた。

「どう？ お気に召しまして、先生……」

伊万里は、慣れ慣れしく彦六のとなりにすわると、甘えるように彼の片腕をとった。

「あの歩き方は、兄の考案なんです。珠のように、あの女を、愛していたのね、膝小僧をこすって、汚くしちゃいけないから、ああいうハイハイのさせかたをしたんですって……男の人って、とっても思いやりがあって、残酷なのね」

そういいながらも、卓や椅子の間を這いま



わる加奈子に、「もっと、お尻をあげて」とか「ひよろひよろしちゃだめじゃない」とかひっきりなしに声をかけた。

縄一筋かかっていないのに、これは残酷きわまる責めだった。

部屋を一巡する間に、加奈子の白い肌は汗と脂に濡れて、ぬらぬらと光沢を帯び、柔らかな紅唇をつく息は、犬のような喘ぎとなった。高々と聳えたつ臀肉のくねりは、むしろ堂々としていたが、足がもつれて、膝を折るたびに、白い双丘も椅子の谷間に陥没した。

「ハイ、一休みさせたい……おすわり」

と、声をかけると、加奈子は彦六の足下にしゃがみこみ、調教された犬のように、手を前に支えた。

聡明そうな広い額に、数条の青筋が盛りあがり、額からしたたり落ちる汗は、鼻梁の両脇を流れて、頤から豊胸まで濡らしていた。

彦六は、正視に耐えなかった。さりとて、責めの終了を望んでいたわけではない。どっちつかずの、矛盾した気持の整理がつかかねて、しきりにせき払いを繰り返した。

「先生は、お前の芸当が、もっと見たいんだって」

伊万里は、彦六の心を読んだのか、新しい

命令を下した。

「チンチンしてごらんよ、ビスケツトあげるからさ」

さっと、加奈子の頬に羞恥の色が走って、容易に腰をあげなかった。

「チンチンよ。簡単じゃない。さあ、やってごらん」

コトバつきは、おだやかだったが、癩癬があるらしく、伊万里の白い額にも、青筋が立った。

「やれないの？ ほんとうに、やらない気なんだね」

伊万里は、すっと立ちあがって、部屋の隅の電話器に向かった。その行方を、不安そうに見送っていた加奈子は、伊万里が、受話器をとりあげるのを見て、悲痛な顔をした。

「やめて。やりますから、正志を呼ぶのだけは、やめて！」

「そんなら、はじめから逆らわなきゃいいのに……」

伊万里はニヤニヤしながら戻ってくると、してやったりと彦六にウィンクしてみせて、「正志チャンは、あたしの家にやってあるんです。こんな女でも、こどもにへんなどこ見られるのだけは、いやらしいわね。電話であ

の子を呼ぶっていうと、必ずいうときくんです。《花と蛇》の鬼源や川田のやり口をまねしてみたら、大成功だったわ」

と誇らしげに説明した。

女子大生とは思えない奸智にたけたやりかたに、彦六はおどろいた。鬼源や川田の悪らつな手口は小説の上だけだとおもったのに、こんな良家の令嬢まで、母性愛を逆手にとった責め口をつかっているかと思うと、少なからぬ恐怖を覚えた。

「それじゃア、うちのワンワンちゃんには、この上で芸をしてもらいましょうね」

伊万里は、さっさと卓上の茶碗や灰皿を片づけはじめた。

加奈子の顔色が、すっと蒼ざめるのが、見ていて分かった。

彦六は、伊万里のペースにはまって、もはや拱手傍観するばかり……。

「おとなしく芸当しておけば、こんなにひどい目に会わなくても済んだのに……パカなワンワンちゃんねえ」

そんなことをいいながら、おすわりしたままの加奈子の背後にまわると、手にした竹の鞭で、剥き出しの背中を小突き、卓の方へ追いたてた。

卓に加奈子がよじのぼり、眼と鼻の先に、量感豊かな女体が鎮座すると、彦六は眼のやり場に困った。毛穴の一つ一つが見分けられるほどに接近すると、加奈子の激しい鼓動までが伝わってくるようで、にわかに彦六の動悸も昂まった。

「さあ、先生にチンチンしておみせ」

伊万里は、加奈子の背後にいて、サーカスの猛獣つかいのように、竹の鞭で加奈子の両肘を小突くと、手首を乳のところまで引きあげて、幽霊のように前へ折った。

人体チンチンである。

「こんなものは、いらぬわね」

伊万里は、加奈子の羞恥をおおるために、エプロンの紐に手をかけた。「あっ」と一声叫んだものの、卓上の犠牲は、美しい眉をひそめて、深い縦じわを刻みつけたまま、唯一の着衣の引き剥がされる瞬間を、懸命にこらえ抜こうとしていた。

「どう？ さっぱりしたでしょ、ワンワンちゃん」

伊万里は、撈りとったエプロンをボロくずのように放り出すと、加奈子の前に回った。そして、齒の根をわななかせ、膝頭をすり合わせて羞恥の極致をさまよっている加奈子に

あらためて嗜虐心を唆られたのか、「こら、カンニングはだめよ。トイレに入った時と同じ恰好するんだって、お兄さんから教わったはずよ」

と、竹の鞭を駆使して、むちむちした太腿を割らせるのに、夢中になった。

彦六は、眼前に展開する開陳ショウの妖しい熱気にあてられて、呆けたように眼を血走らせたまま、白い肉のうごめくさまを、別の物体のように凝視しつづけた……。

二階の奥の一室が、責め部屋だった。

加奈子の夫が、金にあかしてつくったのだらう、四囲は防音壁に守られて、放送局のスタジオのようだった。

淡い間接照明をうけて、木馬、首枷、鞭打ち台、天井から下がった鉄鎖、磔柱等々が、黒々と横たわり、さながら中世の拷問室に入ったような趣があった。

中央のマットの上では、加奈子が俯伏せになって、手足を大の字に括りつけられたまま小休止していた。

先刻まで、加奈子の反りかえらせた頤の下におかれ、そういうポーズをとりつづけることを余儀なくさせた、生け花の剣山のお化け

のような鉄の棘はようやくとり除かれ、冷たいマットに頬を埋めて、加奈子は半失神の状態でだった。

デリケートな起伏を描く背中にも、逞しく盛りあがった臀丘にも、無数のロウ滴がこびりつき、ロウソク責めの凄まじさをものごといていた。

応接間の卓上で、あられもない開陳ショウを披露したあと、加奈子は二階に追いあげられ、磔、鞭打ち、両手吊り、逆吊り、浣腸、ロウソク責めと、息をつく暇もなく伊万里に責めたてられて、さすがに憔悴の色が濃かった。

小休止を宣言して、軽い食事をつくるからと、階下に伊万里が降りていったあと、彦六は、加奈子の頭のところにすわって、額のあたりにぬらぬらと光る脂汗を、ハンカチで拭きとってやった。

軀全体が脂と汗にまみれ、ちょうどオリーブ油を塗りたいようなように、てらてらと照り映えるありさまは、異様な美しさだった。

「せんせえ……」

しばらくして、瞑目したまま、加奈子はハスキーな声をだした。哭き、叫び、咆え、唸り、叫喚の限りをつくしたので、加奈子の声



は、痛々しく嘔がれていた。

「ごめんなさいね、ご病気のところを、お呼びたてして……」

「病気?……」彦六は、胸を衝かれた。「どうして知ってるんです、そんなこと」

「お宅にお電話する前に、事務所の方へ電話してましたわ、伊万里さん……そうしたら、ご病気だっというでしょ。先生のお宅に電話しないでほしいって、泣いてたのみましたのよ、あたし……」

加奈子は、しみじみとした優しさをこめていった。

「いやあ、なんでもないんです」彦六は、つとめて快活に答えた。「ちょっと、家にこもってやらなきゃならん仕事がありましてね。仮病なんです、あれは……」

「仮病……」加奈子は、はじめて薄目をあけて、微笑した。「まあ、先生ったら、加奈子をおどかして、ひどい方ね!」

「もしかしたら、恋患いだったかもしれまんよ」

彦六も、冗談めかして、本心を吐露した。

「あら。どこかに、いい方がいらっしゃるんですか?」

「あなただといったら、どうします? 加奈

子さん……」

彦六は、手足の自由を拘束されているのをよいことに、予想以上に大胆になり、横向きになった加奈子の頬を、指の先で突いた。

「嘘! あれから、何もおっしゃってこないくせに、お世辞いってもだめ。毎日々々、先生がきて下さるか、正志と二人でまっましたのに……」

加奈子は、本気になって、涙ぐんだ。

「いやあ、申しわけありません」彦六は神妙に答えた。「もとはといえば、ぼくが悪かったんだ。あなたの呼びかけをまともにうけてのこのお宅にやって来たりしたから、あなたがこんなひどい目にあわされることになったんだ……まずかったな、ぼくが」

「ちがいます」加奈子は、むきになった。

「先生がいらしても、来なくても、あたしの境遇に変わりはありませんわ。だって、あたしは、伊万里さんに相続されたんですもの、主人の遺産として……」

「遺産?……そりゃひどいや!」

「いいえ。あたしには、分相応です。貧しい農家の娘に生れて、今じゃあ東京で、こんなにぜいたくな暮らしができてるんですもの。奴隷だっていいんです、正志が、ちゃんと育っ

てくれさえすれば……」

マットに頬を埋めて、加奈子は、とめどなく涙を流した。さめざめと哭いた。

四肢を張られて、床の上に磔になった無残な姿が、薄倖の美女の悲しい運命にも思われて、厳肅に映った。

「おやまあ、恋人同士、よろしくやってるわねえ」

折悪しく、伊万里が戻ってきた。

まるで、キャンプかピクニックの食事のよう、バスケットにパンや缶詰をつめこみ、ジュースの瓶を半ダースも抱えこんでいた。「さあ、腹ごしらえをしなくちゃ。今晚は持久戦ですものね。がんばらなくちゃ、がんばらなくちゃ」

と、CMソングを口ずさみながら、マットの周りに、バスケットの中味を拡げた。物見遊山にでも来たような、浮き浮きした調子である。

「こんな恰好じゃあ、具合悪いわね。奴隷のお食事は、こういうポーズがいいかしら」

と、伊万里はクリクリと瞳を動かして、同意を求めるように彦六の顔を覗きこんだ。「食事の時ぐらい、自由にしてあげたらどうです。ぼくたちはプレイをしてるんですよ。」

「もしも、プレイじゃなかったとしたら、犯罪になりますよ、虐待罪……」

彦六は、有閑令嬢の残酷な遊びに、いささか食傷したと、加奈子への憐憫の情が入り混じって多少トゲのあるいいかたをした。

「あら、先生は、奴隷に人格をお認めになりますの」

勝気な伊万里は、挑戦してきた。

「奴隷といったって、お遊びの上のことだけで、加奈子さんは義姉さんなんですよ、あなたの……」

「ちがいます。あたしの所有財産よ」

「あなたがたは、狂っておられる。人間が人間を財産にするわけには、いかないんだ。十八世紀じゃないんだから……」

「ところが、この女は、正真正銘のマゾなのよ。先生は、何か誤解してらっしゃるようだけれど、奴隷になりたいって、あたしに縋りついてきたのは、この女のほうなのよ。自分から、お兄さんの遺産として相続してもらいたいって……」

「嘘だ」

「嘘じゃありませんわよ。この女にきいてもええ、わかることだわ」

伊万里は、足下に俯伏せになった加奈子の

背に跨ると、髪の毛をつかんで、おもいきり、顔を上げさせた。眉間に縦じわをよせて激痛をこらえながら、長い睫毛を閉じ合せた目尻からは新しい涙がしたり落ち、反りかえった、のどの奥から嗚咽がもれた。

「さあ、泣いてなんかないで、いってちょうだいよ。お前が、奴隷の気持を、ちゃんといっておかないから、あたしが誤解されるんじゃない……」

伊万里は、痾癪をおこして、加奈子の頭をぐりぐりこねまわしながら、責めたてた。

「い、い、います……」

加奈子は、泣きながら、いった。そして、頭髮をつかまれて、ぐいと顔をもちあげられると、まっすぐ彦六のほうを見つめ、涕滴をキラキラ光らせながら告白した。

「伊万里さまのおっしゃる通り、あたしのほうから、奴隷にして下さいと、お願いしたんです。先生……虐待でも何でもありません。あたしは、よろこんで伊万里さまに責めていただいているんですから……あさましいあたしを、笑って下さいまし、先生……」

そういいきると、滂沱と涙を流しながら、不思議な静謐が甦ってきて、濡れた瞳の奥にいつか見たアルカイックな微笑が、じわじわ

拡がりつつあった……。

——これが、マゾなんだ。

彦六は、戦慄的な感動を覚えた。

責め椅子にかけられた加奈子を挟んで、山賊の酒盛りのような食事が始まっていた。

がっしりした檜の肘掛椅子の背に尻を向け加奈子は仰向けにされ、肘掛のところ、手と足が一緒に括りつけられたので、軀は二つに折れ曲がり、首は逆さまになって、虚空に垂れていた。

辻村隆好みの悦虐縛りである。

伊万里は、若い娘らしく食欲旺盛で、自分のつくったサンドイッチを、もくもく平らげながら、時おり噛みくだいた残りがすを、まるで虫に餌でも与えるかの如く、指先からませて、加奈子の口に押しこんだ。

「先生、ごらんになってよ。逆さまになっていても、食道に入っていくものねえ」

伊万里は動物実験でもするように、ようやくのこと食物を嚥下する加奈子の様子を、不遠慮に観察していたが、やがてのど首を抑えてせきこませたり、舌をフォークで抑えつけたまま嚥下を強要したりして、間断なき玩弄を加えて、たのしんでいた。



イメージギャラリー 『ともしび』 志羽利也



「先生も、たべさせてもらんなさいよ」  
まるで動物園のサルに餌でもやるような、  
気軽な調子でいう。

彦六が、サンドイッチを千切って、くわえ  
させようとすると、

「だめだめ。噛んでやらなきゃ、のどを通り  
やしないわ。まるで赤ちゃんみたいに、世話

ばかりかけるんだから……」

と、むりやり、彦六の口に含ませた。

「いいわねえ、ベビーちゃん。パパが噛み  
噛みしたのを、たべさせてくれるんだって。

さあーんと大きなお口あけて、まってまし  
ようね」

やさしいコトバとはうらはらに、床を掃く

ように垂れ下がった加奈子の髪を、二つに振  
り分けて、力まかせに引きずりあげた。

「い、い、いたい！」

予期せぬ強襲に、さすがの加奈子も、身を  
ゆすって跳いた。

「ほらほら、せっかくたべさせていただくの  
に、いい顔しなくちゃ、だめじゃない。ほう  
ら、いい顔、いい顔。ニコッと笑って」

伊万里は、赤んぼでもあやすように、ペロ  
ペロバアをしてみせて、苦痛に顔を歪ませる  
加奈子をからかった。

「この赤ちゃんたら、ちょっとむずかっ  
けど、仕方ないわね。先生、たべさせてやっ  
てよ」

と、伊万里に促されて、彦六は自分の指に  
噛みくだいたサンドイッチを塗りつけ、加奈  
子の口元にもっていった。

加奈子は、真赤な顔で激痛をこらえなが  
らも自ら紅唇をほころばせて、羞じけうが如く  
甘えるが如く、パンをのせた彦六の指先を口  
に含んだ。たちまち、ぬめぬめと生温い舌が  
からみつき、彦六の指先を刺激した。別な生  
きものようにうごめく口中の軟い肉塊は、  
妖しい蠕動をくりかえした。

「いつまで、ねちょねちょやってんのよ」

伊万里が、つかみあげた髪の毛を邪険に放すと、加奈子の頭部は、かくッと首を折って垂れさがり、彦六の指先は虚空にとりのこされてしまった。

彦六は、ものほしそうに、その己れの指先を、いつまでも見つめていた。

「いかがです、先生……」伊万里は、皮肉な眼で、彦六をうかがった。「この女は、奉仕のために生きてるんだってことが、おわかりになりました？ 奴隷は生命のない人形、快楽を与える玩具。自分の意志なんて、これっぽっちも存在しないってことが……」

彦六は、あらためて加奈子を見た。

椅子の縁から垂れさがった顔は、無我の境地にあるが如く、清らかだった。天女のようにあでやかで、屍面のように無表情だった。墨塗りのいかつい椅子の上に折り曲げられた薄紅色に輝く女体は、縄目に全てをゆだねて静閑としていた。その凛烈な静けさが、かえって女体の莊嚴美を増し、人間には求められないような崇高さをもたせていた。

彦六は、ふと、あのゴム人形イレエヌをおもいだした。

たしかに、共通のものがある。それは生命なき人形の美しさだろうか。いや、ちがう。

あのイレエヌでさえも、鞭の乱打をあびながら、ふと、灼きつくような生命の燃焼をみせたのではない。死んだものには、被虐の美はない。縛りのないイレエヌは、死んだ人形にすぎぬ。縛りあげられた加奈子は首をもたげることにもままたぬ生きた人形である。一筋の縄が区切る虚と実の世界……今の加奈子には、虚に帰した静謐な美がある。

「どうやら、あたしの人形が、お気に召したらしいわね……」いつの間にか、伊万里が彦六の背後により添っていた。「この人形と、浮気したって、かまわないわよ。ただし、所有権のあるわたしにも、立ち合わせていただくけど……」

伊万里は、娼婦のような卑猥な笑みを浮かべた。ホットパンツから、むっちりした太腿をすうりと曝け出し香水と腋臭のいりまじった体臭をふりまく伊万里が、自らの運命を甘受している加奈子にくらべて、ひどく生臭くおもえた。

「セックスのイントロダクションとして、バルトリ責めを見せたいでしょう？」

「バルトリ責め？」

「あら、先生くらの年になって、バルトリン氏腺、知らないの？」

「バルトリン氏腺……」

彦六は、あきれかえって、伊万里の顔を顧みた。幼い面影をのこした、たった十九才の女子学生が、神秘的肉壁の奥に、ひそんだ器管の名を口にするとはい。

「今じゃあ、あんなに、とりすましていてもね、やっぱり女は女……あそこ苛められるのが、いちばんこたえるらしいわ」

「君、どこでそんなこと、覚えたの？」

「お兄さんのやることを、毎晩、見学させてもらったの。正志チャンが生まれて、この家に引越してくるまで、ズーッとあたしが助手だったんだもん……」

伊万里は、あっさり、いつてのけた。

いつの間にか、加奈子は目を見開いて、上目づかいに、こちらのようすを窺っていた。その怯えきった目の色は尋常ではなかった。「ほら、あの女ったら、目をあけて催促してるわ。ほんとにエッチで、困っちゃう。これで、れっきとした宮井家のお嫁さんなんですからねえ。どうなってんだろう」

加奈子が反応を示したのを見すまして、伊万里は、部屋の内部に設置された洗面所に行き、電気ポットに水を入れて来た。

「伊万里さん、おねがい。今日だけは、かん



にんしてよ。二人っきりの時なら、いくらやってもかまわないから……」

よっぽど淫虐な責めなのだろうか。加奈子は、懸命に首をもたげて、かなわぬこととは知りながら、哀訴した。

「バカねえ。お腹の中まで、先生にお見せするんだっていったのは、どこのだれなのよ。かわいい、お姫さまのお顔を、とっくり拝ませてもらわなきゃ、あんたと寐たくても寐られないってさ……」

伊万里は、わざとワゴンを加奈子に見えるところに引きよせて、もったいぶった手つきで、小箱に入った小道具を、金属の盆の上に移しかえはじめた。

それは、あらゆる種類の刷毛・ブラシの類だった。極細の絵筆、アイシャドウ用刷毛、狸の毛の歯ブラシ、パイプを掃除するための針金つきの小さなブラシ、絹糸で縛った針の束。いずれも繊細で可憐な道具ばかりだが、これらが集中攻撃をしかける瞬間を想像すると、嗜虐の血が、わきたった。

加奈子はすでに、がっくりと首を折って、責め椅子に身をゆだねていた。

ちーんと、電気ポットの湯のたぎる音がしてきた。伊万里はワゴンの上の豚毛の歯ブラ

シをとって、

「ふ、ふ……これをお湯に浸して洗ってやると、この女、よろこぶの。先生、どうぞごらんになって。あたしの奴隷のウルトラCの珍芸よ」

と、むしろ加奈子に見せつけるように翳して、彦六にいたずらっぽい視線を送った。

椅子の背部に、逞しく豊臀は屹立し、肘掛に括りつけられた両足は、いやでも開伸させられていて、この種の責めには、恰好のポーズになっていた。

「ちょっと、これが邪魔ねえ……」

伊万里は、手術にとりかかる医師のような手つきで、最初の責めのポイントを選んでいった。

それは、じらせるだけじらしてやろうという、残忍な意図を含んでいるらしく、指の腹が触れたか触れぬかの慎重さで、丹念に時間をかけた。

加奈子は、激しい喘ぎにまじって、むずかるように鼻をならしはじめた。

逞しく張りつめた臀肉が、伊万里の玩弄につれて、かすかにそよぎだし、次第に豊かなうねりとなった――。

「先生、女って貪欲なもんねえ」

不意に責め手を休めて、伊万里は醒めた声をだした。

「結局、いくら責めても、この女は苦痛を快楽にしてしまうんだわ。たのしんでるのは、あたしたちじゃなくて、この女……女王蜂のように、でんとおさまりかえって、自分を苛めさせながら、自分でたのしんでる。何のことはない、責めてるつもりであたしたちが、働き蜂で、この女王さまに奉仕させられてるってことなのよ……」

伊万里は、生命のない物体を扱うように、腰をうねらせてうごめきつづける双臀を指ではじいた。

「ち……」と小さく叫んで、加奈子は聳え立つ臀肉を擦り合わせるように蠢動させ、責め手の玩弄を渴仰した。それは人間の理性をのりこえた肉体の意志の如く、華麗で、妖艶で淫靡で、グロテスクな肉の叫喚のように見えた。

「動いてるわ、何もしないのに……」

伊万里が呟いた。不思議なことに、ほんのちょっと前まで、嬌慢な女王のようにふるまっていたのに、今は、むしろ沈鬱で、もの悲しげにみえた。

加奈子の甘い鼻声は、いっそう昂まり、拘

束されていない腰を少しでも浮かせて、にじり寄ろうとさえた。

「びくびく、動いてる。笑ってるみたいだし……哭いてるみたいだし……虫みたいに這いまわってる……」

伊万里は、つかまえた昆虫のようすを父親に報告することのように、彦六の顔を仰いだ。むしろ少女のようなあどけなさを湛え、眸の色が死んでいるのが、不気味だった。

「女って食欲で、悲しいものね……」

いま一度、たしかめるように呟くと、何をおもったのか、伊万里は、ホットパンツのフアスナーを引いて、足下に落とし、毛糸の袖なしブラウスを、頭にかぶって脱ぎ捨てた。下着一枚の半裸である。

「先生、あたしを責めて……この女と同じように苛めてほしいの」

青い果実のような新鮮な裸身を曝け出した伊万里は、唐突に、彦六に迫った。そのものおじしない態度に、彦六のほうがあたふた一瞬、息を呑んだ。

「君、しかし、君イ……」

しどろもどろの彦六に、伊万里はカモシカのように跳びかかると、もつれあって床に倒れ、蜜のような唇をおしあてて、彦六の口を

吸った。ぬらぬらと、舌尖がしのびこんで、濃厚な接吻である。

「先生、あたし処女なの。あたしの軀をあげるから、責めてちょうだい。あの女のようにめっちゃくちゃにしてほしいの。先生の奴隷になります、あたし……」

火のように熱い頬をおしあて、耳たぶに齒をたてながら、伊万里は、ささやきかけた。

彦六は、うら若い女性の軀に組み敷かれ、自分が強姦されるようなみじめな気持ちになりながら、責め椅子の加奈子を窺った。

加奈子は凄艶な眼差しで、予期せぬ出来事を、凝視していた――。

#### 四

それから数日の間、彦六は、かつて経験しなかったような憂鬱な日々を過ごした。

フラストレーションは、火の玉となって彦六の魂を灼きつくし、その傷手は、美女イレ―ヌをもつてしても癒やされなかった。

またしても据え膳が喰えなかったのだ。

伊万里にせきたてられて、ロープをつかんだものの、ゴム人形とちがって、人間の軀を縛るのは容易でなかった。

「先生、ちがうわよ。首縄をもっとゆるくし

て、縦縄で調節すんのよ。ブキツチヨね」

という具合に、縛られ役から注文をつけられるようでは、ムードは盛り上がらない。

ほんの二、三ポーズ、縛りの真似ごとをしただけで、彦六も伊万里も、やる気をなくしてしまった。

「やっぱり、先生の奴隷になるのは、やめにするわ。あたしのお人形さんをつかって、せいぜい勉強しておいてね」

と、愛想づかしをされて、伊万里に帰られてしまったら、あとは加奈子を責める気にもなれず、責め椅子から解放してやると、「お茶でも一つ」とひきとめるのをふりきって、すぐごと宮井家を辞したのである。

それでも、いったんアパートに戻ると、雲霞の如く悔悟の念が湧いて、あれだけ、みごとな開陳ポーズをとらされていた加奈子なのだから、せめて刷毛なりブラシなりを使って「バルトリ責め」をやってみたかったとか、念願の海老縛りに縛りあげて、排尿させてみたかった。木馬にのせてみたかった。片足吊りもやりたかった。剃毛したらどんな悲鳴をあげただろう。フレンチキスを強要したらどんな表情をみせただろうと名作「花と蛇」にも匹敵する加虐シーンが、次々に脳裏に映



って、思いの千分の一も実行できなかった自分の意気地のなさを責め苛むのだった。

目を閉じれば、軟体動物のように蠢動する加奈子の肉体がクローズアップされるのだから、今度という今度は、美女イレーヌなんかちゃんちゃらおかしくて代用品につかうわけにも行かず、自虐の怒りの捨て場に窮して、なんともやりきれなかった。

おもいだすのは、加奈子のことばかりだった――。

天女のような法悦の表情と、「わたしは遺産として相続されたのだ」と、さめざめと涙をこぼした加奈子が、二重写しになって、彦六の心を捉えた。

かけ落ちしても結婚を――と夢想したまではよかったが、こんなボロアパートに住むのが精一杯の安月給では如何ともなしがたく、夢はみるみるうちにしぼんで、みじめな自分だけが残された。

そぞろ恋慕の情に耐えかねて、宮井家の塀の外まで忍びよってみたが、庭の芝生で睦まじく遊び戯れる加奈子母子を見てしまうと、かえってこの間のことが白日夢のようにおもえ、加奈子と顔を合わすふんぎりもつかぬままに、またしてもすぐ引き下がったの

である。

こうして、悶々の日を送る彦六のもとへ、再び伊万里から、電話がかかってきた。

「あれから、あたしの人形と遊んでらっしゃらないんでしょう。どうなさったの、先生」と、のっけから、氣にくわぬ質問である。「ぼくはね、幼稚園児のいるような家庭で、へんなことをしたくないんだ」

「あら。正志ちゃんなら、大丈夫よ。あの女に、実家へつれていけて、命令なさればよろしいのよ」

「ぼくはね、たしかに奇クを読んでいますよ。しかし、フィクションの世界をたのしんでるので、あんたがたのように、人倫の道に反する虐待行為はしたくないんだ」

「へえ、むずかしいことをおっしゃるのね。だけど、先生だって男だから、好きなんでしょう。パルトリ責めにかけるっていったら涎こぼしそうな顔、してたくせに」

「失敬なことをいって、大人をからかうつもりなら、電話を切りますよ」

「あッ、まって！」

彦六が本気になって怒っているのを察してか、伊万里は急に鼻にかかった甘い声で「先生、おねがいがあるの」と、きりだした。

「実はね、あたしたちの大学に、SM研究会があるんだけど、その新入生歓迎会に、ゲストの講師として、特別参加してほしいの」

「SM研究会……？」

「ハイ、まさか学校じゃSM研究会って名のないから、公称、ファッショングループS・M・Lっていうの。おしまいのLは、リプつまり解放っていうことかしら」

大学でSMにふけるとは、奸智にたけた女子大生たちである。

しかし、彦六は、そんなところに出ていったら、いい弄りものにされそうな予感がしたので、

「残念だが、ぼくの任じゃないね」と、言下に断わった。「ご承知の通り、ぼくは口べたでブキツチョだろ。そういうことは、他の人にたのんだがいい」

「だめなのよ……」伊万里は、特別、鼻にかかった声を出した。「若い男だと、危険でしょ。だからといって、大学教授のお爺ちゃんにたのむわけにも行かないじゃない。どうしても、先生ぐらいの、おちつきのある、中年の紳士でないと、具合がわるいのよ」

「どうせ、ぼくを肴か餌にして、たちの悪い遊びをするつもりだろ」

「まあね……あたしたちみたいに、女の子ばかりの学校にいと、男性って稀少価値があるのよ。まして、先生みたいにハンサムで、気品のある方は拔群……」

伊万里のお世辞とわかっていても、彦六はみじめな気持が、少しづつ脱け落ちて、浮き浮きした気分になった——うら若い女子大生のSM集いを覗くのも、悪くはあるまい。

「だけど、ぼくは、どんなことさせられるのかね？」

「傍観してて下さればいいの。あたしたち上級生が、新入生にヤキを入れちゃうから。勿論、あたしをはじめ、全員処女……先生も、ちょっとばかり若がえって、生命の洗濯になるわよ」

男を籠絡することにかけて、伊万里は天才だった。調子のよい口舌にのせられて、易々と、彦六は承諾してしまったのである。

伊万里の級友のトキ子のマンションが「ファッショングループ、S・M・L」の新入生歓迎コンパの会場だった。

大阪の大会社の社長令嬢であるトキ子は、東京西郊の大きなマンションに住んでいて、伊万里好みの乱痴気パーティは、すべてこの

一室でやられていたらしいかった。

伊万里とトキ子に案内されて、豪奢なりヴイングルームに入って行くと、盛装した十人ばかりの乙女たちが、一斉に立ちあがって、淑やかに礼をした。

大学の、まして女子大のコンパの雰囲気など、全然味わったことのなかった彦六には、上流階級の子女たちの茶話会のようなムードが、すこぶる優雅に、高尚にみえた。

伊万里やトキ子など、四人ばかりの上級生は、いずれも地味なスーツを着ていたが、新入会員は、いずれも派手な盛装をしていて、二人は振袖を着ていた。

彦六は、少女らしさの抜けきらぬこれらの新入生たちが、SMときいたら、どういう反応を示すだろうかと、ゾクゾクするような期待を抱いた。

「エー、それでは、コンパをはじめます」

伊万里は、あらたまった口調で、開会を宣した。

「今日は、最初のコンパですから、皆さんの顔合わせをかねて、ファッションの基礎としての医学の勉強をしたいとおもいます。ここにお招きした先生は、S医大の医学博士で、畑彦六先生とおっしゃいます」

みんなが、一斉に頭を下げるので、彦六も仕方なしに会釈を返したが、支離滅裂の内容も、流暢な伊万里の弁舌にかかる、いささかも不自然に感じなくなるのに、驚きもし、あきれもした。

「それでは、性病の検査をします。皆さん、着物を脱いで下さい」

やはり上級生の洋子という小肥りの女が、ドスのきいた声でいった。

命令が、あまり唐突だったので、一瞬、不安のどよめきがおこったが、おどろいたことに、一人がスカートを脱ぎ捨てると、不承不承ではあったが、全員おとなしく晴れ着を脱ぎはじめた。

色とりどりのスリップ姿で、中にはブラジャーとパンティストッキングだけの猛者もいたが、いずれも用心深く胸の前で腕を組み、不安げな視線を、洋子や伊万里や彦六に向けていた。

「それじゃあ、部屋の隅に一列に並んで下さい」

再び、洋子が指示した。

いったんは、壁際に一列になったものの、気の強そうな香苗という一年生が、「あおう、セイビョウって、性病のことです



イメージギャラリー 『奢者の狂宴』 岡 たかし



か？ だったらあたし、そんなもんにかかってませんから、検査はうけません」と、いいだしたのをきつかけに、われもわ

れもと、自分の着衣をおいたほうへ、戻ろうとしてはじめた。  
「明子、トキ子、やっちないな！」

洋子の命令一下、いつの間に用意したのだろう、明子もトキ子も、手に手に手錠をもって、機動隊よろしく、スリッパの群に乱入した。

たちまち——阿鼻叫喚の巷である。

香苗は、まっさきに捕えられて、後手錠をかけられ、威勢よく抵抗するものから狙い打ちにされて、次々に手錠がかかった。

着衣を抱いて玄関に逃れようとした者は、そこに陣取った伊万里に突き戻され、腕をふり回して手錠をかけさせまいとする者には、いち早くとりあげてしまった豪華な訪問着にライターをつきつけて、

「あばれると、火をつけるよ」と、洋子が脅した。

いかにも手なれた俊敏さで、新入生全員が手錠で拘束されるまで、ものの一分もかからなかった。抵抗の激しかったものには、ご丁寧に足錠までかけて、明子やトキ子は、部屋の片隅に、半裸の娘たちを、おしこめた。

伊万里は、捕虜収容所長よろしく、片肘を張って、全員逮捕の状況を見守っていたが、やがて、するするとスーツを脱ぐと、一瞬の間に、革の水着姿になった。

洋子も、トキ子も、明子も、それにならっ

てスーツを脱ぎ、背中が丸出しで、腰のあたりに深い切りこみを入れた、そろいの水着姿になった。胸には「S・M・L」のマークが白く浮き出ている。

伊万里は、愛用の竹の鞭をもって、哀れな虜囚の前に立つと、

「ほんとうのことを教えましょうか。サディズム、マゾヒズムっていうコトバ、知ってるかしら？ あたしたちの会はね、お互いに苛めたり、苛められたりして、たのしむ会なの……あなたたちも、せっかく入ったんですもの、仲よくたのしみましょうよ、ね？」

と、例によって、コトバつきは柔和だが、手にした鞭で、顔をそむける者の頬を小突き俯向いた者の肩口を叩き、調教の第一歩に入っていた。

「いやです。学校にいます」

「お父さんにいいつけて、警察に届けてもらうわ」

「そうよ、そうよ。変態性なんか大嫌い」

と、いずれも足錠をかけられたイキのいい連中が、肩をいからせて、抗議した。

「ふ、ふ……いいければ、どこにでもいうがいいさ」洋子が凄味をきかせた。「その代り、これから、あんなたちの恥かしい写真を

一人一人撮らせてもらうけどね。そいつを親のところへ送り、学校の掲示板にはり出し、どこへも顔向けできないようにしてあげるまでさ」

「ひどい……」香苗は、ベソをかきながら叫んだ。「変態性！ 何よ、あたしたちに、フアッションを勉強するんだなんて、だましましたりして。学校の敵よ、社会の敵よ！」

伊万里の目尻に、えもいわれぬ陰湿な微笑が滲んだ。彦六はスツと背筋が寒くなった。この微笑が、凄惨な責めの開始を告げるベルであることを、この間、体験したばかりだったのだ。

「洋子、そのチンコロ姐ちゃんから、行くべきね」

伊万里の鞭の先は、まっすぐ香苗に向けられた。

すでに、あらかたの家具を隣室に運びこんで広々とした空間をみせているリヴィングルームの真中へ、明子とトキ子に腕をとられ、洋子に足を抱えあげられた香苗は、網にかかった鯉のように軀を跳ねかえらせながら、運ばれていった。

「いやあ、ああ、いやあ！」

小柄な香苗は、折檻をこわがるこどものよ

うに、顔をしかめて、泣き喚いた。

そして、絨氈の上に俯伏せに抑えつけられて、後手の手錠を外ずされると、健気にも足錠のかかったまま、這って逃げようとした。

しかし、洋子の重い尻が、たちまち腰の上に落ち、両手首を明子とトキ子が踏みつけると異にかかった小鹿のように、はかなく跳くばかりだった。

淡紅色のスリッパは、みるみるうちに頭上高くたくしあげられ、明子とトキ子は、巧みに香苗の上体を引きおこしながら、スリッパを剥ぎとり、ブラジャーを抜きとった。

ロープを扱いて待ちかまえていた洋子は、鮮かな縄捌きを見せながら、高手小手に縛りあげ、膨らみの浅い乳房の上下にも、がっちり縄がかかった。

「さあ、みんなにも、見せたげようね。縛られた女って、チャームینگだろ」

伊万里は、縄尻をつかんで、部屋の一隅に一塊りになっている新入生のほうを向け、芝居気たっぷりに、竹の鞭を頭の下にはさんで、顔をあげさせた。

新入生の中から、讃嘆と憐憫のどよめきがあがった。

胸の膨らみに喰いこんだ縄は、乳房を括り



出して、女らしい情感を誇張し、鞭にこじあげられた幼な顔と、奇妙なコントラストを成した。未熟な性の不安定な美しさである。

お目見得がすむと、再び、荷物のように転がした。今度は、下半身が攻撃目標だ。洋子らは「いや、いや!」と、跳ねあがる香苗の足を抑えこんで尻のほうからパンティ・ストッキングを脱がしにかかった。

「ああ、お母さん、助けてッ!」

最後の下穿きが、足首を通過しかけた時、香苗は虚空を仰いで、絶叫した。あたりはばかりぬ断末魔の声をきいて、処刑の順番を待つ新入生の中からも、もらい泣きの声がもれ一瞬、白けた空気が支配した。

「ちきしょう。へんな声、出しやがって」

洋子は、いまいましてに香苗をねめまわし「明子。竹の棒、出してよ。癖がつくから、

徹底的にやってやるわ」

と、香苗の腹部に跨がり、両足をからめて自分の腕の中に抱えこむと、膝の裏側に竹の棒をあてがわせて、「おもいっきり、拡げるのよ」と指図しながら、明子とトキ子に、膝頭と棒を連結させようとした。

当然のことながら、香苗は身を揉んで抵抗したが、柔らかい腹部に洋子の重い尻がすわ

り、おまけに両膝をからげた竹の棒を、しっかりと洋子がひきつけてしまったので、自由になる腰をかすかに腕かせるのが、精一杯だった。

「ほらほら、お母さんしか見たことがないのに、あんまりあばれたら、みんなに覗けちゃうじゃないか。はしたないねえ」

と、洋子にからかわれ、かわいそうに、全身に羞恥をちりばめて、桜色に紅潮し、金縛りにあったように動けなくなってしまった。

竹の棒をつかって、への字になるくらい、香苗の膝を割らせると、休む暇も与えず、香苗の軀をひきずりおこし、今度は竹の棒と首とを結びつけるため、香苗の首にロープをかけて、「わッせ、わッせ」と掛声をかけながら、三人がかりで引きよせた。

「つう……いたア、いたい!」

香苗は、高低強弱、七色の悲鳴をあげながら、洋子に髪の毛をわし掴みにされて、竹の棒におしつけられ、明子やトキ子の素早い縄捌きによって、首枷にかかったように、緊縛されてしまった。

強烈な開股前屈縛りである。

「せえのう!」

と、荷物でも扱うような掛声もろとも、香

苗は仰向けさまに軀を返され、痛々しく二つ折りになった惨めな姿を、白日の下に曝したのである。

「まあ、結構、ませてるじゃないの。色は冴えないけど、発育状況は良好よ」

明子は、まっさきにしゃがみこんで、批評をはじめた。

「どれどれ……」洋子も同調する。

「ふん。まだ餓鬼よ、こんなの……明子にくらべたら王様と家来じゃない」

「明子とくらべたら、むごいわよ」と、トキ子も参加した。

「おちよぼで、かわいいやないの。明子の、育ちすぎさんとは、ちがいます」

「いったわね、パイパン坊主!」

明子は、トキ子に組みついて、犬のようにじゃれはじめた。

「あんたも、同じカッコさせて、曝したげよか! お化けヒマワリとコスモスと、二つ並べたら、ようわかるわ」

争う目的でなく、陰語や卑語をさしはさんで、えげつないやりとりをたのしんでいる上級生たちを、新入生たちは裸の肩を寄せあって、おそろしげに眺めやっていた。

「ちよっと、やめてちょうだいよ!」

伊万里は、カメラの三脚を香苗の正面にすえながら、明子たちを、たしなめた。

「スケジュールは、いっぱい、詰まってんのよ。あと八人分の記念撮影しなくちゃならないんだから、急いだり、急いだり……」

と、ハッパをかけられて、明子とトキ子はお互いに、「あとで、お仕置よ！」と尻を叩きあい、香苗を囲んで、それぞれの配置についた。

カメラの三脚が、すぐそばまで来て、羞恥の姿態にレンズを向けていた。香苗は恐怖のあまり腿部一面に鳥肌をたて、彎曲した軀をローリングさせて、逃がれようとあがいた。

「往生際が悪いのねえ。おとなしくしてなきや、写真がブレちゃうじゃないの」

洋子は、床を掃く黒髪を、ぐいと踏みつけた。「ぐ、ぐ、ぐえーッ！」と、のどの奥から悲鳴を奔しらせて、香苗は号泣した。

「お目当てのほうは、バッチリ撮れそうだけど、顔のほうは、どうもうまくないわね。枕させてくれない……」

と、ファインダーを覗きながら伊万里がいうと、まってきたと、トキ子が藤で編んだ円椅子を持ってきた。鼓のように真中がえぐれているので、横転させると、恰好の責め枕

となった。香苗の頭が凹部によってしまうとどう睨いても、枕が外ずせなくなってしまうのだ。

高手小手縛り、竹棒をつかった開股前屈縛り、おまけに責め枕までつかわれて、どこかに生硬さを残したクリーム色の裸身は、もはや、そよぎもせず、赤い絨氈の上に鎮座していた。

明子は完成したばかりの芸術作品を、いとおしむように、香苗の枕元にしゃがみこんでハンカチで顔を拭いてやりながら、

「ほらほら、泣くんじゃないの。せっかくの美貌が台なしよ。こんなのは序の口でね、これから、もっともっと、辛い目にあうんだからさ。ファイト出して、がんばりなさいよ」

と、他人事のような顔で慰めていたが、いっぽう、足のほうにかがみこんだトキ子は、オヤツを待ちきれないこどものように、

「ひゃあ、ずいぶん、しわだらけやわ」と、きこえよがしに驚いてみせて、香苗の嗚咽を昂めるのだった。

「さア、邪魔ものは消えて。本番よ」

伊万里は、屍に群がるハイエナのような明子やトキ子を追い払って、洋子に手持ちのライトをつけさせると、

「香苗さん。カメラを見て、笑って」

と、声をかけ、シャッターに指をかけた。カシヤリと音のする寸前に、香苗は本能的に顔をそむけた。

「何よ、その態度は！」

洋子は、鋭く叫んだ。そうして、手にしたライトを、ゆっくり回転させて、香苗の顔に近づけながら、

「新人だと思って、手加減してあげりゃア、ずいぶんなめた真似するんだねえ。宮井さんが、カメラを見て笑えといったのが、きこえなかったのかよ……」

と、与太もののように、凄んでみせた。白熱の光線から、少しでも離れようと、顔を反らせて、香苗は喘ぐばかり……洋子は、含み笑いをしながら、桜色に上気した頬すれすれまでライトを近づけた……

「口があったら、何とかおいよ。日本語しゃべれるんだろ。頬っぺたに火傷したくなかったら、素直にしたほうがいいよ」

「あ、あ、あつい！」

唇をかみしめて、必死の形相でがまんしていた香苗も、ついに悲鳴をあげた。

「い、いいいます……いいいますから、ゆるしてよウ」



「宮井さんは、何ていったんだい？」  
 「カメラを見て……笑えって……」  
 「あんた、その通りやったの？」  
 「いいえ、やりません」  
 「どうして、やらないのよ」  
 「それは……」  
 と、香苗が口ごもると、洋子は、ぐっとラ  
 イトをよせた。

### △強烈な被虐女性▽

#### 川路むら子子の狂態

本誌二月号のカメラハントで、  
 村氏もあつた驚いた典型的なM女  
 性川路むら子さんの要望によつて  
 彼女のあらゆる被虐の狂態を再び  
 鮮明に描写し、ここにフラストの  
 元を提供することにします。

#### 股間縛りにうめく

川路むら子 一組 四〇〇円  
 一糸もまとわぬ裸身に只股間の  
 ような軟弱な縛り目だけが柔肌を  
 わじわじと痛めつけてやまない

#### 羞恥責めに泣く女

川路むら子 一組 四〇〇円  
 如何に被虐を求めて泣くといふ  
 え余りのことに泣き叫ぶのか、そ  
 れとも悦びに泣いているのか、そ

#### 妖気溢れる開股責

川路むら子 一組 四〇〇円  
 ねっとりとした脂肪を浮かした  
 けは忽ち妖気が充満してくる

#### 全裸縛りの引廻し

川路むら子 一組 四〇〇円  
 川路むら子とられて追いついて  
 うしうしうと手を開いてゆく

### 臀部晒し浣腸責め

川路むら子 一組 四〇〇円  
 後手に縛られたまま、臀部を  
 しつと浣腸責めを受ける

### 露出した全裸肢体

川路むら子 一組 四〇〇円  
 裸のまま、全身を露出したまま  
 マニアの眼の前にあらわした

### 両足挙げ羞恥責め

川路むら子 一組 四〇〇円  
 自分の顔面より上に両足を上げ  
 て、羞恥の責めを受ける

### 壮絶臀部責の妙技

川路むら子 一組 四〇〇円  
 ありきたりのM女性であつた  
 このような妙技は、やはり驚いた

### 悶絶海老縛り地獄

川路むら子 一組 四〇〇円  
 身体が二つ折りになった苦痛も  
 さることながら、羞恥の個所があ

### 片足吊りの全裸像

川路むら子 一組 四〇〇円  
 不安定な片足吊りで全身をぶら  
 るように見られる羞恥の苦痛

### 再びむら子子の狂態

本誌五月号で、本誌三のペンで  
 八片くぼのマリヤで再登場し  
 た川路むら子は、今度は、被虐の  
 んズの前に、その驚愕の姿を  
 らしたのであつた、その驚愕の  
 箱第14号、天竺社宛へ、どうぞ

### 開股責と強烈縛り

川路むら子 一組 四〇〇円  
 両足を縛り、開股責を受ける

### 緊縛と鼻責め悦楽

川路むら子 一組 四〇〇円  
 鼻責めを受ける悦楽を受ける

### トイレの排泄縛り

川路むら子 一組 四〇〇円  
 トイレに縛り、排泄を受ける

### 逆エビ責にあえぐ

川路むら子 一組 四〇〇円  
 逆エビ責を受ける苦痛を受ける

### 棒責めの全裸女性

川路むら子 一組 四〇〇円  
 棒責めを受ける全裸女性

### 椅子責めでいためる

川路むら子 一組 四〇〇円  
 椅子に縛り、責めを受ける

### 柱に縛る全裸女性

川路むら子 一組 四〇〇円  
 柱に縛り、全裸で責めを受ける

### 後手縛り顔面玩弄

川路むら子 一組 四〇〇円  
 後手に縛り、顔面を玩弄する

### 両手挙げ縛り媚態

川路むら子 一組 四〇〇円  
 両手を上げて縛り、媚態を示す

### 悦楽責めアップ集

川路むら子 一組 四〇〇円  
 悦楽責めを受けるアップ集

### 柱と棒利用の開股責め初め

川路むら子 一組 四〇〇円  
 柱と棒を利用して開股責めを受ける

「あッ、つう、いいます、あたし、恥かし  
 ったんです。それだけなんです……」  
 「恥かしかったあ？」  
 洋子は、嘲けるように、ライトを移動させ  
 て、今度は剥き出しの下腹部を照射した。  
 「頭かくして尻かくさずって、あんたのこと  
 だね。あんた、今どんな恰好してるか、わか  
 ってるだろ？ 顔を撮されるのは恥かしくて

も、この恰好を見せるのは、何でも無いんだ  
 ね……」  
 陰湿な責めである——香苗は、乙女の誇り  
 も羞らうも剝奪されて、身も世もあらぬ泣き  
 声を張りあげた。ライトが近づくと、苦痛の  
 呻きに交わり、離れると、慟哭が甦った。  
 「もう、いやあ……殺してよう……どうに  
 もしてよう……」  
 と、口蓋まで曝け出して泣き喚きながら、  
 香苗は錯乱状態に陥り、時おり白眼を剥いて  
 失神しかけた。

両膝と首を括った竹の棒は、虚空に8の字  
 を描いて揺れおののき、香苗は、自らの首を  
 絞めて絶息し、また甦える……自棄的になっ  
 た香苗は、むしろ死を希求していたのかもし  
 れない——そんな醜態にたどたどした。  
 傍観者をきめてむつもりだった彦六も、尋  
 常でない香苗の乱れかたに、慄然とした。伊  
 万里たちにやらせておいたら、香苗が死ぬま  
 で責めつづけるだろう……。

忠告するつもりで、進みでると、おどろい  
 たことに、新入生の群れの中の一人が、後手  
 錠のまま立ちあがり、  
 「先生、助けてあげて！ 三井さん、殺され  
 ます！」

と、絶叫したのである。

「そうよ、そうよ。あんまりだわ」

「もうたくさんです。許してあげて！」

「先生。おねがいします！」

と、涙をいっばいためた可憐な半裸の羞囚たちは、彦六を救世主のように仰いで、口々に嘆願しはじめた。上級生の暴威の中で、おさえにおさえていたものが、ついに爆発した瞬間だった――。

「伊万里さん、もうよしなさいよ。プレイを逸脱してるよ」

と彦六は、つとめて、もの静かにいった。

伊万里は、勝気な眸をきらりと光らせて、彦六を見返した。しかし、眸の奥に、例の凄艶な笑みを滲ませると、意外にあっさり、

「洋子、もうおやめよ。その枕を外すしてやり」

と、命令した。

「伊万里、まだ落ちやしないよ。こういうやせたチビは、キーキーいったって、タフなんだから……」

洋子は、筋書きがちがうと、不服そうに頬をふくらませた。

「いいから、いいから、選手交代よ。今度は今日の特別ゲスト、畑先生に責めていただき

ましようよ」

伊万里は、革の水着の腰に手をあてて、女王然としたポーズで、彦六のほうを見た。

「おい、伊万里さん。そ、そりゃあ、約束がちがうよ……」

彦六は、俄然、慌てた。

「うわあ、賛成！」

明子は、手をたいて、彦六の背後にすがりつくと、ぐいぐい背広の上着を脱がしにかかった。

「うちも責めてほしいわア。男の人に苛められたら、ずーんとこたえて、足腰が立たんようになるやろなア」

トキ子は、彦六の上着の袖を引っ張りながら早くも潤んだ瞳で、彦六を仰ぎ見た。

「おい、まてよ、君たち……こら！」

むちむちした肌を惜し気もなく曝した水着の女の子にまつわりつかれて、彦六は周章狼狽――またしても、三枚目である。

伊万里は、そんな彦六の慌てかたを冷然とみつめながら、

「はじめに、写真をとらせて、いただくわ。

この子にポーズをつけてほしいの」

と、枕は外すされたものの、絨氈の上に仰臥している香苗を、頤でしゃくった。

洋子は、つかつかと、香苗に近づいて、髪の毛をつかんで、ひきずりおこし、ぐうッとカメラのほうへ顔を向けさせた。

「こういうポーズで、おねがいします」

香苗は、目が釣りあがるほど髪をつかみあげられて、ぐしょ濡れになった頬に、二筋、三筋、新たな涙を、したたせながら、それでもうかがうように、彦六を凝視していた。

「さあ。先生、早くっ！」

と、洋子は猶予をおかぬ厳しさで、彦六を招いた。

「ああ、いやあ……許してえ！」

彦六が、一步、香苗に近づくと、しばらく鳴りを鎮めていた黄色い叫喚が、室内にこだました。洋子から引き渡された香苗の髪は、あくまでも、しなやかで繊細だった。良家の子女らしく馥郁たる香料の香を滲ませた黒髪を彦六は力まかせにひきずりあげた。

部屋の一隅で、どよめきがおこり、うらめしそうな新入生の眼が彦六に集中していた。

彦六は、負けてはならじと、髪の毛をからませた指先に、いっそう、力をこめた。長く尾を引いて香苗の悲鳴が劈き、ライトがあびせられ、まばゆい光の彼方で、何回もシャッターを切る音がした。

――(未完)――





## 名剣藤四郎

昭和二十六年、わずか五十八才の、まだまだ壮齡とも云える時に没した鷺尾雨工には、歴史小説の著述が多い。そのなかから二、三を紹介してみよう。

このほど京都の古書即売会で、長いあいだ探し求めていた戦時中の娯楽誌を入手した。その一つに載っているのが標題の作品である。ところでこの作品を紹介するまえに、いま一つ、明治大正昭和の文豪、幸田露伴翁の作品「雪たたき」（昭和十四年三月、日本評論）に触れておきたい。あらすじは――

## 切腹研究夜話

## 文芸切腹史

## 鷺尾雨工篇

河内正覺寺の居城で自刃した畠山政長の遺臣、木沢左京が雪の夜、たまたま下駄の齒にたまった雪を、ある家の小門の裾板で叩き落とそうとする。と、門があいて女が手を取り内に招じ入れた。女あるじが出て来て人違が判り、若い召使いは己が失策に一命を投げ出してわびようとするが、木沢は証拠として床の笛を懐中し、今夜のことは海外にいる主人の帰国したとき、知らせようぞと云いおいて帰る。

女あるじの実家豪商膳脂屋へ、召使いは自分の落度を云い立てて、密夫を入れようとした女あるじの罪をかばった。膳脂屋は木沢に交渉し、なかなか木沢が笛を戻さぬ折から、

たまたま来合わせた政長の残党でも主立った遊佐河内守の扱いから、蜂起の資金と引きかえに、笛は無事もとのところへ納まる。

こうした物語りであるが、その会話の中で畠山遺臣の一人、丹下右膳の言葉に藤四郎の事が出てくる。以下原文を引用してみよう。

「……故管領殿河内の御陣にて、表裏異心のともがらの奸計に陥入り、俄に寄する数万の敵、味方は総州征伐のためのみの出先の小勢、ほかに援兵無ければ、先づ公方を筒井へ落しまるらせ、十三才の若君尚慶ともあるものを、卑しき桂の遊女の風情に粧ひて、平の三郎御供申し、大和の奥郡へ落

し申したる心外さ、口惜さ。四月九日の夜に至って、人々最後の御盃、御腹召されんとて藤四郎の刀を以て、三度まで引給へど曾て切れざりしとよ、ヤイ、合点が行くか藤四郎ほどの名作が、切れぬ筈も無く、我が君の怯れたまひたるわけも無けれど、皆是れ御最後までも吾が君の、世を思ひ、家を思ひ、臣下を思ひたまひて、孔子が魯の国を去りかね玉ひたる優しき御心ぞ。敵愈々逼りたれば吾が兄備前守」

と此処まで云ひて今更の感に大粒の涙ハラハラと、

「雑兵共に踏入られては、御かばねの上の御耻も厭はしと冠り落しの信国が刀を抜いて、おのれが股を二度突通し試み、如何にも刃味宜しとて主君に奉る。今は斯様よとそれにて御自害あり、近臣一同も死出の御供、(下略)……」

とあり、この挿話は塩谷贊氏によれば、足利季世記・畠山記に見えろのことである。

(角川文庫版「雪たたき」本文並びに解説による)

鷲尾雨工の「名剣藤四郎」(富士・昭和十三年十月増刊)もまた、同じ挿話に基づいていのように思われる。この方もまた、あらず

じから云うと――

○

和泉・紀伊・大和三カ国の守護も兼ねた河内の領主、畠山左衛門督政長が正覚寺の城に自刃したとき、近習頭木沢八郎は北の方と若君を托されたため追腹かなわず、堺に落ちのび商売に精を出した。

七年の才月を経、たまたま八郎は足を富商納屋の軒下に運んでいた。それは、「夜ひとり納屋の塀外へ行け、望みがかなう」という夢を三晩つづけて見た、心の迷いからであった。若君を立てお家再興の望みなのである。

我ながら呆れた夢頼みと、道をとって返そうとしたとき、下駄がすべって塀の木戸に突き当たった。すると戸があいて女が手首をとった。通されたのは内儀の部屋らしい。その刀架けに見覚えの短刀がある。藤四郎であった。

粗相、人違いと女あるじも女中もわびたが八郎は、「ただ粗相ではすまぬ」と突っぱね内儀が実家膳脂屋の名を出しても八郎は、藤四郎を懐中したまま戸外へ出た。

女中は刀の紛失に気づいた。ただの泥棒か海外から帰る主じに密夫を引き入れている証拠として見せるためか、女あるじは震えあが

った。薬研藤四郎紛失は彼女の口から実父の耳に入った。彼女は密夫を入れたのではなく父鴻斎に、「良人の帰りを待って潔く自害せよ」と叱責され、実は女の浅智の抜け買いと白状した。

鴻斎は木沢の店、沢木屋を訪ね、お家再興の軍資金を申し入れた。やがて翌年、正覚寺の城を奪い返し、藤四郎の謝礼を納屋へ届けに行ったが、美貌の女あるじは藤四郎のおかげで、ご法度破りを重ねずにすみ、不貞の疑いも受けずにすんだと、かえって礼を述べるのであった。

○

これだけの筋だが、藤四郎が「薬研」と異名をとる経緯が、政長切腹の場で克明に描かれているので、ここに武將らしいその最期を引用しておきたい。少年時代の筆者の目に触れ、浅からぬ感銘を今にとどめているものである。「鈍に靈あり」の一章である。

「……翌くれば政長にとっては、今生最後の日であった。

目に余る大軍が、今日こそ屠り尽くさうといふ意気驍猛に、大手、搦手、東西南北から、総攻めに掛かって、たちまち外曲輪へ、潮のやうに侵入した。防ぐ城兵どもは



算を乱して斃れた。もはや本丸の陥落も迫った。政長は、愛刀藤四郎の鉞を、脇腹へ持って行った。

(そのとき、介錯を承わった丹下備後は)

主君が藤四郎の短刀を、左の脇腹に突きたてて、右へ引きまはし、脇十文字に掻き切るか、正十文字に腹を裂くかして、討てと命ずる其の途端に、刃を揮りおろして首を斬り落す役割を承はってゐたのだ……」

一国の城主が落城の恥をこの一刀に雪こうと、潔く、壮烈に切腹とげようとしている瞬間の緊迫感が、いささかは意識的な文章に表現され、それが、やがて展開されるであろう切腹の情景描写を期待させる。ところが、意外にも、名剣藤四郎を以て最期を飾ろうとしている政長の手は右に引こうにも引けない。

「……この名剣藤四郎は長さ八寸五分、いはゆる京反りの雅やかな、だが然し重花丁子の乱れ鉞、焼刃の影映りが物凄く、見るからに慄と身の毛が、よだって、肌寒さを感じさせる希代の逸品なので、足利三代將軍義満が秘蔵し、その後は室町御所の重宝として代々の將軍が相伝したものだ。そして政長が此剣を、拝領して、肌身離さずに所持したのであったが、今、割腹の場

合にのぞんで、脇腹に突き刺した。ところが不思議や空すべり！……」

苛立った政長は藤四郎を傍の棚へ投げつけた。そのときいよいよ敵の喊声が迫った。丹下はみずから短刀を抜いて、己れの太腿を裂き、切れ味を試してから主君に手渡した。

「切れるか？」と念を押してから、

「……「ううう、よく切れる！」

政長は、苦痛を怵へつつ叫んだ。露はな脇腹から鮮血が、ほとばしる。突き刺して、きりきりッときき廻したのである。

「首討てッ！」

声と同時に、脇の右側を、掻き上げる側十文字。……」

凄烈な割腹と文字どおり称すべきさまを、雨工の筆が正確に描写している。

さて丹下の振りかぶった太刀が政長を介錯しようとした瞬間、切腹の順を待つ一人が、薬研を真ッ二つに割っている藤四郎に気づいて叫んだ。

「「おう！ 藤四郎の刃が！」

十文字に腹を切った政長が、苦しい声音を、ふり搾って、

「鋼鉄の薬研を——ふ、ふたつに、き、き切り割ったと申すのかッ？」

血汐の中で、喘ぎ喘ぎ、眼を瞪る……」  
十文字の割腹をとげてなおかつ、声をしばって驚く政長へ、藤四郎が断ち割った薬研を一人が目あたりに持って来る。

「……「御覧じませ！」

「ううう、いかにも！」

政長は、これぞ冥土への土産と思った。かすかに莞爾と微笑んで、

「剣の魂が、主人の腹を、裂くに忍びなかったものと、み、み、見えるのう！」……」  
そして、政長は頸さしのべて介錯を促すのだ。

戦国の世にはあり勝ちな落城悲話の中へ、壮烈きわまりない、まことに男の中の男らしい、是が男の切腹と云える政長の切腹ぶりを雨工氏の筆は、鮮かに描き切っている。それも、藤四郎という名工の名を以て呼ばれる名刀の奇蹟によって、彩られているのが、なお効果的である。

露伴翁の「雪たたき」にあるように、笛を預るといふ設定は面白いが、雨工の作品では名刀藤四郎を預るといふ設定によって、政長の切腹と藤四郎との関係がより密着して感じられるところに、この作者ならではの妙味がある。



浣腸って

素敵ネ!

福井桃子

私が喋ったことが載った雑誌、持ってきて下さいました? 何月号なの?

あら、どうも、ありがとう。でも、今、見るの怖い。夜、ひとりで、こっそり見るわ。

これが写真? わあー凄い。これなんかワイセツ物陳列罪よ。あら、掲載するときはかくすので

すって。そりゃ、そうでしょうねえ。私って女の人を縛った写真、見るのは大好きなんだけど、やっぱり、自分のは、ドキドキしてしまうワ。

ええ、あのときのことを思い出して、身体中にデンキがかかってるみたい。

こんなだったたら、もっと、もっと、ひどい、いじめられ方してみたかったワ。

これ大きいネ。六ツ切りっていうの? 凄い迫力。こんな写真、初めて見たわ。あらこんな縛られ方したかしらネ。思いきり開かされた太股、案外、肉がついてるわネ。



これ、借りておいてもいい? ゆっくり見せて貰って、ポーズの研究するわ。

それで、今日も、カメラとテープレコーダーで、また私をいじめようというんですの。

ええ? なんですって、今日はカメラの外に、浣腸器も持ってるんですって。へえ、それは大変、大変。この前に、ちょっと、浣腸してもいいって、口をすべらしたもののネ。もうちゃんと準備してきたっていうの。抜け目がないのネ。うち、かなわんわ。

ええ、そりゃ、してもいいけど——。

でも、男の人って、「私は浣腸が大好きだから、して、して」ってせがんたら、興奮めなんですよ。いやだ、いやだって、言ってるの、無理に浣腸したい人と違いますの。

私は、本当はスゴク好奇心はあるのよ。人一倍。でも、やっぱり恥かしいじゃないの。「浣腸して頂戴」なんて、女の口から面と向かって、言えると思ってる?

だからネ、あなたが無理にでも、どうしても浣腸をやるっていうんだったら、そりゃ、好奇心の強い私ですもの、そんなに抵抗しないで、やられてしまうかもしれないわ。でも自分からは、どうしても言えないと思うの。もっとも、あなたのプレイの導き方が、お

上手で、うまく私を燃えあがらせてしまったら、そりゃ、私、どうなるか、しれやしないわヨ。そのときは、あんた、びっくりしないでネ。なんだか、こんな話してるだけで、ぞくぞくしてきたみたい。変ネ、私って——。さて——と、あんた、今日は、お飲み物、なににします?

昼日中から、酔っぱらって、記事をとれなくなったら、帰ってから叱られるって? 今日はお泊まりになるんですよ。だったら十分とれますわよ。この美美代が、お相手してる限り、喋りまくりですからね。

じゃ、失礼して、私は一杯、頂きますか。いや、少しぐらいじゃ、私ゃ、酔っぱらい





ませんヨ。この方が、舌の回りがよくなってその、なんとかいう、それ、取材とかいうのが、よくとれるというもんですヨ。

あんたも一杯やりなさいヨ。テープなんか止めて、こっちへ、いらっしゃい。

だったら、これから、車をとばして、郊外へ行ってみない？ 私の知ってるところで、そりゃ、いいところがあるのヨ。昼まっから、どんどん、お湯が沸いていて、岩風呂なんですよ。今夜、そこで泊まりなさいヨ。どうせ会社から、お金は出るんでしょ。だったら、じゃんじゃん、散財しなきゃソンよ。

そしたら、面白い話も聞かしてあげるし、私を裸にして、縛ってもいいわ。縛ってしまったら、あなたの好きなようにしたら、いいじゃないの？ 私って、こんな女なのよ。

いいえ、酔っちゃ、いませんヨ。

写真でも、浣腸でも、お好きなように、すべては、あなたの腕次第って、わけよネ。

さあ、そうときまれば、車呼びますわヨ。一寸、待っててね、これから、私、着物、着替えてくるから。

○  
さあ、着きましたよ。建てこんでいて、入口はこんなんだけど、中はそりゃ広いのヨ。

見晴しはよくはないけど案外落着いていて、こんなところは、ゆっくり遊べるのヨ。

岩風呂へ入るでしょ。私と一緒に入りましょうよ。湯上がり一杯、私は頂戴するわ。

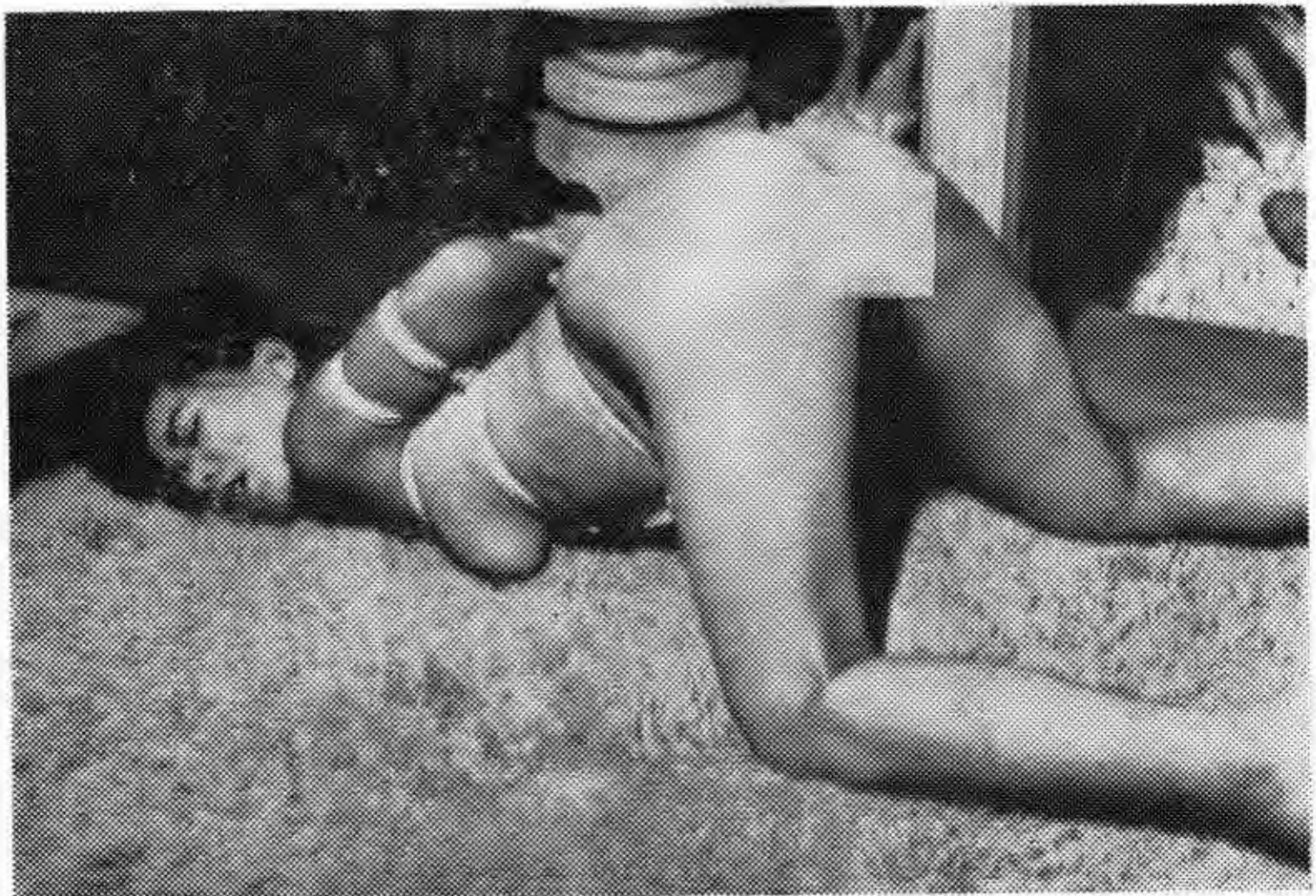
木の香も新しいっていうけど、ここは一寸、古びてしまっているわネ。でも新館があるのヨ、裏の方に。プレイとお写真は、新館の方に部屋とってあるの。

ああ、いい気持。湯上りのおビールって、おいしいわネ。

今日は、お店、休んでしまおうかネ。あんたと一緒に、ここへ泊まってしまおうかしら。

いやですよ。酔ってなんか、いませんわ。

私をすぐ、酔っぱらいにしてしまうんですもの。い







やですわヨ。

そりゃ、少しは飲みますわ。でも、ハメをはずすなんてことは、ありませんのヨ。

あんた、脱がして。暑くなってきたワ。

これ、麻縄。トゲトゲしていて痛いわネ。この前に縛られたとき、大分、肌にアトが残っていたわ。ええ今はもうすっかり消えてしまったけど、一週間ぐらいは、この、胸のところに、はっきりと残っていましたワ。

お写真もいいけど、今日は、思いつきり、プレイしてみない？

そう、この私の身体がバラバラになるくらいに、すごいプレイをしてみない？そう心配すること、ないわヨ。平ちゃらよ。

その麻縄ネ、太いのと細

いのと、それで、思いきり、私を縛り上げてよ。お写真うつすんだったら、なんだけどネ白いロープも、そのマンダラのも使って、もう、荷物みたいに縛ってくれる？

縛ってしまったら、好きなようにしていいわ。縛られたら私、すぐ燃え上がってしまうんだから。写真や記事がとれなくなたって、いいじゃない。先ず、SMプレイで、思いっきり楽しんでから、あとで考えれば、ネ。

気候不順って、言うんですかね、近頃は、雨ばかり降って。また、ぼろついてきたようですわネ。もう、こうなったら、二人で、しっぽりと濡れてしましようよ。

あとは、このテープとフィルムを持って帰ったら、いいんですよ。素晴らしいポルノが出来てヨ。失神しても、私、知らないから。

そんな痛いの、よく辛抱するネ、って言うでしょう。全然、違うのヨ。

本当はネ、痛くないの。信用しないかもしれないけど、凄く気持ちいいのヨ。痛いと思うのに、気持ちいいでしょ。だから、辛抱出来るのじゃなくて、まあ、喜んでるってわけネ。でも、私、浣腸は初体験よ。

凄く興味あるかわり、少し怖いみたい。トイレで私に浣腸するんですって？



あんな狭いところでやらなくたって、ここでもいいじゃないの。なんだったら、お風呂場でもいいわヨ。

まあ、そう慌てなくたって、私のハダカを思いっきり、縛って下さいよ。

どう？ 脚がよく開くでしょ。もう太股にも、こんなに肉がのってしまつて、アクロバットでもないけど、若いとき踊ってたんで、やっぱり今でも、脚を挙げたり開いたりするのは得意だわネ。ええ、泳がせたら相当なものヨ。プールなんか、チャンチャラおかしくて。やっぱり泳ぐんだったら、荒海でなくっちゃね。

自分で舟を漕いで行ってイカリを下ろしておいて飛び込むのよ。波の高いときなんか、波と波の底になって、舟が見えないくらい。

グアム島へで連れて行ってくれない？

私、素裸で思いっきり泳いでみせるわ。グアムの海岸で、縛り写真撮るのもステキじゃない？ えッ、サメがいるんですって？ そりゃ大変ネ。でも、私の肉なんか、食べたら美味しいんじゃない？ 脂がのっていて。

縛られていたら、身動き出来ないから、お尻でも、太股でも、噛みついてごらんないさよ。そうですヨ、もし、声を出していけない



んだったら、猿轡して下さった

ら。遠慮なさらないで、歯を立てて下さいヨ。

歯型なんかついてても、私は構いませんよ。

ぎゅっと噛みつかれて、じーんと痛いところが、また、たまらないの。もう、そのこと考えると、肉が少々喰いちぎられたって、平気なの。変でしょ、私って。そう思わない？

ええ、そうなんですよ。だから、私って、少し、エゲツなく縛られたって、辛抱できるんです。痛いって、いうより、気持がよくって。そうですね、奇譚クラブ的ですネ。もっと、もっと、きつく縛って下さらない？ 私、縛られるの、きつければきつい程、嬉しいんですもの。

あら、こんなポーズで写真撮りますの。だったら、こんなのも、どう？ 自分から、こんな淫らなポーズとってるんですか



ら、早くシャッターを切って下さいヨ。

ゆっくり眺められてる方が、いいんだろうって？ よく御存知ネ。

ねえ、そんなに、じろじろ眺めないで、煙草一本くわえさせて。ええ、縛られたままでいいんですの。縛られて、すぐ解かれるのって、私、物足らないわ。まあ、そうね、三十分以上は縛っておいてほしいの。

エビ責め？ あれ、この前やったわネ。この頃、私、お腹に肉がついてきたでしょ。だから、あれは苦しかったわ。放っておかれて脂汗が出てきましたものね。胸とお腹が圧迫されて。縄が手首や足首に喰い込んできたのは、そりゃ痛かったわ。でも、その方は反って気持がよいくらい。

転がされて、前の方がむき出しになったでしょ。あれで全身がカーッとしてしまって、苦しいのが、むずがゆい快感に変わってきたのヨ。もっと話せて？ それ以上、私、話せないワ。あなたが御覧になった通りよ。

あなたも中々スミに置けないわ。写真を撮るといっておきながら、ずいぶんと悪戯なさったじゃない？ バイブはお前が好きだからって、そんなこと言わないでよ。恥かしいじゃないの。ほら、こんなに顔が赤くなったで

しょ。いいえ、私、非難してるんじゃないのよ。だから、もっと、もっと、悪戯してもいいの。それがSMプレイですもの。

こんな格好で浣腸するって？

それだけはゴメンなさい。

あら、いつの間に、そんなもの準備してきたの？ グリセリンっていうの。

そーっとして、痛くしないで。

わあー、冷たい。お腹までしみてくるわ。

ああ、縄ゆるめて——。こんな格好のままじゃ、嫌、嫌っていつてるのに。

乱暴ね。とうとう浣腸されてしまったわ。

なんだか、お腹がゴロゴロいつてるみたいだわ。ねえ、もう、そんなに入れないで。私って、今日が始めてなのヨ。浣腸って——。

ああ、だんだん、お腹が痛くなってきた。

脇腹がしぼるワ。ねえ、縄、解いて。

意地悪。早く、解いて、解いて。

出るまで、まだ、中々だった？ でも、こ

んなに、お腹が痛いじゃないの。

縛られて痛いのは辛抱するけど、浣腸でお腹が痛いのは辛抱できないわ。

そりゃ、お産のことと思えば、こんなの平っちゃらよ。ああ、痛い、痛い。許して。

ああ、思い出した。浣腸は始めてって、私

言っただけど、お産の前に浣腸されたわ。どんなだったか、今、忘れてしまったけど。

ねえ、トイレへ行かせて。

こんな、縛られたままで出すの、私、いやですわ。トイレか、お風呂場でって言うたでしょ。それに、こんなお部屋の中で、困りますわ。

私、縛りプレイだけだと思っていたのヨ。

それに、もう、のっけから、浣腸液を入れてしまつて。インチキだわヨ。

ああ、もう、辛抱できないわ。

だったら、ここでもいいから、せめて縄だけ、ほどいて——。ええ、脚だけでいいからゆるめて、ほどいて、ねえ、お願い。

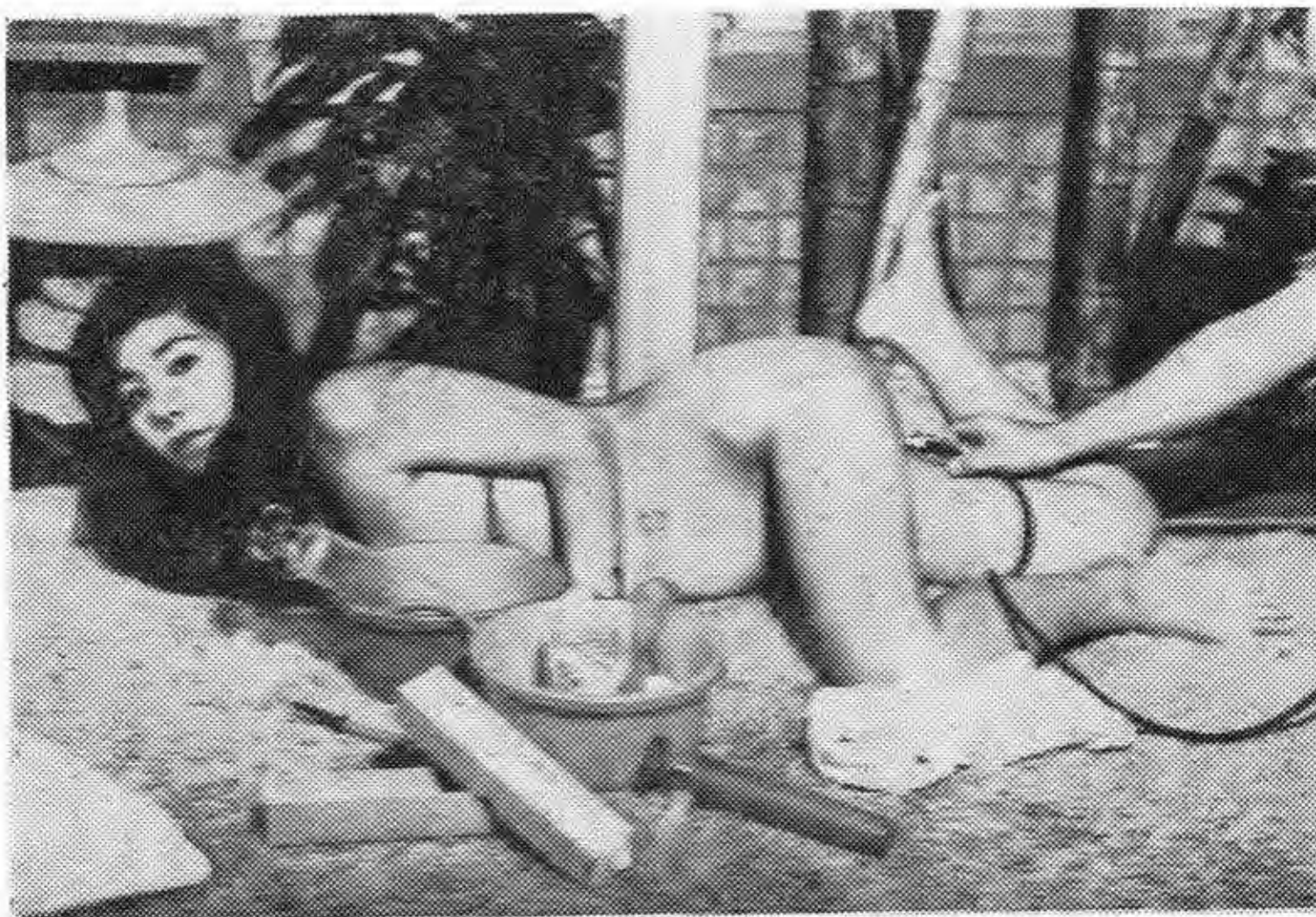
脇腹だけだったのが、今度は、下腹全体が痛くなってきたのヨ。

ええッ、余り、騒ぐから、もう一本浣腸するって。そんなの、ないわよ。許して。

あ、あ、あ、どんだけ入れたの？ 一〇〇

CC、二〇〇CC？

冷たい浣腸液が入ったので、一寸辛抱できそうヨ。あら、ビニールなんか敷いて、ここを出せて、いうの？ そりゃ無理よ。もうお腹がゴロゴロ鳴って、今度こそ、辛抱できそうにないわ。そこら一面、とび散らしたっ



て、私や知らないから。

ねえ、だったら、せめてタオルでもかけて。お願いとび散らないように。

カメラで写すのに、邪魔になるって。だったら、私とことんまで辛抱するわ。

ああ、お腹が痛い。痛いワ。痛いワ。

ウーン、どこまで辛抱できるかしら。

浣腸って、こんなに苦しいものとは、知らなかったワ。一思いに、トイレへ行かせてくれたら、どんなにかいいのに。

お願い、トイレへ行かせて——。

トイレへ行かせてくれないうんだったら、せめて、縄だけでも解いて。ここでするから。

あーあ、お腹が痛いわ。痛い、痛い。

ビニールをもう少し左側

にも敷いて——。

もう、辛抱できない。見ないで、お願い。

○

手首の縄が痛いから、先にほどいて。

ああ、こんなに恥かしいこと、私、初めてだわ。私、今朝、何を食べたか、わかったでしょ。そんなこと、わからないって？

あら、こんなにヒドイ縄のあと。

辛抱のしようが足りないって？ そりゃ、あんた、脱脂綿でぐっと押さえてくれたら、大分、辛抱しよいのよ。それに、あんなに、覗き込まれてたら、もう一思いに、なっ

てしまうじゃないの。  
お腹が軽くなったみたい。せいせいした気持よ。ええ、そこんこは、痛くはないわ。でも、見られてるってことは、素敵だわネ。

あんなにお腹が痛かったのに、今は嘘みたいに、スーッとしたわ。いいえ、私は便秘症じゃないわ。お蔭さまで身体の方は至極、健康。そう、どこって悪いとこ、ないみたい。便通？ 毎朝一回は、きまってるわ。

第一、お薬なんて買ったこともないし、飲んだこともないのよ。お医者さまだって、このところ、縁ないわよ。そうなんですよ、健康保険料は払ってますけど、保険証なんて



使ったことありませんの。歯だって、この通り、ムシ歯一本ありませんものね。

健康便ですって？ ひゃー、恥かし。そうじろじろ見ないでネ。やはり、自分のお腹の中から出したものだもの、そう見られちゃ、恥かしいもの。芳紀まさに二十五才の娘、いや、女性ですもの。花恥かしいですって？ それは一寸、言いすぎでしょ。

ええ？ これから、縛らないから、大量浣腸をするって？ お風呂場？ それ、なんですの、大量浣腸って？ お湯を私のお腹に入るだけ入れるの。あら、そのゴムのタマミたいなもの、なんですの？ エネマシリンジっていうのですか。

さっきの浣腸は序の口。へえ、だったら、これから、いろんな楽しみが、まだまだ沢山あるんですの。その、吊り下げた器械、イルリガートルというんですか、あれも使うんですか。なんだか怖いみたいですわ。

私の身体を、外側ばかりじゃなしに、内側からも綺麗に洗ってしまおうですって。そうなんですよ。私の身体は、今のところ、すっかり、健康なんですから、少しぐらい絶食したって、へこたれませんか。ええ、お酒か、ビールだけ飲まして頂けたらね。

絶食させておいて、私の身体の中の穴という穴を綺麗に洗ってしまつて、そこへ食べ物押し込むっていうんですの。だったら酒の粕ぐらいにして下さいヨ。

そのゴムの管、なにに使用しますの？ ああカテーテルといって尿道からオシッコを出させる道具ですか。

私がこらえようと思つても無理に出させてしまつてすの。そして空になった膀胱へビールを代りに入れるんですって？ あら、そんな勿体ないことしないで、上の口から飲まして下さいよ。オシッコは、すぐ製造しますからネ。ええ？ それだったら駄目だって？

私には、なんのことだかさっぱりわかりませんわ。

じゃ、覚悟をきめて、そのエネマシリンジとイルリガートルの御厄介になりま







しょうかしら。これでも、か弱き女性なんですから、お手やわらかにお願いしますわネ。  
うわア、凄い勢い。ゴム球を押すと、物凄く飛びますのネ。このくらい、殿方も元気があったら、素晴らしいですのに。  
こんな勢いで、私のお腹に、チュッチュツとお湯が入ってゆきますの? なんだか、身

体中がムズがゆくなってきましたわ。  
こうですか? お尻を高くして、ええ、お腹さえ圧迫しなかったら、逆立ちの格好でも私は辛抱できますわよ。顔へお湯をかけんといて。髪は濡れてもいいの。あとで、ドライヤーで乾かすから。  
まるで、タンクみたいネ、私のお腹。どん

どん入ってゆくみたい。一体、どのくらい入るんでしょうね。こうして、自分で見ていると興味できますわ。

お湯だから、余り刺激がないみたい。お腹が張ってくる感じだけだわ。

ねえ、もっと入れてもいいわ。もっと、どんどん入れて頂戴。沢山お湯の入るのが刺激的みたい。あーあ、大分、お腹が張ってきましたわ。お腹が破れるくらい、入れてほしいわ。

何CCぐらい入ったかしら。大分、お腹が大きくなってきたみたい。胃が重苦しい感じだわ。少し、身体ずらしでもいい?

あーあ、なんだか、胸が苦しいわ。あげそうよ。一寸、横にならして――。

少しは楽になったわ。さあ、もっと、どんどん入れて頂戴。いやー、まるいお腹。まるで妊娠してるみたいでしょ。

写真撮るの? 一寸待って。呼吸とめるから、これでどう? 大きく見えるでしょ。

もう、とても、こんな格好続けられないわよ。すっかり横にならして。

あら、出てしまいうそよ。出してもいいんですって? だったら、しゃがまして。

まあスゴイ。たんが入ってたのね。



○  
 なんだか、身体中の力が抜けたみたいヨ。それに、アソコがひりひりして痛い。メンソレタムでも塗ってくれない。

お前は文句が多いって——。でも、相当協力したつもりなのよ。ここらあたりで、ゆっくり岩風呂に入らしてもらって、冷たいおビールでも、ぐっと一杯、おなかにしみわたるようなのを飲み干したら、さぞ、おいしいでしょうね。そうしたら、また、元気が出てきて、次の責めを受けるわよ。

あなたも、ここまで取材したら、今日のところはいいじゃないの。責任完了っていうところなんですよ。一緒にお風呂に入って、夕食を済ましたら、街へ出てみませんか。

こんなこと言ってるの、テープに入ったら駄目だって？ あとで適当に消しときなさいよ。私も、浣腸と大量浣腸をして頂いたんだから、感謝してるのヨ。でも、これ以上、何回もこんなの、やられた、身体中の力が抜けてしまうじゃないの。

それが責めだって？ そう言やそうね。だったら、もう少し色がつかなくなるまで、何回でも、お湯を入れてみる？ ええ、私は辛抱してみるわ。そのかわり、夕食後、一緒に

に街へ出て頂戴ね。

髪が濡れるの、構いませんヨ。黒髪が長いってですか。これでも先日、少し切ったの。切る前には、立って前に垂らしたら、太股の中途ぐらいまであったのヨ。そうですわ、前もすっかり、かくれてしまってた。ええ、髪の量も多いでしょ。ピンも何も使わないで、

流し髪にしておいて、海で泳いだら、そりゃ見事なものよ。濡れた髪、あとで乾かすのに困るけどもね。

ええ、私って、こんな女なのよ。髪が濡れたって、肌に縄の痕がついたって、一向に構わないのネ。一度、歩いてる途中で急に雨が降ってきてね、傘は持ってないし、雨宿りす



るところもないし、濡れたままで悠々と歩いてたのヨ。下ろしたてのスーツから下着まで、びしょ濡れだったけど、私、平気だったわ。

私って、変わってるでしょ。

それにネ、私、毛深いでしょ。剃ってくれ  
る人があったら、一度剃ってもらいたいと思  
ってるのヨ。ええ、そりゃ、夏場は自分で腋  
の下ぐらひは剃りますわヨ。私の言ってるの  
は、その他の部分のことですのヨ。

あなたが剃って下さるって? だったら、  
お願いしようかしら。

盲腸の手術をするとき? そりゃ剃られま  
したわ。なんで盲腸の手術に、ここんこの  
毛が邪魔になるんでしょうね。看護婦さんが  
「動いたら、大切なところが切れますわヨ」  
だなんて言うのよ。馬鹿にしてるわね。

剃られるんだったら、私はやっぱりSMプ  
レイの中で剃られてみたいワ。

あら、もう、さっき以上に、お腹にお湯が  
入ったみたいね。胃のところまで圧迫して  
るみたいよ。もう、出してもいいでしょ。

ああ、これで三回目になりますのね。身体  
の中がすっかり洗われたみたい。ほんと、お  
湯で洗ってるんですものね。

これなんですの? ロトって? (漏斗)

これをお尻の穴へ挿し込んでおいて、薬缶  
からお湯を注ぐんですって? まあキタナ。

投げすてなくなたっていいって言っても、キ  
タナイんですもの。洗ってあるって? そう  
でしょうけどネ、なんだか不潔に思えて。私  
って、わりかし潔癖なのヨ。こう見えても。

ええ、そうなんですヨ。SMプレイで昂奮  
してたら、きたないものもきたないとは思わ  
ないの。いいえ、きたない方が、かえって興味  
があるかもしれないワ。でもネ、今、こんな  
漏斗なんて言われたら、やっぱり、きたない  
と思うのヨ。何に使ったかと思うと。

いいや、もう結構よ。もうこれ以上、お腹  
の中に、お湯を入れられたら、私、たまらな  
い。かんにんしてヨ。

私とその漏斗とかいうのを、くわえて、ど  
んどんお湯を飲み込んでるところを見たいん  
ですって。ひゃー、かなわんワ。でも、ちょ  
っぴり、面白いかもネ。だったら、一回だけ  
よ。やってみようかしら。

急に入れないで——。お腹に力を入れない  
って、こうして、口を開けて、ハァハァ、口  
で息するんですの。

わあー、凄い、もう何リットルぐらい入っ  
たかしら。変わったことするのネ。

いいわヨ、水道の水、入れても。

なんだか私おトイレへ行きたくなってきた  
わ。途中だけど、中止してよ。えッ、ここで  
一緒に出してしまえって? そんなこと、出  
来っこないわよ。ねえったら——。

ええッ? カテーテルで導尿してやるって  
いうの。そんなの嫌ですワ。自分でトイレへ  
行って——。ああ痛い、受けます受けます。  
こうすりゃ、いいんですの。

ああ、すうーッとしましたワ。じゃ、次は  
何をしますの。いや、いやッ。そんな大きな  
ので浣腸するんだって。悪趣味ネ、もうなん  
にも出ませんわヨ。出るものは、すっかり出  
てしまったんですから。

浣腸されて、どんな気持がしたかって?

そりゃ、よかったですわヨ。

私の身体が、どのように変化したか、見て  
いた、あなたの方が御存じのクセに——。

それを、私の口から聞かせたいって。そり  
ゃ悪趣味っていうもんですよ。いくら、私が  
お喋りだからっていつても、そんなことまで  
話せるものですか。

じゃ、今日のところは、これくらいにして  
おいて、また次にネ。さようなら。

(文責・記者)



## 作 鬼 六 団



## 決 定 版

● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

● 番号「花決定版」● 定価一、〇〇〇円(送200円)●

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありましたが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八十年の集積を味読して下さい。

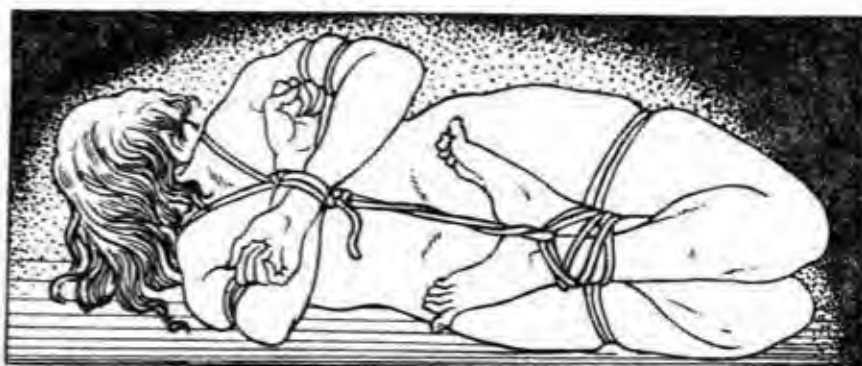
△内容主要見出し一覧▽

第一章 発端 第二章 人探しの場 第三章 美人の脱走 第四章 華麗な来歴 第五章 救済者の失 第六章 餓魔の好 第七章 悪魔の地獄 第八章 恐怖の美 第九章 淫蛇の執念 第十章 美姉妹の危険 第十一章 色事子の受難 第十二章 美津子の微塵 第十三章 密室の秘密 第十四章 脱走の失敗 第十五章 華やかな宴 第十六章 地獄屋敷へ 第十七章 翻弄されるカップル 第十八章 一千万円の身代金

第二十二章 身代金奪取の失敗 第二十三章 涙の宣誓 第二十四章 連命の逆転 第二十五章 奇妙な三々九度 第二十六章 飼育される白い動物 第二十七章 悪魔と悪女の悪業 第二十八章 屈辱の地獄 第二十九章 逃走の恐怖と失敗の結末 第三十章 悪鬼達の残忍な所業 第三十一章 落花無残の修羅場 第三十二章 淫らな美女の調教 第三十三章 すすまじいシヨ一の展開 第三十四章 汚水にまみれた宝石 第三十五章 華々しき美女の屈伏 第三十六章 対峙する美女と美女 第三十七章 あくどい陥罪 第三十八章 羞恥図絵の展開 第三十九章 清純な令嬢の屈辱 第四十章 人身御供の令夫人 第四十一章 深窓の美少女とズベ公 第四十二章 小夜子への執拗な調教 第四十三章 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子 第四十五章 激しいスターへの訓練 第四十六章 低脳男と令夫人の結婚 第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人 第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊 第四十九章 悪魔たちの哄笑 第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄 第五十一章 珍芸を開陳する令夫人 第五十二章 淫靡な時代劇シヨ一 第五十三章 華々しきシヨ一の展開 第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり 第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め 第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち 第五十七章 悪党の執拗ないたぶり 第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面 第五十九章 勝ち誇る悪党一味 第六十章 中国伝来の秘法 第六十一章 緊縛された美女の涕泣 第六十二章 新しい餌食への触手 第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄 第六十四章 恐怖の責め続く 第六十五章 結末なき責めの結末 第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人 第六十七章 新しい儀の到来と静子の狂態 第六十八章 あくなき汚辱に泣く美女 第六十九章 ニューフェイスに飼育開始 第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女 第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演 第七十二章 女盛りの妖美な肉体 第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊 第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。〒558 暁出版株式会社宛



鑑賞感想

## 映画

## 「性倒錯の世界」

を観て

杉本弘志

公開を待っていた映画でしたので、私の街の映画館までくるのを待ちきれず、名古屋まで足をのばして観に行ってきました。こういう映画の例にもれず、何もかもをサッとひとりでして、こういうことにほんとうは無関心な平均的世間に、興味本位にゴッタ煮にして観せるドキュメンタリーであることは、予想していたとおりでした。また隔靴搔痒というか、映倫（という）ことは、いわゆる社会良識の感覚のハサミを意識して、ものごとの核心を映像なり説明なりで表現するのを避けて

いることも予測していたとおりでした。予想していたとはいえ、浣腸乃至アースについて、全然触れられなかったのは、やはり失望でした。

しかし、なお、かつ観てよかったと思ったことを、左記に書きます。

一、同性愛（とくに男と男の）の紹介が、ながながとされ、いい加減ジリジリしてきたところで、伊藤晴雨の責め絵紹介場面からハッと団鬼六氏と辻村隆氏の対談場面になる。やれやれや々と観たい場面になったと坐り直す。ところでこの対談は、ほかの奈良林祥、

戸川昌子、渡辺淳一の各氏に比べ、あまりにも時間が少なく、また前記の諸氏に比し世間的にポピュラーでない団、辻村両氏の簡単な紹介があってもよかったのではないか。あの扱いでは失礼であると思いました。

もちろん、これが観てよかったと思ったことではありません。そのあと、辻村氏という人物の生活と意見を画面で紹介するという形で、あわせて裸女緊縛というか、プレイとしてのサジスムが、日本の社会でどんな形で行われているかが物語られるのですが、ここでも非常によかったのは、辻村氏の風貌、語り口が、まことに堅実・真面目・朴訥で好感がもて、辻村氏が映画の中の談話でも「われわれのサジスムはわれわれ仲間プレイと呼んでいるように、ひとりひとりが誰をも傷つけず各々のセックスをより楽しく味わうための道程としてある」といった意味のことを語っておられました。辻村氏自身の映像が、それよりも何よりも、辻村氏自身のお孫さんをお宅の庭であやしておられる生活ぶりや、そして関西なまりの人なつこい篤実そうな話しぶりから雄弁にアブノーマル・セックスが決して反社会的なものではなく、また陰湿なものでもないことを実証していて、ほんとうに嬉しく感じました。

それに反して、そのあとに出てきた実際に裸女を縛って、プレイする場面。その場所が



いかにも納屋か何かのようで、薄汚いのは、まあ我慢するとして、出てきた女のひとが、美しく魅力的というには、ほど遠い醜女で体も汚く、そして顔の表情も、ただ暗く歪んでいるだけなのは、悲しいでした。深田菊子さんやその他多数の若く魅力的な明るいプレイ・メイトがいるであろうに（映画に出るといふ点で製作側や、撮られるご本人の事情があったのか知れませんが）まことに、残念でした。若々しい魅力的な女体が、虐げられ、恥かしめられ、羞恥の裡にも官能のうずきで興奮、喜びの情感が顔全体に表われる。そういった映像を観たかったと思いました。

二、次に、痛感したこと。アブノーマル・セックス・プレイの誌上に、政治や社会体制の話など、できることなら持込みたくありませんが、あまりに腹が立ったので書きます。それはこの映画のナレーションでも語っていましたが、いままでの権力者は、被支配者にセックスの楽しみを味あわせまいと、不当にそれを抑圧し禁止してきたということです。それを端的に表わしているのが、この映画の初めの部分の男同士のセックス・シーンではっきり女役の男のアヌスを、両臀部を押しひらき、脚を高くかかげて、観衆に大寫しで観せておきながら（観客から失笑の声あり。ホモの人には悪いが、私にもやせてゴツゴツしたゴボウのような黒い両脚と尻の間の情景

など、嫌悪以外のものではなく、顔をそ向けました）一方、女のからだのそれは、わざと絶対に観せようとしなかったことです。

これは、映倫を意識しての製作側側の自粛だろうと思うのですが、つまりこういった意地悪な配慮が全篇に見られることが、体制側の「セックスの喜び、楽しさを、大衆に知らせまい、味あわせまい」という検閲制度の真の意図だと、しみじみ、わかった気がしたということです。

男のアヌスを観て喜ぶのは、ごく一部の特殊な人たちです。（女は、大体異性の体を見て、喜びを感じるようにできてないと思います）一方、女の体の全部を、とくにセクシュアルな部分（下腹、臀部、その間の二つのホール）を見たい（男の性慾には、異性の体を見たいという慾望が大きな部分を占めていると思います）女の側からいえば見せたい——というのは、人間の絶対多数の正直な慾望です。ところが、そっちの方は観せようとしません。まったく意味のない差別をして、意味のないイジワルをするのが、映倫に象徴されるいわゆるワイセツを取締まるという権力（もうこのようなセックスに対する支配体制も、日本でも崩壊前夜にきていると思います）の態度なのです。

丁度、今あまりマスコミに宣伝されてはいないので、実に面白いセックス解放の小

説ノルウェーのビョルネボという作家の「リアン」（原名「一糸まとわず」）——三笠書房——という本を読んでいます。ヒロイン、リアンが女子高校生ぐらいからだんだん性的喜びにめざめていく過程を、素直に、社会的偏見にとらわれず表現している、真面目な意図から書かれたと思われる面白い小説ですが、その中で実に何でも無いように、アヌスの美しさ、アヌス愛撫の喜び、セックスプレイとしての流暢場面などが、ポンポンと飛び出してきて、人間の自然のセックスの喜びは本来こういうものではないのかと、今まで私たちが押えつけてきたものへの強い憤りが、一層燃え立つのを感じるのです。この小説については、またあらためて読後感を投稿させてもらいたいと思います。以上「性倒錯の世界」を観た感想を二つ書きました。

最後に一言。「倒錯」とは「さかさまになり、もつれた」ということでしょうか。しかしセックスに本来「正常」も「倒錯」もないはず。何か誰かが、人間の本来のセックスを歪め、押えつけたから、やむを得ず、多少エキセントリックな形で、セックスのエネルギーが噴き出たのではないか。そのような現象があるからこそ、現代の日本人が、いきいきと生きており、人間らしさを求めていることのしるしではないでしょうか。

（おわり）

連載・アブ紳士行状記

## M 派 交 友 録

(23)

鬼 山 絢 策

カット・岡たかし

△馬場庄平の巻(4)▽



## M の 自 覚

自分は、いつ頃からMの傾向を持つようになったか、それを自覚したのは何才ぐらいの頃からかという点について、私はM派の友人達に一応は質問してきた。

私の交際した友人達は、この点については非常に早い時期の人が多かった。大体、少年期、それも十才から十三才ぐらいの間にはっきり自覚した人が多いが、中には幼年期に、それがMであるということとは知らないが、既に、そうした願望を抱いている人もあった。

私なども五才ぐらいから、その傾向があったことを、はっきり記憶している。もちろんセックスとは全然、無関係である。フロイドの言う「性器的体制」つまり、性器自体が性交不能の未熟な時代だし、性器がセックスのために使われることすら、知らな



い年代である。

にも関わらず、性器には大いに関心があった。幼年期における性器とは、性に関心はないが、不潔なものであるという観念だけが強く印象づけられている。だから、性器ではなく泌尿器として見ているわけである。

ところで馬場氏の場合だが、彼も九才頃からMの願望を持っていたことを、はっきり記憶しているという。

彼は四国の松山で生まれたが、すぐ両親が満洲へ移ったので幼年期を満洲で過ごした。

父親は鉄道の監督みたいな仕事で、よく地方に出張した。そういう時に、よく彼を連れて行くことがあった。彼の弟は、まだ赤ん坊で、彼が小学校の頃、夏休みになると十日ぐらの旅行にも、ついて行った。その旅行先で彼は生涯、忘れられない光景を目撃したのである。

父は、かなり権力があつたと見えて、行く先々で立派な旅館に泊まり、子供の彼とは別々に室をとったが、彼にもお守り役みたいな遊び相手がついてくれるから、彼も旅行は楽しみだった。だが十日ほどの長い旅行で、かなり奥地の、旅館もないような村落へ泊まったことがあつた。そこは日本で言うところの庄屋さ

んみたい大きな家だったが、客用のベッドの置いてある部屋が一つしかないとかで、この日だけ、父と一緒にの部屋へ泊まらされた。しかし、その部屋は主人夫婦の寝室らしく十五畳ぐらいある広い部屋だった。

彼は早く寝かされたが、部屋が広すぎて落ちつかず、なかなか眠れなかった。

少しまどろんだが、ふと人声がするので目をさました。そこで彼は、父とその家の夫人とのセックスを、なまなましいまで見てしまったのである。

出張先では毎晩、酒や料理の接待を受け、父親のまわりに若い女が、いつも坐っているのは見てきたが、人には見せられぬものを彼は生まれて、はじめて見たのである。

父親は家にあつてもワンマンだが、出張先では、それ以上に威張っていた。子供心に父親を尊敬していたのだが、その威厳のある父親が、醜い恰好をして女の上に寝ている。それが何をしているのかということは、彼も何となく知っていた。

しかし、更に驚くべきものを見た。

部屋には彼と父親と夫人だけでなく、もう一人、誰かが居るのだ。

やがて父は夫人の上から退いてゴロリと仰

向けに寝た。すると下の夫人が起き上がったもう一人の人間、それは可愛らしい顔をした十二、三ぐらいの少年だったが、その少年がベッドの傍に、うずくまった。

夫人は少年を見下ろしながら、何か小声で父に話しかけてニコリと笑った。父は寝ながら夫人の腰の所に居る少年を見つめていた。

やがて父親の元気が回復した時、今度は夫人の方から下におおいかがさっていた。

その時、少年の可愛らしい顔が、勤めをうまく果たした後の満足そうな、にこやかな笑顔となつて見えたのである。

この時である。

馬場少年は、その少年をうらやましく感じた。平素から父を尊敬し、大きくなった父のようになりたいと思っていたし、母からもそう、しつけられてきた。だから当然、この場面でも父の立場を望むのが至当であるはずだが、あの少年の笑顔を見た瞬間から、少年の立場の方を望むようになってしまったのである。

この強烈な印象は、その後何回、何十回となく馬場氏の脳裡に再現されたが、いつも少年のようになりたいという気持ちに変わりはなかった。

「後になって本や、その他からセックスの知識を知り、更にMを識った時、ふりかえって見て自分が、はっきりMを意識したのは、あの瞬間からだと思いましたね」

と馬場氏は確信あり気に言いきった。

「当時の満洲と言えば、日本人は威張りくさっていましたよ。満人の召使いなどは全く奴隷同然に扱っていましたからね。よく往来でも、日本人が満人を殴ったり蹴ったりしているのを見ることがあります。地べたに土下座して、拝むように謝まっているのを、日本の女の人で、靴のまま足蹴にかけたのを見たことがあります。女の人が、よくやる侮辱行為は唾を吐きかけることですね。この間抜け野郎、とか、糞喰らえ、などと罵言を浴びせて唾をひっかけるのです。満人の女も怒ると、やりですけど日本人には、かけません。そんなこと日本人にしたら大変ですからね。だから当時、ぼくは満人に同情していました。もっとも、ぼく自身も、もっと幼い頃はダダをこねて満人の召使いの顔を蹴つとぼしたり、馬乗りに跨がったりしたことはあるのですがあの一件以後は、絶対、満人に対しては召使いといえども、暴力を振るったことはありませんでした」

彼と酒を飲むと、よくこんな話を聞かされるのである。

「そうそう。一度、料理屋でね、こんなこともありましたよ。陳と言う下男を連れて町を歩いていると、一軒の料理屋の前まで来ました。今、考えてみるとその店は料理屋というより、日本のバーと言った感じの店なんですね。女が大勢、居ましたからね。陳は、その店を指さして、お父さまは、ここでよく、お酒を飲んで来られますよと言うんです。ぼくは急にその店が見たくなって、そっと料理屋の扉を開けて中を覗いたんです。すると一人の日本人の酔っぱらいが、テーブルに腰かけて、わめき散らしているんです。足元には皿小鉢の割れたのが転がっていて、相当、暴れたらしいですね。日本人は、その男一人であとは満人の男と店の女達が、片隅の方へ集まって小さくなっているのです。そのうち、その酔っぱらいはフラフラと店の中央へ出て来て、Mボタンを外すと、かなり大きなものをポツンと出したんですね。てめえら、俺のお流れを頂けと言って、隅にかたまっている満人達に向かって小便をひっかけてたんです。かなり遠い距離から、上へ向けて輪を描くようにして引っかけたんですね。満人の男や女

は悲鳴を上げて逃げるのを、追っかけるようにして、あっちこちへ小便を振り散らかしているんです。その時、ぼくはパッと、かけ出して、小便の線の中へ入って行ったんです。酔っぱらいはハッとして小便をとめました。がぼくの服に、かなり引っかけました。あつ坊ちゃん、ごめんなさいよ。何で、こんな所へ入ってしまったんですか、と酔っぱらいは酔いもさめたように、びっくりして恐縮しました」

その時の馬場氏の心理は、満人が可愛想だから助けてやろう、と言うような気持ではなかったと言う。ただ、小便の輪を見た時、本能的に自分もかけられたいという気持ちになって、何も考える余裕などなく、とび出して行ったのだと言う。

### ピストルとショット・ガン

このように、馬場氏のMへの目覚めは、男性対女性というオーソドックス・スタイルと異なっていて、三者による複数のMから入ったために、その後は二者関係に戻ったとしても、進行して行くと彼の憧憬するタイプは、複数によるMを理想としている。



それとM派には、かなり多くあることであるが、彼が跪坐する対象は、必ずしも異性とは限らない。同性に対してもMを感じる面がある。

さて、馬場氏に倉田由紀夫人を紹介して撮影を始めてから、今回が三度目。第一回では由紀さんの腿が顔に触れただけでダウンしてしまったほどの、もろかった馬場氏が、二回目三回目となるに及んで、驚異的なタフネスぶりを見せてきた。

殊に今夜は、馬場氏の自宅をスタジオとしたために、彼としては落ちつけたし、今夜の撮影に対する二つの希望のうち、その一つを果たして、彼はますます、はりきっていた。

二つの希望というのは、その一つは由紀さんのネクタールである。

■由紀さんもネクタールを与えるのは好きだし、この方は実現可能と読んでいたが、写真の側から見ても、これは予期以上に傑作ができたと思った。

女性の激しさというものは、ものによっては男性を、はるかに凌駕することがあるが、この放尿の場合でも、男性のは当たりが、それほど強くないし、見た目には細く、誰でも

みこむような尿線を見せるが、女性の場合はもっとパンチがある。バシャーッと叩きつけるような勢いで、男性がピストルの弾丸なら女性にはショット・ガンである。何発もの弾丸が、あられのように散らばって、とび出してくる。

顔が蜂の巣のように穴があくほどショット・ガンをぶちこまれたのだから、馬場氏は生まれて初めての宿願が、期待以上の効果で果たされたのである。

かくて第一の希望は報われたのであるが、第二の希望は、ちょっと無理ではないかと思っていた。

だが第一の希望の叶った馬場氏は、勢いに乗じて、それとなく第二の希望への催促を、言葉を謎にかけて誘ってきたのである。

しかし、馬場氏の望む第二の希望は、今夜は何となく実現不可能の様な気がしていた。

それはともかくとして、御兩人にやる気がある以上、ともかく、その線にもって行こうと考へながら、馬場氏自慢の新築した茶室をセットにした。ここは、まだ先刻、中断されたままで、ライトも、つけっ放しになっている。蒲団も敷かれたままである。部屋に入ると畳の香りがプーンと匂う。

私は「隠す」写真を撮って見ようと思いついた。

すでにこれまで、かなり強烈なシーンを撮ったあとだから、そういう思いつきが浮かんだのかもしれない。

由紀さんに蒲団に寝てもらい、掛蒲団を胸の下まで、ずり下げてタオルの寝巻から、乳房を片方だけ出した恰好で仰向けに寝た。

馬場氏は、四つん這いになって、蒲団の裾の方から、ソロソロと蒲団の中に這い込むところを、劇画のように、ひとこまひとこま、撮っていった。

蒲団にこぶができて、そのこぶがモコモコと、上の方に這い上がって行く。

「馬場さん。そこで腹這いになって下さい」腹這いになると、蒲団の裾から馬場氏の足がニョキッと出た。私は後退して、由紀さんの頭の上から馬場氏の足まで入る構図を捉えた。

「かかあ天下の写真というのは、むずかしいもんですね」

私は由紀さんに話しかけたが、ほんとうは蒲団の中の馬場氏の方に、話しかけているのだった。

「一般的には、奥さんに頭が上がないとい

う、それを具体的に示すには、朝は先に起きて飯をつくったり洗濯をしたり、要するに奥さんのする仕事を御亭主がする。しかし、こんなこと我々の目から見れば、ちっとも、かかあ天下には見えませんね。かかあ天下をセックスに結びつけたら、どうなるか——それを絵にしようと今まで試みてきたわけですが、いまだ撮った写真は、分かりやすいもので心理的な深味がない」

由紀さんは、目をつぶって黙って聞いていた。あるいは、聞いていなかったかもしれない。由紀さんが両膝を拡げて立てたので蒲団が、また盛り上がった。

「奥さんの尻に敷かれる御亭主。その御亭主と奥さんの夫婦のいとなみとは、どんなことか。御亭主は奴隷の位置まで這い上がられるが、それ以上は許されない。奥さんは他の男性とセックスを楽しむ。それが、かかあ天下のセックスというものでしょうね」

「何を、さっきからコチヨコチヨひとりごとを言ってるのよ。写真の方は、どうしたの」

由紀さんは、目をあけて私を見た。

「その蒲団、ちょっと捲ってみて下さい」

由紀さんは躊躇なく蒲団を両手で持ち上げて見せた。その中は、私の予期した構図が埋

ナミオ M 画廊

『ドッグ・ランチ』

春川 ナミオ



まっていた。

私はセルフタイマーをセットし、画面の中へ入って行った。

次のひとコマでは由紀さんの乳房をつかみ

接吻寸前まで顔を寄せた。

一々立ち上がってセルフタイマーをかけるのが厄介である。タイマーは四十五秒にセットしてある。



ナミオM画廊 『ケツ庄特訓』 春川 ナミオ



私は由紀さんの向こう側に回って、蒲団を捲って足をつっ込み、由紀さんを抱いた。私の下になった右足の先が、馬場氏の太腿の辺りに、さわり、上の左足の膝頭が、馬場

氏の頭に当たった。

カチツというシャッターの音を聞くと、由紀さんを離して、また蒲団の中から立ち上がり、タイマーをセットする。

急いで蒲団の中へ潜りこむ私を見て由紀さんはクスッと笑った。

「御苦労さまね」

と言う顔である。

私の太腿が馬場氏の後頭部をおさえつける恰好になり、由紀さんは両足で馬場氏の首を締めた。そのまま、私は身体を起こして、由紀さんの上に重ねた。由紀さんは下から手を回して私の背中を抱いた。

シャッターの音がした。

私が起き上がろうとするのを由紀さんは背中に回した両手で締めて拒んだ。そして右手を私の首に回して抱きすくめてきた。

### 恥をさらす

ここまでは真実である。

と断わると、では、これから先は嘘になるのかと思われるであろう。

その通り、これから先はフィクションで話を進めて行くつもりであった。

何故なら、フィクションの方が極めて自然であり、誰が読んでも真実のように思えるからである。

しかし思い直して、やはり真実を追って行

くことにした。

だが、真実を述べるのは、私としては、まことに書きにくいことなのである。

恐らく、この夜から何日か、または何カ月か経た頃だったら、心にやましくは思ってもフィクションの方に筆がはしったであろう。だが、今は八年近く過ぎ去っている。だから、敢えて恥をさらす気になったのである。

由紀さんは片足をグツと曲げて、馬場氏の頭にあてがうと、邪魔ものを、とりのけるように、馬場氏を蒲団の下の方へ押し下げた。そして、その足を私の腰にからめてきた。「ちょ、ちょっと待って下さい」

私はカメラの方を見た。

「何よ！ もう写真は、いいじゃないの！」  
由紀さんは怒った。

「ええ、でも、ちょっと……」

私は由紀さんの頬に接吻すると、無理やりといていいほどの力を出して、由紀さんの腕をふりほどいた。

私は顔から火が出るほど恥かしかった。

肝心のものが用をなさないのである。

肌を触れ合って、少し動いていれば役に立つようになる見込みがあるなら、こんな不自

然な、まねはしないのだが、恐らく、それは不可能であろう。私は時々、そうした失敗を経験しているから、分かるのである。

もちろん、私は不能者ではない。

だが、旅先などで女と寝ても、何かほんのちよつとした、こだわりがあると不能になることがある。精力が衰えているのかとも思うが、週二回ぐらいの夫婦生活を続けていてもべつに疲労を感じないのだから、それほど弱いとも思っていない。

精力が弱いためではない証拠には、若い血気の頃に玉の井に女を買いに行つて、イザという時にゴムを買ってくるのを忘れた。あるかと聞くと、女は鏡台の引き出しから出してきた。だが、紙を破いてみると白い粉が一ぱい吹いていて、いかにも、安ものであり、弱そうである。すると急に不安になってきて、一応は装備したが、どうも力が出ない。焦つて、サックを取り替えてまで努力してみたがどうしてもダメなのである。恥かしいやら腹が立つやらで、その店を飛び出してから、ふだん、使い馴れているやつを買って別の店へ行ったら、立派に役立った。癪にさわるから買って行ったサックを全部、使ってしまった。だからスタミナの方は十分なのである。

また、私には女性に対する好き嫌いが激しい方で、もちろんセックスに関してであるが嫌いなタイプの女性、例をあげては失礼だけれど、淡島千景とか安藤孝子とかいったタイプの顔の女性は、裸で傍へ寝られても手が出ない。もちろん、淡島さんにしても安藤さんにしても美人であることは認めるし、演技力や才能の優れている点にも敬服しているし、セックスを離れば好きなタレントさんである。

さて、話を元に戻そう。

では、倉田由紀さんは嫌いなタイプの女性かというのと、とんでもないことで、私の理想的な、好みのタイプの女性である。

にも関わらず、どうしてここで不能に陥ってしまったのであろうか。

しかも今、私にとってが一番、刺戟的な、若い頃から夢にまで描いてきたことが実現されようとしている。そういうチャンスで、このざまは何とも、だらしない。

何かに、こだわりがあるとダメになることは自分でよく承知していたし、では、この時は、どんなことが、こだわりの原因になっているかも知っていた。

私は、この写真を撮る道楽を始める時、い



ろいろな誓約やタブーを、自分自身に対して課した。

これは道楽ではあるが、やる以上は、ひとつの仕事として扱おうと考えた。

モデルになってもらう方々はハッスルしてもらわないと困るが、撮影者が一緒になって昂奮してしまつては仕事にならない。

これは本誌の編集をしている方々にも言えることだと思う。私も本の編集をしているから、読者の立場に立ったり、編集者の立場に立ったり、気持の切替えをしながら仕事をしている。

写真の撮影をする以上、あくまでも写真が主体とならなければならず、興のおもむくままに、写真を、おろそかにしてプレーの方に主体が移るようなことがあってはならない。そういう風に自分を深く戒めて、とりかかっているのである。

また、写真の撮影中は、由紀さんは女王である。女王に対して、そういう振舞いに出るのは、失礼であり、女王の尊厳を冒瀆するような気もしたのである。

そうした事柄が重なって私を不能に、せしめたのである。

だが、これだけで真実を語ったとも、思え

ない。

不能にした理由は、まだ別にもあるような気がする。

前述の二つの理由は、原因の一部であるかもしれないが、その他に、要するに私は気が小さくて臆病者なのである。

もうひとつ、非常に神経質なのかもしれない。だが、この一事を除いた他の面では、私は神経は太い方だと思う。服装などは、だらしない方だし、持ち物にもあまり神経は使わず、人が神経にさわるようなことを言ってもあまり気にとめないし、騒音雑音の中でも平気で仕事ができる方である。

ただ仕事の内容に対しては、神経質の方である。

私は今夜、撮影を始める前から、こういう事態になることを半ば想像し、期待もしていたのである。そして今夜はタブーを破って、行きつくところまで行ってやろうという気持があったことも事実である。

だから私の意志としては、そこで写真の方は中止して、成り行きに従うことを望んでいたのである。これが偽らぬ心境である。

にもかかわらず、不随意筋とは、よく言つたもので、仲の方は親父の意思に逆らってい

るのである。

やはり強く戒めた初期の頃の意味が残心となつて、わだかまっていたのであろう。

いろいろ考え、理屈をつけてみたが、結局のところは、よく分らない。

ただ事実は、振い立たぬ意気地のない分身が、そこにあるというだけのことである。

精神医学の専門家なら、これだけのデータで明解に説明してくれるだろうが、私には分からないのである。

告白ついでに、もうひとつ加えると、私と由紀さんとの間に全然、接触がなかったかという、そうではない。

花村崇君との撮影の時に、花村君が岩本巖を紹介すると言つて、撮影の途中で座を外したことがある。その時は極めてナチュラルに結び合えたのである。しかし、その後は接していない。撮影とは別に、二人だけで会ったということもない。

私もドライな方だが、由紀さんもドライな方である。

私は由紀さんは好きだが由紀さんの方は私を別に好きでも嫌いでもない程度ではないかと思う。

私は由紀さんのようなタイプの女性が好き

である。しかし、由紀さんと浮気するつもりはない。いや、ないのではなく、深く戒めなければならぬと、反省したのである。

由紀さんの御主人である倉田課長は立派な人物だし、仕事の面でも世話になっている。

由紀さんの家庭を破壊は、したくない。

女は浮気のつもりでやったことが、つい深間に陥ることが、よくあるからである。

もっとも私と倉田課長を比べた場合、倉田氏の方が年も若く、地位も名誉も、すべて倉田氏の方が上だから私が、どううぬぼれても由紀さんが私に打ち込んでくる恐れはないから、その点は安心である。

だが、倉田課長は女にモテる方だし、地方へ出張した時など、適当に浮気してくる。

私も信州の松本へ一緒に行った時、二人で芸者をあげたが、私の方は大してモテなかったが、倉田課長の相手になった芸妓は夢中になって、私に、ぜひもう一度、連れてきてくれと真剣に頼まれたことがある。

もちろん、由紀さんには旦那さんの浮気なぞ、ひと言も話さなかったが、由紀さんは知っているらしかった。

勝気な由紀さんとしては、亭主が適当に浮気しているのなら、あたしもやってやるという

う気があるのは事実である。

ただ私が相手では、いささか役不足で、私では物足りない様子である。だから、由紀さんと私は浮気しようなどという気はない。

ただSっ気があり、こっちがMだから、S Mのプレーの上で結びついただけのこと、これなら別に、どうということはない。浮気より、ずっと罪は軽いわけである。それは由紀さんも私も、お互いに、そう思っているから、写真の方もスムーズに行ったわけで、もしも私に、由紀さんを、ものにしてやろうとか、この写真を種に恐迫してやろうとかいう下ごころがあったら、由紀さんは手きびしくはねつけたであろう。従って私は、写真は、とっても由紀さんに手を出すことは堅く戒めていたのであるが、一回だけ、ああいうことがあったのは、ものはずみというものである。

しかし今夜も、私に内心は、ものはずみを期待していた下ごころが、ないわけではなかった。

旦那さんはアメリカで適当に遊んでいるだろうし、空欄の淋しさを、なぐさめてさしあげるくらいなら、別にどうということもなからうと、そういう風にも考えては、いたので

ある。

しかし、何の原因か分からぬが、私の太々しい野望は、自ら潰えてしまったのだ。

### 屈辱のタオル

由紀さんは案外アッサリと、私を離れてくれた。

私の不能を見てとったことは確かである。

由紀さんは私がダメだと知ると、そのうっぶんを馬場氏の方に向けた。

蒲団をはねのけ、猛然と馬場氏の顔を肉体で密封した。

否も応もないというかたちで、ペツタリと捕獲された馬場氏は、悲鳴をあげることでさえできぬ状態で、由紀さんの荒々しい、ゆさぶりに身を委せていた。

馬場氏の股間が天幕を張り、由紀さんが、ひと押しひと押しするたびに、ピクンピクンと突き破るような勢いを見せていた。

そして繊維を通して噴出が見え、すぐ天幕は潰れた。

だが、由紀さんは許さなかった。許さぬというより、気がつかなかったという方が正しいだろう。よしんば気がついていても、許す



イメージギャラリー

『足裏清拭台』

岡 たかし



ことはしなかったであろう。

この強烈な、しごきにあつては、ひとたりもない。馬場氏は苦しさに、足をバタバタさせた。

ふっと気のついた由紀さんは、片膝をグイと立てた。

暴虐な女王の憐憫（れんびん）とも見られる。これだけで瀕死の奴隷は、ひと息つける

のである。

だが、お情けをかけ与えたと思えたそれは次に、また死の苦しみを加えるための、仮の情けにすぎなかった。再び肉の万力に、はさまれた奴隷の顔は、先刻よりも、やや下半分に位置されたため両眼だけは封鎖を免れた。

だがそれは、苦しみを上から覗き見るための女王の趣向だったのである。

本気で息の根を止めに来られた時、奴隷はどういう苦しみ方をするか、それを観察しながら、ジックリと責めてやろうというのである。

由紀さんのあまりの激しさに、私はポーズを変化させる言葉も出ないほどだった。

恐らく私が彼女に重なって、いかに努力しても、これほど昂奮させることはできないだろう。

男性が主導権を握って、由紀さんを、これほどまでに昂まらせるには、よほどの器物の持ち主か、高度のテクニックを用いなければこの域にまでは達せられないのではないかと思った。

それにしても馬場氏は、よく耐えている。

第一回の時、馬場氏のあの狼狽振りを振りかえれば、まるで別人の感がある。よくも、

ここまで進境を見せたものだと思心した。両眼をつぶり、眉を寄せて、必死にこらえている。

由紀さんは背中を丸めて、騎手がホームストレッチの追い込みにかかったように押している。ポーズとしては背中をこごめると、恰好が悪いので、写真の方は、お手あげだ。

かなり苦しうだが、馬場氏は、初回の時のように拒否する態度は、しめさなかった。しかし、かなり参ってきている様である。

「あぶないですよ。参っちゃいますよ」

私は、思わず声をかけた。

それでも由紀さんは、しばらく責めた。

十分すぎるほど、征服感を味わって、やがて丸めた背中を起こし、両股の力が抜けた。

馬場氏は完全にノックアウトされていた。

いやテクニカルノックアウトであろう。セ

コンドの私がタオルを投げたのだから。

まさに、それは屈辱のタオルであった。

## 夢の「トリオ」

写真の出来は、あまりよくなかった。

どういうわけか、普通の家庭の応接間や茶の間というのは、バックがゴチャゴチャして

いて、小うるさい。それにモデル二人も何かとってつけたような感じで、バックと、とけ合わず浮き上がってしまったのである。

もっとも我々が戦前から見つけてきたMの写真というものは、何か幻想的で、現世と隔絶されたムードの、ただようものが多いので普通一般の、茶の間を背景にした、という現実感が、写真をや、すでにしまっている。

どうかすると街で売っている十枚一組のエロ写真の出来損いみたいにさえ受け取れる。

しかし人それぞれ見方は違うもので、馬場氏は、この写真を見ると、すばらしいと喜んでいた。

例によって、馬場氏の行きつけの飲み屋で一ぱい飲んだが、酔いがまわると、馬場氏は私の、だらしのなさを責めた。

「あの時、どうしたのですか。中途半ばで、やめてしまわれたようですが……」

この時、私は心ならずも嘘をついた。

馬場氏に、突如インポになったとはどうしても言えなかったので、前にあげた写真の仕事として、神聖さを冒瀆するようなことはしたくないとか、由紀さんは立派な家庭の夫人だから、女王として出演してもらっているのに、それをただの女性にまで、おとすことは

良心がとがめたとか、しゃべっていないながら、私の大嫌いな体裁をつくらう言葉が、私自身の口から出てくるのに、自己嫌悪を感じた。

馬場氏は私の弁解をフンフン聞いてはいたが、額面通りには受け取っていない様子だった。時々私の目の中をジッと覗き込む。

「しかし、あの夜は最高の幸せでした。由紀さんの御神水も、たっぷり頂けたし、最後の由紀さんの、あの猛烈なハッスルには、もうアッという間もなかったですよ。一辺に爆発しちゃいました」

馬場氏は、この日から由紀さんのことを、「奥さん」と呼ばなくなった。どうやら私の家内でないことを、あの夜の私の意気地なさで信用したものらしい。

「私が、だらしなかったもんだから、そのとばかりがあなたに向けられたんでしょう」

「イヤほんとに凄かったですよ。あれで、あなたが、もう少し勇気を出してくれたら、もう言うことなしだったんですがね」

とまた話を、むし返す。更につぎたして、「まさか、ぼくに遠慮されたのではないでしょうね。ぼくは本当に自分の欲するものを卒直に、あなたにお願いしているのですから」

「それは分かっています」



とは言っただけ、馬場氏に改めて、そう言われると、今更ながら、あの時の仲の不甲斐なさが悔まれた。

そう言えば、あの時、馬場氏に対する遠慮の気持も、いくぶんか、あったことは事実である。

口ではそう言っている、イザとなると、うらはらになることが、いままで、ちょいちょい、あったからである。例えば、ぼくは強烈なMですなどと言っているが、いざプレーの実施の段階になると尻こみしてしまう男もいたからである。もちろん、こうした人間はM派交友録の中には加えない。空想の上だけのMなのである。

だが、馬場氏は本心から「三者関係のM」を望んでいることが、はっきり分かったので私はもう一度、由紀さんに頼んで名誉挽回？

のために、写真を撮りたいと思った。

それから一週間ほど経て、由紀さんに電話してみると、一昨日、御主人の倉田氏がアメリカから帰ってきたということだった。

そのひと言を聞いただけで、私のファイトは、しぼんでしまった。御主人が帰ってきたばかりでは、由紀さんも忙しいだろうし、まして、行きつくところまでなどというハプニングは実現不可能の公算大である。で、もう少し時期を待つことにして、延期することにした。

馬場氏も是非もう一度やりたいと言っていたが、それからしばらくして、馬場氏は会社を辞めて、大阪の友人の仕事を手伝うことになり、高円寺の家も売り払って、家族ぐるみ大阪へ移転してしまった。

これで完全に由紀さんと馬場氏の間は絶縁されたわけで、私の望みも断たれたかに見えた。馬場氏が大阪へ行くという直前に、送別の宴を、渋谷の「ふるさと」という割烹で、ひらいた。

馬場氏は、お別れに是非、由紀さんを招待してほしいと言うことだったが、生憎、由紀さんは都合が悪く、出られなかった。

「ろばた」と称する座敷に坐って、民謡や、手踊りを見物しながら、由紀さんとの想い出を語り合った。

馬場氏と私との交遊は、東京大阪と離れたけれども、お互いにM方面のニュースは文通し合うし、私も時々、大阪へ出張することがあるので全然、途絶えるということはない。しかし一応、送別のしるしとして、いままでの作品の中から、一番、傑作と思われるものを四つ切りに伸ばして、馬場氏に贈った。

それから約一年の間、馬場氏からは、ちょくちょく、便りがあった。三度に一度は私も返事を出していた。そういうつながりのままで過ごしてきたのだが、ひょんなことから、大阪で、馬場氏と私の、共通の望みが達せられることになったのである。

## 天星社刊 《限定版グラビア写真集》 在庫案内

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」一部一〇〇〇円（送共）略号「美？」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集『女王様に飼育される日々』一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生体のかずかずを網羅した写真資料。

◎この写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

（続く）



十二月号では、私とプレイした人として、小川さんのことを書きましたが、今日はもう一人のプレイメイト八木さんのことを書いてみようと思います。

言板に連絡文を書いておく事——そういう約束でした。

駅には地下と一階に伝言板があります。私は上の方の伝言板に書いてから地下へ行きま

八木さんは年は三十才。顔立ちはテレビによく出る小山田宗徳に一寸似ていると思います。この人とは姫路で落ち合うという話がついていて、私も福山から姫路まで行くことになりました。

着いたら、先に行った方が伝

したら、下の方の伝言板に私宛の連絡が書いてありましたので、それを呼んで指定の場所へ行きました。初対面でしたが、様子で直ぐわかりました。

「八木さんですか？」

と言葉をかけますと、すぐ、向こうから

「谷山久美子さんですね」

と呼びかけ合って、すぐ分かりました。

連れ立って近くの喫茶店へ入りました。いろいろと話し合っていました。八木さんは手に小さな包みとカメラしか持っていないので、私は不審に思って

／＼告

白／＼

## 私とプレイした人たち

谷 山 久 美 子



「荷物は、それだけですの？」

と尋ねますと、彼はニコツと笑って

「いや、今夜は貴女をいやという程、いじめ  
て上げようと思って、責道具一式は駅のロッ  
カーに預けてあるんだよ。今夜はそれが使え  
ると思うと楽しみだね」

と如何にも愉快そうに話します。その言葉  
を聞いただけで、私は身体が、うずいてくる  
ような気がします。

まだ早いので、お城見物でもしよう  
と喫茶店を出ました。日曜日なので通りは大変  
な人で、人混みにもまれて、ついにはぐれそ  
うになります。彼にそっと聞いてみました。

「手をつないでもいい？」

「ああ、いいよ。貴女さえよければ」

「知らない人が見たら恋人みたい」

小さい子供みたいに、お互いにしっかり手  
を握り合って歩きました。お城へ上ってから  
も、私の知らないことを、色々教えてくれ  
ました。姫路城を出た頃から雨が降りだし、  
だんだんと雨足がひどくなってきました。

売店で傘を買い、雨宿りのつもりで喫茶店  
へ寄りました。そこで新聞を見ると『ジュー  
スティーヌ』をやっているのを映画の広告欄で  
見ました。雨だから仕方がないので映画でも

見ようと映画館へ入りました。

館内は空席が大部分ありましたので、中程の  
椅子へ二人で並んで腰掛けました。初めは手  
をつないで見ていたのですが、その手をうし  
ろへ回し、ついで私のあいた方の手も一緒に  
してハンカチで後手に縛ってしまいました。

私はうしろの席の人から見られはしないか  
と、ハラハラして椅子の背に身体を押しつけ  
てかくそうとしました。幸い、館内は適当な  
暗さなので周囲の人に見つけられるようなこ  
とはありませんでしたが、椅子に寄りかかっ  
ていましたので、後手をそうきつく縛って  
いないのに腕がしびれてきました。

「腕がしびれてきたので、ほめて——」

彼の耳元へ口を当てて囁きましたが、彼は  
平気な顔で、右手を私のワンピースの裾から  
挿し込んで太股を抓るのです。

「いやヨ、痛い。こんなところで」

私は盛んに彼の耳元で囁くのですが、彼の  
悪戯は一向に止みません。周りに人がいるの  
で大きな声も立てられず、体中に力を入れて  
じっと辛抱していました。こんな人中で責め  
られるなんて本当に始めての経験でした。

予期しないことだっただけに、私もまごつ  
きました。突然だったので、とてもスリル

がありました。でも、彼も手加減していたの  
か、余りひどい振り方もせず、映画が終わっ  
て明りがついたところで外へ出ました。

「どうだった？ あんなこと始めてか」

と聞くのです。彼は私の答えを待ってニヤ  
ニヤしています。

「いやよ、あんなこと。人が沢山いるとい  
うのに。無茶よ」

と彼を、たしなめました。そんな私の答に  
も彼は一向に平気で

「この辺にストリップやってるところがない  
かね」

って言うのです。ストリップなんか見て、  
何をしようというのでしょうか。きっと、私に  
見せて、嫌がる顔でも見ようというのでは  
うか。私がうかぬ顔をしていますと、車を見  
つけてホテルへ向かいました。

大体、八木さんは前の小川さんと違って、  
自分の思った通り強引にやる人でした。

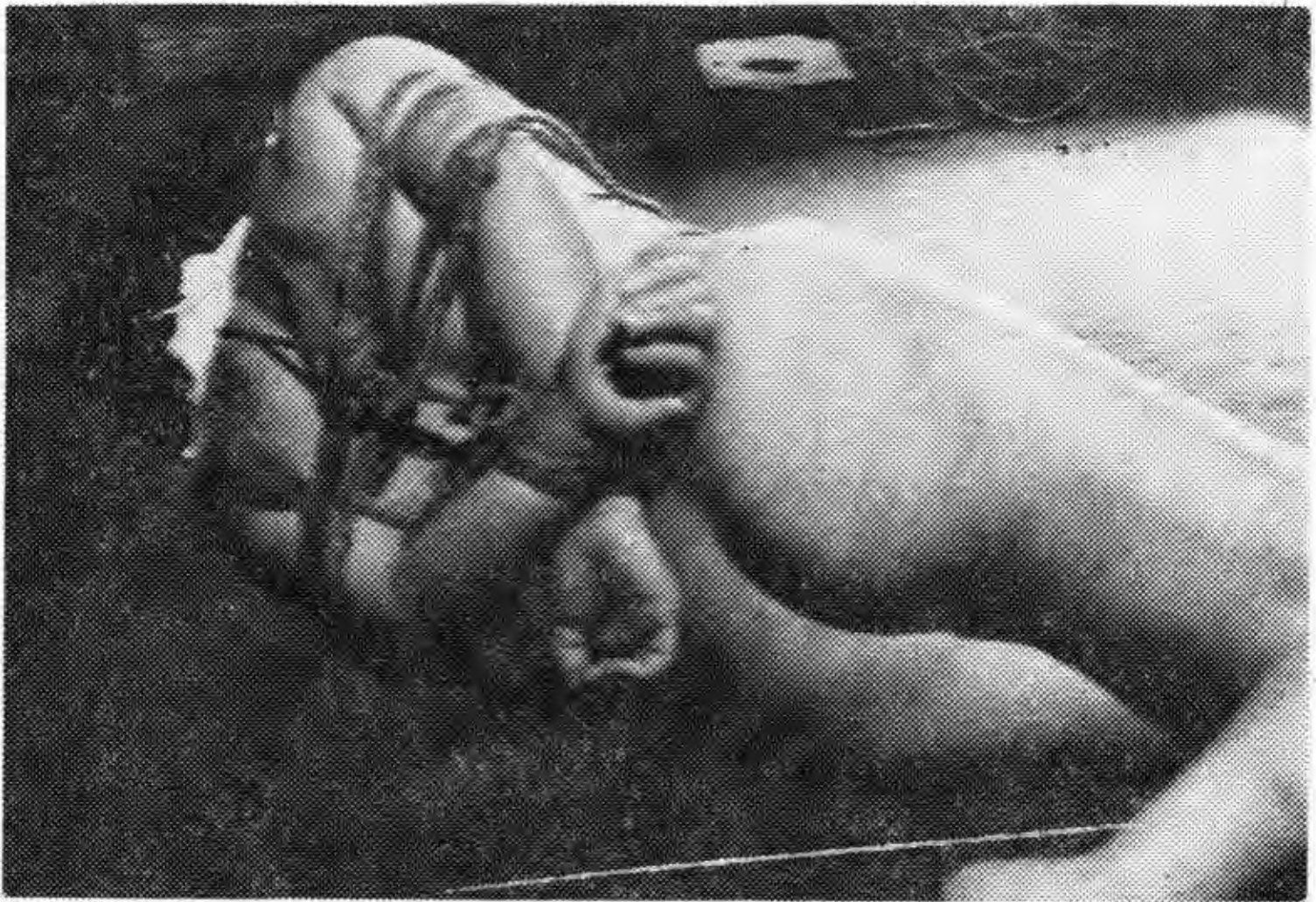
ホテルの部屋へ落着きますと、一服する間  
もなく「脱げ」と言うのです。私がハダカに  
なりますと、いつの間に用意したのか、犬の  
首輪を私の首に取りつけ、そして鎖を連結し  
て、引っ張って風呂場へ連れて行くのです。  
風呂場へ入りますと、鎖を水道の蛇口につ

ないでしまいました。私は跪いたまま、頭を下にして、お尻をつき出すような格好になってしまいました。首輪で蛇口に固定されていますので、うしろを向くわけにいきませんが、彼は私の背後で何かゴソゴソとやっています。なにをしているのだろうと思っていますと、急にお尻のところで、ひやっとした感触がして、あれっと思いました。

いきなりだったので、私はびっくりしてしまいました。浣腸されているのです。冷たい液がお腹にしみとおって、グルグルと鳴っています。やがて、お腹が痛くなってきました、便意を催してきました。「ねえ、トイレへ行かせて、お願い」

と頼みますと、  
「犬がトイレへ行くか。そのままするんだ」

と言って聞いてくれません。小川さんだと私の言葉をきいて解いてくれるのですが、八木さんは怖



い顔をして解いてくれません。

なんだか無慈悲なようで悲しかったけれど辛抱できなかったので、恥かしいのを我慢して目を閉じて用を足しました。

八木さんは、「臭い、臭い」と言ってお湯を、ざあざあと掛けてから、蛇口から鎖を解き「自分が出したんだ。自分で綺麗にするんだ」と、せかします。私は浴槽からお湯をくんで、一生懸命に流しました。

「よし、一度、湯へ入れてやる」

そう言われて首輪を引かれて浴槽へ入れられました。お湯につかるのも鎖付きのままです。こんな思いをしたのは始めてなので、とても悲しく、なんだか、やりきれないような気がしてきました。

お風呂から上がりますと、首輪に鎖付きのまま部屋中央に引き据えられました。

「さあ、今夜は貴方様の奴隷です。どうぞ好きな様に責めて下さい、と言え」彼は鎖の端を持ったまま、私に命令します。

私は急にその言葉が言えなくてどぎまぎしていますと彼は鎖を引きます。私は



やっと

「貴方のお好きなようにして下さい」

と、それしか言えませんでした。

「そうか、それだけか。言えなかった分は、あとで、たっぷりと責めてやる」

彼は如何にも憎々しそうに言うのです。やさしい事を言ってるかと思うと急にえらそうな事をいうので、どちらが本当の心か私は迷ってしまいました。でも風呂場での事で私は今夜は、この人の言う通り、なんでもやらなくてとはと、覚悟していました。なんでも自分の思った通り、やらなくては気がすまないのが、この人の特徴だと思いました。

両手をパンザイの格好に吊られて両足を八の字に開いて縛られました。

この人はビンタが好きです。私が少しマゴマゴしていますと、「これくらいの事がわからないのか」とビンタが飛びます。片手で髪の毛を掴んでおいて頬を叩くのですから、逃げようもありません。でも、ビンタが頬に飛んできますと、やはり、私はこの人の奴隷なんだという気がしてきますから不思議なものです。

お尻を叩かれるのは好きですが、頬をぶたれるのは余り好きではありません。何かとい

っては力一杯ビンタされるのは、かなり痛いので、首を振り振り、「お願い。もう、叩くの、勘忍して。ゆるして」と頼みます。

彼は、「いやいや、まだ許すわけにはいかない。ビンタが嫌なら、こうしてやる」と言っ、私のお乳の先をちょいと摘まんでゴムみたいに引っぱりまゐります。

「私のお乳、おもちゃじゃないのよ」

そんな言葉を言いたくなりましたが、またビンタを喰うと嫌なので黙っていました。両手両足の縄を解かれて、犬の首輪をつけたままで仰向けに寝かされました。彼は片足を挙げて私のお腹をぐりぐり踏みます。お腹から胸に移って、足の指で乳首を挟んで捻るようにします。私は余りの痛さに、彼の足を払いのけて起き上がり、部屋の隅へ逃げました。

彼は私を追って迫ってきましたので、私はまた片方へ逃げます。狭い部屋ですし、それに首輪につないだ鎖は彼の手に握られていいますので忽ちのうちに捕まってしまうました。

大きな彼の身体は約六十キロはあるでしょう。私は四十五キロしかありませんから、彼の下敷きになってもがきますが、白が乗ったみたいで動きがとれません。

「苦しいから下りて——」

と頼みますが、彼は涼しい顔をして

「逃げるからさ」

と言っ、のいてくれません。私は、やっとの思いで彼の身をすり抜けて這いながら逃げましたが彼の大きな身体に馬乗りになられてしまいました。ゆすって落としておいてから今度は負けるのを承知で身体ごと彼にぶつかってゆきました。

なんだか、子供の喧嘩のようで凄く楽しい遊びです。ストレス解消には、もってこいのプレイだと思いました。

二、三度、そんなことを、繰り返しているうち、私は息切れがしてきて、ハアハア大きく呼吸していますと、彼は私の両手を頭の上にして縛ってしまいました。

そんな格好で、とうとう私は彼に愛されてしまいました。その時も、態度が悪いといってビンタを三つ、四つももらいました。このビンタは、とても苦手です。人は好き好きで、いろんな責め方をする人がありますが、八木さんのビンタは特別に変わっています。

このようにして、八木さんとの第一回目のプレイは終わりました。また次回には、それからあとのことを書いてみたいと思います。下手な文章でゴメンナサイ。



—— 或るMマニアの告白 ——

白い肉塊

への眩惑

忍<sup>にん</sup>頂<sup>ちやう</sup>寺<sup>じ</sup>

章<sup>あきら</sup>

私が日夜、このような奇怪な幻想に悩まされる原因が、なんであるのか、時々考えてみることにありますが、私自身の持つて生まれた生来の性質であるのか、それとも学生時代に受けた、あの強烈な刺激のためであるのか、或は、その両方の相乗作用であるのか、自分でも、はっきりとはわかりません。

私は今年二十八才。東京の大学を卒業してすぐ帰阪し、父の経営する会社の傍系会社へ就職して二年勤務しました。「可愛い子には旅をさせよ」という親心だったようですが

私の姓が変わっているところから親会社の社長の子息だということが直ぐばれてしまい、他人の飯を食う苦労は案外、味わうこともありませんでした。

それでも、製品の荷造りから倉庫管理、セールの経験など、多方面にわたって社長候補としての修業を積み、二年前からは父の会社へ移り総務部附として勤務しています。

いずれ、庶務課長、総務部長、取締役から専務取締役社長というコースを辿って、経営者の一人になることに、きまっています。

結婚は昨年の十月でしたから、もうすぐ満一年を迎えることになります。妻の令子は、創業以来の父の友人の娘で二十三才、私とは五つ違いです。平凡な見合結婚で、ロイヤルホテルの宝石フェアを見学するという口実で偶然、同ホテルでお互いに逢い、一緒に食事を共にするという企画でした。

迂闊にも、そのとき、私は自分の性癖については、一時的に忘却していたようです。豪華な訪問着姿に盛装した妻は、真実美しく見えしました。豊満な女体好みの私にとって、和服姿の外観で見た限り、自分の好みにも合いそうで、私は一も二もなく承諾しました。

父にとっても、自分の跡取りである私が早く身を固めて後継者になってほしかったのですから、私の快諾は大喜びでした。特に創業以来、共に苦勞してきた専務の娘と私を結婚させることが出来たことを、何よりも喜んでいました。

昭和十一年に小さな町工場として出発し、戦時中は軍需工場の下請けとして、弾薬函でも防毒面でも、なんでもかんでも御国のためと真黒になって働いたのに一転して敗戦となり、それからは昂進するインフレの中で、闇商売に狂奔したそうです。

父の事業が今日の大をなしたのは、終戦時に軍から請けた隠匿物資の活用と、それに関連して終戦後の経済変動の運用よろしきを



得たことでしよう。朝鮮動乱は事業を一層拡大させたことは勿論ですが、それからは日本経済の高度成長の波に乗って一躍数十億円の資本金を擁する中堅優良会社へのし上がってしまったのです。

妻令子の父は、終戦後、父の会社の基礎がようやく固まりかけた頃から父の片腕となつて陰になり日向になりして、父を助けてきた誠実な人物で、私達二人が結婚したことによって両家が文字通り親類づきあいすることになったことは、お互いの両親にとっても、これ以上の喜びはなかったようです。

妻の令子は女性としては、最上位にランクしてもいいとさえ思える女性でした。細面の爪実顔で色は抜けるように白く、殊に和服がよく似合います。日本舞踊、お茶、お花などが好きで、淑やかな感じの典型的な日本女性といったタイプで、私にも心からよくかしくいてくれます。

私も結婚以来、精神的には妻を尊敬し、愛情も抱いていました。私が心底から待ち望んでいた女性ではありませんでした。

第三者から見れば、そんなことを言えば、何を贅沢なことを言うかと、笑われそうですが、私が女性に対して抱いていた、憧れのイメージとは程遠い感じなのです。妻はそんな心の中は知りませんから、私には愛情こまやかに、何かと気を使って大切にしてくれます

が、私はそんな妻に有難く思い、申し訳ないと思ひながら、今一つ、満たされない気持ちが兆すのを、どうすることも出来ません。

私の心の奥底から、ゆさぶるような喜びを与えてくれるのは、妻の令子ではなくて、他の女性であるという、本当に妻には申し訳ない思いが日夜、私をさいなみ苦しめるのです。

昼、会社で激務に身をさいなまれていた時も、ふと、すき間風の様に私の心の片隅に冷たく通りすぎる、悪魔の囁き。ましてや、深夜の書齋で、一人調べ物などをしていてる時などは、やるせない思いが、身体中をゆさぶり続けるようにさえ、思うのです。

私は学生時代、東京の山手にあるシモタ家に下宿していました。友人の紹介によるものでしたが、小さい子供二人を抱えた未亡人で当時四十才ぐらいでした。明るい陽気な性格で、私の身の回りや洗濯などもよく親身になって面倒を見てくれますので私は、よい下宿を紹介してくれたものだ、その友人に感謝していました。

私の両親も、未亡人とはいえ、二人も子供があり、私とは倍近い年齢の女性ですから、安心して息子の面倒を見てもらえると、大変喜んでおりました。

その未亡人は冬子という名前でしたが、その名前とは反対に、夏を思わすような積極的な性格で、世話好きの喋り好きでした。身綺

麗にしていました。大柄の肥満体ですので年齢よりはふけて見える感じでした。

大学に入学して半年ばかりは、私も学校や東京の生活になじめず、物珍しさも手伝ってあわただしい日々を送りました。それが、夏休みの帰省も終わって、そろそろ人恋しさ、つる秋を迎えて、私にとっては、驚天動地ともいふべき生活の変化を経験したのです。

二階の部屋で予習をしている私の所へ、子供を寝かしつけてしまった冬子がお茶とお菓子を持ってきてくれたのです。そんなことは、今までにも度々あったのですが、その晩に限って、なんであんなことになってしまったのか、現在の私にはよくわかりません。

私はその晩、冬子によって童貞を失ってしまったのです。

一旦そうなってみますと、男女の仲というもの、もう急坂を下る礫のように、もう止めどもありません。私は、初めて味わう性の旨酒に酔いしれるばかりでなく、冬子の豊満な女体の虜になってしまいました。

男としての肉体的な快美は、私の場合、年上の女性によって巧みにリードされ馴致されるものでした。性的に無智だった私は、彼女によって操られる人形のように、飼育されていったのです。

私は冬子に抱かれながら、自ら積極に何らの行動を起こさず彼女の能動的な行為によっ

ナミオM画廊 『組立椅子』 春川ナミオ



て翻弄され、その暴虐ともいうべき一方的な行為によって、最大の喜びを見出していたのです。肉体的な性の喜びは、同時に年上の豊かな女性によって、しいたげられることによって、倍加しました。

愛されることが、こんなにも嬉しいとは一体なんとしたことでしょうか。冬子によって開発された私のマゾヒスティクな性は、次第次第にエスカレートしてゆきました。同一の屋根の下に住んでいる私達二人ですから、プレイをするチャンスというものには不自由をしません。しかし、二人の年

春

齡の差が余りにも離れすぎていますし、それに冬子が年齢以上に見える大柄の肥満体というのですから、誰一人、二人の秘密の仲を疑う者としてありません。

友人がよく私の部屋を訪ねてきたのですが皆、「よく気のつく、よいオバさんだね」と言う位で、まさか、あのデブのオバさんと私が夜々、奇怪な性の饗宴をくりひろげていうなどとは夢にも思っていないでしょう。

友人と話をしている所へ、お茶を持ってきた冬子が、平気な顔で世間話をしている時でも、私は彼女のはちきれそうな大きなお尻を眺めると、異様とも思える昂奮状態に陥る自分のマゾの心理をどうすることも出来ないのです。

もともと私の心の中に、このようなマゾの心理が巣くっていて、それが冬子という一人の女性によって啓発されたのでしょうか。

私は女ばかりの姉妹の中に、たった一人の男の子として生まれたので、大切な跡取りとして過保護にされすぎたのか、女ばかりに混じって育ったので、心理まで女性化してしまったのでしょうか。

冬子は、未亡人としての空闊を満たすために二十才に満たない童貞である私を一つの性の道具として弄んだのだらうか。或は、もともと、彼女の性格の中にサジスティックなものがあって、それが私というM性格の青年と邂



追したことによって、益々昂められたのだろ  
うか。今になっては、私にもその原因はよく  
わかりません。

私が冬子に抱かれるときは、それは大きな  
白い肉塊の中に没入し、そして、すべて彼女  
のするがままに身をゆだねる没我の心境の中  
で燃え上がりました。

私は只、冬子のなすがままにしているだ  
けで最高の快楽を味わうことが出来ました。

私が大学を卒業するまでの三年間、私は彼  
女によって、いろいろのことを経験させられ  
ました。その点、彼女はまことに多彩なアイ  
デアを考案する女性でした。

私は全裸で縛られて犬のように這い廻らさ  
れて犬として人舐めることVの奉仕を強要さ  
れたりしたのは、ほんの序の口でした。

浴室で小便を顔へかけられたり、トイレの  
代用をつとめさせられたりしたこともありま  
した。なにしろ、二人の小さい子供を寝かせ  
つけてしまえば、あとは比較的、広い家の中  
の、どこをプレイに使ってもよいのです。

なんでも、かでも、彼女の言いなりになっ  
ていた私も、やはり、その中でも自分の好み  
のものと、余り好きじゃないものの区別は出  
来てきました。

白い豊満なお尻の下敷になるのは大好きで  
した。後手に縛られて蒲団の上にころがされ  
た私の顔の上に、でっぴりと肥った彼女のお

尻が始めてのつかってきた時には、余りにも  
強烈な刺激に、私は思わず失神しそうになり  
ました。そのあとでの二人の戯れにも、私は  
最高の快楽を味わうことが出来ました。

彼女の身体中を舐めさせられたり、小便を  
顔へかけられたりするのには、汚いとか特に嫌  
だという気持は起こりません。SMプレイの  
一つのコースとして素直に受け入れることは  
出来るのですが、その行為自体をとり出して  
考えますと、特に私の感興を呼ぶものではあ  
りません。どちらかと申せばポリュームのあ  
る豊満な女体で、私を下敷きにして冒瀆をす  
るというような行為が好きです。しかし、こ  
うした積極的で能動的なサジスチックな行為  
は、冬子のような女性でないと、中々自分か  
らは行なうてはくれません。

私も大学を卒業して、冬子の下宿を出て、  
社会人として生活するようになり、バーのマ  
ダムとか、キャバレーの女、或は料理屋の仲  
居などと知り合いましたが、そんなS的傾向  
の女性など皆無でした。ましてや会社関係で  
知り合うOしなどは、皆、淑やかで男性に奉  
仕するといったタイプが多いようです。

私は妻を愛していますが、あの冬子から受  
けたような痺れるような肉体の快楽は味わう  
べくもないのです。

先日、社用で上京したとき懐かしい冬子の  
下宿を訪れたのですが、一年ほど前、家を売

り払って移転したとかで空しい思いで帰阪し  
ました。何故もつと早く連絡しなかったかと  
悔まれてなりません。

私より年上で豊満な肉体の持主。そして年  
下の男性を玩具にして弄んでやろうと思われ  
る女性はいないでしょうか。

そんな女性がおられたら、私は残りの半生  
を、その方の奴隷として思いのままに翻弄さ  
れたいと思います。勿論、私はいずれ、父の  
跡をついで会社の経営陣に参加しなければな  
りませんので、そうなれば、身辺は多忙をき  
わめると思います。今でしたら、父も健在で  
すし、身体的にも自由がきます。

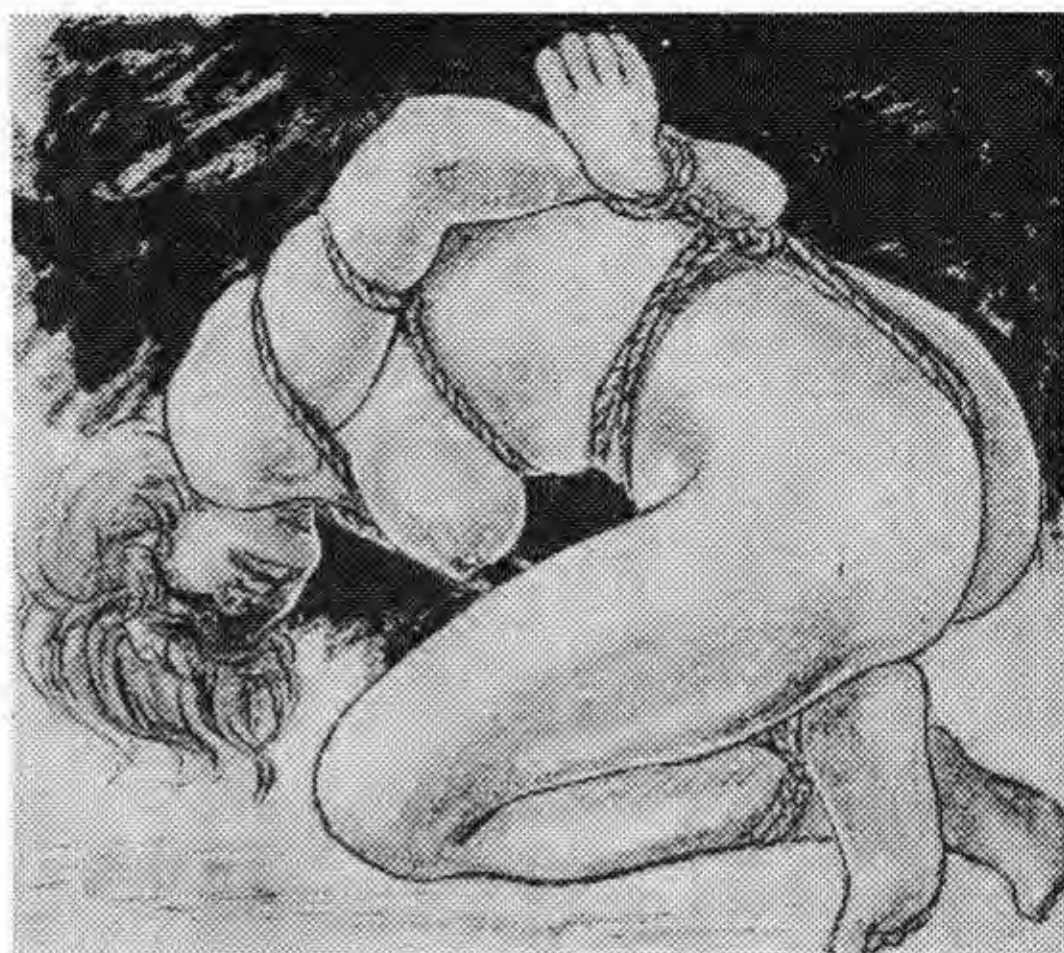
下宿住いの学生であった私を、思いのまま  
に弄んだように、郊外の宏大な邸宅に住んで  
私を思いのままにいじめて下さいませんか。

一人、夜半になって、そんな奇怪な幻想に  
耽ってしまいますと、私はやりきれなくなっ  
てきます。ふと偶然の機会に手にしました奇譚ク  
ラブを読んで、私は自分のマゾヒスチックな  
性格というものを、はつきりと掴みとること  
が出来ました。

他にも読者の中で、私と同じような思いに  
悩んでおられる方々も多いと思います。親や  
友人は勿論のこと、妻にさえ打ち明けること  
の出来ないこの煩悶を、どう解決したらよい  
でしょうか。

よきお智慧を拝借出来れば幸いです。

——カット・志羽利也——



——被虐の旅シリーズ——

## ハワイの別れ

由利美千子

と彼は言った。

それまでに結婚のことを考えて  
いてくれというのだ。

(本当に、くるつもりなのだろう  
か……)

いた。

香水を作るといふ黄色いクメレア、赤いブ  
ーゲンビリア、紫色のジャマロンド、日本の  
夾竹桃そっくりの花はオリアンダというのだ  
そう。

みんなノートに書いているから、私も書い  
た。

ハワイの女は髪へ花をかざる。左側へさす  
とミセス、右がわへさすとミス、真中へさす  
と婚約中だという。私は又してもジョンのこ  
とを思った。ジョンにオーケーと言ったら、

ハワイの空は今にも泣き出しそうに曇って  
いた。

明るい南国の空を予想してきたのに、まる  
で私自身の心のように曇っているのだ。

ジョンは追っては、こないだろう。

「必ず日本へ行く……」

私は飛行機の中でも、まだ迷っていた。し  
かし、そうして時をかせげるのは有難いよう  
でもあった。

空港からバスでホノルルを観光することに  
なったのだが、私の心は重かった。

天気は悪くても、南国の花は一ぱい咲いて



私は髪の中へ花を飾らなければならない。いつそ、髪のうちろへ花を飾って、エネータイム、プロポーズ、オーケーとばかり、知らない人と、めっちゃめっちゃに遊んでやろうかしら……。そんな、出来もしないことを、ふと考えたりした。

(ああ、いじめられたい……)

切実に、そう思った。

この迷う心を打って打って、打ちのめしてもらいたい。

ホテルへついたら、葉山から電話がある筈だった。

(本当にかけてくれるだろうか?)

私は心配になった。相手が外国人ということとをのぞけば、葉山は私の結婚をすすめていくように思われた。

(何故、先生は私を誰にもやらないと云ってくれないのだろう。先生が私をつかまえていてくれないから、いけないのだ)

私は葉山に、もっともっと、ひどいめにあわされたかった。

(お前はオレの女だ。オレだけの女でいるべきだ。他の男に目をふれた罰に日本へ帰ったらボクの牢へ入れてやる)

そう言って、アパートの一室へとじこめて

裸にされ、着るものは全部、洋服筆筒に入れて鍵をかけ、その鍵を渡してくれない……。冷蔵庫も鍵をかけて、私は食べものも満足に与えてもらえない。水だけは自由に飲める。

けれど、トイレに鍵をかけて、あかなくされているから、水をのむことが出来ないのと同じなのだ。一日一度、彼はおとずれる。私のお仕置きのために……。そして、床においたパンとスープを食べさせてもらえる、それも後ろ手に縛られたままで……。トイレさえ、やっとあけてもらって、うしろ手のまま、彼が糞尿をとって、彼の目の前で彼にお尻をむけて、やっとやらせてもらえる……。私は痩せて、しなびて、若いのにシワだらけになってしまう。すると彼は他の美しい女をつれてきて、私の目の前で、その女を愛撫する。二人で私を嘲笑し、私を鞭打つ……。

急にバスがガクンと止まったので、私の空想は絶ち切られた。

私は今、どんな顔をして、自分がいじめられることを空想していたのかと思うと、恥かしかった。

しかし、まわりの人たちはガイドさんの説明に耳をかたむけ、窓の外をみていたらしく

そつとあたりをみきわした私の視線にぶつかる目は、なかった。

カメハメハという王さまのいた宮殿や、バナナやココナッツの実のなっている道や、庭のとび石のように、石が地面に、うめであるポンチポール墓地などをみて、ホテルへついたのは、まだ夕方に間のある時間だった。

すぐに、一と泳ぎするといって海辺へ急ぐ人もあったし、はしやぎながら買物に行く人もあった。

私は、ひっそりと一人、部屋で葉山からの電話を待った。

「会わない方が、いいんじゃないか？」

葉山の電話は真先に、そんな言葉で、はじまった。

「いやよ、そんな……」

私は受話器にしがみついて、叫ぶように言った。

「じゃあ、ボクのホテルへおいで。キミのホテルから海を背にして右の方へ真直ぐ来るとガソリンスタンドがある。そこを左へまがった所だ」

そして葉山は、二、三回、聞き直さないと頭に入らないような、ながったらしいホテルの名を告げた。

簾で編んだアーチ型の部屋飾りがハワイらしくかった。

椅子も背の所が大きく、チェロを逆さにしたような簾椅子だった。

テラスは濡れていた。

「向こうにみえるのがダイヤモンドヘッドという山だよ」

指さす葉山のうしろから、私は彼を抱くように腕をまわした。前からでは恥かしいような気分だった。

「先生、怒っているんでしょ？」

「何故？」

「何故って……ジョンさんのこと……」

「怒ってなんかいないよ。キミはよくいぜんボクにだまって浮気をしたんじゃないかと思う感じの時があった。それを口実にキミをいじめたこともある。けれど、今度みたいに堂々と目の前へつれてこられると、いじめようもないよ」

「いじめてほしいわ」

「ジョンと結婚して、こうした世界からぬけ出した方がいい」

「でも、ジョンはアブノーマルな欲求をもっているわ」

「あのヒゲもじゃの、たくましい男が被虐の

願望をもっているなんて面白いもんだね。あ

いつかサジストなら、ボクはこう簡単にキミを手放す気にはならなかったろう。ボクはジョンが憎めないんだよ」

「もうジョンの話は、やめて……。昔のように先生と二人の旅なの。私は先生のドレイなの。ねえ、お願い。私の頭からジョンを追いつ出して……私をいじめて……」

「よし、これがキミをいじめる最後になるかもしれないね」

「先生」

私は、彼の肩をシャツの上から思い切り噛んだ。

「あっ、こいつ……」

それは、いじめられる、きつかけを作ったつもりだった。

彼は、私がうしろから彼を抱くようにまわしていた手をとると、本当に怒ったような力で逆にひねった。

「痛っ！」

思わず私は、口ばしした。

彼はそれにかまわず、逆手をひねりあげたまま、私のブラウスのボタンをひきちぎるようにしてブラウスを開くとスリップの上からギューッと乳房をつかんだ。

「ううっ！」

私は痛さを、こらえた。

彼はスリップのたすきを引きちぎった。ブラジャーを、すではずしていた私の胸は、あらわになった。

彼は乳房をつかんだままトランクのおいてある隅まで歩いて行く。私も又、ずるずると引きずられるように歩いた。

トランクから幾条もの縄がとり出された。彼は私の手首を後手に縛った。

「そこへ寝ろ」

彼にいわれ、私はベッドの上へ仰向けに寝たが、

「違う、床の上だ」

彼は私の体を邪険に転がした。私は、まだ軽く後手に縛られているだけなので、身が軽かった。転がされながら自分の足ではずみをつけて、ベッドの横に立つことが出来た。

「こいつ」

彼はいうと、私の胸へぐるぐると縄を巻き締め始めた。

二の腕にもかけ、さらに又、胸へかけ、私の上半身を、きっちり固定した。

すると彼は、おなかへも腿へも、ぐるぐると縄をかけていく。そして、まるで小包でも



作るように、足首を結んだ縄で、首まで縦に縄をからげていった。私は一本の太い棒のようになつた。

「さあ、寝ろ」

といわれても、私は膝をまげることさえ出来なかつた。

「体を、そらすんだ」

いわれて私は棒のような体をうしろへ、そらした。彼が私の頭をうけとめて、だんだん下へさげていく。

「ああ……」

私は、その不安定さに思わず声が出た。足が上がって倒れそうだった。

彼は勿論、倒すのが目的だから、私の頭を下へさげる。

「ああ」

小さな叫び声と一緒に、私は床へ寝てしまった。

彼は私の体の上から籐椅子をおいた。籐椅子の四つの脚は、私の体をはさむように私の左右の床の上におかれて、その間から私の乳から上と、脚が出たことになる。

彼は私の胸を靴ではさむようにして椅子にかけた。

「さあ、これならボクは、らくにキミをいじ

められる。しかし、キミの体をもう少し動けないようにしておこうか、どうせ縄が残っているから……」

彼は私の体をまたいで立つのに、片方の足で私の胸をギュウツと、ふんだ。

「あっ！」

私は意気地なく声を出す。

彼は棒のような私の体をさらに四本の椅子の脚へ縛りつけた。

「こんなの、日本でもよくみかけるけどね」

彼は大きな木製のスプーンとフォークを手にして、私の体の上の椅子に、どっかりと腰かけた。ハワイで売っている土産物だった。

「キミにあげようか。壁かけにでもするんだな。もし、ボクの思い出なんか飾っておきたくなかったら、焚火にくべて燃やしてしまえるよ。どうだい？」

云いながら、フォークを私の胸に立てて突いた。フォークのさきは、そんなに尖っていないから、肉へ突きささることはなかったが四本のフォークのさきは肉へ、くいこんだ。

「あうつ……」

私は声も出なかった。

「どこが、おいしいかな」

彼は、その大きなフォークのさきで、あつ

ちこっちを突いた。スプーンで私の乳房をおしつぶした。

フォークを頬へ突き立て、片方の頬をスプーンでおすと、私の顔は奇妙にゆがむ。

「ハハ……」

彼は声を立てて笑ったが、私は笑うどころではない。頬の肉が歯に当たって痛かった。

スプーンとフォークは力をいれて突き立てれば痛かったが、軽くそれでさわられれば、くすぐったかった。まして、豆でもすくうように、スプーンのはしで乳首を下から上へこすりあげたり、フォークのはしでいじられると、私の乳首は本当の豆のように、かたくなってくる。

彼は籐椅子に腰かけて、ゆっくりとフォークとスプーンで私の乳房をもてあそんでいるのだから、悠然たるものだった。

私の方は、そうはいかない。

軽くこすられたり、強く突き立てられたりするたびに違った音色で呻くのだ。

そして、無駄だとわかっていても身もだえする。

私があばれると椅子がギシギシと鳴る。

「静かにしないか」

彼は靴のまま私の素肌をふみつけるのだ。

イメージギャラリー

『しほりしほり』

名古屋 S 生



サンフランシスコの時も、そうだった。  
ホテルの部屋の中でも靴をぬがない習慣が  
彼にそのまま靴をはかせていて、私は土足で  
ふみにじられるのだ。

部屋の中なら、スリッパをはけばいいのだ  
が、日本のホテルのように、備えつけのスリ  
ッパはない。そのために日本から用意してく  
るのが普通でも、それを取り出すのが面倒だ  
と、靴のままでいる。

だから彼が靴のままでいるのに不思議はな

いのだが、それが一つの責め具になって、素  
肌をふみつけられると苦しかった。

彼は椅子の脚にしほりつけた縄をとくと、  
椅子を私の体の上で前や後に動かした。

私の顔の上へ、すっぽりと椅子がのること  
もある。椅子と顔との間に空間があるが、彼  
は私のおなかの上へ足をのせる。そして、手  
に持っている木製のスプーンとフォークで私  
の下半身を、もてあそぶ。

乳房にさわられるのとは別な急所が、そこ

にはある。

スプーンの背を、その急所にあてて、こす  
られると、私は思わず身をよじりたくなる。  
しかし、彼の足が私のおなかをふんでいるの  
で動きようもない。

「痛いかな？」

聞かれても返事も出来ない。

ふみつけられているお腹は痛い、スプー  
ンの背でこすられている所は痛くはない。

「うう……あふ……」

変な声が出てくる。それは、痛さと快感が  
一つになったものだった。そして私は、やっ  
ぱり葉山とは離れられないと、しみじみ思っ  
た。

しかし、彼も又、敏感に、それを感じたの  
だろう。

ふと、のせていた足を私の体の両側へおろ  
すと立ち上がった。

「食事をしよう。折角のハワイだ。夜の海辺  
へ出てみよう」

彼は椅子をどけ、私の縄をほどきにかかっ  
た。

緊縛がゆるんでいく時、私は妙な淋しさを  
感じる。

愛が失せていくような、空虚さがあった。



愛されたいと思う時、手で抱きしめられただけでは、たりないのだ。縄が必要なのだ。ジョンという時に何となく、それで充分だったのは、彼のたくましさにあったのだろう。握手をしても、ジョンに握られると何かしらすすぽりと刑具をはめられたような満足感があったのだろう。

ジョンとなら、正常によろこべるのだろうか。葉山は、その方がいいと私のために私から離れようとしているのだろうか。

「風呂へ入って着がえをするといい」

葉山は言った。

(もういじめてくれないのだろうか)

私は心残りだった。

(でも、まだ時間は早いんだ。このままではいやだ。もっと、もっと、いじめられたい。このまま葉山の手で殺されたら、私の迷いもなくなるのに……)

私は、そんなことさえ、思った。

ハワイのホテルは夜中でも、あいている。私たちのグループも、ハワイの夜だけは門限なしということになっていた。

葉山と私は海岸に近いホテルのガーデンの椅子に向かい合った。

マイタイというカクテルがハワイの名物だそう。ラムを主にしたフィズで、砂糖きびとパイナップルを棒のように切った実とシソのような匂いの強い青い植物が入っている。口当たりはいいが、強いのだそう。

私は、酔いたかった。酔って葉山にダダをこねたかった。

「先生。私を、どう思っているの？」

まだ本当に酔ってはいなかったが、私は多少、酔っている振りをして、聞きにくいことをきいた。

「キミは今まで、一度もそういう言葉を口にしたことはなかった。だから、ボクはキミが好きだった」

「では今は、きらい？」

「ボクはキミに甘えすぎていたんだと思う。」

キミに結婚問題がおこるのは当然なのに、いつても、ボクの欲しい時にキミは応じてくれた。こんな束縛のない仲は貴重だった。精神的な束縛がないから、縄がつかえるんだ。キミは縄で、がんにがらめになる。けれど、ボクはキミを束縛しなかった。だから、よけいキミは縄を好んだのだ」

葉山のいうことは一寸ややこしかったが、私には、わかるような気がした。

「それなら、まだ先生とは、そういう間で続けられる筈ですわ。何も変わっていませんもの」

「キミがジョンと結婚して日本を離れるまでは、といたいたいか？」

「結婚するかどうか、わかりませんわ」

「ジョンは必ず、日本へ来るよ。キミを迎えに……」

「何故……何故、先生は私を他の人と結婚させるの？ 何故、誰にもやらないと云ってくれないの？」

「誰にもやらないということはキミを束縛することじゃないか。ボクは、そういうことはしたくない」

「先生、卑怯よ」

「ボクを打ちたいかい？」

「打ちたい」

「ところが、ボクは打たれるのは、きらいときている」

「先生のバカ！」

私は、だんだんに酔いがまわってきた。マイタイという飲物はツヨイらしい。

「酔ったかい？ 海へ入るか？」

「海でも、どこでも入るわ」

「じゃあ、水着に着かえておいで。ここで待

っている」

「先生は？」

「ボクはこのアロハをぬげばいいんだよ、夜の海で一と泳ぎするつもりだったから……」

私はホテルへ着がえに帰りながら、もっと飲んで水に入って、心臓麻痺をおこしたらどうなるのだろうか、ふと思った。しかし、そんな風にして死にたいとは思わなかった。死ぬなら、縛られて、首をくくられてみたかった。

いくらハワイでも水は冷たかった。しかしハワイという所は、おかしい所だと思う。スーツを着ていても暑くないし、裸に近い恰好でいても寒くない。みんな思い思いの恰好をしていた。ムームーを着てハダシで歩いていく人もある。ホテルへハダシで入っても誰もおかしい目でみないのだ。

ハワイで泳いでみたいとは思っていたが、こんなに遠浅で泳ぎにくい所だとは思っていなかった。どこまで行っても一寸も深くならない。それもおへソのあたりまでしか水がないから、どうも勝手が違う。サーフィンは相当、沖まで出なければ出来ないのだ。

「海の中で正座してごらん」

彼にいわれ、膝をそろえて坐ろうとした私

は、思わず。

「痛い……」

と、口走ってしまった。

日本の海のように海底が砂地ではない。それはゴツゴツした珊瑚礁なのだ。

「痛いのは、わかってる。ちゃんと坐るんだッ」

私は言われた通りに正座した。縛られているわけではないが、それは一つの責めと同じだった。

「手を頭の上で組むんだ」

私は、よく映画やテレビでみるように、両手を頭の上に、のせた。

海面は、ほの暗かった。曇っているが月夜なので、ほの暗いのだろう。しかし、まわりに泳いでいる人もなく、海辺の人からは私たちが何をしているか見えない。

正座している足は痛さを増した。

「キミはジョンを忘れられるかい？」

「先生さえ、私を、つかまえていて下されば……」

「こうやって、つかまえてもか……」

彼は私の頭を、いきなり水につけた。

「あっ」

声は水に吸いとられ、私の鼻から塩からい

水が逆流した。私は頭の上で組んでいた手を離し、彼につかまった。

「ダメだ。手を組め」

私は息をつめて頭の上で手を組み直した。「ジョンが、はるばる日本へたずねてきても知らん顔をするんだね」

私は、だまっていた。水の中で何が、いえる。うなずくことさえ、出来なかった。

私は苦しくて足をくずし、何とかして顔をあげようとした。足をもがくことは正座する以上に痛かった。

彼は、やっと私の首を持ちあげてくれた。

私はケモノのように息を吐いた。

「正座するんだ」

彼は命令する。

私は又、ゴツゴツ、ザラザラする珊瑚礁の上で膝を、そろえた。

彼は私の膝の上へ、彼の膝をのせた。

「あうっ！」

重みで痛さが増す。

彼は自分の膝を横からのせているので、私の首を海へつける作業は両手を使っておさえこむようにした。おさえつけられると、息の苦しさと共に膝の痛さも増す。それなのに、私は縛られているように、手を頭の上で組ん



だま、動かせないのだ。  
もう息が止まるかと思うと、彼はバシヤン  
という音と共に、首をもち上げてくれる。

ほっと一息つく、又、水につけられる。  
苦しさは、だんだん増していく。  
それは私の心からジョンを追い出すより、



イメージギャラリー

「麗人架刑」

岡 たかし

ジョンに救いを求めたくなるような感じだった。

海につけられては出され、つけられては出されていくうちに

「先生」

と、よびかけるより、

「ジョン、助けて。ジョン」

と、おなかの中で叫んでいる自分に気がついていた。

いじめられたいといいながら、人間は死の恐怖にヨワイのだろうか。

不甲斐ない自分が厭になる。

塩水も何度か、のんだ。

鼻から逆流する塩水にむせて、咳をするそばから、又、水につけられる。

涙が出てても海水であらわれる。

「先生、ゆるして……」

私は膝をくずし、もがこうとするのだが、彼の膝を、どけようもなかった。

「ゆるして……」

息もたえだえに哀願するよりは仕方ない。

縄のない、責め……

やっと自由にされても、体をよこたえることも出来ない。

海の中の責めだった。そして、それは私た

ちが、はじめて能登へ旅した時を思い出させあの荒涼とした日本海で、はじまった恋を、この南の太平洋で終わらせようとしているのかと思うと感慨無量だった。

ホテルへ帰ると彼は云った。

「さあ、ボクたちの神聖な儀式を行なおう」

私はハッとした。

神聖な儀式とは結婚の夜に行なう二人の契りを意味するのだろうか。

彼はジョンに私を与える前に、私の体の中に自分の体液を注ごうと思ったのだろうか。

「さあ、裸におなり」

彼は言った。

彼はベッドの上へビニールを敷いた。

「その上へ寝るんだ」

私はビニールの上へ体を横たえた。ビニールが冷たかった。

「仰向けに寝るんだ」

彼にいわれ私は片手を乳房の上にあて、片手を下腹部にあてて天井を向いた。

彼は、その手首へ縄をかけた。

「あっ」

というひまもなく、両方の手首はベッドの上へもちあげられ、両手を開いてベッドの頭の所でベッドへ、くくられた。

次に足だった。

私はもがきようもなかった。まるでジュスチュアのように足を泳がせただけで、両足は開かれて、ベッドの下方へ固定された。

私は大の字にベッドの上に裸身をさらすことになった。

もしそんな姿で彼に犯されるなら、私は本望だと思った。そう思うだけで乳首はキュウツと固くなり、体の中に小波がおこった。その小波に私は濡れる。私は、それが恥かしかった。

（私たちの神聖な儀式なら、神聖な鞭からはじまってもいい）

私は、そう思った。

その姿で鞭打たれたいと思った。

何がおこるのか一抹の不安があった。

どこからか、ドラムの音がきこえていた。

私は期待で胸をふくらませながら大の字に縛られたまま動かなかった。

彼は浴室へ入って行った。

（私を縛ったままにして、お風呂を使ってくるのだろうか）

私は、じれったい気持で待った。

しかし彼は間もなく浴室から出てきた。片手に石ケン箱を持ち、片手からは、お湯のし

ずくをたらしていた。

「あっ！」

と私は声を立てた。

彼は私の下腹部へ石ケンを泡立てて、ぬりつけたのだ。

彼は丹念に石ケンをつける。

私は思わず体をよじった。彼の指が敏感な所へふれたのだ。

しかし、彼の目的は私を刺戟することではなかった。

石ケンをぬりつけて、温かいお湯をしたたらせて泡立てると、彼は又、浴室へ消えた。

手を洗っている音がする。

不安に胸が鳴ったが私に何が出来よう。両

手両足とも動かせば手首が痛むだけだった。

彼が再び現われた時、私は彼の手の中に、理髪店で使うような鋭利な剃刀を見た。

「あっ」

と、声も出せず私は息をつめた。

剃刀の冷たさを私は下腹部に感じた。

ジャリジャリ、ジャリジャリ……。

下腹部が鳴った。

彼は、ちぢれた毛が剃刀の刃につくのを、私の胸で、ぬぐった。

ジャリジャリ、ジャリジャリ……。



胸や腹で剃刀の刃をぬぐう。くっつけられた毛は石ケンとまじって肌を刺戟した。私の裸身のあちこちが毛で飾られた。そしてそれらが痒みを増した。しかし、私はそれをじっとこらえなければならなかった。

動けば鋭利な刃がどこを傷つけるかわからない。私は、じっと身動きせず、我慢した。しかし剃られている所よりも、刃をぬぐわれた所がチリチリと痒みを増してたまらない。乳のまわりも、みぞおちも、二の腕も、黒く縮れた毛が、こびりつけられている。

「痒い……痒いわ」

私は訴えた。

「もう直ぐだ」

彼は、その作業をやめようとしなかった。随分、長かったように思う。

彼が顔をあげた時、私はたまらない恥かし

# 四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』 特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しませんでした。只今、若干在庫があり、是非蔵書の一部未入手の向はお早いに申込は大阪市住吉郵便局にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。略号『花』 定価五〇〇円(送共)

さにおそわれた。心に痛みを感じるような恥かしさだった。

私は両手で下腹部を、おおいにかかった。しかし、縛られている手は自由にならない。ただ、ただ恥しかった。そして私の体の方々に、その残骸をくっつけているなんて、よけいに恥しかった。

「すんだよ」

彼は冷やかに言った。

「先生、ひどい……」

私は、つぶやくように訴えた。

「キミの一番、可愛い時なんだ、そういう目……そういう口……」

彼は私に激しく接吻した。

私も激しく、それを受けた。縛られていることが、もどかしかった。

彼は私の咽喉へも、胸へも口づけの雨をふらした。そして、タオルをお湯でぬらしてくと、私の体につけた毛をぬぐい、ぬぐったあとを激しく吸った。

肩にも胸にも赤いバラをおしつぶしたような痕が出来た。そして彼は、本当に生まれたままの姿になった私の、もう一つの唇へも口づけした。

「ああ……」

私は切ない声を、もらした。そこへ口づけされたのは、はじめてだった。それは、はじめて最後のつもりなのだろうか。

彼は言った。

「キミが大人の姿になるまでに多少の日がかかる。それまでジョンと結婚したくても出来ないだろう。キミに考える時間が出来たわけだ。ジョンとだけではない。ボクとの間にもだ。だからキミを生まれた時の姿にしてやっただよ。これがボクたちの神聖な儀式なのだ。さあ、今日は、そのまま、おやすみ。ボクはもう一度、海の風に当たってくる」

彼は私の上に毛布をかけると、私を縛った縄はそのままにして、部屋の外へ出て行ってしまった。

私は急におなかの中から、こみあげてくるものがあつた。

(これで終わったのだ)

涙がとめどなく流れ、ぬぐうことも出来ないまま、シーツを濡らした。

(もうこれで、おしまいなのだ)

同じつぶやきをくりかえし、私はただ、涙が流れるのにまかせるより仕方なかった。

海が近いのに、波の音さえしない、静かなハワイの夜だった。

(終)